

三玖と恋するフータロー

アランmk—2

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

上杉風太郎は家庭教師をしている五つ子姉妹の三女、三玖と付き合い始めた。

恋する二人はイチヤイチャしたり悩んだり、やっぱりイチヤイチャしたり。

これはそんな二人の話。

※この作品はpixivにも『恋するフータロー』シリーズとして投稿しています

目次

恋する二人の間には	1
溢れるほどの血が巡り	9
君は空から来た天使	17
3%も伝わらない	29
蠱惑の糸に絡まれば	39
乙女の興味の渦の中	48
君と窓辺にいられたら	54
災禍の起こりは喋りから	69
鍛える刀の折り返し	77
宴もたけなわ夜もすがら	89
神の雫の生る木には	105
春風扇ぐ君の手で	119
固い薔が開いたら【上】	135
馬鹿らしいほど馬鹿馬鹿しい	143
大海原に漕ぎ出して	153
僕らを取り巻く衛星の	197
運命あれかし【修学旅行・前日】	210
運命あれかし【修学旅行・一日目】	213
乙女の園へ	237
運命の鎖を解き放て	248
運命を定める僕の沙汰	273
紛れない本心に	284
蝶は羽ばたいた	304
不思議な関係	311

僕らは探し始めたよ

これから正義の話をしよう

その心は

恋する二人の噂とは？

知らない罪と知らせない罰

そういう感じの日

偶然だらけの夏休み

釈明の湖畔に月は笑って

322

333

345

370

383

394

414

437

恋する二人の間には

切っ掛けは何だったのだろうか。上杉風太郎は考えた。

落とした文房具を拾った時に指先が触れあった事だろうか。それとも質問しに来た三玖の顔が、思ったより近くにあった事だろうか。

どんな言葉や事実を並べても意味が無い事は分かっていた。しかしあの幼い頃の少女との出会いから比較的理性の人として生きてきた彼の頭が、最もふさわしい因果を導き出そうとしていた。

「フータロー」

目の前には数日前から付き合い始めた恋人、中野三玖がいる。

大きな目はくりくりと黒目がちで、すつきりと通った鼻筋。小さな桜色の唇で、それを囲む細くて流麗な顎は希代の芸術家を作り出したかのような。

その大理石のような白い肌に朱がさして、その大きな目に自分が映って、桜色の唇から可愛らしい吐息が零れる。

熱っぽく見つめられて、どうすれば良いのだろうかかと心がざわついた。彼女にしてあげられる事は何だろうか。どんなリターンをもらす事ができるだろうか。普段の自分のように損得のそろばんを頭の中ではじいた。

ねえ、と三玖が小さく呟いて彼の頬に触れた。彼女も自分の中の思いと同じだとうぬぼれても良いのだろうか。つまり損得をかなぐり捨ててもなし得たい単純なこの思い。

上杉風太郎は中野三玖に触れたかった。

「三玖」

風太郎はゆっくりと三玖に手を差し出し、壊れ物を扱うかのように触れた。

「あつ……」

熱をもった頬に風太郎の手が触れると、三玖は目を細めて嬉しいという表情をみせる。

その手に三玖は自分の手を重ねる。

「フータロー、大好き」

真っ赤な顔から熱い思いがこぼれた。風太郎は好意の爆弾を受けて頭が揺さぶられる思いに捕らわれる。

「夢みたいだ」

「夢？」

「三玖が告白してくれた時から、三玖とこうやって触れあう夢を見る様になった」

風太郎は全てをさらけ出した様な恥ずかしさを感じた。

それを聞いた三玖は少し膨れ面だ。

「どうした三玖」

呼び掛けにも応じず、いきなり三玖は抱きついた。風太郎の耳元に口を近づけて、妖精の羽音の様な小さい声で囁く。

その言葉は三玖の口から飛び立ち、風太郎の耳にとまった。

「フータローの一番は私だもん。夢の中の私にだって先を越されるのはやだ」

それを聞いて風太郎の頭の中は、燃え上がる血流のままに溶けてしまいそうになる。

ああ、何てこの人は可愛いのだろう。

そして、そんな可愛い人の恋人である自分は何て幸せなのだろう。

「三玖、顔を上げてくれ」

三玖は彼の胸に顔を押し付けたまま離れない。耳が真っ赤になっている。気恥ずかしさに顔を上げられないのだろう。

風太郎は三玖の細くて柔らかい髪を指ですくと、旋毛にキスを落としました。

「ふ、フータロー……」

三玖は上目遣いに風太郎を睨むと膨れ面になった。

風太郎はその膨れた頬をつつく。ぷすつと間抜けな音が漏れて、三玖は「もうっ」と可愛らしく怒った。

その怒りも彼の手で顎を上げられると霧散した。友人とはあまり恋の話をしなかったり、恋愛について書かれた小説なり漫画なりの読書量が少ない恋愛偏差値の低い彼女にも、彼が何をしようとしているか分かった。

三玖は期待に潤んだ瞳を閉じる。この世の何より美しい彼女に、風太郎はゆつくりとキスをした。

「んっ……」

ふさがれた口の代わりに恍惚のため息が鼻から漏れた。

痺れるほどの快感が唇から始まり、頭の回路をを焼き、背筋を駆け抜けて全身に余す所なく広がった。二人は溢れるほどの快感と愛の喜びを感じていた。

だから人は人を愛するのだ。恋愛に不得手な風太郎と三玖は、なぜ恋愛は皆の関心なのか身をもって理解した。

風太郎と三玖はキスで何もかも繋がったかのように同じ事を考えていた。

このまま時が永遠に止まればいいのに。

触れあう唇から愛を渡して受け取って、そんな心と体の充足感は何の事では得られないだろうと二人は思った。

しかし二人の意志に反して、互いは唇を離した。唇の間に銀糸の橋がかかりぷつりと切れる。

「はっ……はあ」

キスの間止めていた息を取り返す様に二人は息を吸い込んだ。

「三玖……っはあ、鼻から、息をする、んだぞ、っはあ」

「ふう、フータローっはあ、こそ」

途切れ途切れに話しながら息を整える。

風太郎はもっと触れたいという思いのまま、三玖の頬に右手を添えた。

「あっ……」

彼の手は下に滑り落ちていく。首筋をなぞり、鎖骨に当たり、ついには三玖のブラウスの一番ボタンに手をかけた。

「待って」

その手を三玖は両手で掴みとった。

「す、すまん三玖。いやだったか？」

「ううん、いやじゃないよ」

風太郎の右手を三玖は顔の前に持ってきて、まじまじと見つめる。

「えつちな事をするなら、もつとフータローの事知りたい」

三玖は彼の右手に左手を絡ませた。一本一本確かめる様に、慎重にじっくりと指を探る。

三玖が探るように風太郎も彼女の指を探った。

細い指に、柔らかい手のひら。風太郎は自分を男らしいと思ったことはあまりないが、三玖の手と比べると自分の手は明らかにごつくて男らしい。

「どんな手の形をしてるかな、指の形をしてるかな」

あ、ペンダコ、と嬉しそうに風太郎の手を堪能した三玖は、

「耳の形は？」

彼の右手を自分の耳に持っていった。

三玖の体は恥ずかしさと照れの感情が心臓に早鐘を打たせて血が巡り、真つ赤な耳は炎の様に熱い。

風太郎は耳たぶの柔らかさを味わいながら、指で外耳の溝をなぞっていく。それすら愛しいという不思議な気持ちになった。

三玖はもう一度風太郎の手を自分の顔の前に持ってきた。

「フータロー、顔真つ赤」

「三玖こそ」

ふふつと三玖が微笑む。

三玖は、風太郎の手を自分の口の前に持つてくると、

「っ三玖!？」

桜色の唇からちろりと赤い舌を出してその親指を舐めた。

全てを味わい尽くそうと、爪の形から指紋まで舌で覚えるかの様に丹念に舐め尽くし、甘く噛みついた。

少しして口から指を出す。風太郎の指から三玖の唇に彼女の唾液の橋がかかる。その不思議なエロチックさに、風太郎の胸が痛いほど大きく跳ねた。

「覚えて」

恋人に対する愛の熱さと、少しの不安に三玖の蒼い瞳が揺れる。

「他の四人が私の格好をしても、フータローの目が見えなくなっても、私の噛む力で私だってわかるくらい覚えて」

そう言うと、再び風太郎の指を口に含む。三玖の歯が風太郎の指に食い込み刻印を刻む。

風太郎は三玖の蒼い瞳を、空の様だとか、氷の様だとか、どちらかというと冷たい物に例えていたが、彼女の蒼の本質を垣間見た。

つまり、太陽よりも遥かに熱い恒星が放つ、蒼い炎の光ということである。

「覚えた？」

噛むことを止め、三玖が風太郎の目を真つすぐ見つめてきた。

夏の日の陽炎のように熱で揺らめく蒼い三玖の瞳に、風太郎は溶かされそうになる。

「あ……ああ」

口から零れる息に、何とか音を乗せる事で精一杯の返事をした。

三玖は微笑み、風太郎の手を両手でつかむ。三玖の瞳から弱々しいともとれる揺らめきが消え、決意の瞳に変わった。

三玖は風太郎の手を、自分の胸に押し付けた。

「っ！ うあ……」

風太郎はまともに言葉を発せられなかった。頭の中が三玖でいっぱいになり、他の事は何も考えられなくなる。

右掌が雷に打たれたようにじんと痺れ、感覚が鋭敏になっていく。服の上からでもわかる豊満な女性の神秘に触れた風太郎は、それからもたらされる快樂に圧倒されるしかない。

さつき触れた耳たぶとは比べ物にならない質量を右手で押しつぶし、そこから脈打つ三玖の鼓動を感じた。

「んっ……フータロー……」

少しでも手を動かすたびに、三玖の口から色っぽいささやきが聞こえてきた。

「三玖……」

そんなささやきごと食べたいと思い、三玖の唇に噛みつくようにキスをした。

「はあ……んっ……」

思いの丈が器に収まらず零れるかのようにキスとキスの合間に嬌

声が漏れる。

「はっ……はあっ」

一呼吸するため唇を離す。しかし、風太郎の目には三玖しか、三玖の目には風太郎しか映らない。寒風が窓を揺らしても、二人の熱気にいささかも影響を与えることはなかった。

三玖は風太郎の目を見てどきりとした。

いつも涼やかで黒曜のような黒い瞳が、熱せられた刃のように揺らめきながら、自分の顔を、胸を、体を突き刺している。

三玖の想像の何倍も熱くて、恐怖すら覚えるほど研ぎ澄まされた男の目だった。

「いいよ、フータロー……」

言葉尻がかすれながらも三玖は自分の意志を示した。何が、とは言わなくても互いに触れ合った唇から、触れた胸から分かっていた。

風太郎はゆっくりと三玖の体を押し倒し、覆いかぶさるようにキスを落とした。

張り裂けそうなほど鼓動を打つ心臓のせい、緊張のせいか震える指に集中し、三玖のブラウスのボタンに手をかけた。

一つ、二つ。

ほとんど日の下にさらされない三玖の真っ白な胸元から、甘い少女の香りが放たれ風太郎の鼻腔をくすぐる。

一人で抱えられずに死んでしまうのではないかと思うほどの愛をこの少女に抱いたことを、風太郎は信じてもない神に感謝した。

三つ。

その豊かな胸を守る、普段着ているカーディガンのような空色の下着に目を奪われる。

四つ……

「ただいま帰りましたー！」

「!?」

四つ目のボタンに手をかけた所で、玄関から元気な大声が聞こえた。四葉だ。

三玖と風太郎は慌てて跳ね起き、三玖はボタンを留めなおし、風太

郎は乱れた髪をすいて整えてやる。

「この靴……三玖ー、上杉さん来てるのー？」

四葉の足音が大きくなってくる。最低限隠さないといけないものは何かどうすればいいか目が回りそうなほど慌ただしく考えながらもなんとか身だしなみを整えた。

四葉の足音が扉の前で止まった。バンと勢いよく扉が開け放たれた。

「よ……四葉……早かったじゃないか。今日は午後まで練習に参加しかなかったか……？」

「え、はい、そのはずだったんですけど、業者が工事に入るからって練習を切り上げたんです」

「そ……そうか」

風太郎は四葉に様子が変だと悟られないように必死で口を回すが、きちんと会話できているか自信がなかった。

「あれ、三玖、ボタン変だよ」

げつと二人は固まった。三玖の胸元のボタンが、留める穴を間違えて不自然なしわを作っている。

「ほ……本当だ、今直す」

「？ 三玖、どうかした？」

普段と違う姉の様子を感じた四葉は、首をかしげながら問うた。

「あー四葉！ 早く帰ってきてくるとは感心だなー！ そんなに勉強がしたかったのか、はっはっは！」

ごまかすように大声を上げた風太郎を怪訝な目で四葉は見るが、飛び込んできた勉強という言葉に不信感が掻き消えた。

「えー……そうですね、あの……ご飯の後でします！」

「あ、逃げるな四葉！」

踵を返した四葉は、脱兎のごとく駆け逃げた。

「まったく……」

「フータロー」

「ん？ 三玖どう……」

どうした、という言葉は言えなかった。三玖が精一杯背伸びしてキ

スをしてきたからだ。

気恥ずかしさにはにかみながら三玖は言った。

「私……フータローを好きでよかった」

四葉の介入で油断したところにこの一言は、ボクサーに顎をかち上げられた様に風太郎に効いた。

「まっつて四葉」

風太郎の返事も聞かぬまま、三玖は四葉を追いかけた。

「そんなのありか……」

思わず風太郎はへたりこむ。

キスされた唇を親指でなぞる。その親指に三玖の噛み痕があることに気が付き、一人で赤面した。

胸に溜めた息が熱をもって吐き出された。一人きりの部屋で、しかし言わないとどうにかかなりそうな思いを口にする。

「俺も好きだ、三玖」

胸の内が温かい思いでいっぱいになり、目を閉じてその幸福感にしばらく身を預けた。

溢れるほどの血が巡り

自慢じゃないが俺は優等生である。

息を吸うように関数を解き、息を吐くように英構文を覚え、瞬きするように歴史年表をそらんじ、鼓動を打つように文脈を読み解き、眠るように化学式を組み立てる。それをおかしいと思った事はないし、進学するにしろ就職するにしろ同じように学ぶことを止めないだろう。

それがこの間からだろう。

息を吸うように三玖の事を思い、息を吐くように三玖を探し、瞬きするように三玖を見つめ、鼓動を打つように三玖に触れたく、眠るように三玖とキスがしたい。

寝ても覚めても三玖三玖三玖。

どうやら俺は完全に三玖にやられてしまったらしい。

昔なら鼻で笑い、『バカの病気だ』となじつただろうが過不足なく理解してしまった。

これが恋の病というやつなのだ。

「フータロー」

どちらが言ったでもないが、登下校は二人でするようになった。朝っぱら、または帰りしなまでそんなにべたべたしなくていいだろう、と揶揄していた物だが自分が同じ立場になればそんなことは言えなくなった。どれだけ一緒にいても、なんて時間がないんだと嘆いてしまうほど、二人の時間を短く感じてしまうのだ。

ガードレールに身を預けた三玖が、俺の元に走ってくる。

走る一歩のたびに髪がふわりと流れ、スカートがはためく。喜色満面の様子が、前髪で顔半分近く隠れていても分かる。引力で物体が引き寄せられるように、俺の視線は三玖に引き寄せられて離れない。

「おはよう」

三玖が目の前までくると、俺の顔を上目遣いで覗き込んできた。

すこし走って軽く息があがり、頬が赤らんでいる。

そういう顔を見るだけで俺の心臓は早鐘を打ち、体は雷がはしつた

ように痺れるほどの心地よさに包まれた。

この目の前の女の子が自分を必要としてくれて、恋人という関係である事実は何て幸福なのだろう。

「おはよう、三玖」

それだけで、三玖の顔がぱつと華やぐ。口元が緩み、目元が笑う。笑顔というのは、他の姉妹からやクラスメイトから向けられる物もあるが、どうしてこの三玖という子からもらう笑顔はこんなに嬉しいのだろう。

恋人になったからといって、話すことが劇的に変わったということはない。

俺は勉強のこと、その過程で読んだ本のこと。三玖は好きな戦国時代のこと、姉妹や友達のこと。他愛もない話かもしれないが、その他愛のない時間こそが何より愛しい時間だった。

学校が近づくにつれ同じ制服を着た生徒が増えてきた。

三玖の視線が先の女子グループに止まる。そこにはクラス内で三玖とよく話している女子達がいた。一步俺の前に出てくると胸の前で小さく手を振った。

「フータロー、また後でね」

「なあ三玖、何で秘密にしてるんだ。別に隠さなくたっていいだろ」
駆け出そうとしていた三玖にそう尋ねると、振り返ってこちらに戻ってきた。

少し俺の顔を見ると、赤くなって俯き、指先をつつき合わせたり遊ばせたり何をいうか考えているらしい。

「それはフータローが……」

「俺が？」

言う事が決まったのか顔をあげて言った。

「フータローがかっこいいって分かって好きになる女の子が増えたら嫌だから」

言い切ると、湯気があがりそうなほど顔を真っ赤にして俯いた。熱くなつたのか両手で顔を扇いでいる。

「そ………そうか」

聞いた俺も顔が熱くなった。きつと鏡で見たら真つ赤な顔をしてるだろう。

「それにね」

踵を返して俺に背中を向けると、

「私達だけの秘密ってドキドキしない?」

そう言っつて女子グループに駆け出して行つた。

「……言い逃げはするいぞ、三玖」

ただでさえ頭の中は三玖でいっぱいなのに、そう言われたら余計に意識してしまうじゃないか。

どんなに恋に浮かれトンチキになつていても、授業となれば頭のスイツチが入るのか、冷静に先生の話を聞いている。

「それでは③を……中野さん、読んで下さい」

クラスの中で小さく笑い声が聞こえた。

「どうしました?」

「せんせー当店ではより取り見取り五人の中野さんがいまーす」

いつもふざけている男子が面白おかしくそう言つと、クラスの笑い声が大きくなつた。

「本当……あ、そうだった。ええー五人もいるの?」

先生はクラス名簿を見ながらうんうん唸ると、

「では③なので三……みく、でいいのかな。三玖さん読んでください」
「はい」

三玖がすつと静かに立ち上がり、綺麗な声で読みだした。

一花のように人に聞かせるために磨き上げた声とも、二乃のように多くの友人と話すために身についたよく通る声とも、四葉のように体育会系にもまれる中で出るようになった大きな声とも、五月のように性格の真面目さがそのまま表れたような芯のある固い声とも違う、ともすれば埋もれてしまいそうな三玖の声。けれど俺はその優しい声が好きだった。

こつそり三玖を見る。

その片目を隠すようにかかるセミロングの重めの髪型や、他姉妹に比べて物静かで少し暗いとも取られる性格から猫背や俯きがちと

いったイメージを抱きやすいが、意外にも（と言ったら失礼か）しゃんとした姿勢をしている。

人に見られる仕事の一花や、お洒落に熱心な二乃が身近にいるからだろうか。

真つすぐに伸びたすらりとした足、背中は丸まらずに胸を張っていて立ち姿が綺麗だ。

胸……

「はいありがとうございます。ああ、中野三玖さん」

読み終わった三玖を座らせて、要点を黒板にまとめつつ話を始めた。

座った三玖は俺の視線に気が付いて、微笑みながら小さく手を振った。

「っ！」

いつもはクラスメイトが答えられずに授業が詰まるなら最初から俺に当てるとすら思っていたが、この時はどうか当ててくれるなど信じてもない神さまに祈った。

こんな赤い顔で立つなんていいさらし者ではないか。

「焼肉定食、焼肉抜「ありで」

昼食。俺がいつものように注文をしようとしている所に、横から口が入った。

「三玖……て、どうした」

俺の出した2000円の上にもう2000円を置いたのは、何故かヘッドホンをしていない三玖だった。

「行こう。あの席空いてるよ」

「え、おい待ってっ」

焼肉皿のある焼肉定食（当たり前だが）のトレーを持って三玖を追いかけた。窓側でもなく、ウォーターサーバーも置いていない比較的人目につかない席に座った。俺は三玖を知る人なら誰でも抱く疑問をぶつける。

「ヘッドホンはどうしたんだ」

「当ててみて」

三玖の返しにはてなが浮かんだがすぐに見当はついた。

「一番の特徴を外せば、五つ子の誰が誰だか分からないってことか？」

「正解」

初めて三玖を見分けられたあの瞬間を引き合いに出してからかっ
てきた。

付き合うようになってから三玖から何回も聞いた話だが、あの時は
今までで三番目に嬉しかった瞬間らしい。ちなみに一位は同率で告
白が成功した時と初めてキスした時だとか。

「三玖ー、上杉君」

学食に入ってきた女子グループの一人がこちらを見つけると駆け
寄ってきた。

星の髪飾りをつけた長い髪。五月だ。俺達の席のそばにくると一
呼吸おいて、

「すみません、二人の邪魔をするつもりはなかったのですが……」

ポケットから掌サイズほどの箱を取り出した。キャラメルフラペ
チーノ味と書かれているお菓子の箱だ。

「今朝買ったお菓子がとっても美味しかったので、どうしても皆に食
べて欲しかったんです」

五月の顔がぱつと華やぐ。きらきらと光る目はご飯を前にした子
犬のようだ。

「五月、お前またそんな……」

俺からお咎めの言葉が出てくるのを察したのか、五月は俺の顔の前
に手を突き出して言葉を遮った。

「いじわるを言う上杉君……」

とそこまで言うと言葉を切り、くつくつと小さく笑って、

「いえ、お義兄さんにはあげません」

声を潜めてそう言った。

「五月ー」

三玖は席から小さく腰を浮かし、五月に詰め寄る。その顔はすぐに
赤く染まった。特徴を消すために前髪を流して、普段隠れている顔右
側が露わになっているせいか、いつもより五割増しで恥ずかしがって

いるように見えた。

「まあまあ三玖、甘い物でも食べて落ち着いてください」

少し五月の策に載せられた気がするが、言葉通り三玖は差し出されたお菓子を一つ摘んで食べた。

一口二口食べると、三玖の顔が喜の色に塗り替えられた。

「私は甘い物は得意じゃないけど、これは良いと思う」

「でしようー」

五月は自分が褒められた様に得意げに胸を張った。俺の方にも一つ差し出してくる。

「三玖に免じて、一つあげます」

「それはどうも」

お言葉に甘えて俺も一つ貰うことにした。

かじるとキャラメルの甘さと少しのほろ苦さが口の中に広がり、甘い香りが鼻に抜けた。

「普通に旨い」

素直に感想を述べると、はあ、と五月は少しの呆れ顔で言った。

「あげ甲斐のない人ですね」

離れた席から『五月ちゃん』と呼ぶ声が聞こえた。席を確保した女子が手を振ってこちらに呼び掛けている。

「はーい。では三玖、上杉……お義兄さん、またあとで」

「い・っ・き」

三玖からの文句を軽く受け流しながら、五月は女子グループに戻っていった。

「あいつは……」

少しの文句を呟きつつ箸をとろうとすると、親指からジャリっという感覚がした。さつき摘まんだお菓子の砂糖が指に付いていたのか。軽く親指と人差し指に付いた砂糖を舐めとる。

三玖を見ると、俺と同じように指に付いた砂糖を舐め取ろうとしていた。

小さい桜色の唇から、ぞくりとするような赤い舌が出て指を舐めた。

食事をしているなら別に変な行動でもないが、魔法にかかった様に俺はその光景から目が離せない。

右親指がうずく。くすぐったい様な感覚が呼び起こされて、もう消えた噛み痕に軽い痛みが走った気がした。

消化のために内臓に集められた血が下半身に流れて行くのが自覚できた。

指の砂糖を舐め取った三玖が目線だけでこちらを向く。その上目遣いの顔がかつと赤くなった。

両腕で胸を抱くようにかばいながら小さく呟いた。

「フータロー、えっちな目してる」

「誤解だ」

「あの時と同じ目をしてるもん」

思い出した恥ずかしさからか、瞳をうるうるさせて俺を睨みつける。

涙で大きな目がきらりと光り、磨き抜かれた宝石のように耐えがたいほどの魅力を放っている。

「三玖……」

俺の手は、吸い寄せられる様に三玖に触れた。

「だ、ダメだよフータロー、ここ学校……」

三玖の言葉にはつとして、慌てて手を引いた。周りを見渡してみる。幸いにも見えている生徒はいなかったようだ。

「悪い」

謝罪の言葉が出てきたが、三玖は口をとがらせそっぽを向いた。

「えっちなフータローとは一緒に食べてあげない」

サンドイッチの一口を口に放り込むと、トレーを持って立ち去って行った。

「あ、三玖……」

去っていく三玖をただただ見送った。立ち上がって追いかけてもこの下半身の状態では何の説得力もないだろう。

「あらフー君、愛しの三玖ちゃんはいないのかしら」

「……二乃、お前の精神は鋼で出来てるのか？」

ふふふと口元に手をお上品に当てながら二乃が話しかけてきた。友達に先に行つててと一声かけている。

自分で言うとしても自意識過剰に聞こえるが、俺をめぐって争い妹に取られた形になったのに、こうやってからかい交じりに話しかけられる精神には驚嘆するしかない。

「何で出来てたつていいでしょ。それより追いかけないの？」

「あー……大した事じゃないから、後で時間をとるよ」

「さつさと立って追いかけなさいって言いたいけど、まああなたの言うことを信じるわ」

二乃は手を振つて立ち去つて行つた。

こんな事誰にも言えないだろう。

起つてるから立てないなんて、バカな中学生の下ネタじゃあるまいし。

君は空から来た天使

灰色の空から霧雨が降っている。

俺は図書室から外を眺め、ペンが紙の上をすべる音を聞いていた。

「あと五分」

そう言っていると、三玖と四葉と五月はビクツと肩が震え、ペンを動かす速度が速くなった。

外を見る。霧雨が収まっていき、光が雲を突き破ろうとしているのか、外の明るさが増してきた。

「終了。ペンを置け」

三人はペンを置き、四葉は解放感そのままに机に突っ伏した。

「はーやっぱりテストは何回やつても慣れません」

「四葉、突っ伏してないで答え合わせだ」

はい、と四葉は起き上がって回答を受け取る。

「と、思ったが雨が上がってるうちに帰ろう」

そう俺が言うと赤ペンを持った三玖と五月は互いに顔を見合わせ、四葉は弾かれたように立ち上がった。

三人はごそごそと帰り支度を始め、俺も教科書を閉じて鞆にしまった。

さつきやったテストを、ああでもないこうでもないと言いつつ、俺が答えと解説を軽く話しながら下足場に向かっていると突然四葉が声をあげた。

「あつ！ すみません、教科書を教室に置いたままでした。ちよつと取ってきます。一緒に来て、五月」

四葉はえ、と困惑した五月の襟首をむんずと捕まえ、俺にウインクしながら五月を引きずって教室に向かっていた。

「気を遣わせたか？」

「そうかも」

三玖は苦笑すると、手を差し出してきた。

「学校だぞ」

「お昼の学食じゃないんだから誰も見てないよ」

「あれは悪かったって」

「つないでくれたら許してあげる」

俺は降参とばかりに手を挙げて、三玖と手をつないだ。

細くて小さい三玖の柔らかい手と、俺の手をつなぐと体温が一度二度上がったかのような感覚がした。

三玖の白い頬にさっと朱が差すと、俺を見上げて微笑んだ。胸がどくんと跳ねて、その微笑みにキスを重ねたいと思ったが、さすがに自重した。

「フータロー」

三玖はその赤い顔のまま、少し寂しそうに言った。

「これからバイトに行くけど、フータローと勉強したかったな」

それを聞いて俺は嬉しくなった。俺を好きになってくれた事、嫌いだった勉強を好きになろうとしてくれている事。出会ったころと比べて、三玖の心に差した二つの輝きにそうだ、俺は惹かれたんだ。

見上げてくる三玖の額に、そっと口付けをした。

「ひゃっ……フータロー」

「頑張つてこい、三玖」

「……うん」

三玖はつながっていた手を離すと、小さく手を振りながら駈け出しに行つた。

正門に向かって走る三玖に、空からきらりと光が降りてきた。

—— 天使の梯子だ

その雨のもたらした一間の奇跡に、俺は三玖と付き合うようになってあの日のことを思い出した。

「学校でイチヤイチャするのは誰だ〜」

「うわー！」

いきなりかけられた声の方向を見ると、角から顔だけ出してニヤニヤと笑う四葉と、赤くなった顔を見られないように手で顔を覆う五月の姿があった。

「すみません上杉さん。さつきからいたんですけど、お二人があまりに熱いから出るに連れなくて」

四葉は、えへへと映画にでてくる三下のような笑い方をしながら五月を引つ張つて来た。

「いや、俺も周りが見えてなかった」

わお、とことさら驚いた姿を見せながら四葉は言ってくる。

「でもあんなに恋愛に否定的だった上杉さんが、まさかこんなにデレデレになるなんて」

「しかたないだろ……好きになったものは」

「信じられません、あの上杉君がこんなセリフを言うなんて。背中にチャックついていませんよね？」

「あのな、俺だって人間だぞ」

俺が過去にした言動のせいとは言え、言いたい放題な二人にため息をついた。

四葉と五月は顔を見合わせて笑うと、

「上杉さん（君）」

「な、何だ」

寸分違わずに言い始める。思わず重なった二人の声にたじろいだ。四葉は五月に言うように目で合図を送る。

「三玖と付き合うようになった日の事、教えてくれませんか？」

「何で……」

言わないといけないんだ、と言おうを思ったが二人の目が爛々と輝き、圧力を放っているのでそれに屈してしまった。

「分かった。だからそんな目で見るな」

そう言う二人はポカンと口を開け、喜ぶ顔に変わり、やったとハイタッチした。こんなところで五つ子シンクロを見せるんじゃない。

「歩きながらで良いか？」

「はい！ もちろんです」

三人で靴に履き替え、家路へと歩を進めた。

「では上杉さん、教えてください、三玖との愛の始まりを」

祈るように手を組みながら、四葉はおどけてそう言った。

俺は観念したとばかりに息を一つ吐くと、あの日のことを思い出した。

あの日はそうだな、こんな風に薄い雨雲がかかった天気だった。昼飯を食って午後からの勉強を始めようとした所にらいはが来て言ったんだ。

「お兄ちゃん、また勉強？ 友達の家で見たテレビで言ってたよ。ずっと座つてるとけっせん？ っていうのが出来て大変な事になるんだって」

「血栓な。血の栓つて書いて血栓」

「そうなんだ。じゃなくて、お兄ちゃん買い物に行つてきてよ」

そう言うくらいは買い物袋とチラシを俺に渡してきて、チラシにこれこれと赤丸を付けだした。

「結構量あるな」

「お願いねお兄ちゃん」

らいはの頼みにさすがに嫌とは言えず、まあ気分転換だと思って買い物に出かけた。

外に出てしばらく歩くと、空模様が思わしくなく、傘でも持つてくるんだったかなと考えた所に三玖が現れた。

「フータロー、偶然……」

「あ、ああ、三玖か」

その時はお前たち五人にあまり会いたくなかったから、気のない返事をしてしまったかもしれないな。

「どうしてですか!？」

「四葉、今は聞きましょう」

そうだな、恥かきついでに言うが、春休みの旅行の最後にお前たちの誰かからキスされたんだ。そうだ、お前たちが全員五月の恰好をしている時にだ。

「私じゃありませんよ!」

分かっている。でもその時の俺はあれが誰だか分からなかったから、会うことに少し怯えていたように思う。

三玖と会ったところに話を戻すぞ。

春休みの旅行はこのスーパーの懸賞で当てたんだ。その時も三玖

がいて、あまりに似た状況が起きて俺はため息交じりに、愚痴のよう
に言った。

「こんどは何が当たるんだ？」

「え、えっと……」

三玖はどもる様に言葉に詰まっていた。今なら俺に会うために俺
の生活圏を歩いていたんだろうなど分かるが、その時の俺はそんな事
分からなかった。ましてや数時間後に三玖と付き合うようになるな
んて想像もしてなかっただろう。

俺の質問に返事を窮した三玖は、何か良い言い訳のヒントがないか
辺りに視線を走らせて、ある言葉を見つけた。

「今日はこっちの方がお得」

そう言つてスーパーの旗を指さした。

そこには『本日カード会員5%オフ』の文字が躍っていた。ああ、だ
かららしいが頼む買い物量が多かったのかと納得して店内に入っ
て行つた。

「フータローも買い物？」

「ん……ああ、らしいは頼まれてな」

手に持っていた買い物袋とチラシをひらひらさせながら三玖に答
えた。見せて、と三玖がチラシを指さしながら言ったので渡した。畳
んでいたチラシを広げてなにやらうんうん頷いている三玖を見て何
だかおかしくなって少し笑つたんだ。

「どうしたのフータロー」

「いや、あんまり熱心に見るもんだから」

「らしいはちゃん節約の先輩だから」

一通り目を通すと折り畳んでチラシを返してきた。まずは油だつ
たかなと売り場に歩こうとしたら、三玖が後ろから付いてきた。

「フータロー、この前の旅行から来てくれないけど、何かあつた？」

「ただ自分の勉強をしてただけだ」

まさかお前ら姉妹の誰かにキスされたから顔を合わせにくいだけ
だとは言えず、とりあえず俺らしい回答でお茶を濁してこの場を乗り
切ろうとした。

「お前たちこそ勉強はどうなんだ？ 新学期早々春休み課題が範囲のテストだつてあるぞ」

「大丈夫。ちゃんと課題は終わらせてる」
「本当か？」

勉強の事なら、話すことはいくらでもあった。話しながら俺は春休みの旅行のキスの事を聞こうと考えていた。もちろん少しの遠回りな質問でだ。

買い物を終えて袋に詰め替えている時に隣にいる三玖にこう聞いた。

「三玖、ほかの四人はどんな様子だ？」

「上杉さん全然遠回りな質問じゃないですよ」

そう言うな。俺が考えられるだけの配慮を働かせて出たのがこの質問なんだ。

「気になるなら見に来ればいいのに。いつも通りだよ」

三玖は荷物を買った物袋に入れて俺についてきた。

スーパ―から出ると空模様が怪しくなっていた。光が透けてきそうなくらい薄い雲なのに、ところどころ黒い雲が今にも無軌道な雨を降らせてきそうな、そんな天気だ。

「フータロー、どうしたの？ 今日なんか変だよ」

「変か……いや、ちよつと気を遣う事態にあつてだな」

三玖の質問に答えようと考えながら歩いていると、顔に冷たい雫が落ちてきた。

「あ……雨」

手のひらを空に向けながら三玖が言って、俺は雨宿りできる所はないか辺りを見渡した。

少し先に公園があるのが見えて、その屋根がついているベンチで雨宿りしようと提案した。三玖は頷いて二人でベンチまで駆け出した。

雨は霧のように粒の小さいものだったが、密度が高かった。傘もささずに歩いていたら本降りに出くわしたくらいずぶ濡れになることを覚悟しないといけないだろう。

髪や服についた細かい水滴を払った。三玖を見ると俺と同じように水滴を払いながら、物憂げに空を見上げていた。

「三玖、大丈夫か。その、ヘッドホンとか」

「簡単な防水加工されてるらしいから大丈夫」

それから、雨は止むかなとか洗濯ものは大丈夫かなという散発的な受け答えが続いたが、すぐに沈黙に取って代わった。

小さな雨音が二人の間に流れてしばらくすると、三玖が口を開いた。

「フータロー、迷惑だったよね」

「何がだ、三玖」

「だってフータロー全然私の方を見ようとしてない」

「そうか？ いや、気のせいだろ」

「旅行の帰り際」

「!？」

その言葉に驚いて、思わず三玖の方を見た。

三玖は俯いて、雨に濡れた寒さか不安からかその肩が震えていた。「あの時、もう一度フータローと話しがたくて鐘の所へ行ったんだけど、足を滑らせて、その……えっと……」

俯いたままの三玖はしばらく指を遊ばせて、意を決したように顔を上げた。その目は雨に降られたように濡れていたんだ。

「キスしたみたいになっちゃったけど、あれは事故だから、フータローは気にせずにまた私達の所へ来てほしい」

そう言い切ると悲しいように眉根を下げて笑っていた。

三玖は買い物袋を手に屋根から出て行った。振り返って、俺にこう言ったんだ。

「ごめんねフータロー。でもあんな事故のせいでフータローが悩む必要ないよ」

三玖はその悲しそうな顔のまま、一步二歩後ずさった。

その時、その時にだ、本当に偶然なんだろうが、薄い雲の切れ間から太陽の光が零れてきて三玖の立っている所が明るくなった。

天使の梯子だ、と俺は思った。

まだ宙に細かく舞う雨がダイヤモンドのように輝いて、濡れた三玖の髪に虹色の綺麗な天使の輪が光っていた。

その時、俺は今にして思えば馬鹿な事と言うかもしれないがこう思ってたんだ。

三玖がその光の梯子を上って行ってしまつて、もう会えなくなるんじゃないかと。

心臓を鷲掴みにされたように胸が苦しくなつて、喉に物を詰まらせたみたいに息ができなくなつて、俺はとっさにこう言つた。

「行くな三玖」

三玖は驚いた顔をしていたな。

俺は買い物袋をほつたらかしにして三玖の下まで走つた。そしてどこにも行かないように手を握つた。

「どうしたの、フータロー」

照れのはいつた三玖の赤らんだ顔を見ると、俺の中で不思議な感覚がした。

そうだな、目が啓いたとでも言おうか。

「どういうことですか上杉君？」

「上杉さんはパッチリお目目とは言いませんが、そんな糸目でもないですよ」

そういう物理的なことじゃなくてだな。お前ら五つ子という柄の同じカードの中で、三玖だけは光つて見えるみたいな感じだ。

「もうちよつと分かりやすく言つてください上杉さん」

そうだな、例えばお前たち二人が姉妹の誰かに変装したとしよう。たぶん俺はどちらが四葉で五月か分からないと思う。でも三玖だったらどんな格好をしていても分かるだろう、という感覚がそのとき俺の中に出来たんだ。不思議な物だよな。

手を取られて困惑交じりに三玖は言つた。

「あれは事故なんだから、フータローは気にしなくていいのに」

「だったら、何でそんな顔をするんだ」

「それは……それは……」

三玖の目が、涙に潤んできらりと光っていた。

そんな三玖を綺麗だなと思ったんだ。

「嫌われたらどうしよう、嫌がられたらどうしよう、もう会いたくないって言われたら……言われたら……」

三玖はぐつと言葉を溜めて、思いの丈を打ち明けるように言った。「私はまたフータローに会いたい、勉強を教えてほしい。だって、私はフータローの事が好きだから……」

頬を伝う涙を見て俺は思った。この子の涙を拭いてあげたい、泣いてほしくない、ずっと笑っていてほしい。

今にも嗚咽をもらしそうな悲しい顔をした三玖に、俺は言った。

「俺も、また三玖に会いたい。一緒に勉強したい。俺も三玖の事が好きだから、あの時の相手が三玖で良かった」

俺の言葉を受け止めきれないのか、三玖はぽかんと口を開けていた。

理解してきたのか段々と顔が赤くなってきて、でも信じられないことがあったかのように驚きで目が見開かれた。

「フータロー……今、何て言ったの」

もう一度言うのは気恥ずかしきもあったが、三玖の目が不安に揺れる所を見ると、何回でも言っつてやろうと思った。

「三玖の事が好きだっつて言っつたんだ」

「本当に……？ 友達として？」

「違う、一人の女の子としてだ」

「ふ、フータロー、もう一回言っつて」

「だから……三玖の事が好きだ」

そこまで言うのと、三玖は喜んだ顔になって俺の手を握り返してきた。目から涙が溢れて頬に河ができる。

「泣くなよ、三玖」

「ごめん、でも、嬉しくて。フータローは恋愛する気がないんだっつて言っつてたから」

俺は三玖の頬を流れる涙を指で取り去った。

三玖は笑って、俺に抱き着いてきて、そして俺も抱きしめ返した。「まあこんな所だな」

そこまで話をして四葉と五月を見ると、顔を赤くしてむずがゆそうな顔をしていた。

「そうなるなら聞くなよ」

「ちよつと驚いてるだけです。上杉君にそんな情熱的な面があったなんて」

四葉は赤い頬から熱を逃がそうと両手で扇いでいた。

「なんだか熱くなってきちゃいましたね。ね、五月、冷たい物でも買つていこうよ」

「そうですね、頭の芯まで冷えるようなやつを買いましょう」

「上杉さんのおごりで」

「なんでだよ。お前らが話せてせっついたらんだろ」

四葉と五月に手を引かれて路肩に止められていたジェラートの販売車に向かわせられた。

「ジェラートを奢ってくれる上杉さんに、お礼に愛の詩でも送りましょうか？」

「俺が自発的に奢りたがってるみたいになうな」

四葉の声がいつもより歯切れよく弾んで聞こえる。こいつにも恋バナでテンションが上がるという事があるのか。

「笑わないでくださいよ」

四葉はおどける様に詩を詠った。

「四葉、いいじゃないですか」

「え？　ちよつと五月、笑わないでって言ったら笑ってって前フリだよ」

「お前に詩の才能があるとは知らなかったな」

「上杉さんまで!？」

「えーと、何だったかな。――」

「わー！　適当に考えた物を詳しく解説しないでください！」
「お返しだ」

キャーキャー言っている四葉をからかいながらジェラート屋に足を向けた。

「もう怒りました。伝説の七色ジェラートを注文しますからね！」

「そんなけつたいな物がある訳……」

「あるよ」

「あるの!？」

「ストロベリーオレンジレモンピスタチオミントグレープブルーベリーで」

「なんだその悪魔の召喚みたいな注文は」

「私は……」

「五月、お前は遠慮と言うものを覚えろ」

雲の切れ間から光が覗いて、空に大きな虹を架ける。

二人には話さなかったがさっきの話には少し続きがある。

あの後、互いに抱きしめていた手の力を抜いて顔を見ようとした。

赤い顔の三玖が笑いながら俺を見上げてくる。その大きな目に自分が映ることを嬉しく思った。

「虹……」

三玖が小さく呟いて空を見ていたので俺も空を見上げた。

そこには青が見え始めた空に、大きな虹が架かっていた。

「ねえ、フータロー。虹って神様との約束の証なんだって」

そう言うと、三玖は俺の胸に顔を押し付けてきた。

「神様っているのかな。ずっと前からこうしたかった私の夢が叶ったんだもん」

俺は天使の輪が輝く三玖の髪に触れて囁く。

「三玖」

なに、と顔を上げた三玖の唇にキスをした。

三玖の唇の柔らかさに、甘い匂いに、飛び上がるほどの衝撃を感じた。

ゆっくりと唇を離すと、なぜか三玖は不満そうな顔をしていた。

「ちゃんと心の準備したかった」

そう言って頬を膨らませている。

俺は小さく笑って虹を見上げて言った。

「神様との約束だ」

そういうと頬が緩み、三玖はまた抱き着いてきた。この小さくて可

愛らしい女の子に溢れるほどの愛が湧いてくる。
「ずっと一緒にいよう、フータロー」

——愛の奇跡が閃いて

僕の瞳が啓いたら

虹の階きざはし降りてくる

君は空から来た天使

3%も伝わらない

ああこれは夢だ。

目を開けた記憶がない。微睡を振り払って体を起こした覚えがない。

そして何より、三玖が俺の家にいる訳がない。

「フータロー」

朝とも夜とも分からない時間の中で、二人きりの勉強会をしているという状況のようだ。三玖はペンで問題を指して分からないと言っていた。

「ああ、それは」

答えた問題は長篠の戦の事についてだった。三玖がこんなメジャーな戦について人に聞かなければ分からない事なんてないだろうと、この三玖は俺が夢の中で作りだした物なんだと確信を得た。寝る前に見ていた教科書が確かそのあたりだったのだろう。二つ三つ答えると三玖は顔を真っ赤にして、

「ありがとう」

と言った。可愛い。

それから黙ってみているとあることに気が付いた。

いつもより明らかに露出が多い恰好だ。

シャツのボタンが開けられていて胸元が露わになっている。少し角度をつけて見れば下着が見えるだろう。半袖のポロシャツでその袖口が大きく、横から胸が見えそうなほど時折はためく。スカートが異様にミニでいつもははいているタイツをはいていない。何で三玖がタイツはいてねえんだよって？ 俺もそう思う。

「えへへ……フータロー」

いつものように可愛らしい声で、しかし普段の三玖がしない事をしてきた。

三玖は俺の頭を抱き寄せ、胸を押し付けてきた。むにゅっと俺の顔が三玖の胸を押しつぶす。温かい柔らかさを両頬に感じた。

「フータローかっこいいよ」

緩めた頬のまま、蕩けそうなほど甘くて熱くてやさしい声で三玖は囁いてくる。ゆつくりと俺を押し倒してきて、体の上にのしかかってきた。俺の胸板で三玖の胸がつぶれて、柔らかくて気持ちがいい。心臓が繋がった様にお互いの鼓動が重なり、俺はこんな言葉を思い出した。

私達は半球であり、恋とは真球になるよう合わさる半球を探す事である。

これは夢だが、現実の三玖に会ってこういう状況になれば、欠けた半球同士が合わさり真球になって、好きの感情が転がりだすだろう。うっとりとした目の三玖が身を乗り出すように顔に近づいてきた。襟ぐりが大きいせいで大きな胸が揺れる様が見えた。俺はそれに目が釘付けになる。

「フータローのえっち」

と文句を言うが嫌がる様子もなく、はにかみながらキスをしてきた。

俺の体はカツと熱くなり、下半身に血が集まった。

「フータローのこっこ、固くなってる」

絶対に三玖はこんなことを言わないだろうが、分かっているにもかかわらず、分かっていても否応なく興奮した。

「わ、おっきい」

いつの間にか着ていた服がなくなり裸になっていた俺の体を三玖の指が走る。浮き上がるような快樂に包まれて、俺は……

「……夢か」

確信はしていたが、こうして現実を突きつけられるとガツカリした。下半身に不快感がある。パンツにべったりと夢精のあとがあり、大人しく洗い物をしに風呂に向かった。

洗いながら俺は、さっきの夢とあの日の事を思い出していた。どちらも時間があれば『その先』に進んでいただろうか。触れたいという思いの究極系の行為を想像するだけで体が熱くなり、

「あ」

そして俺は重大なことを思い出した。

流れる景色が闇に変わる。外の景色を映していたガラスが今度は俺の顔を映す。それを見ながら前髪をいじった。

俺は焦りにも似た不安感を抱きながら電車に乗っていた。今日は夕方からバイトで抜ける奴がいるとはいえ、全員の勉強を見れる貴重な日だ。しかし思い立ってしまったため、俺は動かなければならないという使命感の様なものに突き動かされてある場所へ向かっていた。

何の気なしに本を読んでいると、電車の中が浮足立ったような雰囲気包まれている事に気が付く。ある一点に男性客達は注目している。

その視線の先を俺も見ると理由がすぐに分かった。とびきりの美人が立っていたからだ。

背中にかかるほどのセミロングをアイロンで巻いたのだろう、カールしていわゆる『ゆるふわ』な髪型だ。けぶるような睫毛に覆われた目はぱっちり大きく、少し釣り目だが目元の力を抜けば可愛く、力を籠めればクールに見える得な目の形だ。服装はボーダーのシャツで、その上にデニムの丈の長いシャツを着て、細いパンツをはいて足元はヒールなので足がほっそりとして長く見える。

見惚れるほどに美人だった。

というか三玖だった。

何してるんだあいつと思いつつ観察することにした。いつものようにヘッドホンではなくイヤホンで音楽を聴いている。

ややもすると駅へ到着し、開いたドアから出て行った。呆けたようにその姿を見ていたが、俺の目的地でもある事を思い出して慌てて駆けだした。

駅を出て向かっていく足取りは、いつもより大股で自信に満ち溢れているように見える。あんな恰好をしてどこに行くのだろうか。あそこまで気合の入った格好を俺は見たことがない。

まさか浮気……

いやいやまさか、あの三玖に限って。しかしあんなに可愛い女の子を世の男子が放っておくだろうか、いやない。

「すみません」

もやもやと考え事をしていると声をかけられた。まずい、もしかして三玖が気が付いたのか!?

考え事をして散漫になっていった焦点を目の前に合わせると、カメラを持った洒落た女性と男性が立っていた。

「私、こういう者なのですが」

と言うとポケットから名刺を取り出した。それを見ると名前と会社名が書いてあった。

女性はファッション誌のストリートスナップを撮影するスタッフなのだと言明した。

「悪いが少し急いで……」

「今ですとハンバーガー一個無料券を差し上げ「何してるんですか早く撮って下さい。はっはっは天下の〇〇に掲載されるなんて嬉しいな」

許せ、これも貧乏学生の悲しい性なのだ。

何枚か向きやポーズを変えて撮影した。カメラを持った女性と男性が写真を見て何か言い合うと、

「はい、ありがとうございます。こちらお礼の無料券です」

と言つて赤い券をくれた。時間になると五分にも満たなかつただろう。

よし、今日の昼飯は行き先でもあるショッピングモールでこの券を使って水をしこたま飲むことにしよう。

……つてこんなことをしている場合じゃない。三玖を追いかけないで。

駆け足で角を曲がるとポーズをとっている三玖がいた。俺のようにファッション誌のスタッフに捕まったのだろう。ありがとうございますも知らぬファッション誌。

電柱に隠れて携帯をいじるフリをしつつ撮影を横目に見た。

恋人だからという欲目を引いても、三玖はとびきりの美少女だ。一花が美人女優と言われているのだから、同じ顔の三玖も第三者の目から見て美少女なのに相違ないだろう。しかも普段は化粧をしないが、今の三玖は化粧バチバチで可愛さ増し増しだ。ファッション誌ス

タツフが連絡先を欲しがるともむべなるかな。

三玖はスマホを出すそぶりさえ見せず立ち去って行った。スタツフはがっくりと肩を落とし物欲しそうな顔で歩いていく三玖を見送った。

俺は充分三玖との距離が離れるとその後ろをついていった。三玖は人の横を通るたび振り返られていた。十人いれば十人振り向くという美人を評する言葉があるが、今の三玖はまさにそれだ。

どうやら俺と三玖の目的地は同じらしい。シヨツピングモールの自動ドアをくぐり店内へ入って行った。

店内は休日ということもあり、人でごった返していた。走っていた子供が俺の足にぶつかった。その勢いのままこけて尻もちをついて俺を見上げてくる。

「おい、大丈夫か？」

屈んで手を貸そうとすると少し後ろに下がられた。怖がられただろうか。人混みの中からこの子の母親であろう女性が走ってきた。

「翔ちゃん大丈夫!? あ、ごめんなさい家の子がご迷惑を」

「いえ、大丈夫です。そちらのお子さんも大丈夫ですか？」

母親は子供を抱き上げ軽く揺らしながらあやしていた。

「ほら翔ちゃん、ぶつかってごめんなさいは？ ごめんなさい」

母親に促された子供はおっかなびっくり俺の方を向くと小さく、

「ごめんなさい」

と言った。

「ちゃんと言えたな、偉いぞ」

俺は髪をくしゃつとさせて子供の頭をなでる。母親がばいばいと言うと抱きかかえられた子供は大きく手を振ってきた。手を振り返して一つ息を吐くと大変な事に気が付いた。三玖を完全に見失ってしまった。

どうしようかと考える。連絡するか？ いやそれなら俺に気を使って三玖の本当の目的が分からなくなってしまいかもしれない。だが見つけられるか？ この休日の人混みの中で？ どうにも現実的じゃないな。

あれこれ考えた末、さつさと目的を果たして帰ることにした。今日は午後から勉強を見ると五人に連絡を入れていいるからそれまでには帰ってくるだろう。

もし帰ってこなかったら？

頭にかつと血が上った。胸の奥がつぶされそうなムカつきを覚える。

嫉妬しているのか？ いるかどうかすら分からない相手に。三玖だって女の子だ、ああいう可愛い恰好をして出かけたくなることだつてあるだろう。しかし、俺に見せずに誰に見せに行くのだろう。

……ダメだ。今は考える事を止めておこう。

俺は目的地に歩を進めた。気恥ずかしさを押し殺し、平静を装い目的の品が置いてある陳列棚の前に立ち、商品を手を取った。会計を済ませて急いで鞆にしまう。過剰なほどに何もありませんよという感じを醸し出して帰路についた。目的を果たした達成感で注意力が散漫になっていた。

目の前にいる三玖に気が付かないほどに。

「え……フータロー？」

その声で俺は現実に取り戻される。三玖は驚きに目を真ん丸に開き、開けた口に手を当てていた。

「み、三玖」

「フータロー、どうして……」

金髪なの？」

その言葉にバツが悪くなり、金色の前髪をいじった。

俺たちはフードコートで向かい合わせに座っていた。机には互いにストリートスナップで貰った券で注文したハンバーガーと、無料券はそれだけ使うということができないので追加で俺はもう一個ハンバーガーを、三玖はお茶を頼んだ。

俺はウォーターサーバーから紙コップに注いだ水で口を湿らせると口を開く。

「三玖、どうしてそんな恰好で出かけているんだ？」

三玖は質問に俯いた。少し考えて頭をあげると俺の恰好に突破口

を見出したのかこう切り返してきた。

「フータローこそ、何でそんな恰好なの」

その質問に思わず言葉に詰まった。言葉を選びながら慎重に話す
「俺は……ちよつと用事があったただけだ」

自分が少し後ろ暗いことをしている自覚があったので三玖に顔を
合わせず、机に呟くように言った。

「私もそう」

と三玖は短く言うのとハンバーガーの包み紙を剥がして一口かじつ
た。

「そんな俺にも見せないお洒落をしてか？」

三玖の柳眉がぴくりと動いた。こんなことを言うつもりはなかつ
た。しかし目の前にいる綺麗に着飾った三玖を見ると胸のムカつき
が収まらない。

認めよう。俺は嫉妬していた。いるかも分からない相手にだ。

「フータローだって……フータローだって、そんな、髪を金髪に染めて
まで誰に会いに行くの？」

「これはカツラだ」

「どつちでもいいよ」

三玖の周りに剣呑な雰囲気立ち昇る。いつもの可愛らしく繊弱
な雰囲気三玖とは違い、綺麗な姿のせいで迫力も一塩だ。

「フータローだって髪色まで変えて出かけてるのは、何か私に言えな
いことがあるからじゃないの？」

俺の閉じた口から唸り声が漏れた。ふんと三玖は鼻白み、お茶に口
を付けた。その様は異常に冷たく見えて恐怖すら覚えた。こういう
のを心胆寒からしめるとでもいうのか。

「俺は、三玖のために……」

「フータローだって分からないような恰好をすることが？」

言葉に棘がある。これは間違いなく怒っているな。

「フータロー……」

三玖の吊り上がった眉が困り眉になった。怒りが度を越して悲し
みに変わったのだろうか。

「言えない事なの？」

「そんな事はない……」

「ね、言つてよフータロー。いやだよ、ケンカなんてしたくないよ」

三玖はいきなり赤面して、

「ふ、フータローが言つてくれたら、私も言うから」

と言つてきた。俺も三玖とケンカなんかしたくない。内心にある気恥ずかしさを守つて三玖とケンカするくらいなら、さらけ出して何とでも言われた方が楽だろう。三玖に手招きしてもっと近づくように示した。三玖は身を乗り出して俺の顔ほど近くまで来た。俺は鞆で周りの視線を遮りながら中身を見せた。

「あ……え、フータロー……こ、これつて」

中身と俺を交互に見ながら、三玖の顔がどんどん赤くなつていった。

こんなこと言えないだろ、

コンドームを買いに来ただなんて。

三玖は湯気が昇りそうなほどに顔を赤くして俯いてしまった。それはそうだろう。これを買うということは、『俺は三玖とセックスするぞ』という意思表示も同じだ。

「俺は教えたぞ」

恥ずかしさを誤魔化すように強がつて言った。出してしまったからにはもうごり押ししかない。

「うう……」

三玖は俯きながら持っていたポーチを押し付けてきた。

「開けていいのか？」

こくりと弱々しく頷く三玖を見てからポーチを開けた。そこには

……

「はは、はっはっはー！」

俺は思わず笑い声をあげてしまった。

「笑わないで……」

と言われても、笑うなというのが無理だろう。

なぜなら三玖も俺と同じものを、コンドームを買っていたのだから

ら。

両手で顔を覆う三玖。しかし隠し切れていない耳まで真っ赤になっただけ。

「み、見ないで……フータロー……恥ずかしくて死んじゃう」

さつきまでの冷たい雰囲気は何処へやら、いつものように恥ずかしがり屋で可愛い俺の恋人が目の中にいる。

「そんな恰好してるのも俺と同じ理由だろ。知り合いに見られたら恥ずかしいから、一目で自分と分からないように変装しようって事か」「ん……」

頷いて肯定すると俯いて小さくなった。

俯いた三玖の頭をなでた。乱れた髪を押さえながら睨んできたが、「ははは、もうそんな目しても怖くないからな」

それが恥ずかしさの裏返しと知っているなら、なんて可愛らしい顔だろう。

「なあ三玖、そんな可愛い恰好してどこに行くんだ？」

俺の質問に要領を得ないのか小首をかしげて疑問を示す。

「良かったら俺とデートしに行かないか？」

少しキザだっただろうか。いや、聞いた三玖が笑顔になったからこれでもいいんだ。

「うん」

数週間後。

家庭教師をしにきた俺に二乃がニヤリとしてからかうように言うてきた。

「お洒落をした三玖ちゃんとのデートは楽しかったかしら？」

内心どきりとしながら、表には出さずに返した。

「何の事だ」

「とぼけたって無駄よ無駄。どうりで三玖がいない訳だわ」

だから、と口を挟もうとした俺の目の前に二乃は雑誌を一冊突き出した。

そこには三玖と、そして後ろに金髪のカツラをかぶった俺が僅かに

映っている写真が掲載されていた。後ろから一花も覗き込むようにその写真を見てきた。

「あー本当だ。フータロー君べつにこんな変装しなくても。言ってくれたら三玖との時間くらい作ってあげるよ」

見せてと来た四葉に一花は雑誌を渡した。

「あ、本当だ。三玖とこれ小さいけど上杉さんだ。こんなお洒落して何してたんですか?」

「何って……」

勉強していた三玖が顔を上げてこっちを見てきた。俺と目が合うとかつと顔を赤くして俯いた。胸をかばうように腕を組んでもじもじしている。

「あれ? どうしたんですか上杉さん。顔赤いですよ」

「よ・っ・ば、野暮なこと言っちゃダメだよ。恋する二人の間には、余人の立ち入る隙は無しってね」

「一花、それ何の言葉?」

「知ーらない」

その日は雑誌をダシに散々からかわれた。

蠱惑の糸に絡まれば

「じゃあね。六時には帰ってくるから、それまでにイチヤイチャしくくしときなさいよー!」

「二乃、私たちは勉強するだけ」

「ふん、どうだか」

「二乃、いじめないの」

「あれ? 四葉、今日は予定はないと言っていますでしたか?」

「五月くさすがに私でも気を遣うよ」

五姉妹のうち四人が玄関にひしめき合う。休日の正午ほどになぜ慌ただしく出かけなければならぬのかというと、家に残る三玖と風太郎が恋人関係であり、誰も人の恋路を邪魔して馬に蹴られたくないからだ。

「行つてきます」

四人の声がピタリと重なり次々玄関から出て行つた。四人がいなくなると先ほどまでの姦しさはどこへやら、寂寥感すら覚える静けさが広がる。

二人は顔を見合わせる。どきりと心臓が脈打ち、互いの顔が赤くなつた。

風太郎は気恥ずかしさを誤魔化すように頭を掻くと、

「あー……三玖、分からない所はあるか? 今日は徹底的に教えてやるぞ」

あくまで教師としてここに来ているのだと心の体裁を整えた。

「え……うん。フータローに聞きたいところがあるから来て」

そして三玖もその茶番に付き合うことにした。そうでもしないと恥ずかしさに消え入りそうだった。

先を歩いて机に座る三玖を見ながら、風太郎は内心自分のヘタレ野郎と毒づいた。

三玖は問題集を開きノートをぱらぱらと捲つた。ノートを見ている伏せられた顔に、「綺麗だ」そう素直に思った。

「え……フータロー、あの、えつと……」

三玖はいきなりあたふたして顔を赤らめた。思わず口に出てしまっていたらしい。

誤魔化すように風太郎は軽く咳払いをして三玖の隣に行き、問題集を覗き込んだ。

「これは……」

それは関数の問題だった。彼は頭の本棚から数学を引っ張りだして、流れる様に問題の解法を唱えた。

三玖はもつとよく話を聞こうと風太郎の顔を見た。それがいけなかった。

嫌な気持ちになったから？ その逆だ。彼の真剣な顔を見るとどうしてこんなに好きなんだろうと、血が沸騰したように体が熱を帯びてきたからだ。

「分かるか？ 三玖」

問題の解法を一通り言い終えると確認のために視線を落として三玖を見た。風太郎は息を呑んだ。顔を赤らめた三玖が、熱に浮かされたような目で自分を見てきたからだ。

彼は熱風を吸い込んで喉が焼けたように息が出来なくなった。

「フータロー……」

三玖は甘く、しかし耳をそばだてなければ聞こえないほど淡く恋人の名を呼ぶ。

花の甘さに引き寄せられる蝶のように、風太郎は言葉の甘さに引き寄せられ、三玖の小さな桜色の花にとまった。

「んっ……」

あまりに甘美なキスの快楽に、鳥肌が立つほど感覚が鋭敏になっていく。

息が漏れる。感情が昂る。そしてなにより、恋人への愛が高まる。

「はっ……あ」

唇を離す名残惜しさが熱い吐息となって零れた。二人はその名残惜しさを取り戻そうとゆっくりと近づき、

「ごめん忘れ物」

しかし玄関から聞こえる声に弾かれるように距離をとった。

「あら？ お邪魔だった？」

二乃は悪びれる様子もまるでなく、二人に視線を向けるとテレビ台の上に置いてあるスマホを取った。

「ごゆっくり〜」

目元がにんまりとし白い歯をみせて笑いながら二乃は出て行った。

残された二人は先ほどまでの、うつとりとした耽美な雰囲気霧散してしまい気恥ずかしさに頬をかいた。

「お茶淹れるね」

沈黙に耐えられなくなった三玖は逃げる様に台所へ立った。

「あ、ああ」

ヤカンに水をいれて火にかける。棚から茶葉を探して三玖の後ろ姿がゆらゆら揺れる。そんな彼女を見てみると、風太郎は無性に抱きしめたくなった。

それはこんな風に家事をしていたかもしれない母親への憧憬なのか、それとも自分にかまってほしい子猫のような嫉妬なのか確かめなくなり、後ろからそつと抱きしめた。

「わ、フータロー……？」

抱きしめられた三玖は驚いて一瞬固まる。しかし抱きしめてくる腕の力強さに安堵の気持ちを覚えて風太郎に体を預けた。

「三玖」

耳元で風太郎は囁いた。三玖は愛しい声が頭にびりびりと響き、過剰な電力を流された回路のように焼き付いて思考が真っ白になる。

「フータロー……フータロー……」

もつと頂戴とねだる小鳥のように、三玖は彼の名前をうわごとのように呼ぶ。

彼女は風太郎の腕の中で振り返り彼の背中に手を回す。そんな三玖の腰に手を回し、力強く引き寄せた。

腹が、胸が、腕がくっついて、後はどこをくっつけなければいいだろう。

答えは、互いの瞳に映っている。

二人は押し殺した息でさえもかかる距離に近づくと、答え合わせを終えた本のように瞼を閉じた。

「あ……っ……」

唇が触れ合うと、どくと心臓が大きく跳ねた。いや、くつつけた胸から伝わった相手の鼓動かもしれない。

自分と相手との境目が曖昧になるほど熱く繋がると、唇を離すことがおかしい事のように思えてくる。

「すみません！ 本当に二人ともすみません」

玄関から五月のぴしゃりと芯の通った声が出た。名残惜しくも体を離すと、半身を失ったかのような強烈な寂しさが胸の内に広がる。

「ええと、持っていく本を忘れてしまつて……」

バツのわるい五月はそそくさと机の上に置いてある本を手取る。もう一度謝罪を述べようと二人を見ると、そのことを後悔した。

風太郎は人相の良い人とは言い難いが、それでもこんなに険を持って何事かを見る事はなかった。その敵意を持ったような鋭い目に見られるとさしもの五月も縮こまる。

そして姉は普段の凧のような穏やかな表情は面から消え、恋人への愛で赤い頬をして、海さえも沸き立たせるような火が瞳に灯っている。

ああ、これが恋する人の顔なんだ。

少しかもつと先か分からないが、自分もこんな顔を見せる人と出会うのだろうかと思いがときめいた。しかし今の状況を思い出した。自分とはとんだお邪魔虫だ。ここは自分の出る幕ではないと思い、小走りに玄関から出ていく。

「ごめんねフータロー」

「いや、ここはお前達の家なんだから、帰ってくる奴をとやかく言う資格は俺にはない」

とは言うものの、風太郎の胸の内では不完全燃焼の黒い煙がむくむくと膨れ上がり、事ここにおいては武断的行為もやむを得ない、と某北の国の放送の様な物騒な事を考えた。つまりは開き直す事にしたのだ。

火にかけてヤカンからシューとお湯が沸く音がすると、三玖は慌てて火を止めて急須と湯呑を準備し始めた。お茶を飲むつもりらしい。

風太郎は体の芯に残った熱から目を反らすように頭を振って歩き、いい加減片付けなければいいのと思いつつコタツに足を入れた。

お盆に湯呑と急須を乗せて来た三玖はそのお盆を机に置いて彼の隣に座った。

三玖はこなれた手つきでお茶を淹れ始めた。一つの湯呑に少し注ぎ、もう一つにも同じように少し注ぐ注ぎまわしという手法だ。

彼女が淹れてくれたお茶に口をつける。温かい苦みが舌にじわりと広がり、ゆつくりと味わいながら飲んだ。

「見てフータロー」

三玖は微笑みながら自分の湯呑を見せてきた。そこには茶の茎が浮いていた。茶柱だ。

ふわりと朗らかに笑う彼女を見て、風太郎はいたずら心が一つ芽生えてきた。

三玖の湯呑を取ってお茶を一口含む。あ、と言って彼女は風太郎から湯呑を取り戻すが、もうそこに茶柱はなかった。

「フータローのいじわる……」

三玖はいつもの様なふくれっ面で、目を細めて彼を睨んだ。

風太郎そのふくれっ面の真ん中、唇に人差し指を当てた。三玖はその人差し指に噛みついてでも文句を言おうとしたが、彼の指に込められた意味を考えて赤面した。

まさかそんな。あのフータローが？ そんな……少女漫画でもえっちな方の漫画でしか見たことのない、あんなことをしようとしているの？

三玖はその未知の行為に対する興味と、不思議な高揚を覚えた。ドキドキとうるさい心臓を落ち着かせようと唾を飲み込む。

三玖は風太郎を見るために少し顎を上げる。彼はいたずらが成功した子供のように口の端を釣り上げた。それを見て彼女は、可愛い所もあるなど胸の奥がきゅんと甘くうずいた。

風太郎は唇の上に置いた指を滑らせて下り、三玖の顎先に当てた。その指をくいと引いてこちらを向かせる。見上げる形になった三玖はおずおずと口を開く。

期待に潤んだ三玖の瞳が風太郎を見つめる。彼はそつと近づいて彼女に唇を重ねる。

風太郎は口に含んだ緑茶を三玖に流し込んだ。

「ん……んくっ……」

初めての口移しに戸惑いながら、必死に飲み込もうとする。人肌ほどこにぬるくなった緑茶が、恋人の口によって甘くなったように感じた。飲み込み切れなかったものが三玖の口から一筋零れた。

「はっ……はあ……」

風太郎からもたらされる奔流に弄ばれて息も絶え絶えになる。足りない空気を求めて浅い息を繰り返した。それでも尚ぼうつとす頭で三玖は求めるままに口を開いた。

「もつと……」

言つてから自分が何を言つたか理解して、やっぱり今のなしと言おうと思つたが開いた口に風太郎は口付けてきた。今度は先ほどよりもゆつくり丁寧に、そんな配慮を嬉しく思う。

口移しするものがなくなつても、口付けは終わらない。風太郎の舌が三玖の唇を割つて入つてきた。熱い、自分と全く異なる体温の舌がお互いを舐める。二人は夢中になつて口の中を舌でまさぐりあい、甘美な唾液の交換を続けた。体の奥から溶けていくような強烈な快楽を手放したくなかつた。

「四葉く台本どこ置いたんだっけ？」

「えつとー、テレビ台の一番下のはず」

玄関から二人分の声がした。三玖は呆けたように回らない頭で考える。四葉、台本。帰つてきたのは一花と四葉だ、と他人事のように思った。

足音が一步步近づいてきても風太郎は不思議と焦りも怒りも湧いてこなかつた。もう開き直すことにしたのだから、この愛する恋人との触れ合いを止めるつもりなどさらさらしない。

「ごめんねふた……り……」

「一花ー、一番し……た……」

一花と四葉の足音が止まり、会話が止まる。

三玖と風太郎が行っているたわむれに恥ずかしさを抱きながらも、憧れてもいるから目を皿のようにして見入った。三玖の口の端から涎だろうか、きらりと光る跡がある。普段は冷たく見える目元の目じりが下がり、とろんとした瞳は女である二人もどきりとさせられるものがあつた。

一花と四葉は普段はどちらかと言うとクールな三玖の痴態に驚いていた。

平たく言うと「うわ三玖エツロ」と思ったのである。

「フータ……」

三玖は風太郎が気付いていないのかと思い、目線を二人に向けて一言告げようとしたが、その言葉は風太郎に飲み込まれた。彼は三玖の後頭部に手を添えて引き寄せ、強引にキスをしたからだ。

「え……フータローくん？」

「わわ……」

一花と四葉、二人を見ていた三玖の目が驚愕の色で彩られたまま見開かれた。しかし恋人からの熱いキスに、全身が粟立つほどの気持ちよさと心地よさに、三玖はうつとりと目を閉じた。

一花と四葉はそれにシンクロするかのよう片目を閉じる。二人は奇妙な感覚に捕らわれた。いまさら言うことでもないが、一花と四葉、そして三玖は同じ顔である。それ故にこの三玖が風太郎とたわむれている姿を、まるで鏡に映る自分がそうされているかのような錯覚を覚えた。それはある意味倒錯的な快感で、溺れるように目の前の「鏡」に夢中になった。

三玖がキスされる。二人はしたこともないキスを幻視する。風太郎は三玖の口に指を入れ、それを嬉しそうに彼女は噛む。がじり。二人は自らの指に噛みついた。風太郎は三玖の頭に添えた手の指で彼女の頭皮に爪をたてる。

「やつ……あんっ……」

三玖の口から、聞いたこともない甘い女の声が漏れた。二人の口から熱いため息が零れる。

風太郎は意地悪く笑い、二人に流し目をくれた。一花はどきりとす

る。それは彼女が好きだった彼の笑顔だから。

——いつまで見てるんだ？

目を離せない魔法から解かれたのか、それとも風太郎の言葉に従う魔法にかけられたのか、いずれにせよ二人は客観性を取り戻した。

妹の（姉の）情事を覗き見て興奮しているなんて、こんなの変態じゃないか！

「ごめんなさい！」

二人は今更だが恥じ入って赤面し、目当ての物をとって風のように駆け抜けて行った。

そんな二人をみて、三玖も自分は何てはしたない姿を姉妹に晒したんだと赤くなつた。

「フータローのばか……」

三玖は体の芯が熱で溶けてしまったように力なく風太郎にもたれかかった。彼は胸に寄りかかる三玖の頭をなでる。二人の胸の内に先ほどまでの灼熱のようなキスとは違って、陽だまりのような温かさがこみ上げてきた。

「フータロー……えつと……」

風太郎の胸に抱かれながら三玖は彼の顔を見上げた。恥ずかしさに決意の火が揺らぐが、三玖は勇気を振り絞って言った。

「あの……布団……敷いてる……」

言ってしまった！ 三玖はまともに風太郎の顔を見られない。風太郎が来る前から、『そういう事』を期待して待っている自分がとてもいやらしい女に思えてきた。

風太郎は涙目になっている三玖の頬にキスを落とす。

「三玖、愛してる」

風太郎は精一杯の心を込めて愛を謳う。彼は三玖を見ているだけで爆発しそうなこの思いを彼女に受け取って欲しかった。そばにいて、手をつないで、笑いあつてキスをして、そして……

三玖は今の状況が夢ではないかと疑うほどに幸せを感じていた。彼女は風太郎を見ているだけで張り裂けそうなこの胸のときめきを彼に知って欲しい。そばにいて、手をつないで、笑いあつてキスをし

て、そして……

三玖はにこりと笑う。風太郎は思わず息を呑んだ。
彼女があまりに綺麗に笑うから。

「私も愛してる、フータロー」

乙女の興味の渦の中

「ねえ三玖、一緒にお風呂入らない？」

晩御飯を食べた後、一花はいきなりそう言ってきた。

「いいけど」

「あ、私も！」

いつものように元気な四葉の声も一花に便乗してきた。二人ともちよつと頬が赤い。そして目が爛々と輝いてる。さすがに何の事だろうととぼけるほど私は鈍感な人ではない。

「うん、決まり。早く入ろ」

と言うと、一花は私の腕を引っ張り四葉は後ろから押してきた。そんな私達を見ると二乃は呆れた顔で言う。

「こんな狭いお風呂で、すし詰めにならなくてもいいでしょ」

一花は軽く笑って受け流すと、脱衣所まで私を引っ張りこんだ。服を脱いでいると、じろりと視線が肌に突き刺さる。……脱ぎにくい。

シャツを脱いで洗濯機に放り込む。洗面台の鏡にそろりと近づいてくる一花が見えて、

「えい」

「ひゃっ」

指でつついてきた。

「ふっふっふ、三玖ちゃん、虫刺されの時期には少し早いんじゃないかな」

「なんの事だか分からない……」

一花の指摘に私は知らんぷりをする。でも、どんなに口で言っても意味はない事は分かった。

「わ、本当に赤い痕。これがキスマーク？」

体に隠しようのない痕が残っているのだから。

『三玖』

その赤い痕が残った時の事を否応なしに思い出される。胸がどくと跳ねて、フータローがここにいない事に切なさが胸の内に広がる。

「まあまあ、湯船につかりながらゆっくり聞こう?」

ね、と一花はウィンクした。ここにあってもはや逃げることなど出来はしない。乙女の興味の大渦に飲み込まれてしまった私が悪いのだから。

ただでさえこのアパートの浴室は狭いのに、三人も入れれば足を伸ばすことすら難しい。しばらくの協議の末、一人が体を洗い、二人は湯船に入る形に落ち着いた。まずは私から。

シャワーで髪を濡らしていると視線を感じる。一花と四葉がジロジロと私の体を舐める様に見つめていた。

「何?」

そう聞くと二人は顔を見合わせた。そして聞いてくる。こういう時先陣を切りこんでくるのは一花だ。

「どうだった?」

「だから何が……」

「とぼけても無駄だって。あんな熱いラブシーン見せつけておいて」

思い出すと恥ずかしさに震えそうになる。あんな強引なフータローは初めてだった。体が熱いのは温かいシャワーのせいだけではないだろう。

「本当に困ったんだから。ラブシーンの撮影見ると思い出しちゃって監督に『君、うぶで可愛いね』なんて言われちゃった」

ぽつと声に出して頬を一花が抑えた。大した役者ぶりである。

「で……三玖、どうだったの上杉さんとは?」

抑えきれない興味の光で四葉の瞳が光った。

「どうって……」

私は数時間前のフータローとの情事を思い出す。それだけで体がかつと熱くなり、もう一度あの腕に抱かれない思いがよみがえってくる。とはいえ正直結果から言えば、

「次回に課題を残す結果となった」となる。

「えー何それ、負けた時のサッカー日本代表みたい。ミク・ナカノにならなくて良いから」

一花はそう言つてむくれて四葉と一緒にブーイングの構えだ。

「言つちやえ四葉」

「ええ私!？」

四葉は先ほどまでの勢いはどこへやら、小さくなって恐々聞いてきた。

「でも、えつと……あの……した、んだよね上杉さんと」

四葉の質問は、その性格らしく直球だ。恥ずかしさに固まった心に食らえばひとたまりもない。余計な弁明も弁論も意味なく、

「……うん」

と言わざるを得なかった。二人は顔を赤くして指を絡ませキヤーカー言いなながら湯船で跳ねている。

「ね、どうだった?」

グイグイと湯船から身を乗り出して二人が近づいてくる。怖い。

何とか言葉にしようと、フータローとのあの一時を時系列順に思い出して強く思った事だけ述べる事にした。

「……痛かった」

「痛かった!？」

「泣いちゃった」

「泣いちゃったの!？」

「でも……」

「でも?」

「優しかった」

「ほほう」

二人は顎に手を当ててしたり顔だ。……いや知らないでしょ。

「あー! 一花、三玖が『可哀そうだけどあなた処女なのね』って顔した!」

「五つ子格差がこんな所に……。あー熱くなってきた。三玖、こうたーい」

派手な水しぶきを上げて一花が湯船から出た。後で二乃に怒られそう。

「四葉、つめて」

「はーい」

四葉が作ってくれたスペースに体を入れる。隣からの視線が痛い。

「あんまり見ないで……」

「ごめん、でもやっぱり気になって」

四葉はバツが悪そうに笑って頬を掻いた。今まで姉妹から色恋色恋した話は聞いたことがなかったが、やっぱり皆気にはなっていたのだろうか。

「でもそんなに痛かったの？ 泣いちゃうくらいに？」

思い出すと体が熱くなる。フータローが私に『好きだ』『愛してる』と言ってくれた言葉の震えが呼び覚まされて、心が震えて胸が嬉しい気持ちでいっぱいになってきた。この日の事を、きつと忘れないんだろくな。

「うーん……痛かったのもあるけど、一番は情けないからかな」

「情けない？」

首をかしげてはてなの意味を示す四葉に、私は恥ずかしいが訥々と説明した。

「フータローの……えっと、あれが入ってくる時に股から裂けそうなくらい痛くなって、フータローはすぐ抜いてくれたんだけど、そのとき私はなんてダメな女なんだろうって思ったの。こんなに大好きな人を受け入れられないなんて、私はなんて情けないだろう、フータローにふさわしくないんじゃないかって思って、それが悲しくなつて涙が止まらなくなって、でもフータローが……フータローが……」

あれ？ 私は何を言っていたっけ。頭がぐわんぐわんして……

……

三玖―!? わー大変三玖がのぼせた! 二乃―二乃―! 三玖がのぼせちゃった氷持ってきて! あんたたち何やってんのよー! 持ってきてしまった三玖は大丈夫ですか! 五月なんでそのまま持つてくるの!? 袋に入れてもつてきなさい! ……

……

……

ん……

「あ、起きた？」

う……ん。だれ？

「あーあ、これは相当まいってるわね」

「ごめんねー三玖」

「疲れていたのでしょう。話では泣くほど自分を責めたそうですし」

「ごめん三玖」

ぎゅっと何かに抱きしめられた。

「明日にしましょう、明日に」

「そうだねー。明日もフータロー君来るし、その時でいいか」

「楽しみだわー。どんな顔して話すかしら」

「今はゆっくり休んでください、三玖」

ん？ おやすみ……

昨日の今日で中野姉妹宅に赴くのは、気まずいというか気恥ずかしいというか。だが俺はお金が貰える実利の面と、三玖に会いたい気持ちの面から言っても約束をすっぽかすなどありえなかった。

中野のネームプレートのはまった扉の前に立つ。昨日の記憶が蘇ってきてどくと胸が大きく脈打つ。

『フータロー……大好き……』

……

いやいや、今はとりあえず忘れよう。

……頑張って忘れよう。どうにかして忘れよう。何としてでも忘れよう。

よし。

チャイムを押す。中から誰だろうか、どうぞと言う声が聞こえた。扉を開けると、

「うう……フータローー！」

なぜか若干涙目な三玖が俺の下へ駆け寄ってきた。そのまま三玖は抱き着いてくる。柔らかい胸が当たってきて……

だから今だけは忘れろって。

「どうしたんだ三玖」

「今日からフータローの家の子になる」

「はあ!？」

突然の告白に頭が追いつかない。何が、と思つて顔を部屋に向けると、三玖以外の四人がなんとも言えない笑顔をしてこちらを見つめてきた。

「あーあ、いじめすぎちゃったかしら？」

「丁度いいところにフータロー君も来たし、選手交代つてことで」

言つた順に二乃、一花がじりつとにじり寄ってくる。俺は完全に理解した。色恋沙汰に興味津々な女子らしく根掘り葉掘り三玖から聞き出そうとしたのだろう。

「今日は忙し「おっと逃がしませんよ」

いつの間にか四葉が扉を閉めて鍵をかけていた。え、怖。

「せめて三玖は置いて帰って下さい」

五月は三玖を引き戻そうとしてくる。しかし三玖は俺の服にしがみついて離れない。

「往生際が悪いわね、さっさと入つて来なさい」

ここに来て今度こそ理解した。

どうやら俺はとんでもない渦中に飛び込んでしまったらしい。

君と窓辺にいられたら

中野家への家庭教師を終えていつもの帰り道、いつもと違う事が一つある。

「フータロー」

隣を歩く三玖がいる事だ。

三玖に泣きつかれた後の俺は結局勉強を教える事にしたのだが、たびたび昨日はどうだの三玖はどうだったのだの、針の筵にいるような居心地の悪さを散々させられた。

そしてこの事態を引き起こした決定打は、五月が話の流れでポロつとこぼした、家出していた時に俺の家に来ていたという事実だ。一花に二乃に四葉は面白おかしく五月を追及し始めたが、三玖は少し俯いて何も言わなかった。

「三玖、何か五月に聞きたい事ないの？」

俯いたまま動かない三玖に気を遣って二乃は質問を投げかけた。

三玖は顔を上げると涙目になりながら四人を見渡して、私もフータローの家に行くなどと言い出した。

さすがに質問攻めしすぎた負い目があるのか、他の四人は何も言わず着替えや教科書をまとめて三玖に持たせてくれた。

隣を歩く三玖を見る。それだけで胸が高鳴り、体が熱くなるように感じた。

「ねえ、フータロー」

しかし、三玖はどこか浮かない顔をしている。自分を恥じ入るような、どこか嫌悪にも似たような、そういう複雑な顔だ。

「やっぱり帰る」

「どうした、三玖？」

「恥ずかしくて、五月が羨ましくて思わずあんな事言っちゃったけど、フータローに迷惑かけられない」

羞恥と怒りが交ぜになつたような感情のままに飛び出した方がいいが、家を出てしばらく歩いて冷静さが戻つたのだろう。しかし、さすがに自重するだろうとは言えあの四人の大渦の中に三玖を放

り込むのも気が引ける。

三玖の手を引きながらゆっくりと歩き出し、電話をかけた。

『もしもし、お兄ちゃんどうしたの?』

「らいは、いきなりで悪いんだが今日一人家に泊めても大丈夫か?」

『家に泊まる……もしかして五月さん?』

「いや、違う。三玖って分かるか? 右目が隠れるくらいの長い前髪してる」

『あー三玖さん。大丈夫、分かるよ』

「そうか。それで一人増えても大丈夫か?」

『私はいいけど』

「分かった。それで今から買い物に行こうと思ったんだが、何か必要な物はあるか?」

『買い物……ちよつと待つて』

と言うとうんうん唸る声が聞こえる。らいはが頭のメモ帳をめぐっているのだろう。

『お兄ちゃん、買い物はいいよ。近所のスーパーがセールやってるからそこで買っちゃうね』

「ああ、ありがとう」

『はいはい』

電話を切って隣の三玖を見る。口を一文字に結んで難しい顔をしていた。

「フータロー、何で……」

「意地悪な姉妹の毒牙から守りたいからだ」

三玖は潤んだような瞳を揺らし、その顔を伏せた。

「三玖、遠慮するな。俺は三玖が家に来てくれたら嬉しいぞ」

握った手に力を込める。三玖は涙がこぼれそうな顔を上げて、笑顔で言った。

「ありがとう、フータロー」

ゆっくり話ながら歩いていると、段々と日が傾いてきた。空が赤く染まり、全てに赤が差す。車のライトに光が灯り、夜の訪れを知らせる様に道を走って行く。

楽しい時間はあっという間に過ぎ去っていく。気が付くといつの間にか家についていた。

「ここがフータローの家なんだ」

「まあ狭い家だが」

「そんな事ない。私達の家の方が」

「五人いるから狭く感じるだけだろ」

ドアに手をかけるが開かない。らいは、まだ帰ってきてないのか？ポケットから鍵を出してドアを開いた。三玖にどうぞと目で促して先に入ってもらおう。俺はその後が続いて入る。

すぐに電気のスイッチを入れる。さして広くない部屋の全てが露わになると、三玖は興味深そうにキョロキョロと見渡した。

「面白い物なんかないぞ」

「ここにフータローが住んでるだなんて、不思議な感じ」

という三玖は振り返ってくる。微笑みながら弾むように嬉しそうに言った。

「フータロー、おかえり」

その時俺はどんな顔をしていただろうか。胸が悲しいように痛んで、嬉しいように弾んだ。これがいわゆるキュンキュンするというやつなのだろうか。

その眩いような笑顔にそつと触れて、ゆつくりと顔を近づける。三玖は長い睫毛に縁どられた瞼をゆつくり閉じて訪れる唇を待つ。

「ただいま」

ふわりと温かくて柔らかい三玖の唇に触れると、心も温かくなるような感覚に包まれる。胸の奥がもつとしたという思いで疼くように、痛いほど脈打つ。その望みを満たそうと、荒い吐息交じりに三玖を呼んだ。

「三玖……」

「フータロー……して……」

三玖の顔は美しい赤に染まって、その赤のように熱い息がお互いの気分を高める。

「んっ……」

今度は乱暴なほどに深く口付けた。火花が散りそうなほどに快樂がはじけて頭の中を駆け巡る。らいはが帰ってくる、自制しなければというタガも外れたように、さらにもう一度キスをした。

「フー……あ、んっ……」

「ただいわああああああ!!!」

玄関からいきなり上がった叫び声にびくりと身を固くする。声の方を見ると、買い物袋を落として両手を口元に当てて驚きにあんぐりと口を開けているらいはがいた。

「らいは、驚かすなよ」

「驚いたのはこっちだよ！ え、お兄ちゃんどういふ事？」

「前に言っただろ、付き合ってる子がいるって」

「本当だったんだ……」

「ええ……」

らいはから彼女が出来たと言い張るヤベー奴と思われていた事に、さすがにショックを受ける。

「え、じゃあ三玖さんがそうなの？」

うなだれる俺をしり目に三玖の下へ歩いて行った。三玖は屈んでらいはに目線をあわせる。

「うん。春休みの終わり頃から……っ、付き合ってる」

三玖はさつきキスをしていた時とは別の感情で赤くなった。

「えくそうだったんだ」

らいはがこちらを振り返ってくる。その顔はにやりとして新しいおもちゃを見つけたかのようだ。

「お兄ちゃんいつもあんなにイチャイチャしてくるの？」

女性はいくつでも恋愛模様に首を突っ込みたがるらしい。ただ幸いなことにらいはに知識が余りないのであの四人の様な質問は飛んでこないだろう。

「うん。フータローは結構大胆」

「へえ、お兄ちゃんがね」

あ、これ長くなるやつだな。

「ね、ね、キスっていつしたの？」

「付き合っつてすぐに」

「えくほんとに大胆く。きつとお兄ちゃん勉強ばかりだったから、三玖さんっていう恋人ができて爆発しちゃったんだ」

……勉強しよう。

「あ、そういえばどっちから告白したの？」

「私」

「そうなの？ お兄ちゃん、女の子に告白させるなんて甲斐性なし」

「悪かったな」

二人はしばらく恋愛話に花を咲かせていたが、らいはが唐突に手を叩いた。

「そうだご飯の準備しなくちゃ」

「らいはちゃん、私も手伝う。フータローの好みの味を身に着きたい」

台所へ歩いて行くらいはに三玖が付いて行った。大丈夫だろうか。

「お兄ちゃん、お風呂の準備しておいて。ていうかそのままお風呂入って。あがったところにご飯できてるから」

俺は読んでいた英文から顔を上げる。らいはが少しだけ顔をこちらに向けて、そして料理に視線を戻した。立ち上がって浴室に足を運んだ。家事の事でらいはに反論できる奴はこの家にはいない。

浴槽を洗いお湯を溜め始める。五分もすれば丁度いい具合にお湯が溜まっているだろう。

少し単語帳でも見て風呂に入ろうと思っていると、台所かららいはの大きな声が聞こえた。三玖が何かへまでもしたのか。

台所へ足を運ぶと俺の懸念はその通り、らいはが三玖にお説教の最中だ。

「三玖さん！ 味付けはレシピの分量通りかちよつと少ないくらいにしないと、薄味は後で濃くできるけど、濃い味は薄くできないよ」

「ご……ごめんなさい」

「それに、火が強すぎたり弱すぎたりすると、焦げたり火が通ってなかったりしちゃうよ。お兄ちゃんは『料理は科学だ。条件をそろえれば誰でも再現できる』って昔言ってたよ」

「フータローがそんな事を……」

「だから三玖さん、まずはレシピ通りに作ろう」

「うん。分かったらいはちゃん」

話の一つ区切りがついた所で口を突っ込むことにした。

「なあらいは。何だか三玖に当たりがきつくはないか？」

「あ、お兄ちゃん。だって三玖さんと結婚するんでしょ？ そうなったら私お兄ちゃんにご飯作れないから三玖さんに料理覚えてもらわないと」

らいはの口から飛び出してきた結婚という言葉の石が頭に直撃して火花を上げた。それを種火として頭の中に火が点いて三玖の頬が燃える様に赤くなった。きつと俺の顔も赤くなっている事だろう。

「え？ しないの？」

らいはがきよんとした顔で俺と三玖を交互に見てくる。

……結婚か。

「あれ、そういえばお兄ちゃんお風呂は？」

「今から入る」

着替えを取って浴室へ向かった。

体を洗い湯船につかる。息を吐いて人心地つくど、さっきの言葉が頭の中を巡る。

結婚か。

そもそも、恋愛事自体をどこか小馬鹿にしていたから、結婚について思いを巡らせる事なんてなかった。俺も今年で一八歳になり、保護者の同意が必要とはいえ結婚できるようになるのだから、少しくらい考えるべきだろうか。

三玖と結婚するのか？ もちろん好きだし、愛している。恋人ならそれだけでいいのかもしれないが、結婚となると家の事も考えなければならぬ。この借金を抱えた上杉家に三玖は来てくれるだろうか。

三玖が良いと言つても、あの父親は許してくれるだろうか。

頭がぼうつとしてきた。まず風呂からあがってその後でまた考えよう。

体を拭いて着替えに袖を通す。部屋に戻るとテーブルに料理が並べられている。

「フータロー、ご飯出来てる」

三玖に促されてテーブルの前に座り、いただきますと手を合わせて料理に箸をつける。豚肉入りの野菜炒めだ。一口食べると、三玖の大きな目がきらきらと光って俺の方に視線をくれる。らいはが三玖の心を代弁して聞いてきた。

「お兄ちゃん、どう？」

「どうって、普通に旨いぞ」

そう言うと、三玖はほっと胸をなでおろした。

「良かったね三玖さん」

「らいはちゃんのおかげ。ありがとう」

二人はそう言って喜び合うと、おしゃべりに花を咲かせた。学校の事、友達の事、そして時折俺の事。お喋りと食事が一段落すると、三玖は食器を片付けようと立ち上がって台所に運んで行った。らいはが私がやると言ったが三玖は、

「いきなり押し掛けたお詫びにこれくらいさせて」

と言って譲らず、任せることにした。洗い物をしている三玖を視界の端に捉えながら、らいはは少し小さい声で尋ねてきた

「お兄ちゃん、どうして三玖さんうちに来る事になったの？ ケンカしちゃったの？」

「前に五月が泊った事があつただろ」

「うん」

「それを聞いた三玖が私も行きたいって。そういう話だ」

「そうなんだ。でも、すぐに連れて来るなんてやっぱりお兄ちゃん恋が爆発してるよ」

「してるか？」

「うん」

洗い物を終えた三玖がこちらに戻ってくる。

「三玖さんありがとう。お風呂お先にどうぞ」

「え、でも」

「いいからいいから」

らいはに押し切られる形になり、三玖は浴室へ向かった。俺は風呂

に入る前にやっていた英語の参考書を開き、勉強を再開する。長文問題を終えたくらいに風呂からあがった三玖が姿を現した。

顔を上げて三玖を見るとどきりとした。

濡れた髪がつやつやと輝いて頬にくっついていている。上気したように肌がほんのりと赤くなり、くつろいだ首回りの寝間着姿が妙に色っぽい。そんな三玖が俺の家にいる事に不思議な興奮を覚えた。

「お兄ちゃん、私お風呂入ってくるけど、イチヤイチャするのもほどほどにしてね」

「そんなに信用ないか?」

「私が帰ってくるのにずっとちゅっちゅしてたお兄ちゃんにそんなのないよ」

そうらしいはが言い切ると立ち上がって三玖とすれ違う。三玖は一度らしいはを振り返り、小首をかしげながら俺に聞いてきた。

「フータロー、らしいはちゃんに何言われたの?」

「いや、大したことじゃない」

三玖は納得いかないように少し眉をひそめながらも頷いて、鞆から数学の問題集を引っ張り出してノートを開いた。しばらく紙を滑るペンの音だけが響く静かな時間が広がる。

「なあ三玖」

その静かな時間を打ち切って俺は聞いた。

「俺ってそんなに恋が爆発してるか?」

俺の質問をかみ砕いて飲み込むと、三玖は小さく笑った。

「してる」

と言うと、まだ可笑しさが引かないのか笑っている。

「どんな所が?」

「すぐ手を握ってきたり、キスしてくる所?」

それと。と三玖はさらに付け加える。

「フータロー、前は鈍かったけど、今は私のして欲しい事すぐ分かったりして鋭い所とか」

「鋭くないとお前達が誰が誰だか分からないだろ」

「もう皆の事入れ替わっても分かる?」

「三玖だけなら絶対に分かるんだが、他の四人はもう少しかかりそう
だ」

口元をほころばせて三玖は俺の近くまで来た。

「ね、フータロー」

訴えかけるような目線を俺に向けて、三玖はその場で止まった。し
て欲しいことを当ててみてという事だろうか。

風呂上りの温かきで上気したような赤い顔に、やさしい目をして、
少し身を乗り出すようにこちらに前のめりだ。

俺はあぐらをかいて手を広げて言う。

「三玖、おいで」

目の前の可愛い顔がぱつと華やいで、俺のかいているあぐらの上に
座ってきた。ふわりと甘い女の子の香りが俺の鼻腔をくすぐる。三
玖は俺の背中に手を回して抱き着いた。その濡れて艶やかな髪を指
で梳くように頭をなでると、子猫のように目を細めて嬉しがる。

「こういうこと、フータローはしたくないのかなってずっと思ってた。
恋愛なんて、って言ってたから」

「そんなことは……」

ない、と良い訳がましい事は言えなかった。過去の発言に恥じ入る
ことくらい俺にもある。だからだろうか。それを埋め合わせるよう
に、三玖に触れたいのは。

「三玖」

気持ちと期待を込めて、三玖の綺麗な瞳を見つめた。俺のことなど
お見通しかのように、すぐ行動に移してくれた。

三玖は俺の首に手を回すと、ゆつくりと顔を近づけてきた。目を閉
じて三玖からのキスを受け止める。温かくて思わずうっとりしてし
まうような、そんな幸せなキスだった。名残惜しくゆつくりと唇を離
していく三玖を追いかけて、今度は俺から唇を重ねた。爆発でも何と
でも言われて良い。こんなに君の事が好きなのだから。

「フータ……んっ」

鳥が木の実を啄むように、短いキスを繰り返した。唇が離れるたび
にちゅっというリップ音がして、世界に知らせるように部屋に響い

た。

「フータロー、目を瞑って」

三玖に言われるまま目を瞑る。光が消えて、聴覚と触覚の世界になる。あぐらの上に乗る三玖の柔らかい太ももが俺の体の方に体重をかける。しなやかな手が俺の首筋を這いまわって、そして力をいれて抱き寄せられた。俺の胸板に、三玖の柔らかい胸がつぶれる幸せな感触がする。耳元に息づく妖精が、こう悪戯をしてきた。

「大好き」

頭の中でその言葉がリフレインして、嬉しくて心地よい稲妻が体中を駆け巡る。薄目を開けて、幸せそうに笑う三玖を見て口付けた。

「出たよ〜」

浴室の方かららいはの声が聞こえた。俺達に気を遣っているのだろう。その気遣いを受け取ることにした。三玖は俺のあぐらの上から立ち上がって、広げていた自分のノートの前に戻った。

湯気が上がりそうな赤い顔をして、汗を一筋流しているらいはが歩いてきた。

「どうした、らいは。のぼせたのか？」

「え、そうかな？」

らいはは両手で顔を扇ぎながら、冷たいものを飲もうと冷蔵庫を開けた。お盆にお茶を注いだグラスを三つ乗せて来てくれた。

「お兄ちゃん、三玖さんもどうぞ」

「ありがとう、らいはちゃん」

俺もらいはに短く礼を言い、グラスに口をつけた。冷たい物を飲んだおかげか頭が冴えたような気持ちになる。寝る時間になるまで勉強をするとしよう。

……

「それで四葉が……」

「えー、ほんとに？」

勉強に没頭していた意識が話し声で現実に戻された。三玖とらいはが楽しそうに会話をしている。

「らいは、三玖に勉強させてやってくれ。三玖、赤点回避したとは言え

油断して良い訳じゃないぞ」

「フータロー、ごめん」

「でもお兄ちゃん、もういい時間だよ」

と言われて時計を見る。確かに普段ならもう寝る時間だ。

「まあそうだな。今日はもう寝るか」

同じ体勢をしていたせいで凝り固まった筋肉を軽く動かしてほぐす。大きく体を伸ばして深く息を吐いた。見るともう布団が敷いてある。らいはの布団が一番端に置いてあり、大人用の布団が隣り合っている。

「五月の時みたいに川の字になって寝ないのか？」

「そうなの？ らいはちゃん、私はいいけど」

「三玖さん、お兄ちゃん、私だって恋人に割り込まないくらいの気は遣うんだからね」

らいははそそくさと自分の布団に入っていく、

「電気消してね」

と言うと寝息をたて始めた。

俺は三玖と顔を見合わせ苦笑した。電気を消して三玖と隣り合う布団に入った。

今日は満月ではないはずだが、カーテンの隙間から世間を切り裂くような青白い月明かりが漏れて、闇の中に三玖が幻想的に浮かび上がる。

「フータロー、そっち行って良い？」

目を閉じてても眠気の起こらない静かな時間が経つと、隣の三玖の囁きが聞こえる。俺は掛布団を上げてスペースをつくり、そこに三玖が飛び込んできた。

甘い女の子の香りが舞い、三玖の顔が俺の目の前に来る。笑ったことが、顔は見えずとも雰囲気と少しの空気の震えで分かった。そばに来た三玖の腰に手を回して抱き寄せる。

「ねえフータロー、結婚したら毎日こんな風と一緒にいられるのかな」

らいはが言った事を三玖も考えたのだろうか。

結婚。

遠い様で、近いもの。

街を見渡せば何組もの夫婦がいるのに、どうして自分の事になるとこんなに現実の事のように思えないのだろうか。

闇に眼が慣れて、三玖の顔が見えるようになった。青白く差し込む月光のように、不思議と心がかき乱される光を宿した瞳が俺を見ていた。

「なあ三玖」

「なに？ フータロー」

「俺の家には借金がある。そんな家に来てくれるか？」

「私も働いて借金を返す。お嫁さんだもん」

「三玖が良いって言っても、あのお父さんは何て言うか」

三玖の顔にむつと力が入る。幸せな想像に水を差してしまったのだろうか。

「お父さんに何言われても関係ない。フータローは私と結婚したくない？」

「でも三玖に会えたのは、お父さんが家庭教師を雇おうと思ったからだ」

「それは……そうだけど……」

「だからこそ、あの人にも認めてほしい。あの時俺を雇って良かったって。三玖も、そして皆も笑顔になれるような結婚をしたい」

「フータロー……」

月光のような神秘の光を瞳に湛えた三玖に、想いを伝えるためにその頬に触れた。手から伝わる三玖の温かさに、胸が熱くなる。

「愛してる、三玖」

「私も」

言葉に乗せきれない想いを込めて唇を重ねる。甘い痺れに全身を貫かれて、その心地よい愛の魔法をまた唱える。

三玖の目が細められて、口元が綺麗な三日月を描く。

「愛してる、フータロー」

愛の証をたてるように、数えきれないほどにキスをする。

「はっ……フータロー……んちゅっ……」

「三玖……んっ……はっ」

口から零れる吐息さえも味わうように、舌を三玖の口に入れた。蕩けるような熱に触れて、夢中になってその深いキスを繰り返す。

「はあ……はあ……んっ……れる」

「んくっ……んっ……んむう……」

キスだけでは足りないような気がして、俺は三玖の上に覆いかぶさる。のしかかるようにゆっくりと三玖に体重をかけた。その俺の胸板に柔らかい三玖の胸が押しつぶされる。芯から燃え上がるような熱を孕んだ腹が触れて、しなやかな足を絡ませる。全てが溶け合つて混ざりそうなほど熱く唇も重ねる。どくんと三玖の心臓が俺を震わせる。俺の心臓も、彼女の心を震わせただろうか。

「フータロー……好き、大好き……愛してる」

愛しさの器から溢れたものが俺の瞳をにじませた。この切なさすら覚えるような莫大な感情を、人は愛と呼んだのだ。

三玖を、愛する人を確かめるために彼女の輪郭に触れる。

またキスをするために近づいて……

「う、うーん」

少し離れた布団からうめき声のようなものが聞こえる。らいはだ。俺達は顔を見合わせて軽く笑った。

「もう寝るか」

「うん。おやすみ、フータロー」

俺は三玖の上からどいて、三玖は布団に戻っていった。ドキドキと跳ねる胸を押さえて深呼吸を一つ。危なかった。もしらいはがいなかつたら、絶対にセックスしたくなっていた。昨日の今日でそんな事をして、三玖に体目当てなんだと言われたら立ち直れないかもしれない。

俺は目を瞑る。熾火のように残る熱に浮かされる心地のまま、いつの間にか眠っていた。

まぶしさに目が覚めた。カーテンの切れ間から朝日が差し込んで、その光が俺の顔にかかっていた。身を起こして軽く伸びをする。す

ると寝間着が引つ張られる感覚がして、力のかかっている方を見た。すやすやと穏やかな寝息をたてる三玖が、俺の服の裾を摘まんでいた。

「風太郎、朝から見せつけてくるじゃねえか」

突然の声に驚いて周りを見る。金髪の中年がこちらを見ていた。

「は、親父!」

「おい大声だすな起きちまうぞ」

「ん……」

横から二つの声がした。三玖とらいはが眠たい目をしながらゆつくりと起き上がってきた。らいははすぐ親父に気が付いた。

「あれ、お父さん? いつ帰って来たの?」

「ついさっきな」

早くから家事をしたりして朝に強いらいはは、軽やかに立ち上がって腕を回した。対して三玖は冬の動物の様に緩慢な所作で起き上がり、どこかぼうつとした目が俺を見て来た。

「フータロー、おはよ……」

ちゅっ

「え?」

三玖が俺の頬にキスをしてきた。夢の中と思っているのだろうか。ぼうつとした目のまま、三玖は朗らかに笑う。

「熱いねえ」

「三玖さん大胆……」

俺以外の声が聞こえた事で夢の中ではないと気が付いたのか、三玖の目が現実焦点を合わせた。三玖は恐る恐るといった様子で周りを見渡すと、口に手を当てて驚いているらいはと、ニヤリと口の端を釣り上げている親父を視界に捉えた。自分がどういう状況で何をしていたのか思い出し、真っ赤になつて俯いた。

「お、おはようございませす……」

おかしくてたまらないと言わんばかりに親父は声を上げて笑った。

「ガッハツハ、可愛いじゃねえか、大事にしろよ風太郎。そしたら上杉の坊主は美人な嫁さん貰つたなって俺も自慢になる」

「お父さん朝ご飯は？」

「今から一旦寝るから俺の分は用意しないでいいぞ」

「分かった」

「お熱い二人も起きた起きた」

親父は俺の腕を引つ張つて無理やり立ち上がらせた。布団から出ると親父はそこにどかりと横になった。

「むさい男の寝た布団じゃなくて、可愛い女の子が寝た布団で寝たいね俺は」

「親父！」

「冗談に決まってるだろ。カーテンちよつと閉めてくれ」

言われた通りカーテンを少し動かして朝日を遮ると、すぐにガーガー寝息をたて始めた。

「二人とも、朝ご飯にするよ」

らいはに言われて朝食の卓につこうとしたが、三玖が顔を隠したまま動かない。

「どうした三玖」

「うう……もうお嫁に行けない……」

「俺の所に来ればいい。早く行くぞ」

そういつて三玖の手を引く。

「ありがとう、フータロー」

らいはがにつこり笑つてこちらを見てくる。……食べにくい。

朝食を終えて、身支度を済ませる。

靴を履いて出ようとする俺達に、らいはが首をかしげながら聞いてきた。

「行つてきますのチューはしないの？」

三玖と顔を見合わせて笑いあう。らいはに視線を合わせて、

「二行つてきます」

俺は右の、三玖は左の頬に口付けた。らいははぽかんと口を開けて固まったが、両頬をさすつてはにかんだ。

「ありがとう、お兄ちゃん、お姉ちゃん」

災禍の起こりは喋りから

「ねえ四葉ちゃん」

「はい、何ですか？」

「四葉ちゃんって上杉君と付き合ってるの？」

「ええ、お義兄さんと私が？」

「えっ」

「えっ」

「「えっ？」」

特に何も無い平日、いつもの教室に、上杉さんが入ってくると一部の女子が色めきたつ。理由は分かっている。私のせいだ。

「ねえ四葉ちゃん」

クラスメートの女子がくねくねとしなを作りながら話かけてきた。

「知らないよ」

「嘘だー。何にもないクラスメートをお義兄さんなんて呼ばないでしょ」

そうそう、と周りの女子も同調する。口々に私達の名前が飛び出してくる。それは野球ファンのペナント予想、サッカーファンのW杯予想のように止めることなんて出来ない。

「二花ちゃんかなー。化粧もぼつちり決まってる可愛いし。ちよつと胸元開けてあざとい所も男子に効くんじゃないかな」

分かるー、と周りとう理解を共有して盛り上がった。

「二乃ちゃんは？」

「えー、でも二乃ちゃん男子に当たり強くない？」

「そこが良いんじゃないの？ ほら、ツンデレってやつ。俺だけに見せる顔ってやつに男はくらくらきちやうらしいし」

キヤーと喜ぶように声をあげた。……自分退席いいですか。

「どこ行くの四葉ちゃん」

「い、いやー皆さん盛り上がっているようなので邪魔しちや悪いかなーって」

私がそう言うのと周りの何人かが押さえつけてきた。

「やっぱり隠してるんでしょ〜」

「いやいや」

そう言っつて平静を装うが内心は汗だらだらだ。この流れだと次に出てくるのは……

「じゃあ三玖ちゃんかな」

正解。

「ああいうちよつと落ち着いてる子は意外と人気あるからね」

「分かるわー、男つて清楚大好きだもん」

「あはは……」

大丈夫だろうか。顔に出てないかな私。

「それに落ち着いた子が実は……つてのも好きだよね」

「すごいねつとりイチャイチャしてそう」

キャハハハと甲高い笑い声が重なりあう。……笑えないんだよなあ。もしかして知つてて遊んでいるんじゃないのかな皆。

「もしかして四葉ちゃんが付き合ってたりにして」

「ええ!?! 違いますよー」

「うんそうだよね」

「彼女にお兄さんつて呼ばせる奴だったら、悪い事言わないからさすがに別れた方がいいよ」

うんうんと皆が頷く。確かに恋人にお兄さんと呼ばせる人はご遠慮したい。

「五月ちゃんは無いか。妹だから付き合ってたら弟だもんね」

「でも昔は後から生まれた方がお兄さんやお姉ちゃんだったつて何かで聞いた事あるよ」

「なるほど、ちよつと捻つてる所が逆に特別感出てるね」

喧々諤々と言つた様子の議論は終わりが全く見えない。それはさうだ。こういう議論は結論を出す事が目的じゃなくて、議論を戦わせる事自体が目的なのだから。イチローが日本球界復帰したら二千本打てたかとか、眞兎にクリロナが入ったら優勝できるかとか、結論の出ない事を永遠話しているこの状況自体を楽しんでいるんだ。あ、永

遠じゃなくて延々？

予鈴が鳴った。皆は議論の熱を抱えたまま自分の席に戻って行った。

朝のショートホームルームは一時間目が体育という事もあり、担任の先生は時間に余裕を持って着替えでできるようにと早めに終わらせてくれた。

授業の用意をしないといけない体育委員は、いの一番に飛び出して行った。私は急ぐことなくのんびり歩いて行こうとすると、

「四葉ちゃん」

捕まってしまった。女子の恋愛に対する興味は尽きないんだなあ。

捕まりながら話していると、視界の端っこに三玖が見えた。三玖はゆっくりと歩き出すと上杉さんとぶつかって少しふらつく。あ、絶対わざとだ。だって上杉さんは道を十分に空けていたのに。

「フータロー、ごめん」

「いや、大丈夫だ」

と、二人は短く言葉を交わすと微笑みあった。わわ、そのままキスしそう。

「何熱心に見てるの〜？」

「あ、上杉くん。おいおい、実は好きなんじゃないの〜」

両サイドを固められた私はつんつんの波状攻撃に晒されてしまった。

冤罪です裁判長。さっきのがイチヤイチャ、イチヤイチャですぞと言いたくなる胸の内を抑えて誤魔化すように笑った。

そもそもなんだけど、三玖と上杉さんが好き好きを普段からしきり行動にしている事が分からないのかな。それは絵に隠れた動物を見つけないさいつてクイズの、答えを見てから問題の絵を見るくらい簡単に思っちゃうけど。

「四葉ちゃん危ないー！」

「え？ アパーツ！」

頭にガツンと固い感覚。よそ見をしていたら防球ネットの支柱に

ぶつかってしまったようだ。

「大丈夫!? 今女の子が出しちやいけない声出してたけど」

私は頭を押さえて、心配して駆け寄ってきてくれた友達を見上げる。

「うう……大丈夫、致命傷だよ」

「全然大丈夫じゃない!」

「笑ってやってください……」

「そんな体張らなくていいから。ほら、氷貰いに行こ」

手を貸してもらって立ち上がると、男子の最後尾を走っていた上杉さんがのろのろとやって来た。

「四葉、ぶっ倒れてどうした」

「あ、委員長。四葉ちゃんの事よろしくね」

そう言うとき彼女は下手なウイנקを飛ばして走って行ってしまった。

「歩けるか」

「は、はい」

上杉さんが私の手をとって歩き出した。

「三玖に悪いですよ」

「怪我した妹を放っておけと言うほど、三玖は冷たい女じゃない」

知っています。だから好きになったんですよね。

「すみません上杉さん」

「怪我なんてするときはするんだ」

「いえ、そっちではなくてですね」

私は昨日から一部の女子達を沸かせる話題について話した。

「四葉……」

「すみませんすみません」

とりあえず私は平謝りするしかない。

「からかいの種でお前がからかわれてどうする」

「面目次第もございませぬ」

上杉さんはため息を吐いて前髪をいじる。何か考えているんでしょうか。

「……四葉、こういう手はどうだ。一定の効果はあると思うが……」
「なんですか?」

「これだ」

……

クラスメートは頭に冷えピタを張った私に、心配の声をかけながらも、その目は興味の色でキラキラ光っていた。

「やっぱり上杉くんと仲いいよね」

いままでなら違いますよと言っていたが、ここはあえて同調する。
「そうなんです。仲良くなりたいたんですよ」

今までと違う反応に皆は驚いた。しかしすぐに獲物を見つけた肉食動物のようにニヤリと口元が歪んだ。

「やっぱり『お義兄さん』だから?」

「そうですよ」

と言って私はポケットからスマホを取り出した。そしてギャラリィから一枚の写真を表示して皆に見せた。

「わ、かわいいい。誰この子?」

「らいはちゃんです」

上杉さんが授けてくれた技は、皆の中にあるお兄さんの意味を上書きするという技だ。

「らいはちゃんの『お兄さん』が上杉さんなんです」

何人の口からため息が出てくる。どうやら姉の誰かと付き合っているから『お義兄さん』という頭から、らいはちゃんの『お兄さん』という頭に切り替わったようだ。

しかしそうなってくると問題は……

「え、じゃあ家族で仲いいの?」

「たしかに妹ちゃんは可愛いけど、それだけで仲良くなりたいてなる?」

「やっぱりもつと別の意味が……」

姉妹に散っていた注意の矢印が、私一人に集中してしまうことだ。

『この作戦の問題は、四葉、お前の言ったお兄さんの言葉の意味を塗り

替えるだけで根本的な解決にはならないという事だ。この手を使うかどうかはお前に任せる』

うう……大丈夫です後は何とかできます、なんて安請け合いするんじゃないかった。

私のせいなんですけどね……

放課後。なんとかしのぎ切った達成感と話し疲れから、私はぐったりと机に突っ伏した。あの後らいはちゃんのが可愛らしさを熱を込めて喋って、そうしてでも仲良くなりたいという気持ちを伝えた。そうして何とか「ならしようがないね」という空気を作り出す事に成功したのだ。

「四葉、大丈夫?」

机に何か固い物を置く音がして顔を上げた。

「三玖……」

そこには抹茶ソーダを机に置いた三玖がいた。

「今日は皆にもみくちやにされてた」

普段は美味しいとは思えないそれを、疲れに任せて流し込んだ。

「はあく美味しくくない」

「そう?」

無然というか、納得いかないような顔で三玖は小首をかしげた。

「ねえ三玖」

「なに」

「いつまで隠しておくの?」

「どういう事?」

「えつと……」

私にもみくちやにされた理由を話した。

話しているうちに頭に上っていた血が引いたように思う。私が勝手に口を滑らせて、勝手に困って、それなのに勝手に三玖達に怒って、何て自分勝手だろう。スケートでこけて氷に怒るような滑稽さだ。

「……ごめん、私のせいだからやっぱこの話は忘れて」

「四葉」

三玖はそっと私の頭をなでてくれた。不思議だ。あのどこか臆病

だった三玖は何処に行ってしまったのだろう。

決まっている、上杉さんが三玖に勇気を与えて臆病を吹き飛ばしてくれたんだ。

「四葉が困るんだったら、いつでも言っただけいい」

「でも、秘密にしたいって」

「あれは、そうした方が楽しいかなって思いつきだから。でも四葉がこんな大変な目にあうなら、そんな秘密いらさない」

三玖の瞳が蒼い星のように強く輝いた。その強い意志の力が宿った瞳に、思わず気おされそうになる。かと思えばその瞳は水の面のように凪いで、穏やかな光を湛えた。

「ねえ四葉」

「なに、三玖」

「私はフータローと結婚する」

「……うん」

それは男慣れしていない乙女の戯言なんかじゃないってことが、その目から痛いほど伝わってくる。いつになっても、二人は手をつないで歩いているだろう。たまにケンカもしちゃうかもしれないけど、上杉さんはぶっきらぼうだけど心にある優しきで、三玖は少しづつでも前に進むひたむきさで、きつと元通り仲良く暮らしていくんだろ。うな。「だから皆が笑ってくれるような、そんな付き合いをしたい」

三玖は私の手を包むように握って言う。

「四葉、私達の事で迷惑かけてごめん」

「ううん。三玖の真剣な気持ち聞いて良かった。迷惑した甲斐があったよ」

私は笑って三玖を見た。三玖もくすくす笑って答えてくる。

「帰ろう、三玖。そろそろ日誌を先生に出してきた上杉さんが……」

言葉を続けようとした所で扉がガラガラと音を立てて開いた。上杉さんが夕日に眩しそうに目を細めながら教室に入ってくる。

「四葉。三玖も一緒か」

「フータロー」

三玖は待ちきれないという風に上杉さんに歩み寄ると、ぎゅつと抱

き着いた。

「三玖、どうした？」

そう言いつつ、上杉さんも三玖の背中に手を回す。そんな二人の姿に、私は未来を見た気がした。上杉さんがスーツ姿で、三玖がネクタイを直している姿を見る。あるいは二人の間に子供がいて、愛を込めて抱きしめている姿だ。

そうなったら素敵だな。なんだか私も嬉しくなつて二人まとめて抱き着いた。

「四葉、いきなりどうした」

「三玖の事、大切にしてあげてくださいいね。お義兄さん」

「お前、今日はそれで散々苦労したんだろ」

「三玖も言ってくれましたけど、もう嘘を吐くのはやめます。だって大好きな姉さんとお義兄さんの二人に、嘘なんて似合いませんから」

三玖の目がうるうるして私に抱き着いてきた。

「でももうしばらく三玖は私達のもんですからね！」

可愛い三玖を取ってつちやう上杉さんなんて、あつかんべー！です。

鍛える刀の折り返し

全国学力模試がすぐそこまで迫っている。

俺は机に噛り付いて瞼をこじ開けて勉強し、それでも足りないかもしれない勝負に挑まなければならぬ。間違えるかもしれない不安を残すような勉強をしているつもりはないが、啖呵を切った以上やれることは全てやる。

「そこで」

と、俺は三玖の肩を掴んで言った。

「これから模試までは恋人らしいことは一切してやれない。登下校も勉強に当てるし、いつも繋いでいる手に参考書を持つし、三玖の事を目で追ってやれない」

「うん。大丈夫だよフータロー。全国10位以内だもん、それくらいしなくちゃいけないって私でも分かる」

三玖はそう言って健気に笑う。

「それで……」

「フータロー？」

小首をかしげる可愛らしい姿に、ドキリと胸が跳ねた。くそっ、俺はこんな弱い人間だったか？ ……いや、弱くても良い。三玖と一緒にいられるなら、弱いという言葉も甘んじて受け入れよう。

「フータロー、私に出来ることなら何でも言って」

「……キスの貯金がしたい」

「何だそんな……えっ？」

「具体的な数でいうなら30回はしたい」

「さんじゅう……」

三玖は顔を赤くして、目を白黒させている。

薄い肌を触れば脈動すら分かりそうな赤い顔にそっと手で触れた。

「三玖、俺に勝利をくれ」

「フータロー……んっ……」

甘い香りが鼻腔をくすぐる。ケーキに飛びつく子供の様に、俺は三玖に口付けた。温かくて、柔らかくて優しい心地がいつぱいに広がる

これは、なるほど子供にさせたくないのも無理はない。これは麻薬だ。俺は愛に捕らわれた中毒患者なのだろう。

「あと29回」

「……フータロー、ローン組んでもいい？」

「残念、即金しか受け付けてない」

三玖の組んでくれた金融プランを却下する。今の俺はとにかく現物が欲しいからだ。

「んっ……フータ……ちゅっ……あん」

俺は呆れるほどにキスをする。短く長く、浅く深く、時には舌を絡ませて、柔らかい桃に噛り付くように首筋に。

「ふ、ふう……フータロー……」

熱病にかかったように真っ赤な三玖は、呂律の回らない口で必死に俺に呼び掛けてくる。

「あ……あと一回」

三玖は絶え絶えになった息を整える。30回は吹っ掛けたかなと思っただが、すればするほどもっと次がしたくなった。深呼吸して胸いっぱい空気をため込む。

さらさらと流れる三玖の髪を指で梳く。後頭部をがっちり掴んで力強く俺の唇に三玖の唇を引き合わせた。

「あん……っ……」

お互いの唾液で濡れた唇が合わさると、何にも代えがたい気持ちよさに全身を貫かれた。俺は三玖の口を舌で開ける。二つの舌が絡み合い、甘くて熱い愛しさの味がした。

「っ……い……」

三玖の体が硬くなる。俺がシャツの下に手を入れたからだ。

滑らかな腹をなで上げて、へそのくぼみ、みぞおちを通る。固い下着のワイヤーをすり抜け、柔らかい双丘の片方を揉んだ。

「フータロー……」

三玖に突き飛ばされてしまった。じとりと俺を睨みながら、下着の位置を直している。

「いきなり……えつと……胸を触ってくるなんて、お金とるよ」

「いくらだ？」

「……フータローの一生」

俺はその答えに嬉しくなつて三玖に抱き着いた。

「払うさ、一生をかけて」

「うん……」

見上げてくる三玖の潤んだ瞳に心がくすぐられる。愛を刻む鼓動のままに、ゆつくりと三玖に近づいて……

コンコン

「いつから模試の科目にキスが追加されたのかしら？」

音のした方を向くと、腕を組んだ二乃が憮然とした顔をして立っている。後ろには一花と四葉、そして五月もいた。

俺は誤魔化しきれない気まずさを、咳払いで振り払う悪あがきをして、固い声を作つて無理くり真面目に言った。

「よし、勉強を始めるぞ」

「フータローがかまつてくれない……」

「ほっほーう。それはそのキスでタラコみたいに腫れた唇を今日の Pasta に和えても良いという事かしら？」

そう意地悪を言つてやれば三玖は手で唇を隠して、広げていたテキキ ストに目を落とした。

「鱈^{キス}なのにタラコとはこれ如何に」

「うるさい。だいたいあんた達普段からベタベタし過ぎ」

「自覚はある」

「会えない時間が愛を育てるって歌を見習いなさい」

まったく何で私は負けた恋敵に愛を説いているのかしら。

まあ三玖がうなだれるのも分からない事もない。ここ最近のフータローは暇さえあれば勉強して、勉強の合間に勉強するというものはや修羅の境地に達している。頭の良い奴が勉強しまくつて手に掛かるかどうかという世界なのだ、全国模試十位以内というものは。自分の勉強だけでも大変なのに、言つて悲しいが私達5バカの面倒も見なくちやいけない。改めて見ると無茶苦茶ね。

あの武田って奴がどれほどすごいのか分からないけど、厳しい戦いであることは変わらない。

「でも三玖、いつにたく勉強してるわね」

「偏差値50から55越えを目標にしてる」

その三玖の目標設定に驚いた。偏差値55もあれば、有名どころの大学のどこかしらには行けるだろう。学部は選ばなくちゃいけないだろうけど。

「三玖、大学行くの？」

「分からない。これはお父さんに示したい目標だから」

「パパに？」

「うん。フータローを家庭教師にしてくれてありがとう、こんなに成績が伸びたんだって言いたい」

三玖の言いたい事は分かった。パパは決して良い感情をフータローに抱いてない。その好悪の針を少しでも好に振れさせたい一心からの行動なんだ。……まあ三玖と付き合ってるって知ったら±0、むしろマイナスだろうけど。

「そう、頑張りなさい。三玖のだけちよつと多めにタラコ入れてあげる」

パツと三玖は掌で唇をガードした。

「あんたの唇の事じゃないわよ！」

全国学力模試当日。

俺はらいはに行儀が悪いと言われても朝食を済ませながら書き込みだらけの問題集をめぐっている。

「お兄ちゃん遅刻しちゃうよ」

ここまでか。前日に用意していたバッグを手に取り玄関に向かう。チャイムが不意に鳴った。らいはがはーいと返事をしながら扉を開ける。

「お兄ちゃん、三玖お姉ちゃんが来てるよ」

三玖が？ という言葉を小さく口の中で転がして、机に置いた問題

集を拾って玄関で靴を履く。

扉を開ければ今の俺には目に毒なほどの、空色のカーディガンを着た三玖が待っていた。

「怒ってるのか？ 今日が終わったら好きな所にも行こう。だからあと少しだけ集中させてくれ」

今は待ち受ける問題という名の壁を貫くための矢を番えて、心の弓を引き絞っている状態といえる。少しでも力を抜くと、そのまま矢が放たれてしまつて頭から覚えたことが飛び立ってしまうような不安が、爪の先ほどではあるがあつた。

何も言わず少し伏せ目がちな三玖をあまり見ないように俺は歩き出した。片手に持った問題集を見ながら、もう片方の手で家から持ってきた牛乳に口をつけようとした。

「え……フータロー待って！」

そう三玖が言つて俺から牛乳を取り上げた。俺はその怪訝さに顔をしかめて三玖を見る。

「何だよ三玖」

「やつぱり……フータロー、この牛乳飲んじやだめだよ」

パックの側面の賞味期限日をしげしげと眺めて、それから俺に突きつけて来た。日付は今日から十日ほど前を示している。親父ならまだ飲めると言つて躊躇なく飲むだろうが、さすがに俺は遠慮したい。きつと腹を下すだろうから。

「ありがとう三玖。気が付かなかった」

艶めく髪にそつと触れて、三玖の頭をなでた。それはもう反射的にというか、無意識でというか、普段していた恋人としての行動だった。

「あ……フータロー」

三玖の目が驚きに見開いて、そして細められる。白い頬に恥ずかしさと、自惚れだろうか、嬉しさに赤くなる。零れる吐息に熱がこもり、耳から不可避の波動が叩きこまれる。この模試までの勉強期間、三玖とは殊更教師と生徒という立場で心を縛り付けていたが、恋色の吐息はお構いなしにその鎖にヒビを入れてくる。

「行くぞ」

脈打つ思いから目を離して冷たい調子でそう言った。

学校の道すがらにいた四人と合流し、分からない所、疑問が残る所をポツリポツリと話しながら正門から入った。

俺達の前に立ちほだかる様に立っている男がいた。武田だ。その嘘くさいほどの精悍な顔を歪めて感情的に言う。

「逃げずに良く来た。だがしかし、君は後悔することになるだろう！あの時逃げておけばよかったと！」

二乃はそんな武田の声を聞くと、ファンデーションでも誤魔化しきれないほどの隈に縁どられた瞼をしばたたかせた。

「朝からうるさいわね……」

「上杉さんは負けません！」

「君たちには話してない！」

二乃と四葉の言葉を、武田はその声優のように通る声で遮る。

武田は階段を一つ二つと踏み、ワザとなのか知らないが芝居のように熱の増していく調子で一騎討ちという言葉を口の端に乗せる。

「悪いな一騎討ちじゃないんだ」

俺は後ろの五人に目をやる。

勉強しかできない馬鹿が、この五人に会って変わったんだ。世界は教科書に載っている事だけで出来ている訳じゃないという当たり前の事や、人との付き合いは面倒だったり時に疎ましく思ったりすることもあるけれど、楽しさや嬉しさに溢れている事。

そして、人を愛する喜びの事。

「こっちは六人いるからな」

「ふふふ……それが君の弱さだ」

弱いか強いか、それは今日の模試の結果が何よりも雄弁に語ってくれるだろう。

「フータロー」

下足場で靴を履き替えていると、三玖が小さく声をかけて来た。ちよいちよいとこっちに来いと指示する指に従って少し屈んで目線を合わせた。三玖はほそりとこっちを覗いてくる。

「勝ったら、私ができる事何でもしてあげる。だから頑張って、フータ

ロー」

三玖は俺の顔を見て、ぱちぱちと瞬きしてから微笑んだ。体中を巡る倦怠感すら燃料にして燃えてしまうかのように体が熱くなり、まともにも三玖が見れなくなる。

「三玖ー?」

「今行く」

五月に呼ばれて三玖は駈け出して行った。今日の空模様のようなカーデイガンが翻る。残された俺は、この血管すら焼き切れそうな熱をどうすればいい。……顔を洗ってこよう。

昼休憩になると俺は手早く昼食を済ませ、午後からの教科に対して最後の追い込みとばかりに問題集を繰る。しかし心の目は目の前の文字になかなか焦点を合わせてくれない。

『だから僕は、こんな小さな国の小さな学校で負けるわけにはいかない……夢があるから』

俺は武田の言葉を思い出す。あいつの勉強する理由は、宇宙飛行士というほんの一握りの者しかたどりつけない夢に辿り着くため。対して俺は? 誰かに必要とされるためにと勉強をしてきたが、その中でいつの間にか勉強自体が目的となってしまうのではないだろうか。

もちろん、だからといって手を抜いたりワザと点を取らないという選択は無いが、武田の言葉は俺の心の水面に石を投げかけて波紋を立ててきたような、そんな風に思った。

最後の教科の問題が配られる。泣いても笑っても、これで終わりで。俺はやけに重たい瞼をつねってこじ開け、かかる号令を待つ。

「始め」

その声と同時に問題を表に返す音がして、ペンで紙を叩く音が上がる。基礎問題、応用問題と点数の低い箇所を見落としがないか確認しつつ駆け抜けて行く。一つで最初の問題の三か四問分の点数が貰える発展問題の大問に入る。ここが時間のかけ所だ。単純に難しい上に、かかる手間も前半とは段違いなので一つ積み方を間違えると全て

が崩れてしまう事もあり得る。

瞼が重たい。左手にペンを突き立てて無理やり意識を覚醒させる。

……問題は解いた。あと……は……は……かい答よ……う紙……に。

……

……三……玖……おれは……

……

「起きろ上杉」

軽い物で頭を叩かれた感覚にはつとずる。顔を上げると紙を丸めた物を持った先生が俺を見下ろしていた。

「後ろの解答用紙を受け取れ」

いまいち覚醒しきらない頭を後ろに向かせると、答案用紙の束を持って困った顔をしているクラスメートの姿が見えた。俺はそれを受け取り自分の解答を束にまとめて先生に渡した。

「よし今日は以上だ。お疲れ様」

その声を合図に、堰を切ったかのように皆の口から話し声があふれ出す。

「フータロー君」

まだ少しぼうつとした頭で何の気なしに問題用紙を眺めていると、一花が声をかけて来た。

「一花、何だ？」

「模試が終わった事だしさ、皆で甘い物でも食べに行かない？ 代金は私達がもつよ」

「俺は……」

言葉を続けようとしたが、一花は聞く耳をもたないといった風に立ち上がると一歩二歩と教室のドアに向かう。

「場所は三玖が知ってるから、一緒に来てね。図書室にいるから迎えに行つてあげて」

そう言い切ると、教室の外で待っていた二乃達と合流して去って行った。

俺は言われた通り図書室に向かった。中に入ると模試を検討しあっているグループが何組かいて、ああでもないこうでもない答え

を言い合っている。三玖は窓側の席に座り、大判の史跡写真集を眺めていた。

「三玖」

近くまで行き、そう小さく声をかけると三玖は顔を上げてきて、俺の顔を見るとにつこり笑った。

「フータロー、お疲れさま」

その笑顔が痛いほど胸を突く。ぱっくりと開いた傷口が鼓動に合わせて疼くように、ここ最近三玖と触れ合えなくてぽっかりと開いた心の穴が疼いた。

「皆で甘い物を食べに行くんだろ？」

「うん。行く、フータロー」

三玖は分厚い本を棚にしまうと、軽い足取りで下足場に歩を進めた。学校から出ると、溜めてきた想いが溢れてきて、隣を歩く三玖の手を握った。白くて小さくて、柔らかくて滑らかで、温かくて優しいこの手を二度と離さないと思った。

「フータロー、どうだった？」

俺を見上げる三玖の目が光っている。その光る期待に俺は応えたい。

「負けるつもりはない。が、最後の問題を記入できなかつた事だけは悔いが残るかな」

「ごめんね、フータロー。自分の勉強だけでも大変なのに、私達の勉強まで見てくれて」

「三玖、それは違う。お前達がいてくれたから俺はここまで頑張れた」握った手に力を込める。

「だから、笑ってくれ。俺は勝つ。俺自身のために、そして皆のために」

三玖は少し伏せた顔を上げると、花が咲くように笑った。俺はその花に傷をつけないように優しく触れた。今日まで溜めていた想いの一滴を注ぐ。

「好きだ、三玖」

「私も大好き、フータロー」

久しぶりのキスは痺れる様に刺激的で、陽だまりの様に温かくて、そして花の蜜の様に甘かった。

「やあ上杉君、来たね」

模試の結果が返却された日に、俺は屋上に来ていた。先客の武田は四つ折りにした結果の紙を弄びながら、こちらを真つすぐに見つめてくる。

「結果はもう見たかい？」

「まだ見ていないが、先生がソワソワしていたからそこそこの結果は出てるんじゃないか？」

「僕も同じさ」

さあ、と武田は言うのと四つ折りの紙の端を持ち、すぐにでも開ける構えだ。俺も二つ折りの結果を摘まみ、そして同時に広げる。

「八位……上杉君、君は？」

ゆつくりと視線を下ろしていく。教科ごとの点数、志望大学の合格判定、そして……

「二位」

目標の全国十位以内、そしてこいつの順位よりも上、俺は出された条件を全て成し遂げた。

負けた武田は、しかしどこか嬉しそうに笑う。

「見事だ。僕は勘違いをしていた。飛び上がるために屈んだ君を、低くなったとなじる愚か者だったようだね」

その笑いには少し自嘲が混じりながらも、不思議と誇らしそうだ。

「フータロー」

屋上の扉が開く。そこには風に髪をたなびかせた三玖が立っていた。俺と武田の二人を見ると、バツの悪い顔をした。踵を返して出て行こうとする三玖を俺は呼び止める。

「武田、あいつが俺が勝てた理由の一つだ」

「どういう事だい？」

「勝利の女神ってやつだ」

武田は俺の言葉にポカンと口を開ける。しかしすぐに可笑しそう

に口を歪めて、笑い声をあげた。

「ははは！ 勝利の女神か、君からそんな言葉が出てくるとは」
くくく、と可笑しさが引かないように喉の奥で笑いながらこう続けた。

「上杉くん、君は鋭い抜き身の刃だった。しかし彼女たちと関わるうちに、叩かれ、折り返し、また叩かれ、そうして君は以前よりも強いひと振りの刀になったようだ」

武田は俺に背を向け歩き出した。

「僕も研鑽を積むことにしよう。負けっぱなしではライバルとは言えないからね」

三玖とすれ違い、扉を開けて屋上から出て行った。三玖は不思議そうに首をかしげて扉と俺を交互に見やる。そして俺のところまで駆け寄ってきた。

「フータロー、えっと……どうだった？」

俺は黙って結果を三玖に渡した。眺めている顔がみるみる笑顔になって、勢いよく俺に抱き着いてきた。

「凄い！ フータロー、本当に凄いよ！」

そう喜ぶ三玖を抱きしめ返した。

「ああ。これでお前達の家庭教師を続けられる」

三玖は背伸びびして俺の頬にキスしてくる。照れくさそうに笑って、

「えへへ……おめでとう、フータロー」

そう祝福をくれた。

「三玖はどうだったんだ？」

「見て」

三玖はポケットから結果の書かれた紙を取り出し、広げて俺に見せて来た。各教科の点数は平均点付近で、三玖が目標にしていた偏差値は51を示している。このまま勉強を続けていけば、いわゆる普通の大学には問題なく入学できるだろう。

「三玖、凄いじゃないか。進学するには十分な実力があるってことだ」

「フータローのおかげ」

そう言って三玖は誇らしげに笑うと、照れくさそうに頬を掻いた。

「それでね……」

と話を切り替えると、さつきまでの笑顔が消えて真剣さを帯びた顔になる。俺は少し浮かれた居住まいを正して、三玖の話に聞き入る事にした。

「打ち明けようと思う」

「何を？」

「私達が付き合ってること」

「誰に？」

「お父さんに」

俺は冬の寒空に立ち尽くすような、底冷えする心地になった。声を荒げて説教じみた事を言ったり、二乃を迎えに行った時に娘さんを頂いていきますと言った事からくる気まずさのようなものを思い出した。後者の話は三玖も怒るだろうから言わないでおこう……。

「一番私達の事で反対しそうなお父さんを説得できないと、皆が笑って祝いしてくれるなんて夢のまた夢だと思う」

「三玖……」

三玖の決意のこもった瞳がまっすぐ俺を見据える。その生半可ではない想いに、俺の言える事は一つしかない。

「頑張れ三玖。お前ならできる」

「ありがとうフータロー。私、お父さんに会ってくる」

宴もたけなわ夜もすがら

「えーそれではこの度の全国模試お疲れ様会と上杉風太郎君ならびに中野五姉妹のお誕生日おめでとう会を……まだだよ…………始めます！ かんぱーい！」

「」「乾杯！」「」

一花の乾杯の音頭で、皆はグラスをかち合わせる。カランというガラス同士がぶつかる音とグラスに入った氷がぶつかる音がした。

「さあ皆食べて食べて。今日は特に腕によりをかけたんだから！」

二乃はいつになく嬉しそうに笑いながら、料理を小皿に取り分けた。俺は取り分けてくれた骨付きのから揚げ、俗に言うチューリップに口をつけた。カリツとした衣はニンニクやコショウの風味がして、中の肉から溢れた肉汁と絡み合う。文句なしの旨さだ。米が欲しい。

「おいしい！ すごい二乃さん！ お店で売ってるやつみたい！」
ちよつとおめかししたらいはも嬉しそうに笑った。

「でも私、誕生日でもないのに、来て良かったのかな」

「いいんですよらいはちゃん。お祝いは皆でした方が楽しいですから！」

らいはの隣に陣取った四葉はぎゅつと抱きしめて顔をぐりぐりしながら明るく言った。

「四葉さんくるしい〜」

「さん、だなんて他人行儀な。違うでしょ〜らいはちゃん」

「四葉お姉ちゃん〜」

「わはー、思い描いていた事が現実！」

なおもらいはへのぐりぐりを止めない四葉を五月が引きはがした。

「四葉、らいはちゃんをぐりぐり死させる気ですか」

五月の胸に抱かれてらいはは人心地つく。

「あ、そうだ。私、お姉ちゃん達にプレゼント買ってきたの。お守り！」

背負ってきた鞆をぐそぐそ漁ると、中から和紙に包まれたお守りを取り出した。

「はい、一花お姉ちゃん。私もお姉ちゃんみたいに綺麗な女の子に頑張ってなりたいな」

「ありがとーらいはちゃん。絶対なれるよ。だってこんなに可愛いんだもん」

一花はらいはの頭をわしやわしやとなでる。

「二乃お姉ちゃん、美味しい料理ありがとう」

「皆らいはちゃんくらい素直だともっと作り甲斐あるのになー。ありがと」

冷やしていたデザートの様子を見ていた二乃が、らいはにそのデザートを一口食べさせた。美味しい、といって笑ったらいはの額に二乃はキスをした。

「三玖お姉ちゃん、お兄ちゃんをよろしくね」

「うん。お兄ちゃんの事安心して任せられるようなお姉ちゃんになるから」

三玖はらいはの手をとって微笑みを交わしあう。

「四葉お姉ちゃん、いつも元気なお姉ちゃんに私も元気を貰ってるよ」

「ううう、やっぱらいはちゃん良い子です。抱きしめて……」

「四葉」

「五月、分かった今日はちよつと我慢するよ」

そう五月に叱られてつーんと唇を尖らせた四葉を、らいはがそつと頭をなでた。

「はは、どっちが姉なんだか」

「もう、上杉さん」

飛び掛かる体勢をとった四葉を俺は手で制した。

「五月さん、お姉ちゃんになっても仲良くしてね」

「はい。らいはちゃんは私の大切な友達ですから」

そう言う五月にらいはは抱き着いた。

「えくずるい五月く」

「ずるくありません」

その微笑ましい光景に、皆から笑い声があがった。

「ね、見てみよう」

一花はそう言つて四人に視線を送り、まずは自分のお守りを和紙の包み紙から取り出した。

「えーと、商売繁盛？ あはは、そうだね。もっと大きなドラマやCMに出られる女優になるように頑張るよ」

「私ね。これは、千客万来かな？ らいはちゃん、私もうちよつと真剣に追いかけてみるわね、お店を出すつて夢」

「次は……」「あー！ 私のお守り無病息災です。これでもつともつと頑張れます！」

「四葉、そんな割り込むみたいに大声ださなくても……三玖？」

一花は四葉をたしなめるように言うと、しかし三玖が俯いてることに首を傾げた。

「どうしたの三玖？」

「……い、五月が先に言つて……」

先にと促された五月は、一花と目線を合わせて頭の上にはてなを浮かべたが、特に反論もなく包みからお守りを取り出した。

「学業成就のお守りです。らいはちゃん、このお守りに恥じないような、私が教えた人の学業も成就させるような、そんな先生になってみせます」

「五月さんならできるよ」

「最後に三玖ね。何かしら……縁結び！」と二乃が言い、

「もう結んだんだからいらないでしょ。家内安全じゃない？」一花はそう返して、

「金運は？ やっぱり先立つものがないと」四葉は予想を立て、

「長寿祈願というのはどうでしょう。家族には長生きして欲しいですから」五月が締めた。

皆の視線が三玖に集まると、三玖はもつと俯いて小さくなった。耳まで赤くなつたまま、蚊の鳴くような声で言う。

「……の……り」

「聞こえないわよ三玖」

二乃のその言葉に、三玖は真つ赤な顔を上げた。
「安産祈願のお守り！」

一息でそう言うと、皆の視線から逃げるように俺の背中にしがみついた。

皆是三玖のいきなりの大声に鳩が豆鉄砲を食ったような顔をしたが、言葉を理解すると声をあげて笑い出した。

「「あははは！」「」」

その笑い声に、三玖は俺の背中を掴む手の力を強くする。

「ひーひー……十年早いわよ」

「ふふふ、そうですね、せめて成人はしないと」

「あははー、でも一番最初に必要になるのは三玖だろうけどね」

「ししし、三玖、元気な赤ちゃんを産んでね。でもそしたら私達もおばさんか〜」

「嫌よ、せめて三十超えるまではお姉さんって呼ばせるわ」

「お前ら気が早いぞ。結婚だってまだなのに」

「フータロー……」

三玖はしがみついていた手を離して、俺の体に手を回して抱き着いてきた。それを見ていた皆は「ヒューツ」とはやし立てる。

「らいは、何て言ってこのお守りを買ったんだ？ 三玖を最後にして言ってみてくれ」

「え？ えーと……」

らいはが指折り数えだした。

「お仕事頑張ってる人と、お店を開きたい人と、いつも元気な人と、先生になりたい人と」

「それで三玖は？」

「これからお姉ちゃんになる人」

そう言うと二乃の口元がニヤリと歪む。

「なるほど、歳の離れたお兄さんが結婚するからお守りを買って来たって思われたのね」

二乃は納得して頷いた。しかし四葉は納得がいかないように顔をしかめる。

「でもだからっていきなり安産祈願のお守りを勧めるかな？」

「どこにでもフータロー君みたいなノーデリカシーさんはいるって事

だよ」

「二花お前なかなか酷い事言ってるぞ」

「三玖、笑ってしまつた事は謝ります。だから機嫌直してください。せつかく上杉君と一緒に誕生日を祝えるんですから」

五月が三玖の隣まで来て背中をさする。俺に回されていた手が解かれる。

「うん……」

どうやら観念したようだ。のそのそ緩慢な動きで三玖は俺の隣に座りなおした。

「さ、続けましょ」

二乃の一声で皆に話し声が戻る。三玖の顔からも恥ずかしさのこわ張りが解け、皆の会話に楽しそうに混じつた。

皆でつついていた料理の山がなくなり、デザートとシャーベットに舌鼓を打つ。

「デザートとケーキで甘い物がダブってないか？」

「文句言うなら私が食べるけど」

「甘い物は別腹」

こんなときは連携が取れている二乃と三玖の、いらぬならよこせという視線をかわしながら平らげた。皿を片付ける。三玖が冷蔵庫からケーキの入った箱を持ってきて机の真ん中に置いた。イチゴのショートケーキのホールだ。三玖は細い蝋燭を十八本立てる。一花がマッチでその十八本に火をつけた。

「消しますよー」

四葉はそう言つて部屋の電気を消し、夕方の薄暗闇の中ぼんやりと同じ顔が五つ並ぶ。ゆらゆらと揺れる蝋燭の火を彼女達の大きな瞳が映し出した。

「せーの」と二乃が合図をする。五人の声がピタリと重なり、すこし外れたらいはの声と一緒にハッピーバースデーを歌いだす。

「ハッピーバースデーディア……」

そこで歌が一旦途切れ、三玖の隣の一花が小突いた。

「フータロー」

三玖がそう歌を締めくくる。俺は照れくささにむずがゆくなつて少し身じろぎした。

「お兄ちゃん？」

らしいはに言われてはつとし、俺は慌てて蠟燭を吹き消した。一息で全て消えて、皆が拍手してくれる。

「おめでどう！」

俺は不思議な心持になった。こういうベタな祝われ方をあまりしたことがないからだろうか。……悪い気はしないな。

「さあ次は私達に歌つてよ、フータロー君」

一花はその大きく開いた目を期待に光らせる。いや、一花だけでなく他の四姉妹も同じか。

「フータロー」

隣にいる三玖が袖をくいと引いてくる。その方向を向くと、上目遣いの三玖が俺にねだるような視線を俺にくれた。その可愛い視線にどうも弱いみたいだ。これが惚れた弱みか。

「分かった」

蠟燭に火をつけなおして再び状況を作り直した。照れくさいがたまにはこういう労いもあっていいだろう。ハッピーバースデーをらいはと歌った。

「一花、二乃、三玖、四葉、五月、おめでどう」

五人の息があつという間に蠟燭の火を消す。電気をつけると五人はにっこり笑う。隣の三玖が飛びついてきた。

「ありがとうフータロー。一番嬉しい誕生日になったよ」

「三玖、言つたでしよ」

「あ……ごめん」

三玖は申し訳なさそうに引き下がった。どういう事だ？

「フータロー、プレゼント持つて来た？」

「ん？ ああ、持つて来たぞ」

俺は持つて来た鞆を指さす。

姉妹は立ち上がつて隣の部屋から小包を持つて来た。

「まず私達から渡すね」

そう三玖が言つて五人は漢数字順に並んだ。小さい数から、つまり一花からだ。

「私からはこれ」

一花の小包からは投資の本だ。……借金があつても投資はできるんだらうか？

「頑張つてお金を増やしてね。最近の学生は投資してる人も結構いるみたいだから、フータロー君もきつとできるよ」

「いや即金で欲しいんだが」

「フータロー君、近道は遠回り、遠回りは一番の近道つて言葉知らないの？」

知らん。が、厚意を無碍にするわけにもいかないし、もしかしたら必要な時が来るかもしれない。

「まあ、ありがとう。金持ちになる道は甘くないつて事か」

うんうんと満足そうに一花は頷いて、横にずれて二乃を呼び込んだ。

「私からはこれよ。アロマキャンドル」

二乃は赤や青のつるりとした何かが入った箱を渡してきた。

「……どういふ物なんだこれは？」

「えー嘘、知らないの？ キャンドルは日本語で何？」

なぜいきなり英語の問題を出されているのだろう。

「蠟燭だ」

「ピンポーン、正解。これは火をつけると香りが広がる蠟燭なの。いい香りに包まれて存分にリラックスしてちょうだい」

二乃はそう話を終えて、後ろの三玖の肩を軽く叩いて俺の前に来るように促した。

「私からはこれ」

三玖は大きな袋を俺に突き出した。お店の名前がでかど載つたビニール袋だ。

「ジャージ上下セットとランニングシューズ」

どうやらその店はスポーツ用品店の物らしい。らしくない三玖の出かけ先に頬が緩む。

「結局のところ走れってことだよな。体力が欲しいなら」

「私もお揃いのジャージを買ったから、一緒に走ろう?」

しかし体力無しコンビが三日坊主で終わらないだろうか。

「頑張ろうね、フータロー」

そう言うのと三玖は立ち上がり、ケーキをカットしている二乃の下へ歩いていった。

「次は私です上杉さん。どうぞ!」

四葉が渡してきた物はがざりと紙の擦れ合う音がした。これは千羽鶴か。千羽いないかもしれないがこういう形のものは千羽鶴だ。ムカデが足が百本もないのに百足と書くのと同じだ。

「お前よくこんな折れたな」

「はい! 頑張りました」

力こぶをつくつてふんすと誇らしげに息を吐いた。

「ま、これだけ頑張ったんだ、何かしらのご利益はあるかもしれないな」

「きつとあります」

俺はそつと鶴の束を横に置くと、いつの間にか目の前に来ていた五月を見る。

「私からはこれです。どうぞ」

五月は大きい箱と小さい箱の二つを渡してきた。開けてみると大きい箱は茶葉のセットで、小さい箱は湯呑だ。

「コーヒーのセットと迷ったのですが、三玖の好みに合わせました。お父様やらいはちゃん、三玖と一緒に味わってください」

「ああ、そうしよう」

箱を閉じてバッグに収めた。大きめの物を持って来たつもりだが、五人のプレゼントで膨れ上がってチャックが閉まりきらないほどだ。

「皆コーヒーと紅茶どっちにする?」

台所から二乃の声がする。コーヒーカーップとティーカップをいくつか出して、ケーキを食べる準備をしていた。

銘々が要望を言うと、二乃は慣れた手つきで手早く人数分のコーヒーと紅茶を用意した。ショートケーキのイチゴは最初に食べるか

最後に食べるかというくだらない会話を楽しみながら食べ終え、ケーキもたらず甘い幸せな余韻までしかと味わった。

ぐだぐだとした時間が少し流れると、一花はいきなり伸びをして立ち上がり、姉妹に視線を送った。その指令を受け取った四人は一花を先頭にずらりと俺の前に並ぶ。

「ではフータロー君は何を用意してくれたのかなー？」

「三玖は最後ね。お楽しみは後にとっときなさい」

「分かった」

「上杉さんのセンスに期待してますよ」

「男友達からプレゼントを貰うのは初めてなので緊張します」

五人の同じ顔が向かってくる。その不思議な圧力に後ずさり、しかしいやいやと思いついてまずは一花のプレゼントを取り出した。

「まずは一花。誕生日おめでとう」

鞆からラッピングされた小ぶりの箱を取り出す。

「ありがとフータロー君。ね、開けていい？」

「もうお前の物だ、好きにしろ」

「やったー。どれどれ……これは口紅？ いやリップかな」

俺が渡した箱の中には中指ほどの長さの円柱が入っている。一花の言った通りリップだ。

「凄く真つ当なプレゼントでお姉さん驚きを隠せないよ」

「お前は俺を何だと思ってるんだ」

「うそうそ、ありがとねフータロー君」

リップの封を切り、下唇にのせてなじませる。一花の唇がつやつやと艶やかに光って俺に聞いてきた。

「どう？」

「……いいんじゃないか？」

一花は笑って立ち上がる。遠巻きに見ていたらいはの所に行つて自慢していた。

「次は私ね」

「二乃、お前にはこれだ。おめでとう」

アニメのキャラがあしらわれた箱を渡した。

「ハンドクリームかしら。ディズニーのプリントだなんてすごい王道じゃない。それくらい機微はあるのね」

「さつきから当たり強くない？ 俺何かしたか？」

「ふふっ冗談よ。ありがと、フータロー」

ハンドクリームの入った缶を開け、手の甲に少しとり、手全体に塗り広げる。

「いいわねこれ、手触りが優しくくて」

「そりやよかった」

二乃はリップをつけている様子をらいはに撮ってもらっている一花の下へ行った。

「上杉さん、次は私です」

わくわくを隠しきれない様子の四葉が俺の方にはずいっと詰め寄る。

「近いぞ四葉。ほら、おめでとう。世話してやってくれ」

俺はラップピンクされた花束を渡した。ピンクのバラだ。

「わ、お花ですか？」

「三玖から観葉植物を置いている事を聞いたんだが……もしかして花は嫌だったか？」

「いえいえ、そんな事ありません！ 大事にします」

四葉は花束を胸に抱え、花の香りをいっぱいに吸い込んだ。

「上杉さん、ちなみに花言葉は考えてくれますか？」

「ピンクのバラの花言葉は、しとやか、上品さだ」

「ええ〜花束でもお説教ですか？」

ぷくつと四葉はむくれる。元氣と快活さが服を着て歩いてるような奴だ。上の二つはあまりにそぐわないかもしれない。しかし花言葉の便利でもあり不便でもある点は、一つ二つではなく、もっと多くの意味を内包していることだろうか。

「それと、感謝と幸福だ」

むくれていた四葉の顔がきよんとし、ぽかんと口を開けて、最後に笑顔に変わった。

「ありがと〜ございます上杉さん、大事にお世話しますね」

立ち上がった四葉は手頃な花瓶はないかと部屋中の搜索にのりだ

した。

「正直驚いています」

五月は目をすつと細めて、真贋を見分けるように睨んでくる。

「お前もらしくないとか言いたいのか」

「それもありませんが……いえ、止めておきましょう。こういうものは素直に貰った方が可愛げがありますから」

さあ、と言つて両掌を前にだしてくる。そう準備万端だと渡しづら
いのはなぜだろうか。

「おめでとう五月。人前に入る仕事を目指すなら、これも少しは勉強しておくんだな」

五月が出してきた手を越えて、プレゼントで軽く額を叩く。もうとぶつくさ文句を言いながら受け取った。

「これは……化粧品ですか？」

「一花や二乃に少しづつ教わったらどうだ？ 学校じゃ化粧の授業はしてくれないぞ」

五月はメイクパレットを開いてそこについてる鏡としばらく睨めっこする。満足したのかパタンと音を立てて閉じて小脇に抱えた。

「ありがとうございます上杉君。これをきっかけに少し化粧を勉強しようと思います」

「ああ。自分で送っておいてなんだが、本来の勉強に影響が出ない範囲で頑張れ」

「分かっています」

五月は小さく一礼すると、なにやら激論を交わしている一花と二乃の輪に入って行った。

さて、最後は……

「フータロー」

その囁くような優しい声が俺のすぐ目の前でした。

「三玖、近い」

顔を少し動かしたらキスしそうなほど近くに來ていた三玖に少し距離を取らせる。離れて三玖の顔を見ると、大きな目が爛々と輝き、体全体から期待のオーラが立ち昇っていた。

「フータロー、私すごいドキドキしてる。今までのプレゼントの中で一番」

「俺も今までのどんな面白い物よりも緊張したよ。三玖に喜んでもらえるのと良いんだが……」

「フータローから貰う物だったら、どんなものでも嬉しい」

そう言って笑う三玖は、どんな宝石よりも輝いて見えて、思わずキスしたくなる気持ちを抑えて俺はプレゼントを差し出した。

「受け取ってくれ、三玖。誕生日おめでとう」

三玖はゆつくりとラッピングを解いて、箱を開けて中を確かめた。

「これ……ネックレス？」

中に入っていたネックレスのチェーンを掴まんで持ち上げる。ゆらゆらと緑色の石が光って存在を主張していた。

「綺麗……ねえフータロー、これって何て石？」

「翡翠。5月の誕生石で、幸福の意味を持つ石だ」

幸運、と三玖は小さく呟く。くすぐったそうに笑いながら俺の首に抱き着いてきた。

「ありがとう、フータロー。私幸せだよ」

キラキラと輝く世界で一番綺麗な宝石が、上目遣いに見上げてくる。暴れまわるような思いを抑えきれず、そっと短く唇を重ねた。

「えへへ……嬉しい」

さっと赤の照れ化粧をさした三玖は、少し距離をとって俺に背中を向けてこういった。

「つけて」

後ろ髪をまとめて上げて、三玖はその白い首筋を晒す。絹の様な滑らかなうなじに指でそっと触れると、「んっ……」と色っぽい声が聞こえる。邪な考えを頭から振り払ってチェーンをくぐらせ、留め金を止めた。

「どう？」

三玖の胸元に翡翠の石が控えめに光っている。その刺々しさのなにか柔らかな輝きと、理知的にも見える深い緑色に、俺はこの石で良かったと思う。それを見て笑顔になった三玖に俺はこう言った。

「似合ってる」

散々勉強して、数える事も億劫なほどの言葉を覚えたはずなのに、こういう時に出てくる言葉の何と素っ気ないことか。しかし、この女の子にゴテゴテと言葉を飾り立てるのも野暮なような気がして、俺は思いよ届けとばかりに三玖の手を握った。三玖は俺の手を握り返して、蕾がほころぶように笑った。

「三玖、おめでとう」

「フータロー、誕生日おめでとう」

輝きを秘めた瞳を閉じた三玖に、ゆつくりと口付けた。

「あー！ もう、目を離すとすぐこれなんだから！」

突然の叫びに弾かれるように俺と三玖は離れた。声のした方を見ると、仁王立ちした二乃が威圧感たつぷりに見下ろしてきていた。一花は苦笑い、四葉が目を見開いて、五月は赤くなって俯き、らいはが無邪気に笑っていた。

「ほんとに仲良しだね、お兄ちゃんとお姉ちゃん」

「らいはちゃん、あれは仲良しっていうよりバカツプルっていうんだよ」

「一花……変な言葉を教えるなよ」

「変な言葉を使って形容される行為をしてたのは何処の誰かなー？」

俺は降参とばかりに両手を上げて皆の下へ歩いて行った。

「三玖も来てよー。皆でゲームしよう」

「分かった。何するの？」

普段できないゲームに喜びながらプレイするらいはに微笑まじさを感じながら皆でゲームをした。協力し合い、競い合い、ときに蹴落としたり蹴落とされたり、そういう一つ一つが新鮮で喜びに満ちていた。

「あ、もうこんな時間」

四葉がふと時計を見てそういった。たしかに時計は八時近くを指していた。明日も休みとはいえ、らいはを遅くまで起こしておくたくなはないな。

「よしらいは、帰るか」

「うん」

「私達も見送りましょう」

二乃の言葉に促されて皆が立ち上がった。忘れ物がないからいと確認して、先に玄関に行き靴を履いて待ってた四人の下に行く。

……四人？

「んく、こんなに遊んだのは久しぶりだね」とは一花、

「たまにはいいじゃない」そう二乃が言い、

「らいはちゃん、今日は楽しんでくれましたか？」四葉はらいはに語り掛け、

「今度はらいはちゃんの誕生日を私達にお祝いさせてください」これは五月。

「あれ、三玖はどこ行った？」

俺がそう尋ねると、四人の顔に隠しきれない可笑しさの色がにじみ、薄く笑いながら五月が言ってきた。

「上杉君、実はあなたにもう一つプレゼントがあるんです」

「は？」

「隣の部屋に行ってください。らいはちゃんは責任もって私達が送りますから」

俺は二三言い返そうと思ったが、有無を言わさぬ強い力が四人の目から放たれ、思わず黙ってしまった。

「よろしい。じゃ、私達の事は気にしないで楽しんでね」

その二乃の言葉を皮切りに、四人とらいはが玄関から出て行った。

どういうつもりだろうか。自分たちの部屋に男一人ほったらかしで出かけるなんて、普通考えられない。

「隣の部屋だったか？」

それに三玖も見当たらない。三玖を探すついでにそのプレゼントやらを確かめておこう。

隣の部屋に足を踏み入れる。電気をつけると部屋の端にうずくまる人がいた。

「三玖？ どうした」

そう声をかけても三玖はじっとして動かない。

「三玖、どこか体調でも悪いのか？」

俺は近づいて三玖の肩を叩いた。三玖は意を決したように立ち上がり、その手には何か赤い布を持っていた。

その布はところどころ緑色を差す、クリスマス風のラップピンクの様な赤いチエツクのスツールだ。三玖はそれを肩にかけ、赤い顔をして潤んだ瞳で俺を見てくる。よく見ると首にシルバーのハートがあしらわれた赤いチョーカーをつけて、頭にピンクのリボンをつけている。「ふ、フータロー。えつと……その……」

三玖はもごもごと口の中で言葉をしばらく転がすと、睨むように俺を見て言った。

「フータロー。ぶ……プレゼントは私。私をあげる」

そこまで言うと、三玖は湯気が出そうなほど真っ赤になった顔を俯かせて、もじもじと可愛らしく身をよじる。

「くっ……あはは」

俺はその可愛らしさと可笑しさに、思わず笑い声をあげてしまった。

「笑わないで……だから止めておこうって言ったのに……」

「いや、今までで一番のプレゼントだ」

二乃が言ったでしよと三玖を止めたのはこれが理由か。後で時間をあげるから、今くらいは我慢しなさいという事だろう。

俯いている三玖の肩を掴み抱き寄せた。腰に手を回して、ぴったりと体をくっつけた。どきりと三玖の鼓動が聞こえてきそうなほど近くで触れ合い、髪から匂い立つ女の子の甘い香りが、俺に狂おしいほど好きの感情を湧き立たせる。

「フータロー……返品しちやだよ」

「三玖こそ、俺から離れるなよ」

少し離れて三玖と見つめ合う。頭に巻いたりボンをそつと外した。肩にかけてスツールはぱさつと床に落ちて、俺はゆっくりと包装を一枚ずつ剥がしていく。

「大好き、フータロー。世界で一番愛してる」

嬉しい愛の調べが囁かれると、好きの気持ちを抑えきれなくなり、

思わずキスをしてしまった。にっこりと三玖は笑うと、

「もつとして、フータロー」

猫のように甘えた声をして俺にしなだれかかってくる。

「愛してる、三玖」

「うん……」

二人して布団にへたりこみ、俺は三玖を押し倒す。覆いかぶさるように三玖の上に行き、ゆっくりと重さをかけてキスをする。その二人が一人になるような深く繋がったキスに、体が熱を帯びて、燃える様に三玖の事しか考えられない。

夜もすがら、俺たちは愛を交わしあう。心の繋がる人としての喜びと、体が繋がる男としての喜びに打ち震えて、その永遠の様な一瞬は、宝石の如く光り輝いて心の中に大切にしまわれた。

神の雫の生る木には

つんと鼻の奥に残るような煙草の残り香に少し顔をしかめながら、ガラス一枚隔てて流れて行く光芒を見送る。光が走り抜けると、窓が鏡の様になって私を映した。どこか沈んだような暗い顔。いや、もてからこんな顔か。

「お嬢ちゃん、大丈夫かい？ けっこうかかるよ」

運転席に座るタクシードライバーは、困ったように眉根を寄せて私に問いかけて来た。

「大丈夫です。江ば……お父さんの秘書が払ってくれと」

「秘書？ お父さんは社長か偉い人なのかな？」

「えつと……」

しまった。世間話の口火を切った事を少し後悔しながら視線をさ迷わせると、大きな黒塗りの高級車がマンションの前に停まる。

「あ、来ました」

ドライバーは私の視線の先を追いかけ、停まった車を見た。後部座席からお父さんが降りてくる。それだけなのに、その洗練された所作は恐怖すら覚えるほどだ。

コン、と運転席の窓を軽く叩く人がいた。江端さんだ。ドライバーは窓を開けて江端さんと言葉を交わすと、カードを渡されてそれで支払いを済ませる。

「はい、ありがとうございます」

とドライバーは言うのと私のすぐ横のドアが開いた。江端さんは車を駐車場に置くために戻っていった。私は降りると、夜の帳のようなスカートがふわりと翻る。真面目な話をしに来たのだから、私の服装も少しばかりは真面目だ。

黒のプリーツスカートに白のブラウス、ジャケットを羽織り、胸元には翡翠が光っている。フータロー、私に勇気をちょうだい。

「やあ三玖君。僕に話とは、何だろう」

「お父さんあの……」

「いや、立ち話は止めよう。5月とはいえ今日は風が吹けば肌寒い。」

夕食をとりながらゆつくり話そう」

お父さんはそう言うと言つすぐマンションに向かう。私は慌てて追いかけた。自動ドアを抜けてエントランスに入ると、釣りをする休日のおじさんみたいに大きなクーラーボックスを担いだ人とお父さんが会話をしていた。

「今日はよろしくお願いします」

その人は小太りの体を揺らし、深い皺が畳まれた目元の中は優しい光が宿っている。握手をした手は分厚くて力強い。

「今日は三玖君が来ると聞いていたからシェフを呼んだよ。普段の食生活がどうかは知らないが、たまにはこういう物も良いだろう」

なるほど、料理人ならあの体系と分厚い手も頷ける。クーラーボックスには肉か魚か、とにかく今の私達には手の届かないような物が入っているのだろう。

「今日はここに泊まるのかな。それともアパートに帰るかい?」

ちらりと車を置いてきた江端さんの方を向く。帰るなら車を出そうと言いたいのだ。

「……帰る」

「分かった。江端、すまないがゲストルームで待っていてくれないか。三玖君を送ってほしい」

「かしこまりました」

「すまないね」

私達はエレベーターに乗り込んだ。三十階までの時間、私の胸に気まずさの靄がかかる。それは男の人三人に囲まれているからではなく、私自身の心境の変化から起こるものだ。

少し前までは、このエレベーターに乗ることに何の疑問も抱かなかっただろう。しかし、この数か月で私はあの狭いアパートの事を、心の底から帰る家と認めているんだ。

ポーンと到着を知らせる電子音が響き、考え事の岸边から呼び戻される。お父さんが重々しく足取りを進めて部屋に真つすぐ向かう。私もそれに続いて歩き出した。

お父さんがキーを通してドアを開ける。江端さんが扉を持ってく

れてその間に私と料理人さんも入る。

久しぶりのマンシヨンは懐かしいような空気がした。でもどこか嗅ぎ馴染みのない匂いがして、この短かったような長いような数か月を思い起こさせる。

このマンシヨンを飛び出して、あのアパートに住むようになった事。皆で協力しながら暮らす中でケンカしたり、仲直りしたりして姉妹の結束を深めた事。バレンタインチョコを一花や二乃の協力を受けて作って、フータローにうまかったぞって言われた事。ただ買い物に行くだけなのに、わざわざフータローの近所まで行つて彼を探した事。春休みの旅行の最後、私を見つけてくれた事。……そしてフータローと付き合うようになった事。

胸元に輝く緑の魔法を握りしめる。それだけでこれからの事を憂うさざ波の立った心が静まる様に落ち着いた。うん、私は大丈夫。

キッチンに入った料理人さんはコックコートを身に纏い、大きなクーラーボックスから何かの塊を取り出した。鮮やかな赤色の、赤身のお肉だ。ちらりと見えたクーラーボックスにはいくつか同じ様な塊があつて、つまり肉料理のコースだろう。

「どうした、三玖君？ 席に着きなさい」

お父さんの地の底から響くような、威厳と威圧感のたつぷり詰まつた声が私に呼び掛ける。言われるままに私はお父さんと向かい合う席に座った。グラスに入ったミネラルウォーターで口を湿らす。お父さんは泡立つ液体を、細いグラスのステムを優雅に持つて口に運ぶ。

「模試の結果は見せてもらったよ」

とん、とグラスを置いてからお父さんは言った。

「こう言つては三玖君に失礼かもしれないが、正直驚いたよ。現時点でこの成績なら、進学にそう不自由はしないだろう」

「お父さん」

「どうやら上杉君の実力は本物のようだ。認めざるをえない」

言い終わると同時に最初の皿がサーブされる。真ん中に小さく、綺麗な赤色の差したお肉が置かれて、その周りを取り囲むようにソース

が半円の軌跡を描く。

ナイフを入れて私の口に合うように切る。口に運ぶとしつかりとした赤身の旨味が広がり、歯で筋繊維をぷつりと噛み切る柔らかい肉特有の食感を楽しむ。五月に今日こんな肉を食べたと言ったらどんな顔をするだろうか。

「それで、何が欲しいんだい？」

「えっ……？」

最初の皿を空にした所でお父さんはそう言った。突然の言葉に私は一瞬固まる。

「誤魔化さなくていい。思春期の娘が父親と話がある時は、何か欲しい物がある時と相場が決まっている」

空にしたグラスに注ぎながら言った。その姿さえ怖く見えるのは、私にやましい事があるからだろうか。いや、フータローと付き合っていることはやましい事なんかじゃないけど。でも父親からしたら娘が異性と付き合うことは許容し難い事だろうか。

「お父さん、最初にこれは言っておきたいの」

「何だい」

「家庭教師を……フータローを私達につけてくれてありがとう」
「ほう」

ぴくりとお父さんの眉が動いた。驚きだろう。去年の九月の私もこれを聞いたら同じ様な顔をしようだ。あの時の私ときたら、自分の知っている事だけは一丁前のつもりで、そのくせ外に踏み出す勇氣のない臆病者だった。

続く言葉を探していると二つ目の皿が出される。野菜の上にさつと火を通した薄切りの肉がのっている物だ。

お父さんはその皿に目を落とし、肉を口に運ぶ。落としていた視線が私に向けられると、私は二の句を続けた。

「そして、ごめんなさい」

「何を謝るんだ？」

「私が、フータローと付き合っている事」

鬼のような形相で睨まれるか、声を荒げて怒鳴られるかと思っていた

らお父さんは意外な反応を示した。片眉を下げて、疑問に首を捻っている。少しして分かっている問題に挙手する生徒のように控えめに手を挙げて言った。

「一ついいだろうか」

「何？」

「二乃ではなかったのかい？」

「え、どういう事？」

お父さんは力の入った眉間を親指でぐりぐりと押しほぐした。

「どういう事も何も、上杉君が来て最初の定期考査で嘘をついてかばったのは二乃だったろう？ それに少し前の学年末考査で二乃は『私達を見て』と言って上杉君のバイクの後ろに乗り、そして上杉君も『娘さんを頂いていきます』とさえ言ったんだ。おまけについてこの間の家族旅行、夜中に旅館を飛び出して誓いの鐘の下での逢瀬を重ねようとしたのも二乃だったかな」

「……」

お父さんの言葉を聞いて分かった。二乃もフータローの事を好きだったんだ。いつからだろう。少なくとも春休みの旅行の前からな事は間違いない。バレンタインチョコを作るのを協力してくれた時はどうだったんだろう。知らなかったとは言え、私はとても無神経な事をしていたのだろうか？

「そうか……二乃ではなかったのか。いや、でも三玖君と付き合っているのか……」

お父さんはほつとして、でもすぐに沈み込むような顔色をした。感情の打ち寄せる波に表情をころころ変えるお父さんを見るのは面白かったが、そんな感想はタンポポの綿毛の様に容易に吹き飛ばされる。

重力が倍になったかのように部屋の空気が重くなった。冷や汗が一筋私の頬を流れて、突き刺すような視線を感じる。お父さんの黒い瞳が私を真っすぐに見据えていた。それはただ睨んでいるだけじゃなくて、相手の奥底まで確かめるような、そんな瞳だ。人間の奥のさらに奥底を切り開く医者であるお父さんだから持てる、メスのように

鋭い目に恐怖で身がすくむような感覚を覚えた。

気を紛らわそうとした頭はこんな話を思い出した。それは生物の解剖の問題の時にフータローの話してくれた事。

『メスってというのはその切っ先の重さだけで肉を切ることができらしい。肉の塊である人間を切るんだからそれくらい当然か。……とてもじゃないが三玖には持たせられないな』

そう理解はしても慰めになるだろうか。メスは突きつけられ、お父さんがちよつと力を入れれば……いいや、逆だ。切り裂かないようにお父さんは力を入れてるんだ。その氣遣いが無くなった時、探求の刃が私を切り裂くだろう。

「いつからだ」

「え……」

「いつごろから付き合うようになったのかと聞いているんだ」

「あの、家族旅行から帰った後」

「そうか、と小さく空気を震わせると料理に箸をつけ、飲み物で口を濡らす。

「せつかくの料理だ。遠慮せずに食べなさい」

と言われて素直に味わえる人がどれだけいるだろう。……いや身近に一人いるな。けど私はとてもあの子のようなメンタルで食事ができない。舌に感じる美味しさも、どこか上滑りしてまともに味わえなかった。

「やめておいた方がいい、と僕としては言わざるをえないね」

「でも、認めるって……」

「家庭教師としては、だ。ある人物が嫌いという感情と、その力量を認めるという事は両立する事柄だよ」

お父さんは一息を吐いてポケットからスマホを取り出して数回タップする。落としていた目線をまた私に向けて言う。

「三玖君、学生時代の恋愛なんて熱病と同じだ。その時は辛かったり苦しかったり、この人がいないと生きていけないと強烈に思うかもしれないが、なんてことはない。数日休めば熱が引いていくのと同じで、数か月、数年すればその熱病は引いていくだろう」

「そんな事ない。私はフータローのこと……」

「風邪と恋には特効薬がないとはよく言われる与太話だが、目の前の君を見てるとその言葉もあながち嘘じゃないと思えてくるね」

お父さんはそう吐き捨てるように冷たく言い放ち、グラスを傾けて休符を打つ。指揮者がタクトを振る様に、トントんと一定の間隔で指先を机に打ち付ける。

「なぜよりもよって彼なんだ？ 君の前途にはいくらでも道があつて、いくらでも素敵な出会いを手繰り寄せることができるだろう。それこそ本物の愛さえも」

机を叩いていた手を上げる。メインであろう大きな肉が、脂が熱で溶けてキラキラと美しく一種の宝石のように輝いていた。その皿がサーブされると同時くらいに、お父さんの部屋から黒い瓶を持った江端さんが出てくる。

「古来から女性は様々な物に例えられてきた。船、花、勝負事」

江端さんがその瓶を机に置いた。瓶に張られたエチケツトに力強い文字が記されている。私達が生まれた年だ。

「そしてワイン」

そつと赤ちゃんを抱くように、お父さんはそのワインボトルを手にとる。

「これは君たちが生まれた年の物だ。購入したのは二・三年前だが、その時でも百万はした。君達が飲める歳になったら一緒に開けようと思っていたが、そのころには二百万の値が付いていたとしてもおかしくないだろう」

そこまで言うのとボトルを置いて私を見てきた。先ほどのような鋭い目線ではなく、諭すような目だ。

「君達はこのワインになる実をつける葡萄の木だ。常人にはそうそう触れられない価値を実らせるだろう。それは単に母親譲りの見目麗しきからだけではない。歳を経て得る経験に、教養に、君達の円熟味は増して益々素晴らしい女性になるだろう。その価値が分からないような男に渡したくないと思うのは、そんなにおかしい話かな？」

お父さんはグラスを空にする。江端さんがそのグラスを満たして、

もう一口お父さんは口を湿らせた。ナイフとフォークを手に取り、芸術品の様な肉にナイフを滑らせる。

「素晴らしい君達に、このクラスの肉の様に素晴らしい人を引き合わせようと思うのは特段変な事ではないと思うが、どうかな」

言いたい事は色々あるはずなのに、喉に引つかかったように言葉が出てこなかった。何て言えばいいんだろう、どう言えば納得してくれるんだろう。胸の内ですぐぐると言葉がかき回されて、意味のない奔流が渦をつくる。

トン

何かが私の胸を叩いた。思わず胸元を抑えると冷たい石がそこに揺れていた。フータローがくれた、幸福の意味を持つそれを握ると心が落ち着いて胸のつかえがとれたように思えてくる。ここにいないフータローが私を見かねて、この石を通じて勇気づけてくれたと考えるのは、いくら占いが好きとはいえスピリチュアルが過ぎるだろうか。

「お父さん。私はお父さんが言ってくれるような、そんな大それた人間じゃないよ」

「謙遜することはない」

「ううん。謙遜じゃなくて、本当の事。私はお父さんがくれる物を、ただぼうっと受け取っていただけの、ダメな木だった」

でも、と一旦言葉を切り、水を一口飲む。

「でもフータローが変えてくれたんだよ。自分で根を張ることも、葉っぱを広げる事も忘れた私達に、このままじゃダメだって向き合ってくれた。怒られたり、叱られたり、でもそれを乗り越えて私達は成長できた。私達が価値のある物を実らせるようになったとしたら、それはフータローのおかげ」

思いの丈を打ち明ける事に、体がかつと熱くなる。でもここで思いをぶつけないと、あの鉄仮面の奥に響かせることなんて出来ない。

「だから私はフータローと一緒にいたい。フータローと一緒に成長していきたい。子供の戯言だってお父さんは言うかもしれないけど、でもこれが私の気持ち。何て言われても、この恋を諦める事なんてでき

ない」

とうとう言ったんだ。あのお父さんに、私がフータローの事を好きなんだって、フータローと一緒にいたいんだって。

お父さんはその変わらない表情のまま私を見ている。怒っているのだろうか、悲しんでいるのだろうか、顔色からはうかがい知ることができない。

「……つまらない物だね」

「え……？」

「食べなさい。冷めたらせつかくの肉も台無しだ」

そう言われて私はこのメインディッシュに一口もつけてない事を思い出した。言わなくちゃという思いで頭がいっぱいで、物を食べる何て思考がどこかに飛んで行ってしまっていた。

肉にナイフを入れる。さして抵抗もなく切れて、一かけらを口に入れる。食べるというより、飲めるとでも形容するような、これが最上級の物だという味が口いっぱいに広がる。

「なるほど、三玖君の気持ちがそれなりに本気なのは間違いない様だ」

「それなり、じゃなくて、本気」

「失礼。本気なようだ」

先に食べ終えたお父さんが丁寧にナイフとフォークを置いて、指を組みながら私に語り掛けてくる。

「では、将来はどうするつもりかな？」

「将来……」

「近い所でいうと……そうだね、進学するか就職するか、というところか」

あつ、と思った。私はお父さんに言う事ばかりに躍起になって、そういう説き伏せるプランを練ってきていなかった。

「考えていないとなると、君の言ったように子供の戯言と言わざるをえないな」

「……進学はする」

「何の目的を持って？　ただモラトリアム期間を得たいだけなら駄目だとは言わないが、さっきの君の言葉は軽くなるだろうね。それは問

題の先送りだ」

「大学で資格をとって、給料は高くなくても、産休や育休をちゃんとくれる所に勤めたい」

「それはどこかな？」

「それは……これから調べる……」

お父さんはふうと少し呆れたように息を吐いた。こういう先の事を考えられるのが、大人という事だろうか。

甘かった。私は気持ちをちゃんと話せば分かってくれれば、やっぱりどこか甘えていたんだ。説得する、なんて偉そうな事を言っておいてこの体たらく。私は目頭が熱くなって、鼻がつんとする感じがして、泣いちゃだめだと自分に言い聞かせる。

「A大学なら……」

とお父さんは口を開いた。私が顔を上げた所を見て、話を続ける。

「そこならここからでも、今君達が住んでいるアパートからでも無理なく通えるだろう」

何だろう、お父さんは何を言っているのだろうか。

「そこで簿記なり事務仕事の資格でも取ればいい」

「え……お父さん……？」

「社会人の先輩として言いたいのが、メモを取ったりしなくていいのかな。覚えられるというなら、取る必要はないがね」

そこまで言われてようやくわかった。お父さんは進路相談をしてくれているんだ。スマホを取り出してメモのアプリを立ち上げる。さっき言われたことを手短かにまとめた。

「早く自立したいなら、B短大に通うという手もある。学費の事は気にしなくていい。君達五人が全員大学に進学しても不自由はさせないよ」

それは何となく分かっていった。中野家という家は、私達の想像の上に行くお金持ちの一家なのだ。

「そして……そうだね、うちの病院に事務員として勤めるといのはどうだろう。産休も育休もある。そして病院には保育園もある」

喋った分を取り戻すようにお父さんはグラスの中の物を飲み干す。

「と、これくらい考えてずっと一緒にいたいとのたまって欲しいね」
「……うん、考えてみる」

最後のデザートが運ばれてくる。すっきりとしたレモンのアイスクリームだ。思い通りにいかないような酸っぱさと、打ちのめされるようなほろ苦さ、そして最後に教えてくれたほのかな甘さ。今日のこの会食を締めくくるに、これ以上ふさわしい品はない、と思った。

「ねえ、お父さん」

「なにかな」

「さつき言ってた、つまらない物だねってどういう事？」

そう聞くと、お父さんは鼻を掻いて伏目がちに言う。

「男親なんてつまらないな、と言ったんだよ」

「？」

「三玖君も、そして他の四人も、こんな風に誰かに取られていくんだなと思うと、つまらないじゃないか。一人くらい男の子がいれば、慰めにもなったのかも知れないけどね」

そのどこか弱々しい心中の吐露に思わずおかしくなった。

「あはは」

「おかしかな」

「おかしくはないけど、あのお父さんが言ってると思うと、おかしい」
お父さんは立ち上がって、時計に視線を向ける。

「もう遅い。早くアパートに帰った方がいいだろう」

と言うと江端さん呼んで、私に帰り支度をするように促した。と
いっても私の荷物なんて小さなポーチくらいのもものだけだ。

先を歩くお父さんは振り返らずに、どこか言い訳がましくこう言った。
「勘違いしないで欲しいのは、僕は上杉君を認めた訳ではないという事だ」

「じゃあ何であんな事を言ってくれたの？」

「さあ、何でだろうね」

その言い方は漫画に出てくる不器用な父親の様で、笑いそうになるのを奥歯で噛み殺した。

「しかし僕が提案した道も楽ではないよ」

「うん。分かっている」

「いや、分かっているじゃないね。君がどんなに優秀な成績を修めたとしても、口舌がない奴は言うだろう。『親だけ偉いバカ娘』とかね」

そういう言葉にどこか力がこもっている気がして、思わず聞いてみた。

「お父さんも言われた事ある?」

「あるね。……君達のお母さんと結婚した時に、『五コブラクダを貰って、中野は動物園でも始めるのか』というのは最悪だった」

その言葉の悪辣さを追求するように険のある言い方に、あまりに普段のお父さんのイメージとかけ離れていて思わずくすりと笑いが漏れてしまった。

「笑うような話かい」

「その言葉は最低だけど、それにお父さんが怒っているのが、なんだか嬉しい。そんな事言ってくれるなんて思ってたから」

お父さんは気まずさを誤魔化すように頭を掻いた。

「飲みすぎたかな」

「こんどこそ我慢できずに声を上げて笑ってしまった」

「あはははー!」

「僕だって酔うことくらいある」

「ただの炭酸水なの?」

これはフータローから聞いた話だ。お父さんはお酒を特別な日にと決めているらしい。私がお父さんと話すくらいの事を特別な日と言っているのは、さすがに自惚れが過ぎるだろう。

お父さんの力の入った顔から、まいったと言う風に力が抜けた。

「君達にする事は大抵許してきたと思うが、やはり上杉君と付き合うというのは僕は反対だね」

けれど、と言葉をつなぐ。

「上杉君の事を、僕が認めたくなくなるような男にしなさい。君も女なら、そのくらいの器量はあつてほしい物だ」

「うん。お父さんに『上杉君、三玖を貰ってくれないか』って言わせて

みせる」

私は笑った。お父さんも唇の端を一瞬だけピクリと動かし

「これを渡しておこう」

そういうお父さんの手にはカードが五枚握られていた。あ

のとき投げ捨てたこのマンションのカードキーだ。

「今すぐ帰ってこいとは言わない。だが、いつでも帰って

きて良い」

「分かった。皆に渡しておく」

五枚を受け取ってポーチにしまった。靴に足を入れた所

でまた声をかけられた。

「いけないね、あまり会わない娘にいき会うと、あれこれ

言いたくなるのは」

そんなお父さんを見た江端さんは、車を出しておきます

と行って先

に出て行った。

お父さんは口を開いて……

「今日は来て良かった」

「ええ。きつと喜んでおられます」

「やっぱり、逃げてちゃダメなんだ」

ふう、とため息を吐く。高い車のソファが私を受け止

めてくれる。これに乗るのも久しぶりな気がした。

窓から外を見る。それは鏡の様に私の顔を映し出して

いた。すつきりしたような、晴れやかな顔をしている。

私はお父さんが言った言葉を思い出す。

思考に気をつけなさい、それはいつか言葉になるから。

言葉に気をつけなさい、それはいつか行動になるから。

行動に気をつけなさい、それはいつか習慣になるから。

習慣に気をつけなさい、それはいつか性格になるから。

性格に気をつけなさい、それはいつか運命になるから。

有名な聖女の言葉だ。お父さんは普段の何気ない事も

きちんとかえなさいと言いたいのかな。

ありがとうございます。

五^イ 私はこの恋を、運命にしてみせる。

春風扇ぐ君の手で

フータローが最近おかしい。

普段している恋人同士の触れ合いの質が変わった。あのキス魔のフータローが、十分時間があっても一回しかしてこなかったり、その代わりにボディタッチが増えたりという具合だ。

心当たりは、あの一緒にした誕生日パーティーの夜の事だ。あの時愛を交わしてその行為の余韻に浸っているときに、フータローが言った、

『次こういう事をする時は、三玖がしたいって言うまで我慢する』

という言葉だ。

あの甘くて熱くて、二つの糸が纏れて絡まるような一時は結構好きだけど、フータローが熱く零すような気持ちよさと言うものはあまり感じた事はない。それをフータローは分かったのだろうか。

だから触れ合う事は気持ちいい事なんだ、と教えてくるような触れ方をするようになったのかな。

「三玖」

ぎくりと胸が跳ねた。タイミングが良いのか悪いのか、声の主はフータローだ。ゆっくりと振り返るといつもの少し無然としたような顔で私を見ている。

「今日バイトだろ。少しくらい勉強会に参加していかないか？」

「うん、そのつもり」

人気のない廊下を手をつないで歩いて行き、空き教室に入る。教室は机が斜めになっていたり、椅子が出しっぱなしになっていて人がいた形跡はあるが、今は誰もいなかった。

「あれ、どこ行った？」

フータローは多分他の姉妹が座っていたであろう席に歩いて行く。机の上には可愛らしいピンク色のメモが置いてあった。なになに、友達と勉強会を開くのでそっちはよろしくやっててください、と書いてある。

「あいつら、ふざけているのか？」

「でもその友達っていう子、クラスで一番成績のいい女の子だよ」

ぐるるとフータローは納得いかないように唸る。やがて唸る無意味さに気付いたのか、鳴らしていた喉からため息を吐きだした。

「まあいいだろう。そういう勉強するネットワークは広い方が良くはらな」

そう言うのとフータローは椅子にどかりと座り込む。鞆から分厚い参考書を取り出してノートを広げる。

「三玖、時間無いんだろ。分からなかった所を教える。それくらいなら出来るだろう」

「うん。えっと、昨日分からなかったところが……」

私は昨日解いていた英語の長文問題をフータローに見せた。私にとっては筋張って噛み切れないような問題を、フータローは魔法のように解き明かす。文に区切りを入れながら読み解く姿に、やっぱりフータローって頭が良いんだなと思う。

話を聞きながチラツと顔を盗み見る。男らしいけど細面な顔。普段は睨み気味の鋭い目が真剣な色を帯びて英文を追っている。真つすぐな鼻筋が通って、その下に最近はご無沙汰な唇が言葉を紡ぐ。

「……と、なる。分かったか？」

「うん。ありがとう、フータロー」

疑問が一つ解けたところで時計を見る。十分後に学校を出れば充分間に合うだろう。勉強にかこつけて、もう少しフータローと二人きりでいよう。

「あ」

カチャンとペンが落ちる音がした。慌ててそれを拾おうと椅子から降りて屈む。ペンを摘まみ上げようとした指にフータローの指が重なった。目線を上げると、私の顔のほど近くにフータローの顔がある。

「三玖」

優しく呼び掛けられると、胸が否応なしに弾んだ。フータローの深い知性を秘めた緑がかった目が、優しく笑って私を見つめてくる。

重なった手を、フータローはぎゅっと掴む。フータローは笑ったまま、何をするでもなくじつと私をみているだけだ。

その目線はまるでレーザービームのように私の心を溶かしてしまふ。目線の熱量を受け取って、私は体が燃える様に熱くなる。

「三玖」

「フータロー……」

心臓が泣いているように痛んで鼓動を刻む。この傷をフータローに舐めて癒して欲しかった。熱くて、照れくさいようで、少しの不安が体中を駆け巡る。

フータロー、どうして見てるだけなの？

いつもみたいにキスしてよ。

私とキスするの、飽きちゃったの？

「フータロー」

息がかかりそうなほどの距離で、私は呟いた。

フータローは空いている手で、私の顎を伝いながら、くいつと顎先を持ち上げた。どくんと期待に震える胸が大きく脈打つ。神経が昂って、異常なほど集中していることが分かる。唇が、揺れる空気すら感じ取って、フータローからのキスを今か今かと待ちわびている。

「愛してる」

「あ……」

その一言と共に、私の唇にフータローは唇を重ねる。唇から伝わるフータローの熱に、びりびりと痺れるような快感が顔に、頭に、体に伝わる。頭の中がぐしゃぐしゃにされるように強烈で、甘美で、体の芯も燃え溶かすような、そんなキスだった。

しかし、フータローはすぐに離れた。笑いながら時計を指さして見ると促している。

見ると、もう学校を出ないとバイトに間に合わない時間だ。後ろ髪を引かれる思いだったけど、バイト先に迷惑をかけるわけにもいかない。

「……フータロー、また明日」

フータローは私の頭をくしゃりとなでると、またな、と言って私を

引っ張って立ち上がる。
うん、がんばろう。

二人きりで勉強している時、不意に合った目線に世界が止まったように感じる瞬間がある。それを感じた時、いつもフータローは私の体を触り、ゆつくりとキスをしてくれる。

今日もそんな瞬間が不意に訪れた。

休憩の時に私はお茶を淹れようと立ち上がる。フータローは手伝おうか、と言つて立ち上がりかける中腰の時に、丁度私と同じ高さになつて目線が重なつた。

それだけで私は、ああキスされるんだ、と思つて期待に胸が膨らむ。フータローは私の肩を掴んで抱き寄せた。温かい恋人の体温を感じながら、うつとりするようなフータローの鼓動に聞き入る。

「三玖」

何よりも愛しい声が、私を呼んでいる。その方向を見ると、きらりと光るフータローの瞳がこちらに向けられていた。あの鈍ちんで女の子に興味のなかったフータローが、こんなに熱い目で私を見ている。その嬉しさに、喜ばしさに愛の証が欲しくて、フータローにキスをねだる。

「フータロー」

そう言つて顔を少し上向きにして目を閉じる。私にキスをして、といういつものしぐさ。だけど、待っていてもフータローの唇が落ちてこない。目を開けるとフータローはじつとこちらを見ているだけだった。

背中に回されていた彼の手がじわじわと首筋を上ってくる。普段は髪とヘッドホンで守られているそこは、初めて物が触れたかの如く過敏に反応する。

「ひゃっ……」

ぞくりとするような感覚が背中を駆け抜ける。フータローの手はそのまま上に行き、五本の指が髪をかき分けながら頭をなでてきた。ちりちりと髪が擦れる音をどこか遠くに聞きながら、その髪一本一本

すら愛撫するような優しい触り方に、私は顔の血がどんどん熱くなるのを感じた。

このとろとろに蕩けたような温かさで、フータローに思い切りキスされたらどんなに気持ちいいんだろう。あのあげたチョコレートのようにフータローの唇にまとわりつくようなキスがしたい。ペろりと舐め取られるみたいに彼に食べられたってかまわない。

だから、ねえ……フータロー。

「どうした、三玖。何をして欲しいんだ？」

いじわるにフータローは笑う。察して、というわがままを許さない突き放した態度に、どうしてか胸の奥が疼く。

「き……キスしてほしい……フータロー」

そう言うと、フータローは目を開けたままゆっくりと私に近づいてくる。この瞬間を私は待っていたんだ。心臓が早鐘を打つ。

早く。

早くキスして、フータロー。

フータローにキスしてもらうために、私の唇はあるんだよ。

唇にふわりとフータローの唇が当たる感触。いつもなら、そこから押し付けて絡まって溶け合うような行為が続くのに、どうしてなのかフータローは唇を離れた。

触れ合うというよりたまたま掠ったような、キスと呼べない刹那の唇の触れ合いに、胸がしくしくと泣くみたいに悲しく脈打つ。

「はっ……あっ……」

望みをかなえてくれないもどかしさが、気付かないうちに息になって零れた。

フータローはぼんと私の肩を叩いて、勝手知ったる私達の台所の棚からヤカンを取り出してお湯を沸かし始める。

馬鹿な事とは分かっているけど、その水にさえ嫉妬の様な気持ちが湧いてくる。水はいい。沸いてお湯になったらフータローに飲んでもらえるんだから。だけど、沸いたお湯のように熱く駆け巡るこの気持ちは、フータローに飲んでももらえなかったらどうすればいいんだろう。

誰かに飲んでもらう？　あり得ない。私が愛しているのはフータローだけなんだから。結局のところ、自然に冷めるまでこの気持ちを置いておくしかないんだ。けど、冷めても完全に熱が失われる訳じやなくて、暖炉の灰に残った炭みたいに、その中に赤々と熱を残しておくすぶっている事をフータローは分かっているのかな。

受け止めて欲しいよ、フータロー。

私、どうにかなっちゃいそう。

休憩時間に友達が買ってきた雑誌を読みながら話していると、こんな話題が出て来た。

「男ってやりたいばっかでサイテー」

私の友達のグループは、どちらかというとも男つ気のない集まりだけど、各々男子に思う事を言い合い始めた。

「ジロジロ見て来るし」

「特に胸ばっか」

「ちよつと優しくすると勘違いして」

「あいつらバカなんだから」

立て板に水とばかりに、たくさんの言葉の流れがどんどん溢れて板の上を滑り落ちていく。

私は事の発端になった記事をもう一度見る。『男子に本音アンケート』と銘打たれたコーナーに赤裸々な質問が数問載っていた。これの『セックスをしたいか』という質問で圧倒的多数がはいと答えている所が、皆の逆鱗に触れたらしい。

私も少し考えてみた。質問を『キスしたいか』くらいに考えれば、この質問にはいと答えた男の人の気持ちも少し分かる気がした。

あのじりじりと焼けつくような、渴望する気持ち。したいと言っても暖簾に腕押しという風にすかさされて、でもいやらしい人と思われたくなくて、すごすごと引き下がるしかない情けないような感情。私がフータローからのキスを欲しがするような気持ちで、男の人はセックスを求めているのだろうか。そう思うと、どこか同情のような気持ちも湧いてくる。

「かわいいそう」

ポツリと何の気なしに呟いた言葉は、皆の琴線に触れて、笑いの大音声を奏でる。納得したように、かわいいそうかわいそうと口々に言っておかしさの引かないようにまだくすくす笑っていた。

そう、かわいいそうだ。沸きあがる熱い気持ちを受け取ってもらえず、結局自分の心中に収めるしかない事ほど情けない事は無い。

教室のドアを見るとフータローが食堂から帰ってきていた。隣にはあの模試の一件以来仲良くなった武田君がいる。きつと私には理解できない勉強の話で盛り上がっているんだろう。この前話に混ぜてもらった時は、ニュースになっていたブラックホールから相対性理論の話になって、全く理解できずに大人しく四葉のグループに混ぜっでご飯を食べた事をよく覚えている。

話に混ざれなくても、こうしてフータローを見ているだけで、ドキドキと鼓動が速くなる。クラスの皆は武田君ばかりカッコいいというけれど、フータローの方がカッコいいと声を大にして言いたかった。

「やっぱり付き合うなら武田君かなあ？」

「うんうん。カッコいいし、頭も良くてスポーツ万能」

「性格だって優しいし、おまけに家はお金持ち」

「少女漫画でもなかなかいないくらいの男の子だよね」

「でも漫画だったら二番目ポジだよね」

「分かる〜」

どうやら会話のステージを漫画に移すらしい。

分かる範囲でふんふん頷きながら、ときたまフータローの方を見る。

フータローは漫画だというキャラかな。ぶっきらぼうで、けっして性格の良い人とは言えないけれど、胸の内に優しさを秘めている。こう書くと、漫画に出てくるヒーローみたいだ。

……えへへ

フータロー。

私のヒーロー。

私の毎日が楽しいのは、君が悲劇のヒロイン気取りの目を覚ましてくれたからだよ。

ふとフータローと目が合った。声に出さずに目だけで思いを伝える。

大好き！ フータロー。

赤くなって俯いた彼に、伝わった事が嬉しくてくすぐすと心の奥で笑った。

「あいつら、俺達に気を遣う余裕なんてあるのか？」

少し勉強してからバイトに行こうと、この前と同じようにフータローと一緒に空き教室に行くと、これまた同じようにピンクのメモが置いてあった。もちろん内容も同じ。

フータローは納得しかねるといふ風に頭を軽く振るとこの前と同じ席に座った。私はそのすぐ隣に座る。

「三玖……その、だな」

「どうしたの、フータロー？」

静かな時間が少し過ぎると、フータローは何の脈絡もなく言葉をかけて来た。数学の問題を解いている手を止めて、フータローの話に聞き入ることにする。

「ああいう事は止めて欲しい」

「ああいう事って？」

私が聞き返すと、フータローは赤くなって口元を手で隠しながら言った。

「昼休みの……あの、好きって目線だ」

「何で？」

「何でって、それは……」

「迷惑だった？」

「そうじゃなくて……」

フータローは前髪をいじってしばらく考えると、ゆっくりと身を乗り出してきて私の顔を両手で挟むように掴んだ。

「あんな可愛い顔、他の奴に見せたくない」

その独占欲の詰まったらしからぬ言葉に、頬が緩んで笑いが零れた。私みたいに独り占めしたいって思ってくれてる事に、嬉しさを覚える。

「フータローのくせに」

「俺にだって、恋人を独占したいって気持ちくらいある」

「うん。嬉しい」

困ったように眉根を寄せたフータローに、どうしようもないほどに愛しさを感じて、もっと触れ合いたい気持ちが膨れ上がる。

「ねえ……フータロー……」

私の顔を挟むように持っていたフータローの手が解かれた。その手はふらふらと行き場を求めて、机に置いている私の手を包むように握って来た。

なんだ？ とフータローは笑う。

「キスして欲しい……して？」

上目遣いにフータローを見る。私の精一杯のおねだり。

瞳を閉じて、フータローからのキスを待つ。そつと額にフータローの温かい手の感覚がして、口付けられたのはそこだった。

「何で……？」

私はいいい加減そのじれったさに、もったいぶった行動に、いら立ちに似た感情が湧き起こる。

「どうして、してくれないの？」

「三玖？」

そう言つて覗き込むように見てくるフータローに、その唇に、私から飛びついた。

「んぐっ……」

驚いたフータローの鼻息が頬をくすぐる。もう文句を言つても止めてあげない。こんな私にしたフータローがいけないんだ。

そんなに日が空いたわけではないけれど、久しぶりに感じるキスは麻薬のように頭をくらくらさせる。キスってこんなに良かったっけ、と思うほど体がかつと熱くなり、頭に電極でも刺されたみたいにびりびりと色んな感情が頭の中を駆け巡る。

息が続かなくなって、仕方なしにフータローから離れた。

「はっ……三玖、いきなり……」

「いきなり、じゃないよ。フータローがいけないんだよ。ずっとしてくれないから」

待て、というフータローの静止の声も聴かずに、もう一度舐める様に唇を重ねる。

胸の奥で温かい思いが爆発するように鼓動が早まり、心地よさの、溺れるほどの奔流に身を任せる。

「三玖、悪かった」

唇を離すと開口一番フータローはそう言った。そのどこか言い訳くさい言葉の奥を見極めようと、私は睨むようにフータローを見つめる。

「何でしてくれなかったの？」

「それは……三玖の飢餓感を煽ろうかと思って」

「でも、したいって何回も言った」

「その、だな……キスだけじゃなく、もつと先の事に踏み込ませよう……」

その先、と私はその言葉の意味する所を思い出して、俯いてフータローの視線から逃げた。もしフータローが、キスするからさせてくれと言ったら、私は頷いたと思う。

「でも、フータローが言ってくれたら……えっと、私は……」

「それじゃダメだ」

「でも、私は良いって言ってる」

そう言った私の肩を軽く叩くと、フータローは優しく語り掛けてくれる。

「俺が言うから、じゃダメだ」

「……でも、男の人ははしたいって雑誌に……」

「今だけ良いって付き合えばそれでいいかもしれないが、そうじゃないだろ?」

「フータロー?」

フータローは手を伸ばして私の頭に置いた。そつと頭をなでてく

る手の温かさに、優しさに身を任せて、その嬉しさに思わず頬が緩む。「だからだな、その、性生活の不一致は離婚の原因にも十分なりえる訳で……」

なでてくる手の動きが乱れる。答えを探すようにあつちこつちに目線を散らすフータローは新鮮だ。フータローにも答えにくい問題があるんだ。

「俺がしたいって言えば、三玖は嫌だったとしてもいいよって言うだろう」

これはその通りかもしれない。初めてした時、バラバラに裂けそうなくらい痛かったけど、でもフータローがしたいなら私が我慢すれば良いんだ、と思った事は記憶に新しい。フータローがたくさんの時間とキスを掛けてくれなかったら、私はあの行為に嫌悪の感情しか抱かなかっただろう。

「それは嫌だ。俺はセックスするより、三玖とずっと一緒にいる方が大切だから」

ずっと一緒……

痺れる様に心臓が跳ねた。きゅつと縮こまって、そして破裂寸前まで膨らむような、体がその嬉しい言葉に付いていこうと無理してるみたいなの、今まで感じた事のない鼓動。

「とは言っても俺だって男だから、したい気持ちが無いとは言えない。だから三玖がしたいって言うってくれるように策を弄したんだ」

そう釈明し終わるとそつと短いキスをくれた。

「でももう止めた。三玖がそんな風に思っていたなら、キスくらいいくらでもしよう」

そう言ってくれたフータローに、嬉しくなって飛びついた。

首に腕を回して、出来なかった分を取り戻すように深い口付けを交わす。

「んっ……ちゅっ……」

舌でフータローの唇をつついて迎え入れてもらう。赤い舌がちろちろ舐め合い、甘い唾液の交換をする。

久しぶりのその深いキスに、呼吸の仕方を忘れた体が悲鳴を上げて

気持ちとは裏腹に離れた。

「はっ、はー……ふう」

息を整えて、もう一回絡まりあう。びっくりするようなフータローとの体温の差がなくなったように、もう自分の口を舐めているのか、フータローの口の中を舐めているのか分からないくらい頭がどろどろになった。湯だった頭には、もうフータローとキスすることしか頭がない。

「ふぁ……あむっ、ちゅっ……」

触れるだけの、噛みつくような、絡ませるように、もっど、もっどもっど、

——したい

抱いたことのない気持ちがドクンと胸を弾ませる。

今、私は何て思ったの？

したい？ 確かにキスはしたいけど。

でも、それとは違うもっど深いところから湧き上がってくる不思議な気持ち。確かめるように、もう一度キスをする。唇で噛みつくようにフータローの唇を挟む。フータローの目が笑って、お返しとばかりに下唇を挟みこまれる。

満足の炎が体中を駆け巡っているのに、どこかで切ないような、ズキリと痛むような不満足の色がくすぶっている。

「キスがレモンの味なんて言った人は、きつとレモンが好きだったんだらうな」

フータローは満足そうな笑顔を浮かべながら、そんなことを言ってきた。いまいち意味が分からない私は、首をかしげてフータローに答えを求めた。

そつとキスをしてきて、そして言った。

「俺が世界で一番好きな味がする」

「あ……」

そのちよつとキザなセリフ、臆面もなくそう言ってくれる嬉しさにキュンキュン胸が疼いて、体の奥から燃え尽きる様に熱くなった。

「フータロー、好き」

とてもじゃないけど我慢できなかつた。火山の噴煙をせき止められないように、胸の内にもくもくと、したい気持ちが膨れ上がって恥ずかしきなんて物を焼き切るようにへし折ってしまう。

「こんなに好きで、好きで好きで好きな気持ち、私にあるなんて知らなかつた」

なんで好きって言葉に、こんなに物足りなくなるんだろう。世の恋人達はどうかやって恋人にこの気持ちを伝えているんだろう。

「好きだよ、愛してる。フータロー、愛してる」

愛してるより、もっと上の気持ちを表す言葉があつたらいいのに。

「三玖」

「あ……」

嬉しい。嬉しい、嬉しい！

ただ名前を呼ばただけで、何でこんなに嬉しいんだろう。これが恋の魔法なんだ。

「愛してる」

その言葉が嬉しくて、嬉しすぎるほどに心が震えて、涙が溢れてきてフータローの顔にもじむほどだった。

フータローは頬をつうつと流れる涙を舐め取ってくれる。その優しさがどれだけ私を喜ばせてくれるか伝えたくて、また絡まるようなキスをする。

「情熱的なキスは嬉しいが、三玖、バイトの時間じゃないか？俺もそうだけど」

「え……？」

そんなことを言われても、この体は離れたくないと痛いほどに脈打った。

「うう〜」

「そんな顔してもダメだ」

「さ……最後にもう一回させて……」

しょうがないな、とフータローは笑いながら私の頭をくしやりとなる。そんな姿もさまになってカッコいいなって、胸のときめきが抑えられなくて破裂してしまいそうになる。

ゆつくりとフータローが近づいてくれる。甘い吐息が触れて否応なしに期待が高まる。ふわりと唇が触れれば、何回しても飽きない痺れるような気持ちよさにつつまれて、ふわふわと自分の立っている足元さえおぼつかなくなってしまう。

フータローが唇を離すと、そんなの嫌だと思って追いかけた。

「み……んんっ」

何回しても、し足りない。もっともっと繋がりたい。

ああ、そうだ。

きつとこれが……

「三玖。もうしないぞ」

フータローが自分の唇の前でバツ印を作った。名残惜しい気持ちはあるけど、でもそうやって止めてくれないとずっとしていたかもしれない。

「あと顔を洗って行け」

「え、そんな酷い顔してる?」

「綺麗だ。だから他の奴に見せたくない」

反則だ。

なんでこの人の言葉は、こんなに胸を疼かせて、嬉しい鼓動が轟くんだろう。

でも一旦忘れよう。私だっという顔をフータロー以外に見せたくない。

「バイトが終わったら会える?」

「ああ。時間をつくろう」

フータローの大きな手を握る。握り返してくれるのが嬉しくて、その嬉しさに口元をほころばせながらフータローを見つめる。

そのまま正門から出て行くと、何人かにジロジロ見られたけど、そんな事気にしていられない。恥ずかしいより、嬉しい方が大きいから、見られたって平気だ。

「中野さん。はいこれ、次のシフトね」

「あ、ありがとうございます」

バイトの終わり頃、店長が次のシフト表をくれた。

「中野さんこれから修学旅行だっけ？ その前にちよつと詰めちゃったけど大丈夫かな？」

「はい、大丈夫……」

シフト表を見ると驚きの事態に焦りが生まれる。修学旅行まで日はほぼ全て出るようにシフトが組まれている。

「ごめんね、なぜか中野さんが修学旅行行くまでの間、休日に出られないって子が多くて。でも修学旅行終わってからはちゃんと減らしているから」

そう言ってくれても慰めになるかどうか。目を皿のようにしてシフト表を食い入るように見つめると、蜘蛛の糸のような救いの一日休みがあった。その日はフータローも休みな事を思い出す。

それは明日だ。

「中野さん？」

「え、あの、大丈夫です。お疲れ様でした」

「う、うん。お疲れ」

急いで着替えてシフト表を制服のポケットに入れる。

急がなくちゃ。私に残された時間は、あと三時間ほどしかない今日と、明日だけなんだから。

フータローはバイト先であるケーキ屋さんのすぐ近くにあるコンビニで見つけた。

「ん、三玖。お疲れ」

ただの風よけに入っただけのフータローは、雑誌コーナーで赤本を読むという珍妙な姿だったが、とりあえずそれは脇において外に引っ張りだした。

「三玖どうした。急ぎの用事でもあるのか？」

急ぎと言えば急ぎだろうか。

でも、こうフータローを前にするとどうしても恥ずかしい気持ちが顔をのぞかせる。

……いいや、いかなくちや。明日を逃したら、このもやもやした気持ちを少なくとも修学旅行が終わるまで抱える事になるんだから。

動くこと雷霆の如し。

私はフータローの首に抱き着いて、思い切りキスをした。

「三玖、どうしたんだ？」

フータローは顔を赤らめて口元を隠し、流し目をくれるように私を睨んでくる。その色っぽい目にドキリとして目的を一瞬忘れかける。

だめ。勇気を出さなくちゃ。あれはそういう気持ちなんだって分かったから。

「フータロー……」

屈んでくれたフータローの耳に、ぽしよぽしよと内緒話する。

——えっちしたい。

固い蕾が開いたら【上】

このドキドキをどう言葉にしたらいいんだろう。

俺は今、前まで五人が住んでいたマンションのエレベーターに乗って、三十階に到着するのを心待ちにしている。

操作盤のすぐ前に立っている三玖が、俺の方を振り返ってきて、赤い顔を伏せるようにしながらそれでも手も握って来た。

俺が欲しがっていた肯定の意味の言葉を口にした三玖について行くこと、そこはこのマンションだった。

この前父親と会った時に帰ってきてきても良い、とカードキーを手渡されたらしい。ロックを解除する際に、ごめんなさいと三玖が言っていた。しかし、その後ろめたさに三玖の頬が赤らんで、俺もそうだがあまりよろしくない興奮をしている事は否定できなかった。

さっきの言葉を思い出すだけで、俺は下半身に血が集まってきてしまつて、それを隠すように言い訳がましく赤本を持ち、その本で股間を隠した。

上る箱が動きを止めると、ゆっくりとドアが開く。あの部屋までの僅かな距離の廊下が輝くように思えてくる。この少しの距離を歩いたら、誰にはわかる事もなく三玖とめくるめくようなセックスに溺れる事が出来るのだろうか。俺はさらに下半身に血が集まって、どうしようもない程に三玖と繋がりがりたくなつた。

三玖がカードキーを通す。

がちやりと開く扉は、さながら天国への扉のようだ。

三玖が先に入り、俺が後に続く。後ろ手に扉を閉めて鍵をかけること、三玖が俺の首に抱き着いてきた。

「おかえり、フータロー」

「三玖、ただいま」

その会話で、俺達は夫婦なんだと自分に言い聞かせる。

そうだ、俺達は夫婦なんだから、セックスする事は何らおかしくない。い。

ちゅつと短いキスをしてくつつつけていた体を離す。もしもつと長

いキスや、深いキスをしてしまうと、この場で下着を下ろしてまぐわってしまおうだろうという事を、お互いに考えているだろうから。

「ご飯の用意するね」

そう言うとき三玖はブレザーを脱いで、青いカーディガンの上に黒のエプロンを着けた。

大きな鍋を取り出して水をいっぱい張り火にかける。手には黄金色の束。パスタだろうか。三玖は冷蔵庫の中身と睨めっこして、スマホをとんとんとタップする。何のソースを和えるのか決めたのか、冷蔵庫から卵とチーズとベーコンを引っ張り出した。

「フータロー、お風呂の用意してて」

言われるまま俺は浴室に向かう。浴槽を洗い、お湯を入れる。ここ
の風呂は楽だ。溜まったら勝手に蛇口を締めて止まってくれる。

リビングに戻り、料理をしてきている三玖を眺める。何かに打ち込んでいる姿は不思議なほど魅力的に見えてしょうがない。

ああ、三玖に抱き着きたい。キスがしたい。料理よりもお前が食べたいなんて言って、そのまま始めるのも悪くない。

頭をふってその考えを追い出す。もしそうして、行為の最中に腹の虫が鳴ったら興奮めもいとこだ。普段の俺では考えられないほどピンク色の妄想を振り払おうと、鞆から漢文の問題でも取り出して見てその世界に没頭する。

……

「フータロー」

頭の中で文を組み立てていると、不意に俺を呼ぶ声が聞こえた。三玖がテーブルにパスタの入った皿を置いて、頬杖をつきながらこちらを見ている。

「冷めちゃうよ」

「すまん。食べるよ」

ふわりと三玖は笑って「めしあがれ」とおどけて言う。

「いただきます」

薄く黄色のソースにベーコンがぱらぱらあって、上に黒コショウがかかっている。カルボナーラだ。さすがにそれくらいは俺でも知っ

ている。

フォークに少し巻き付けて口に運ぶ。チーズのねつとりと絡みつくような旨味と、甘いようにも感じる肉の脂が口の中で混ざり、最後にコシヨウの風味が鼻に抜ける。

「上手くなつたんじゃないか？ 三玖」

旨さを感じる下限が低すぎるんじゃないの、とは二乃の俺に対する評価だが、三玖の料理が以前の物とは違うことが俺の貧乏舌でも良く分かった。

「嬉しい」

三玖は笑う。そんな顔が見られるなら、何でも旨く感じる事は得だなどと思った。先に食べ終えた三玖は、食べている俺を見ながらにこにこ嬉しそうだ。

浴室の方からお風呂が沸きました、という声が聞こえてくる。

「三玖、先に入ったらどうだ？ 洗い物は俺がやっておこう」

「わ……分かった……」

一番風呂を勧めると、三玖はなぜか赤くなつて着替えを数枚持つて浴室に向かった。

変な三玖、と思つて頭を捻っていると一つ思い当たる。先にシャワー浴びて来いよ、なんて映画でも聞かないセリフを言っていたも同然だ。俺は一人で恥ずかしくなつて顔が熱くなる。男が赤ら顔で何が面白いんだ、と自嘲しながら煩惱を落とすように皿を洗った。

「ふ……フータロー、えつと……どうぞ」

ソファに座つて漢文問題の続きをしていると三玖が声をかけてきた。返事をしようと思つたから顔を上げると、俺は三玖の恰好に目が釘付けになる。

髪が濡れて艶っぽく輝き、その長い髪が首筋に張り付いていた。血色の良くなつた顔が照れたように赤い。何より目にとまるのは、水色のキャミソール姿ということだ。その白い肩を、首回りを惜しげもなくさらしている。立ち上がつて三玖を見下ろすと、その豊かな胸の間に生まれる深い谷間が良く見えた。

「……見すぎ」

「え……ああ、すまん」

じつと見すぎたせいかな、三玖に腕で胸元をかばうように隠されてしまった。ちよつと残念に思いながら、以前泊まり込みで勉強をしたときに着ていた服を持って浴室に向かった。

服を脱いで、まだシャワーの温かさが宙に漂う浴室に入る。

脳裏にさっきの三玖がフラッシュバックする。あの女性としての魅力に満ちた、ほっそりとして、でも出るところは出ている体。あの柔らかな胸に指をうずめる感触がありありと思いついて、欲望を抑えられずに屹立したものに触れる。しかしすぐに快樂が頂点に達しうになり、慌ててその手を止めた。こんなところで無駄打ちなんかしてられない。

冷たいシャワーを浴びてあれが収まるように深く息をする。収まったところで髪を洗って、念入りに体を洗う。

風呂から上がると、洗面台の前で歯を磨いている三玖と目が合った。三玖は視線を俺の頭からつま先まで二・三回往復させると、赤くなって慌てて逃げだした。

そんな様子をおかしく思いながら体を拭いて、用意してくれた服に袖を通す。途中のコンビニで買った安物の歯ブラシの封を切り、歯磨き粉を失敬して磨き始めた。機をうかがっていた三玖が入ってきてうがい始めた。

一通り終わらせた三玖は、俺に呟く。

「部屋で待ってるから」

三玖を見る。しかし三玖は顔を伏せて俺の視線から逃げて、そのまま部屋へと小走りに駆けて行った。

部屋で何をするのか。その事を思うと体中の血がかつと熱くなり、痛い程勃起して、期待に先走る汁でパンツをダメにしてしまいそうだった。

マウスウォッシュ液を少し頂戴して念入りに歯磨きを終わらせた俺は、リビングに置いた自分の鞆をあさる。常にあわよくば、と考えている男子の浅ましきなのかな、財布に忍ばせたコンドームを三個……四個持っていこう。

マンションの一室のくせにある階段を登り、三玖の部屋の前に立つ。コン、とノックすると「入っていいよ」と言う声が僅かに聞こえた。

ドアを開けて中に入ると、掛け軸に屏風といった和な調度品が目に入る。そして、ベッドが置いてあり、その上に三玖が腰かけていた。

「フータロー」

小さく囁くようなその声は、俺達の他に誰もいない部屋に良く通る。呼ばれて、俺は三玖の下に歩いて行く。眩いほどに美しい三玖に引き寄せられる俺は、さながら蝶か蛾だろうか。

「三玖」

呼びかけると、三玖はその潤んで煌めく大きな目を上目遣いがちに俺に向ける。その綺麗な目に圧倒されて、息が詰まるように感じた。ズキリと切ないように胸が跳ねて、早く三玖と触れ合いたいと思う。

隣に座り、三玖の両肩を掴む。

「愛してる」

重なりあつた声の様に、俺達は唇を重ねた。

風呂上がりの温かくて甘い女の子の香りが、鼻腔から脳を揺さぶり狂おしいほど好きの感情をかき立てる。短く、何回も触れ合うキスを繰り返す。

ちゅっ、と一際大きなリップ音が鳴ると、それが合図かのように三玖は俺の背中に手を回し、体をぴったりくっつけた。

柔らかい胸の奥から命の震えが伝わってきて、この三玖という一人の女の子に愛しい感情を改めて感じる。

「好き」

三玖は胸に秘めている思いを爆発させると、噛みつくようにキスをしてきた。唇で俺の唇を挟んできて、わずかに開いた口の隙間に舌を入れてくる。俺は口を開けて三玖の舌を迎え入れた。口に入ってきた愛しい訪問者をペろりと舐めて歓迎する。

「ん……ふっ、あん……」

鼻から甘い声が漏れて、乱れた息を整えるために唇を離す。細い透明な唾液の糸が名残惜しそうに俺と三玖の間に架かり、見つめるだけ

の余韻を残して、そして切れた。

切ない吐息が三玖から零れて、その切なさを飲み込むようにゆつくりキスをした。そっと押し付けるようにキスに力を込め、そのまま三玖をベッドに押し倒す。

キャミソールの肩紐が片方外れて、なぜだかとても色っぽい。色気の源である紐がかかっていた肩にキスを落とす。鎖骨のくぼみに舌をつたわせ、首筋にキスをしながら登っていく。

「ひゃっ……あ、んんっ」

くすぐったそうに身をよじりながら、嬉しそうに小さく笑った。顎の付け根にちゅっと口付けると目の前に耳がある。女性は耳が弱いという話を、図書館で読み漁った雑誌か本かに書いてあった事を思い出して、

「好きだ、三玖」

優しく声をかけ、耳たぶを甘噛みした。

「フータロー……」

戸惑うような声が三玖の口から零れる。まだ足りないか？

「愛してる、三玖。俺とずっと一緒にいてくれ」

耳から直接脳を揺さぶるように囁くと、三玖は震えて俺を力強く抱きしめた。三玖を押しつぶさないように突っ張っていた腕に力が入らなくなり、のしかかるように体重をかけた。

「三玖、重いだろ」

「フータローだから重くない」

顔だけ上げて、そっと口付ける。三玖は両手で俺の頭を掴むと、自分の唇に俺を押し付けた。息が出来ないほどの情熱的なキスに、粟立つほどの気持ちよさが体中を駆け巡る。

しかし息が続かなくなり、肩を叩いてギブアップの意思を示した。唇が離れると、まだ不満そうな顔をのぞかせる三玖が要求してくる。

「フータロー、もう一回言っつて」

「何をだ？」

と俺が言うのと、怒ったように膨れっ面になり、俺の耳に口を寄せた。ぞわぞわするような、甘い囁きを繰り返す。

「フータロー、大好き。愛してる。私のこと、めちやくちやにして」
なるほど……これは効く。

いたずらっぽく三玖が笑うが、その可愛らしさを裏切ってしまうような、獣のような欲が湧き上がってくる。コンドームもつけないで思い切り腰を振り、三玖の中を全て白に染めるほどの精を解き放ちたいという、男の奥に秘められた欲望だ。

俺は痛いほど膨れ上がったモノを三玖の柔らかい太ももにぐいと押し付けた。三玖は驚きに目を見開いて何かを訴えるように口をぱくぱくさせるが、赤くした顔を横に反らす。

「めちやくちやにしたい」

その言葉の持つ意味が実感を伴って蘇ったのか、大きな目に零れ落ちそうなほどの涙が溜まる。

俺は冗談だよと言うふうには笑って額にキスをした。そのキスに込められた意味を察したのか、三玖も笑って俺の頬にキスをし返した。

「学校でも言ったが」

三玖は大きな目をぱちくりと数回瞬きして、小首をかしげて話の続きを促す。

「こういう事には、三玖の意思がないと」

「でも男の人はしたいんでしょ？」

同じような話の流れ。どうやら三玖はもう一度言って欲しいらしい。ずっと一緒、という言葉は三玖の琴線に大いに触れるようだ。

「三玖の嫌な事は、俺も嫌だ」

小さな桜色の唇を舐めて、二つが一つになりそうなキスをゆっくりと落とす。

「あ……んっ……」

口の端から喘ぐような桃色の色がついた吐息が立ち昇る。なんてたまらない気持ちになるのだろう。この子の愛を独り占めになりたい、という欲望が沸々と湧いて抑えられなくなる。だから三玖はずっと一緒という言葉が好きなんだ。

「ずっと一緒にいられない事が、一番嫌だからな」

目の前の三玖の肩が震えて、俺の体に回した腕の力を強める。その

長い睫毛にダイヤモンドのような涙の雫が乗り、眩い様な美しさに拍車をかける。

「嬉しい、フータロー」

三玖は右手で俺の左手を取る。ゆっくりと、確かめるように指を絡ませて強く握ってきた。

「ずっと一緒にいて」

その言葉を言葉だけにしたくなくて、証明の判を押すように口付ける。交わした約束に重さが生まれて、捉えどころのない愛が確かなものとして二人の間に刻まれたように感じる。唇を離すと、三玖は嬉しそうに笑った。三玖も同じ気持ちだ、と感じる事は、何て幸せだろう。

「フータロー」

三玖は絡ませていた手をほどく。空いた両手で俺のシャツの裾をまくってきて、俺はその求めに応じて袖を抜き、上半身を裸にした。

体の奥から零れるような熱い吐息が、三玖の口から吐かれて俺の肌を撫ぜる。

「男の裸なんて面白いか？」

「……カッコいいよ」

おそろおそろといった様子で、三玖は俺の体に触れてくる。細い指が俺の体を這いまわるとくすぐったくなり、小さく笑い声が出てしまう。

「どうしたの？」

「くすぐりたいだけだ」

体を触っていた三玖の手がつつつと俺の胸板を滑って首筋を登り、顎に手を添えて来た。

「フータローが脱がして」

その願ってもない提案に飛びつくように、キスをして了解の意を示す。

三玖がしてくれた事をし返す。顎から首筋を下り、キャミソールのカップの間を抜けて、脇腹に手を添えると「あっ……」と色っぽい声が聞こえて、そして水色の裾をまくり上げた。

馬鹿らしいほど馬鹿馬鹿しい

息を深く吸う。さつきまで夜だった証の涼しさが宙を舞って、吸い込まれて、私の肺いっぱい溜まる。

ゆっくりと歩きながら軽く跳ねて体を揺らし、準備運動を済ませた。よいドン、と心の中でピストルを鳴らして駈け出した。

走り出してからすぐに、ふくらはぎが少しピリツとしたり、太ももがちよつと痛くなったりする。それを無視して五分十分ほど走ると、体が温まってきて走りのギアが上がる。ストライドが大きくなり、踏みしめる足に力強さが増して、スピードがぐんぐん上がって頬を撫ぜる風が強くなる。

日課になっているランニングの、この走るための動物になったような、いわゆるランナーズハイの状態は、普段にない私を感じられて好きだった。

日がどんどん高くなってきて、さつきまでであった涼しさは鳴りを潜める。汗がどんどん流れ落ちて体力を奪っていく。

三十分ほど走ると、ゆっくりとペースを落としてクールダウンする。軽く一キロほど流しながら走って、心臓が落ち着いてくると公園の芝の上に座り込んだ。体を傷めないようにゆっくりと柔軟体操をしていると、遠くから私を呼ぶ声が聞こえてくる。

「い、一花〜」

あれ、珍しい。二乃だ。

「どうしたの？ 汗みずくになるのは男子の仕事って言ってなかったっけ」

「ぜえぜえと息を切らしながら、肩で息をして呼吸を整えている。

「そ、そうなんだけど……」

限界がきたように芝生に倒れこんだ。

「はあ……私が優秀なのが災いしたんだわ」

「あはは、なにそれ？」

倒れこむ弱々しさとは裏腹に、飛び出てくる強気な言葉のギャップに思わず吹き出してしまった。

「それで？ 優秀な二乃さんはどうしてこんなに汗を流しているのでしょうか」

「楽しんでない？」

「いやいや」

「まあいいわ。私ってケーキ屋でバイトしてるじゃない？」

「そうだね。フータロー君がバイトしてるお店だね」

そう茶化すと、二乃はぐぬぬと唸って続ける言葉を失う。直球勝負をモットーとする二乃にとって、この事実は納得いくように自分の中に落とし込めないらしい。

「この泥棒猫！」

「しようがないじゃない！ あの時は三玖と付き合ってるなんて知らなかったんだから」

どうも二乃の中には、この妹の恋人にちよっかいをかけるお邪魔虫感が抜けないらしい。

「私だつてさ、春休みの旅行でフータロー君を取られたくない、なんて思ってたのに。フータロー君が三玖と付き合ったのって、旅行から帰って来てすぐくらいだったっけ？」

「そうね」

「よっしゃやるぞって試合会場に行ったら、試合は昨日終わりましたよって言われた気分になったよ。二乃暴走工業と三玖天下第一高校の戦いの間に入ることすら出来なかったのは、ちよっと後悔かな」

「高校野球じゃないんだから。ていうか名前の時点で三玖強すぎない？ なに天下第一高校って」

「いやー、もうフータロー君の中の天下は三玖が制覇したし」

「私だつて、そんな戦った気分しないわ。ていうか、気が付くべきだったのよね……どうも三玖は余裕だったって事に」

「ふーん。どんな感じだったの？」

と聞くと二乃は視線をさ迷わせ、バイトを決めた日の事を回想する。

「四葉だったかしら、フータローがバイトしてるお店の募集があるって言ったのは。それで私は飛びついたの。当然、三玖も同じ気持ちな

んだらうなっと思って思ったら、『もつと時給が良い所ない?』なんて言って求人誌をぱらぱらめくるのよ? 私は変だなって思つて『良いの?』って聞いたたら、三玖何て言つたと思う?」

「えー、何だろ」

「正解は『安心だね』でしたー」

「うっはー。それは確かに余裕だね」

そんなセリフ、フータロー君を信頼しているから言える言葉だ。

まず恋人が自分以外の女の子に手を出さないだろうという信頼。次に初めてのバイトで困るだろう二乃を、フータロー君は助けてくれるだろうという信頼。フータロー君は二つの信頼に応えてくれるだろうから、二乃のバイトに安心の二重丸を押ししたのだろう。

「そうでしょ! 二人が付き合ってるって知つた時に、さっきの会話の違和感が一本の線になつて繋がつた感分かる!?!」

「真実はいつも一つのな」

「じっちゃんの名に懸けて的なの」

私達は謎が解けた事をミステリー漫画を引き合いにだして表現した。軽く笑いあつて、話の核心に迫る事にする。

「まあそれは分かつたんだけど、結局二乃が走ろうって思つた理由つてなに?」

げつと苦虫を噛み潰したような顔をした二乃は、恥じるように顔を伏せてその長い睫毛をしばたかせる。

「だから……料理人に付き物のアレがね」

「アレって?」

二乃は人差し指を舐める仕草をする。

「ああ、味見」

「それに、たまーに売れ残りを食べて品評会みたいな事をするのよ」

「へー。フータロー君も?」

「あの万年カロリー欠乏症のあいつが脂質糖質炭水化物のゴールデントリオに飛びつかない理由なんて無いでしょ」

つまり、どういう事かな。どちらも物を口にする共通点が……あ。「分かつた、太つたんでしょ」

と言うと、ぐつと息を詰まらせて悔しそうに歯を食いしばる。

「まだ予兆の段階だから！」

「嵐の前の静けさってやつだよ」

「だからこうして走ってるんじゃない」

ほどほどに二乃と言いつ争いながら帰路につく。喉の渴きを覚えて途中の自販機に立ち寄る。

「飲み物買って良い？」

「私水ね」

「自分で買いなよ」

「お姉ちゃんお願いーい」

「しようがないなあ……」

お願いされるとつい許してしまうのは、姉心というやつだろうか。財布から小銭を出す時、カード入れの黒いカードがきらりと光った気がした。

二乃に水を渡して、どうしても気になってしまい、そのカードを取り出す。黒いカードの真ん中には五角形を意味する『PENTAGON』の文字。私達が前までいたマンションのカードキーだ。

「……意地張ってる場合じゃないのかな」

「どうしたの？」

私はカードキーをひらひらして二乃に見せた。

「二乃はどう思う？ あのマンションに帰るべきかな？」

「あのマンションの生活が恋しくなったの？」

「そうじゃないんだけど……三玖がね」

「三玖がどうかしたの？」

「うん。昨日さ、仕事から帰って来たら三玖が通帳を見ながらニコニコしてたの」

「別に普通じゃない？ フータローに何か買ってあげるんだ、とか何とか言っただけでしょ」

「ま、そうも言っただけ。もっと驚く一言が出てきてさ、だから……何て言うかな、こんなに悩んでるんだよ」

「もったいぶらずに早く教えなさいよ」

私はペットボトルのキャップを捻り、スポーツドリンク一気に飲む。分かっていたつもりとはいえ、この言葉が三玖の口から出て来た事は、やっぱり私にとって現実を突きつけられたように思って心がちくりと痛んだ。

「三玖はね、こう言ったんだよ。『いつか生まれてきてくれる私達の子供に、服とかおもちゃとか買ってあげたい』ってね」

二乃はぐつと唾を飲み込む。その子供は誰との子供かなんて、考えるまでもない。

その言葉は、三玖はフータロー君とずっと一緒にいるんだという決意表明に他ならないだろう。

「だからさ、未来の甥っ子や姪っ子のおもちや代を取り上げてまで、今のアパートに住む意味って何だろうなって」

学校の友達や役者仲間には、お兄さんやお姉さんが結婚していても子供がいるという人もいる。皆は「この歳でもう叔母さんだよ」と苦笑いするけれど、子供を抱っこする顔は優しく、嬉しそうで、ちよつと羨ましいなとすら思う。

私達が叔母さんになるとしたら、それは三玖がフータロー君との子供を産むという事が一番近くて、そして一番現実的なんだろうな。

「そう言われるとすっごく悪い事してる気分になるわね」

「このカードキーを貰って、帰ってきて良いって言われて、フータロー君は家庭教師に復帰できる。だから、分かんなくなっちゃった。あのアパートに住んでるのは、ただの意地なんじゃないかってね」

こういう事に答えなんて無いのかもしれないけど、でも無駄な事をしているんじゃないかって思うと、焦るような、急くような、そんな気分させられる。

「あ、悩みの種が走ってるわ」

二乃は不意にそんな事を言った。私は二乃の目線の先を見ると、そこには三玖がへろへろになりながら走っていた。

「おーい、三玖ー」

私は大きく手を振って三玖に呼び掛ける。あの運動音痴の体力無しな三玖がランニングなんて、どんな心境の変化だろうか。まあフー

タロー君が発端なんだろうけど。

三玖はストライドの度につくくんがつくん揺れる頭をこちらに向けてると、息を切らしながらやって来た。

「お……おはよう、はあ……はあ……一花、ふう……二乃も」
流れる汗を袖で拭いながら、絶え絶えな息で苦しそうに話かけてくる。

「おはよー」

「自主的に運動なんて、きっと今日は雪が降るわね」

「に、二乃だって、人の事言えない……」

その切り返しに思わず笑ってしまった。

「確かに」

「良いでしょ、たまには汗みずくになつたって」

「でも三玖、本当に何でいきなりランニングしようって思ったの？」

ようやく息が整った三玖に、残ったスポーツドリンクをあげて一緒に帰ることにする。

「ありがと。えっと、この前体力テストの結果が帰ってきたでしょ」

「うん」

それは4月に行われた全国体力テストの話だろう。私はまあ平均くらいだったけど、四葉は表彰されてたっけ。

「でもそれがどうしたのよ」

「総評の欄に、もっと運動しないと早く老け込んでしまいますよって書いてあって……」

「あ……」

二人して妙に納得してしまった。ずっと綺麗でいたい女の子にとって、老け込むという言葉は中々にきつい物がある。一生を添い遂げたい男の子がいる三玖にとっては、なおさら効いただろう。

「それに……」

「それに？」

三玖のポツリと言った、聞こえないほどの大きさの声を耳ざとく聞いた二乃は追及する。聞かれたとは思っていなかった三玖は、分かりやすくうろたえて誤魔化そうとしてきた。

「なんでもない。とにかく、それだけ」

そう言い切ると小走りに駆けだそうとする。

……あやしい。

私は二乃と顔を見合わせる。その顔はニヤリとして、どうやら同じ気持ちらしい。

「確保——」

「え、え？…何？…」

私は手を上げて二乃に指令を下した。

二乃は三玖の後ろに回り込み、抱えるように両脇に手を入れて拘束した。二乃も体力がある方ではないが、三玖を抑え込むくらい弱い。

「白状した方が身のためだよ」

「な、なんのことだか分からない……」

なおも抵抗の意思を示す三玖に、私は実力行使を慣行する。

ガラ空きになった脇に手を入れて、そのままくすぐりの刑だ。

「あははは、一花、やめ……ははは、もうほんとに、あはははは！」

「そらそらー、吐きたくなつたかなー？」

「は、はなす……あはは、話すから……ははは！」

被疑者が落ちた事を確信してくすぐりの手を止め、二乃に拘束を解くように言った。

「はあ……はあ……」

赤い顔をして目に涙を浮かべ、荒い息を吐く三玖はなぜか色っぽい。……同じ顔のはずなのに。

「で、三玖、それに……何かしら？」

二乃はことさら強い口調で三玖に詰め寄る。逃げられないぞと暗に言っているのだ。

三玖は辺りを見渡し、人がいない事を確認して、片手で口元を隠すようにした。内緒話をするからもっと近寄ってということだろうか。私達は三玖の囁きに耳をそばだてる。

「……の」

「え、何？…もう一回言って」

「だから……………」

「三玖、もうちよつと大きい声でお願い」

私がそう言うと、三玖は恥ずかしさの許容限界に達したかのようにぶるぶると震え出した。これで終わりという風に三玖は少し語気を強めて言葉を発した。

「だから…………えっちする体力がないの」

「は…………？」

その言葉が受け止められず、私と二乃は固まった。三玖は真っ赤になつて小さくなつていく。

「…………ぷっ」

隣から気の抜けるような笑い声。二乃は口元に手を当ててくすくす笑い出した。

「ふふふ。あーあ、馬鹿馬鹿しい。一花もこんな色ボケちゃんに悩まされてたなんて」

色ボケという言葉にショックを受けた三玖は、その場にうずくまつてしまう。地面に『の』の字を描きながらいじけていた。

「いいもんフータローはそんな私でも良いって言ってくれるもん。あっ、フータローやめて…………いじわる、やっぱやめないで」

「前までだったら可愛らしい妄想で済んでたけど、今のあんたが言うと生生しさが半端ないからやめなさい。ほら帰るわよ。一花を悩ませたあの話、皆で考えてみましょう」

二乃に引つ張られて立ち上がった三玖は、小さく首をかしげて尋ねる。

「あの話って？」

「ご飯食べてからでいいわよね？　これは皆で話さないといけない話だから」

「二乃…………？」

「二花、いつまでぼーつとしてるの？　あんたが言い出したんだからね」

「もう、分かったよ」

先を歩いて行く二乃を追いかけて私達は帰っていく。

今の私達がしている事を、未来の私達が見たら何て思うかな。子供の癩癩だったな、と恥じるのだろうか。いや、あれは大人の階段を昇るために必要だったんだよ、と懐かしむのだろうか。

過ちを認めて糧にすればいい、なんて言えるほど大人になれないけど、でも私達は時の流れがそのまま成長の軌跡を描くほどの子供でもなくて、悩んで、考えて、それでも間違える怖さを知っていくんだらう。

大人になるって事は、世界を知っていく事なんだろうか。知るって事は、賢くなるって事なんだろうと信じたい。賢くなるって事は、馬鹿な事をしなくなるって事なのかもしれない。

さつき二乃は（まあ私も少し思ったけど）、三玖の行動の切っ掛けを馬鹿馬鹿しいって言ったけど、我欲にすぎる馬鹿らしさも、時には必要なんじゃないかな。

まだ二乃がフータロー君を好きになる前に、三玖がしていたアプローチを馬鹿みたいって言う事があったけど、三玖がフータロー君と恋人同士になれたのは、結局はその馬鹿みたいな事の積み重ねをしていたからだ。

馬鹿馬鹿しい事も、馬鹿に出来ない、何て言うといひねくれたトンチみたいかな。

健気なとか、ひたむきなとか、そう言うこつ恥ずかしさすら感じるような、馬鹿みたいな真っ直ぐさ。それが三玖にあって、私達に無かった物なのかもしれない。

馬鹿になる事を恐れて、望む未来を得られないのは、果たして賢いと言えるだろうか。少なくとも、私はそう思わない。未来の私は、高校生の私にあの時もつと馬鹿みたいに仕掛けてたらな、と後悔するんだらう。

この馬鹿らしさと賢さの二律背反に苦しむことは、知ったかぶりな言い方かも知れないけど、きっと人生って事なんだ。

「あーあ、でもやっぱり馬鹿らしいな」

「いちかあ……」

今更ながら言った事の恥ずかしさがぶり返してきたのか、三玖は涙

を溜めた瞳で睨んでくる。

五月晴れの爽やかな風が私達の間を通り抜けていく。三玖のセミロングヘアーがふわりと風になびいて、きらきらと光の波がうねる。

でもね、今は素直に言えないけど、こう思ってるよ。

綺麗だよ、三玖。

おめでどう、馬鹿みたいに可愛い、私の妹。

大海原に漕ぎ出して

「武田君、さっきの問題なんだけど……」

「なあ武田、次の授業で俺当てられるんだけど……」

「武田君」

「武田」

「武田君」

休憩時間に入るとすぐに、武田祐輔の周りには人でいっぱいになる。それは彼の人当りの良さ、成績の良さ、加えて顔の良さがもたらす、彼を知っている人なら疑問の一欠片すら思いはしないいつもの光景だ。

人気者は大変だね、と風太郎は他人事に想いながら食堂に足を運ぼうとする。今日の勉強談義は諦めて、三玖と楽しい昼食を過ごすのも悪くない。

鞆から財布を取り出している三玖に一声かけようと、席から腰を浮かして立ち上がる。

「おーい三玖……」

「ごめんね、全部を見る事は出来そうにないよ。そうだ、上杉君、一緒に教えてくれないかな？」

「はあ」

自分の名前が不意に呼ばれた事に、風太郎の間抜けに開いた口から思わず間抜けな声が出て来た。間抜けな口を開けているのは呼ばれた本人だけではない。勧められたクラスメート達もぽけーつと口を開いている。

それはそうだろう。彼ら彼女らにとって上杉風太郎とはただの学級委員長でしかない。中野五姉妹の窓口になつてくれる事もあるとはいえ、基本的に風太郎という男は人と楽しく関わり合いを持つとしない人である事は皆何となく察していた。

「心配しなくても良い。上杉君の学力は僕が保証しよう。何と云っても僕のライバルだからね」

「おおく〜」

しかし武田祐輔のお墨付きともなれば話は別だ。風太郎を見つめる皆の目にどこか羨望の色が混じる。

クラスメート達の人生で出会った中で武田祐輔ほど凄い人間はいない。勉強だけを切り取っても全国模試八位という順位は、例える言葉も見つからないほどの、もはやギャグの域にすら思えるほどの凄さだ。その彼にライバルと言わしめるとは、いやはや人とは分からないものである、とクラスメートは各々勝手に思ったのだった。

「武田、お前なに勝手に……」

「まあまあ。誤解を受けやすい友の橋渡しをしてあげるのも、友人の務めではないかな」

武田は立ち上がり、何人かを指さした。

「付いてきてくれないかい？　あまり行儀がいいとは言えないが、昼食ついでに勉強会といこうじゃないか」

「えー、武田君なんで私は選んでくれないのー？」

「君達はまだ余裕があるだろう？　彼らはこの後すぐに間に合わない、補修や追試をする羽目になるだろうね。課題や予習をしなかったというのは簡単だけど、部活で上の大会をめざして頑張っている姿を知ってるから、おせっかいを焼きたくなくなってしまふのさ」

臆面もなく言い切る武田を、皆は眩しい物を見る様に目を細めて見た。

「はあくイケメンか？　お、イケメンか？　……イケメンだったわ」

「からかいながら落ち込むなら言わなきゃいいのに……」

「はっはっは、それにね」

「それに？」

「おバカな生徒ほど可愛いというだろうか？」

「おい言われてるぞ」

「お前だよ」

軽い漫才に皆の輪の中から笑い声上がる。

面倒な事になった。風太郎は小首をかしげてこちら見る三玖に癒されはしながら、気の進まない事態に重いため息を吐いた。

「何でもいい。行くならさっさと行くぞ」

財布をポケットに突っ込みながら、風太郎は不貞腐れた顔をして歩き出した。なおもこちらを見る三玖にアイコンタクトを送り、教室から出て行った。それに気が付いたのは彼女の姉妹と、彼女が『勝利の女神』と知っている武田の5人だけだ。おかしいな、という風に武田は喉の奥でくっくつと笑う。

「何あれ」

風太郎の顔が移ったかのように、ついて行くご相伴にあずかる事になった女子はむすつとした顔つきで武田に尋ねる。あまり話したことのない男子に教わる事を認めたとはいえ、それは武田祐輔という人物に対しての信頼からくるものからだ。

「ははは、彼は誤解を受けやすい人だから……ね」

彼はレフ版から光を受けているかの如くに輝く笑顔を不満たらたらない女子に向ける。その眩さを受けた彼女は明るい髪色をぱさりと振って頬を染めながら、

「まあ武田君がそう言うなら……」

五時間目の授業である英語の教科書とノート、そして電子辞書を携えて食堂に向かった。

恋の鞆当てをしている他の女子は面白くないが、武田の選択にケチをつけて嫌われたくないというある種のいじらしさを発揮して、渋々この場は譲ることにした。

談笑を交わしながら食堂へと向かう。昼休みの食堂は人がごった返しているが、この学校の食堂は広いので、四人掛けの席を見つけた事はすぐに出来た。

「あれ、上杉は？ あいつ先に来たんじゃないか」

「たぶんいつもの席で食事をとっているのかな。呼んでくるから、勉強の準備をしていてくれないかい？」

「うん、分かった」

武田に言われると二人はノートを広げた。

彼が風太郎を探しに席を外すと、女子は男子に対して、空気読みなさいと怒り心頭だ。男子は俺だってやばいんだ、と大声で反論して二人の間でしばらく口喧嘩の応酬が続く。それも昼食の喧騒に包まれ

た食堂では雑多な音の一つにまぎれ、武田はその口喧嘩に気付くことなく、いつもの席で味噌汁をすすっている風太郎を見つけた。

「やあ上杉君。面倒なのは理解するが、中野さん達にふるっている辣腕の一端を見せてはもらえないだろうか」

「よくやるよ、お前」

「お褒めに預かり光荣だね」

風太郎の嫌味をさらりと受け流して、お新香を齧りながら白米をかきこむ彼の前に座る。

「確かに勉強に対してあまり情熱を持っていないかもしれないが、友達付き合いすればいい奴だということが分かるよ」

「中野姉妹との人付き合いにかかずらう羽目になった俺を、君達が凡人にしたと怒った人のセリフとは思えないな」

「いやはや恥ずかしい。あれは僕の中でもかなりの失言だったと反省はしているんだ」

全て平らげた風太郎はカチンと箸をトレーに置く。

「で、どこだ」

「中庭に通じるガラス扉があるだろう。そこの四人掛けの席で待っているよ」

トレーを返却しに立ち上がった風太郎を見送ると、武田は自分の注文をとって席に戻った。

「あーもう役に立たないなあ。マジでこのサーティワンアイリッシュクリーム真夏の雪だるま大作戦野郎」

「意味は分からんがすごいバカにしてる事だけは伝わる。あとお前俺の英語の点数は44点だ」

「死ね」

「ストレートにひどい」

水を一口飲みながら席に戻ると、二人はケンカしているようだ。男子は女子が慌ててやっている英語が苦手で、女子は男子が追試の危機に陥っている物理を選択していないので、組み合わせとしては最悪の部類だろう。

「やあ二人とも、勉強は……どうやら難航しているようだ」

「あ、武田君。やっぱり私、君じゃないと……」

「今更可愛い子ぶるな」

女子はさつきまでの威勢は何処へやら、いからせていた肩を落として可愛らしく武田を見上げる。そんな豹変ぶりに呆れた男子は、丸めたノートで軽くぱこんとその頭をはたいた。

「ははは、仲良き事は美しきかな。けど、少し真面目にやろうか」

たしなめる言葉はひりつくように二人の肌を撫ぜた。ごめん、と二人は謝るとふざけた調子を抜いて真面目な態度を作る。武田は風太郎に手を振って席に呼ぶと、

「では始めよう」

そう言っただけで慌ただしい勉強会は始まった。

武田は料理をつつきながら、次回の物理の授業で行われるであろう小テストの対策を話し込みだした。

男子に武田を取られたことに露骨にため息を吐きながら、女子はその明るい髪色の間から訝し気な目線を覗かせつつも「お願いします」と小さく頭を下げた。

「で、何が出来てないんだ？」

「たぶん今日当てられるんだけど、翻訳が出来てない」

それは英語の勉強を何もしていないに等しいではないか、と風太郎はため息を吐きたくなるのを堪えてこう言った。

「まずはやってみろ。違ったら口を出すからな」

「そこを何とか、スツと教えて欲しいんですが……」

「じゃあな」

「すみません、嘘です。あーあ、翻訳したいなく。成績優秀者に見守られながら翻訳したいなあ」

調子の良い奴だな、と鼻で笑いながら浮かしかけた腰を下ろす。

しかし彼女は風太郎の見積もりよりは勉強できるらしい。教科書に単語の意味を小さく書き込んで、訳文をノートに書き写す。だがやはり間違える。

「おい、そのThatは『あの』という意味じゃない。関係代名詞だ」「ええ」

指摘された彼女は、信じられないという風に口をへの字に曲げる。いや英語の決まりなんだから仕方ないだろう、とモチベーションを下げるような事は言えなかった。家庭教師をしている時に身に着けたスキルの一つだ。

「上杉君、私思っただけだよ」

「なんだ」

「英語ってThatをこき使いすぎじゃない？」

「は？」

その突拍子もない言葉に、風太郎は口をあんどりと開ける。

「Thatって四つか五つくらい意味があつたよね」

「そうだが」

「はあくまじブランク単語じゃん。労組に訴えられたら負けるよ」

「もうメーデーは終わったぞ」

「Haveと徒党組まれたら英語サイドはどうするつもりなんだろ」

「単語の労働機会の不平等さを気にする前に、まず自分のまっさらなノートを気にしろ」

彼女はその後もぶつくさ文句を言いながらも、風太郎が言う単語の意味や構文を素直に聞いていた。もう考えるのも面倒くさいから手を動かしているのか、風太郎の勉強の熱意が伝わったかはこの際どうでもよかった。

なにはともあれ、予鈴の鳴るギリギリには翻訳をノート見開きいっぱい書き込み、今日の授業でどのタイミングで当てられても問題は無い程度には体裁を整えられたのだから。

「間に合ったー」

ぐつと女子は伸びをした。どこか晴れやかな彼女に対して、武田に物理を教わっていた男子は死んだように机に突っ伏している。

「よく頑張ったね。これだけすれば追試は免れるだろう」

「あ……そうか……？　ありがとな……」

感謝の言葉にも力がない。

「上杉君もありがと。頭が良いってマジなんだ。たぶん他の子と協力してたら辞書で構文を調べるのに手いっぱい終わらなかつたよ」

じゃあねーと手を振りながら彼女は教室へと戻って行った。

「彼女は友人が多い。上杉君の悪いようにはならないさ」

「それが余計面倒を起こしそうだが……」

「上杉？ そんな奴いたな、より上杉ってあいつか！ の方が楽しいと思うけどね」

「そうかよ」

ふうと気疲れを吐き出して、風太郎たちも教室に戻る事にした。

「お前ってすごかったんだな」

「はは、急にどうしたんだい？」

本日最後の授業が終わり、帰りのホームルームまでの休憩時間にトイレに行った風太郎は、いつもの如く連れションしに来た隣で用を足す武田にそんな事を言った。

「いや、お前休憩時間なんてずっと人の事見てるじゃないか。面倒だろ」

はあ、と数える事も億劫なほど吐いたため息を深くした。

「何だそんな事か。まあ、性に合ってるだけでも言うのかな」

風太郎のため息の回数が五割増しになるのは、その面倒を被ったからだ。昼休み、食堂から帰った後、駆け込み乗車のように二人の下に飛び込んできて英訳が正しいか尋ねてくる何人かのグループ。六時間目の前に、さっきの授業で分からない事があると聞いてくる女子と次の授業で分からなくなりそうな事を聞いてくる男子。クラスの人気者である武田祐輔にはその両立しえない質問が飛び込んでくるのもしばしばだ。

「今日は助かったよ。それに、皆も君の事を見直すだろう」

一気に答えられる質問とそうでない質問を分けて、そうでない方を風太郎に丸投げした彼は、しかし悪びれるでもなくどこか嬉しそうに笑う。

「はあ……、一人の方が楽だと、単独行動がもっぱらだった昔の俺を褒めてやりたいね」

「しかしお生憎様、皆は君の事を少しづつ頼りにするだろう」

「面倒を押し付けやがって。ええかつこしい」

「ははは、宇宙飛行士とは皆のヒーローだからね。ええかつこしいにもなるさ」

臆面もなくそういう武田は、嫌味なほどにサマになる。

「急ごう。ホームルームが始まってしまっ」

手を洗い、アルコールで湿った手をふらふらさせながら武田は急かしてくる。

面倒だ。全くもって面倒である。

手を洗いながら、風太郎はそんな事を考えた。

しかし、ありがとうと感謝される事は存外悪くない。そんな事を考えている自分も、また面倒なもんだ、と風太郎は自嘲した。

今日の予定を全て終了し、クラスメート達は自分の目的の為に教室を後にする。部活に行く者、学校で勉強する者、そのまま家に帰る者。部活動に所属していない風太郎と中野姉妹は学校で勉強するか、はたまた第四の道、バイトに行くかの二択だ。今日は姉妹達は家に帰り、そして風太郎はバイトの為に彼女達について行こうとする。

つまり久しく行われていなかった、正式に給料の発生する家庭教師業務が始まるのだ。

そのことを嬉しく思いながら、三玖は家庭教師であり大切な恋人である風太郎へ声をかけた。

「フータ「あ、上杉くーん」

「……」

愛しさが零れそうなほどの呼びかけは、しかし他の声に阻まれる。明るい髪色がふわりと揺れて、着崩した制服からははじけるような陽気さを感じられる。昼休みに英語をせかせかやっていた女子だ。

「今日は助かったよ。柄にもなく先生にも褒められちゃったし、今度から英語は家でやらねーわ」

「しろよ。……昼休みに見てて思ったが、お前別に出来ない訳じゃないだろ。単語だって覚えてるようだし、後はやれば慣れるもんだ」

その言葉に三玖は驚いた。自分の恋人は確かに優しいが、そんなに

さらりと褒めるような人だっただろうか。むむむと頬をむくれさせた三玖は、嫉妬の炎を可愛らしくメラメラ燃え上がらせる。

「マジ？　おいおい褒め言葉の成績も優秀かよ。そういうえば模試の順位ってどんくらいだったの？　武田君とライバルって二桁台くらい？　ま、それでもとんでもないのは変わらないけどね」

フータローは二位だよ、と三玖は言いたかったが、それは身に着けたブランド品をえばって見せつけるような浅ましきにも似た下品さを感じて、二人の会話の成り行きを見守る事にした。

「……まあそんな所だ」

「真ん中より下をうろろうろしてる私には想像できない世界だね。でも分かっちゃったな。何聞いてもポンポン答えが出てくるのってヤバイわ。天才か？　頭ジーニアスか？」

貶すような口調で、英語の辞典になぞらえて彼女は風太郎をそう評した。

「おーい」

廊下の向こう側から手を振っている女子のグループが、大きくこちらに声をかけて来た。彼女の友達だろう、手を振ってこたえると、

「あ、呼んでる。じゃあね。また教えてもらおうわ」

「人を当てにすんな」

からからと陽気に笑いながら、軽やかに彼女は駆け出して行った。

疲れたようにため息を風太郎は零すと、ほったらかしにしていた恋人の方を恐る恐る見る。つーんと唇を尖らせて、分かりやすく拗ねている三玖は可愛らしいが放置していると後が怖い。

「どうした三玖」

「茶髪が好みなの？」

「拗ねるなよ」

風太郎は三玖の小さい手を取ると、彼女はふわりと笑って嬉しそうだ。そんな三玖を見ていると、風太郎は自分も嬉しくなる。

「フータローやっぱり変わった」

「そうか？」

「そんなに褒める人だったっけ？」

「褒めてやらねば人は動かじ、という言葉があつてだな……」

「知ってる。山本五十六でしょ」

「お前達に教えて分かったが、人つてのは基本的に褒めた方がやる気になる生き物だ。そんな何回も教える相手じゃないんだ、気分良く勉強させてやった方が良いと思っただけさ」

「ふーん」

納得いかない三玖は繋いでいた手をほどいて、鞆から一枚の紙を取り出す。

「ん」

二つ折りのその紙を風太郎受け取って開く。六時間目の理科で風太郎は物理で三玖は生物を選択している。その生物の授業で小テストがあつたのだろう、これはその答案用紙だ。一つ、二つ、マルが続いて、その行進は最後まで続いている。名前の横に満点の証である花丸が大きく踊っていた。

「小テストか。満点じゃないか」

「それだけ？」

三玖は上目遣いに風太郎を見上げて、分かりやすくおねだりした。彼は小さく笑うと、三玖の頭に手を置いて髪をすくようになる。

「頑張ったな、三玖。偉いぞ」

三玖は嬉しさに頬を赤らめた。

「……もつと」

小さくそう囁くと、三玖は一步踏み込んで風太郎に抱き着いた。背中に手をまわし、ぎゅつと力を込めて体をくつつける。

「えへへ」

気の抜けるような幸せな笑いが三玖の口から漏れる。そのまま彼女は甘える猫のように風太郎の首回りに頬をすりすりする。

「キスしていい？」

「小テストで調子に乗るな」

いつになく大胆な三玖の願いを、風太郎は軽くデコピンすること
で答えた。

「うう……」

さして痛くもないはずだが、三玖は大げさにおでこをさすって恨みがましく風太郎をにらんだ。

「それに……」

まだあるの？ と三玖は身を固くしたが、予想に反して落ちて来たのは柔らかい感触だった。

「んっ……ふぁ……」

一瞬、何が起きたのか三玖は分からなかった。見開いた目から、風太郎の黒い髪と伏せられた目が見えて、鼻が一番近い所にある彼の匂いを嗅いで、不満に尖らした唇には温かくて柔らかい感触。

ああ、キスされたんだ。

三玖は嬉しくなつて、うつとりと目を閉じる。びりびりと全身を駆け巡る愛の鼓動に、今は静かに聞き入る事にした。

少ししてゆつくりと離れると、照れくさそうに頬をかきながら風太郎は言った。

「キスくらい、いつでもしてやる」

その言葉に、同じ気持ちを抱いている事に、そして行動に移してくれる事に、三玖は例えようのないほどに嬉しくなつて、もう一度を欲しがる。

「でさー」

「えーマジっ？」

しかしそれ案は、廊下の向こうからする声に立ち消えになる。「帰るぞ」

そういう風太郎の耳が赤くなつている事を目ざとく見つけると、フータローは可愛いなと胸が疼いてしまう。だからこそ、おあずけを食らうのは辛い。

「うう……辛いです。……フータローが、大好きだから」

「何言つてんだ？」

最近野球ファン役をもらった一花に教えてもらった、広島生まれのスラッガームいたいな事を言いながら、風太郎の後をついて行く。

何回も教える訳じゃないから褒めておく、か。もし私がたまにしか勉強会に参加できないなら、褒める言葉を多くかけてくれるかな。

と、三玖は考えたが、手持ち無沙汰に遊ばせている風太郎の手を掴むとそんな策は問題外だと思に至る。

「何だ？」

「なんでもないよ」

褒め言葉の一つ二つが貰えないからって、わざとフータローから離れるなんてありえないよね。

掌から彼の体温を感じながら、そんな思いを送るようにぎゅっと握る。

君と一緒にいる時間は、こんなにも特別なんだ。だから、一緒にいる未来を手に入れるために頑張るよ。

三玖は静かに秘めていた想いを改めて確認する。手から伝わる優しさに、温もりに、こんなにも頑張ろうと思えるのは、これが愛だからだ。こんな思いを抱けたことは、人生で一番誇れることに間違いはない。

歩幅を合わせてくれる風太郎に、未来もずっとこうありたいなと三玖は思いながら、並び立つ決意をもって隣を歩いて行つた。

友人は世界を広げてくれる翼だなどと言う言葉を、どこかで聞いたような聞いていないような。

風太郎はいつものように中野姉妹と登校して、まだ疎らに埋まった席の中から他力本願の光を宿した瞳で見られると、上記のセリフに疑問を抱かざるを得ない。

「おはよう上杉」

昨日少しだけ教えた男子だ。にこやかな挨拶も、その後に続く言葉を考えれば素直に受け取れないのは仕方ないだろう、と誰に言い訳するでもないが風太郎は思った。

姉妹の輪がすつと解かれて、それぞれの友人たちの下に向かっていった。

「いきなりで悪いんだけど、ちょっと教えて欲しい事があって」

「武田はどうした、あいつは」

「女子にひっ捕らえられてる」

「罪人か何か？」

「イケメンはもう生きてるだけで罪だから」

はっはっはと可笑しそうに笑いながら数学チャートを開いた。何回も解いたのだろう、その単元のページはくたびれていて直ぐに目的のページに行き当たると。

おっ、と風太郎は思った。そして適当そうとか軽そうとか勝手に思った事を反省する。まだ実っていない努力を貶すほどに、傲慢な人間ではないと自分では思いたい。

「何だ」

そう言つて、彼の頭の中で関数の神経をつなげる手伝いをする。とは言つても、赤点まみれだった中野姉妹に教えるよりはよっぽど簡単だ。意欲はあるし、知識も無いわけではない。シヨートホームルームが始まるまでに登校してきた彼の友人達も交えて、即席の勉強会を開く。

「寂しい？」

そんな風太郎をぼうつと見つめる三玖に、二乃は雑誌に落としていた目線を上げて問いかけた。

「そんな事ないよ」

「ほんとかなー？」

ニヤニヤとからかいの色が多分に含まれた笑みを浮かべながら、二乃はすまし顔な三玖の頬をつついた。

「フータローは凄い人だもん」

だから皆が彼の凄さを知って、彼が頼られている事は喜ばしい。

……はずなのに。

三玖の胸の内にもやもやと複雑な気持ち湧き上がる。

「あー、そういう事」

「最初からそう言ってるだろ」

「あっはっは、バーカ」

「うるせーバカって言う方がバカなんだよ」

「小学生かお前ら」

そんな会話がとても楽しそうに見えるのは、男子同士が持つ気安さ

からののだろうか。バカなんて罵倒が飛び出しても、それはコミュニケーションの一種だ。風太郎の顔も可笑しさに白い歯を露す。

「……やっぱ、ちよつと寂しいかも」

優れた才能の持ち主は、その才能を世界に還元すべきであるとは誰の言葉だっただろうか。

その言葉になぞらえるなら、武田祐輔と上杉風太郎は今も、そしてこれからも誰かの為にその才能を振るう運命にあるのだろうか。三玖はそんな事を考える。

「やおおはよう上杉君。なんだかんだ楽しそうで何よりだよ」

薔薇の花に溜まった朝露のように爽やかなキラキラを放つ武田は、大仰に手を広げると風太郎にそんな事を言った。教室の前には女子達がたむろしていて、こいつらにひっ捕らえられたんだなとすぐに分かった。

「楽しすぎてお前にもこの幸せをそっくりそのまま差し上げたいぜ」「そうしたいのは山々だが、僕も女神の茶会にお呼ばれしている身だね。男子の語らいは君に譲る事にしよう」

笑顔を煌めかせながらそんな事を言う武田に、他の男子からは「ズリーよ」と非難の声が上がる。しかし言うだけで武田について行くこうとする奴らが一向に出ないのは、女神の茶会なんて可愛らしい表現を用いているが、その内実は武田を狙う獣の伏魔殿である事を知っているからだ。

狩りをするのは雌ライオンだと言う事は、この歳になれば誰でも知っている。いくら色恋の血気にはやる男子高校生とはいえ、女子の恋愛狩場に首を突っ込んで大怪我したいと言う男は一人もいないのだった。

「武田だからな。しょうがない」

と言う諦めにも似た言葉を囁きながら、

「寂しい同士、仲良く勉強でもしようぜ」

馴れ馴れしく風太郎の肩を叩いた。

誰が寂しい同士だ、なあ三玖。そう一つ余裕をぶちかましても良かったが、それを言えば際限なく勉強以外の質問が飛んでくる事は明

らかだ。

面倒に面倒を重ねるほど愚かではないと思いたいし、わざわざ三玖との幸せな付き合いの一端をおすそ分けするほどのお人好しでもない。

この場は流れに逆らわず、適当に頷いて乗り切る事が賢明だろう。ノーデリカシーとも評された、言いたい事をずけずけ言っていた自分はどこに行つたのだろうか。これは進化か退化なのか、うすぼんやり考えているとこちらを見るクラスメートの顔は怪訝なものになっていて、風太郎は誤魔化すように咳払いを一つした。

人とは必要に迫られて行動を起こす生き物だ。朝早くに起きるのは、学校や職場が決めた時刻にその場にいるため。やりたくもない課題を、額に汗水たらして終わらせるのは、それによって評価を得るためだ。締め切りに追われない芸術家は、作品を完成させられないとは決して大げさな言葉ではない。

必要に迫られないなら？ それはこの弛緩した空気の教室を見れば、答えは明白だ。午前の授業を終えて、午後の授業は体育と、せまる修学旅行のためのロングホームルームという頭を使わない授業の二連投という事もあり、必死に勉強する空気はほとんどなかった。

ここ最近、クラスメート達に勉強を教えていた風太郎はその空気を感知取り、軽い気持ちで昼食をとりに行こうと席から腰を浮かす。

久しくフリーな風太郎と一緒に昼食をとろうと、三玖は声をかけようとした。

「フータロ…「飲み物買いに行かぬ？」

しかし風太郎投げかけた言葉のパスは、軽やかに飛び出してきた男子にインターセプトされる。奇しくも彼らはバスケット部だった。

「お、いいね。上杉もどうだ？」

「いや、俺は……」

「勉強の礼だ。奢ってやるよ」

「一番高いのは何だったかな」

「そういう所、俺は良いと思うぞ」

男子は少し前まで、まるで風太郎と言葉を交わさなかつたとは思えない気安さで肩を叩きながら自販機へと歩を進めた。

当然、声をかけた三玖は面白くない。女子に取られた訳ではないのでそこだけは救いだが、しかし嫉妬しないという事ではない。

「みるく」

三玖は膨らませていた頬をつつかれた。ぷしゅうと空気が漏れて、その間抜けさに顔が熱くなる。つついて来たのは誰だろうと半眼になって睨む。

「むう……一花」

つついてきた不届き者は自分の姉だった。鞆を肩にかけ、帰り支度をして友人に手を振っている。

「どうし……あ、撮影だっけ?」

「うん、これからね」

その言葉で、昨日の夜にご飯はいらないよという会話を二乃と交わしていた事を思い出した。

「修学旅行に行くためにちよつとは無理しないと。今のうちに撮りだめしておかないと、他の人のスケジュールを圧迫しちゃうし、そうになったら時間に融通利く子に変えられちゃうかもしれないからね」

難しい顔をしながら、一花はそれでもどこか楽しそうに笑う。最悪、修学旅行を欠席しても構わないという覚悟はあるが、姉妹と風太郎にとって京都という土地は特別なものなので、出来る事なら参加したかった。

「頑張つて」

「三玖もね」

「私?」

何か頑張るようなことがあつたかな、と三玖は頭をひねつた。

「フータロー君が取られて寂しいのは分かるけどさ、だったら自分から行かないと。別に隠してる訳じゃないんでしょ?」

「そうだけど……」

照れくささに頬を掻いて、一花への返事を濁す。確かに隠している訳ではない。手をつないで帰つた事だって、片手で数えるほどだがあ

る。けれど、この人が自分の恋人ですと喧伝できるほどの凶太きは三玖にはなかった。

そんな妹の様子を微笑ましく思いながら、一花はポンと三玖の肩を叩いた。

「私の分まで話し合いに参加しといてね」

じゃ、とおどけて敬礼をしながら一花は教室を後にした。

フータロー君はうまくやってるかな、とふと思った一花は真つすぐ下足場へ向かおうとしていた足を近場の自販機へ方向転換させる。

三年生の教室がある階の、外階段の踊り場から自販機を見下ろすたたむろしている男子達がいた。心配していたよりも風太郎は普通に会話に混じっている。なんでだろ、と一花ははてなを浮かべながらゆっくりと階段を下って行った。

風太郎が意外にも受け入れられているのは、三年になったからという要因が大きかった。そろそろ勉強に身を入れなければならぬ、そういう事が得意な友人が三年になったら必要だろう、という需要に風太郎はドンピシャだった。

風太郎には友人がいない。

それはかえって今から一対一の関係を築くのに都合がよかった。それに皆が接してみte感じた事だが、思っていたより上杉風太郎は普通の人間だった。少し眉を顰める所もあるが、それは天才性からくる偏屈さだと思えば、かえって『らしい』と思える範疇にとどまっている。

「でもさ、武田もそうだけど、何でそんな勉強できんの?」

「そらお前アレだよ。真面目にやってきたからよ」

某引越し会社のCMのようなことを言いながら、からからと大きな笑い声をあげる。テレビを見ない風太郎は、その冗談に首をかしげながら奢って貰った飲み物をちびりと飲む。

「まあそうだ」

「ほらやっぱり。ヒゲの配管工の元カノも歌ってただろ。毎日コツコツ生きる奴がすげえんだってさ」

「なんだそれは?」

「知らねえの？ 多分、体育祭の三年生色別対抗ダンスの選択曲になるあれだよ」

そんな普通の高校生らしい会話をしている風太郎に、おかしい気持ちになるのは失礼かな。そう一花は思いながら階段を下りる。

飲み終わった男子の一人が、缶を指先で弄んで、そして力強く握った。

「はい一発で入れまーす」

そう言っただけで立ち上がった彼は、少し先にあるゴミ箱を見据えた。

「外したら今日の片づけお前だからな」

「ひでえ」

投げかけられる軽口に答えながら、投球フォームに入った。風太郎は変な恰好と思ったが、一花はその恰好が何か思い当たった。

上体を水平に倒して右腕を軽く前に出し、投球コースを見定めるような仕草。

「お、キンブレル」

「一花さん」

男子達は声が出た方を向くと驚く。そこにはクラスの男子の憧れ、中野一花が立っていたからだ。

「よくぞ存じて」

「うん、ドラマで野球ファンの女の子を演じるんだ。だから最近スポーツニュースを見てるの」

へへつと照れくさそうに鼻を搔いて微笑む一花に、男子達は目が釘付けになる。

この男以外は。

「これから仕事なのか？」

風太郎はいつもの調子で問いかけた。いつものフータロー君だなあ、と一花は内心嬉しくなりながら答える。

「そうだよ。ほら君、早く投げて。結果が気になりすぎて遅刻しちゃう」

一花に急かされた彼はドギマギしながら、もう一度手短かにルーティンの真似事をして缶を投げた。緩やかな放物線を描いたそれは、

カコン

「じゃあー！」

見事にゴミ箱にストライク。彼は憧れの女子の前で、なんとか面目を保つことに成功した。

「おー、お見事。よし、良い物見れたしお仕事頑張つて来ますか。ばいばーい」

微笑みながら立ち去る一花は、春風のような温かな余韻を残して彼らをなおもドキドキさせる。

「この辺に残り香が……」

「それはマジでキモイからやめろ」

空気をかき集めようとしている友人を見かねた一人が、持っていたアルミ缶の腹でかつんと殴った。

「いった。金属はダメでしょ」

「うるせえ、今度は温かいココアの缶で殴るぞ」

「スチールはヤバイってスチールは」

見咎められた彼は頭をブロックしながらベンチに座った。

「やっぱ一花さん良いわー」

そして反省したそぶりもなく、一花が歩いて行った下足場への道を見ている。

あ、と思い出したように彼は風太郎の方へ身を乗り出す。

「上杉さ、中野さん達と仲良いだろ。誰かと付き合ってるのか？」

そう切り出された質問に、風太郎は喉が変に鳴った。飲んでいたジュースが気管に入りかけたが、ちびちび飲んでたケチ臭さが幸いしたのか、不法に侵入してきた液体の量は多くなく軽く咳をするだけで違和感はなくなった。

「別に、二年の時に末妹の五月と同じクラスだったからだ」

「ごじよじよちゃん」と

「ごじよじよ!? あいつそんなあだ名があったのか」

「一部界限ではそう言われているらしい。てかそれ言ったら俺だって三玖ちゃんと同じクラスだったぜ」

納得いかないように彼は肩をすくめる。二年の時は五姉妹はバラ

バラのクラスだったのだから、風太郎の言い訳を信じるなら他にも五人と仲が良い奴が出てきてもおかしくない。だがそんな奴はいない。これは何かあるのではないだろうか、と疑うのも無理からぬ事ではあった。

風太郎は何を言うか考えると同時に、三玖と同じクラスだったと言う目の前の彼にむかむかするいら立ちを抱いた。

腹立たしい。羨ましい。そして思いを端的に言うなら『 temeエなに人の彼女をちゃん付けでよんでんだコラ』であった。

「頼むー、一花さんじゃないと言ってくれー」

彼はそんな怒りに似た感情を向けられているとは露知らず、風太郎に対してお祈りをささげる。

「一花さんは競合必至だからやめとけ」

「いやだ、諦めとうないわ」

「下手くそな関西弁やめろ」

そんな風にふざけていると予鈴が鳴った。ふざけて笑っていた顔がぴきりと固まり、風太郎を残して一斉に駈け出した。

「やべえ次体育じゃん」

「飯食うの忘れた」

「どっち？」

「体育館」

「ギリギリだな」

風太郎も最近ランニングをしたりと体力作りに勤しんでいるが、放課後いっぱい部活動で鍛えている彼らにかなうべくもない。あつという間に水を開けられ、風太郎は悪態をつく。

なんで俺はあんな無駄な時間を。奢って貰った飲み物代と比して、明らかにマイナスだ。こんな風に考える俺は、きつと人付き合いに向いてない。

武田やそれに二乃は、と風太郎は身近な友好関係が広い二人を思い浮かべて、本人たちのあずかり知らぬ所で尊敬の念を深めた。

「上杉君？ どうしたんですか、早く移動しないと授業に遅れますよ？」

これからの体育が不安になる足取りで教室に着替えを取りにきた風太郎は、すでに体操服に着替えた五月と鉢合わせた。

「ごじよじよ」

「何ですか？」

「いや、お前のあだ名らしいぞ」

「初耳です」

「だろうな」

風太郎は体操服を取り、五月は取り忘れていた室内シューズを取りながらそんな会話をした。

「あ、上杉君」

すると何かを思い出したかのように五月は風太郎に詰め寄った。

「クラスメートとの交流も大いに結構ですが、三玖をないがしろにしてはいけませんよ」

「してねーよ」

「あと」

「まだあるのか」

「もう間に合わないの、言い訳を考えておいた方がいいですよ」

そう言い残すと五月は体育館に走り出した。時計を見ると授業開始一分前だ。

「勘弁してくれ」

くたびれた。

あの後分り切った遅刻に言い訳じみた走りを加えて、その上教師に怒られて肉体的にも精神的にも疲弊した所に、追い打ちの如く六時間目のロングホームルームでは学級長としての雑務と司会の仕事があった。

京都の観光地図を職員室から班の（この班は京都を歩く自由班ではなく、席順に六人区切り五人区切りの）数だけ持って行き、いわゆる鉄板コースの道順、バスの本数、それに付随する料金などを調べ、授業終わりに班ごとの発表をするのだ。

四葉はいいですね、楽しそうですねとニコニコ笑っているので、必

然的に風太郎が案に突っ込む役になる。楽しい計画に水を差すなどという顔をされたりして、ああ何て面倒なんだ、と風太郎は頭を抱えた。い内心を抑えて学級長の役目を務めた。

まとまりの無い原案を、いくつか活用できる案に落とし込んだ所で終業のチャイムが鳴った。

担任はそのまま一言二言で解散を告げると、教室中に雑談の波が押し寄せる。その波濤に押されるように風太郎は頭を振った。

「フータロー、大丈夫？」

そんな風太郎を見かねてか、とてとて三玖が歩み寄ってきて、肩にそつと手を置いた。なぜだろう、そんな気遣いが嬉しかった。心配な上目遣いに、もつと近づいてその体温を感じたかったが、ざわざわとうるさい教室ではそんな訳にもいかないだろう。

「大丈夫だ。五月が先生に話があると言っていたから、先に図書室で待っておこう。四葉も、行くぞ」

鞆を取り、あとは要領の分かっている中野姉妹の家庭教師をすれば今日は終わりだ。しかしこのくたびれる一日は最後まで、そうは問屋が卸さないとばかりに面倒を投げかけてくるらしい。

「おーい上杉くん、助けてくれー」

調子のいい茶髪が揺れて、その主はこちらに手を振っている。三玖は思わず眉根に力が入るのを感じた。

この前フータローに教わっていた女子だ。今日は友達と一緒になようだけだ。

「悪いが先約が入ってる」

「そこをなんとか。一問だけ、一問だけだから。これ出来ないと部活の時間減っちゃう」

ねえ、と彼女は三人の友人振り返って同意を求める。あのなあ、と呆れの言葉が風太郎の口から意図せず出て来たのかもしれない事かも知れない。前髪をいじりながらどうやって断ろうか考えていると、

「私はいいよ、フータロー。いじわるせずに教えてあげたら？」

三玖はそんな提案をしてきた。

「三玖？」

風太郎は呆気にとられて間の抜けた顔で三玖を見た。彼女の顔は風のない日の水のおもてのように平穏で、風太郎は久しく感じなかった『三玖は何を考えているんだ』という感覚に陥った。

「行く、四葉」

「え……三玖、いいの？」

風太郎との時間が何よりも幸せな三玖がそんな事を言ったから、四葉の姉を見つめる目が怪訝な物にもなってしまう。

先に歩き出した三玖を追いかけて、四葉は風太郎を振り返り、約束忘れちゃダメですからねと言って図書室へ向かった。

「まあ来たまえよ」

そこらの席を取って置き、そこに座るよう促された風太郎は大人しくその指示に従った。四人の目が興味深げに向けられるが、中野姉妹の大きくて吸い寄せられるような瞳に比べれば、そよ風に吹かれているくらいの圧しか感じない。

「で、どの問題なんだ」

面倒だなという内心を隠しもせずのため息を吐き、風太郎は勉強へと水を向ける。

「ねえねえ、誰なの？」

「何がだ？」

問題集に落としていた視線を上げると、女子四人がにやりと抑えきれない興味に顔を歪ませていた。

この顔は、俺と三玖の事を聞き出そうとする姉妹の顔と同じだ。

風太郎はそう結論付けて、質問の二の矢を受け止める準備をした。「だから、中野さん達の誰と付き合っているのかなって話」

やっぱりそうだ。内心悪態をつきながらその質問を受け流そうとする。

「どうでもいいだろ。要件はそれだけか？」

付き合ってられないとばかりに席から腰を浮かせると、肩に手を置かれて無理やり座らされる。

「上杉君がさあ、中野さん達の誰かと手をつないで帰ってる姿を見

たつて子もたくさんいるんだよ。いいじゃん教えてよ、減るもんじゃなし。何か教えてくれるまでゼーったい帰さないから。あと問題が出来ないとヤバイのもマジだから」

こいつらその意思の固さを勉強に向けるよ、と呆れて物が言えなくなった。しかしふと思いつき出す事がある。あれはまだ家庭教師を始めたばかりのころか、泊まり込みで勉強を教えていた時に三玖が好き女子のタイプはと聞いてきた事があった。そのときは質問の答えというご褒美をぶら下げて、ノートを埋めさせたものだが、おそらく同じ事が今回も使えるだろう。

「全員が問題を解けたら、アルファベットを一文字教えてやる」

そう言うと四人は色めき立つ。喜々としてノートを広げて快調にペンを滑らせ始めた。途中分からない所があると言う質問に答えて、彼女達が問題を解くのを待った。

十分ほど経つと先に終わった者が出てくる。その答え合わせと解説をしていると、全員を見終わるのに合わせて三十分も使っていた。

参ったなと風太郎は頭を掻いた。もう五月の用事も終わって、仕事があつて今日はいない一花以外は図書室で待っているはずだ。焦れるような気持ちで最後の一人に教えると息を吐く。

「これで分かっただろ。じゃあな」

「ちよつと待ってよ。ちよつと、ちよつとちよつと」

茶髪の彼女は双子芸人の鉄板ギャグで呼び止める。しかし風太郎はテレビを見ていないので、笑いは生まれず彼の顔を胡散臭い物を見る目にするにとどまった。

「忘れないでよ。名前を覚えてくれるんでしょ？」

「アルファベットと言ったはずだが」

「なんだ覚えてるじゃん。さあ教えてよ」

風太郎はこの期に及んでもつたいぶるほどの余裕はなかった。一緒に帰っている場面を見られたのだから、放っておいても三玖という結論にたどり着けるだろう。少し遅いか早いかの違いしか生まないなら、さっさと教えて姉妹の下に行く方が有意義だと思ったのだ。た。

「iだ」

そう短く言い切ると、風太郎は鞆を手に取り真つすぐ図書室へと向かった。

それを聞いた四人は声を上げた。こんなんもう一花ちゃんじやんと盛り上がるが、一つ引つかかる。

「ねえちよつと待つて」

四人のうち一人が、さつきまで数学の問題を解いていたノートの片隅に中野姉妹の名前をアルファベットで書いた。

一花—— I C H I K A

二乃—— N I N O

三玖—— M I K U

四葉—— Y O T U B A

五月—— I T U K I

やられた、と思った。iというアルファベット一文字では四葉しか候補から外れない。そもそも四葉は本人が付き合っているなんてありえませんかと言っていたので、最初から候補から外していたのだ。

こんな簡単な落とし穴に嵌るなんて、と四人は自分達の浅はかさを悔やんだ。と同時に、絶対に風太郎から聞き出してやると無駄に決意をたぎらせるのだった。

「あ、来た来た。おーい」

図書室に向かうと、一番最初に風太郎に気が付いた四葉が小さく手を振って呼び掛けた。

「すまん、思ったより時間を使った」

「そんなの断ればいいじゃない」

「そういう上手い人付き合いを考えて、お前や一花への尊敬を深めていた今日この頃だ」

「あら、どうしたのかしら？ 頭でも打った？ それはそれとしてもっと褒めなさい」

二乃は得意気に胸を張ってふふんと鼻を鳴らした。

「フータロー大変じゃない？」

隣に座った風太郎の手を、隠れるように机の下で握りながら三玖は尋ねた。

「三玖、心配しなくてもあと少ししたらこんな引つ張りだこじゃなくなるわよ。皆新しいおもちゃで遊びたいだけなんだから」

「おもちゃの上杉さん」

「とうとう人間ですら無くなったか」

「あんたはもう三玖の物なんだから、ぶーぶー文句たれないの」
「二乃」

三玖の声がつんと二乃の意識の腹を突く。ひやりとするような言葉とは裏腹に、三玖の顔は優しく微笑む。

「フータローは私の物じゃないよ」

「でも、付き合ってるじゃない」

「うん。フータローは私の一番だよ。でも、私の物じゃない」

ぎゅつと、三玖は風太郎の手を握る力を強くする。

「二人の人間だから、あっちに行ったりこっちに行ったりする事を止められない。でもね、最後に帰ってくるのは私の所だよって、それは絶対に譲りたくないんだ。フータローは私の物じゃないよ。でも私の所にいてくれるから、それでいいの」

それを聞いた二乃と四葉、そして五月は呆気にとられた顔をする。

「このー、良い女かよー」

二乃につつかかれて、三玖はくすぐったそうに笑う。しかし風太郎は釈然としない物を感じて三玖の真意を確かめる。

「三玖、それはお前の言葉か？」

「どうしたのフータロー？」

「いや……何というか分からんが……無理してないか？」

「私は大丈夫だよ」

きよとんした顔をする三玖に、風太郎は考えすぎかと思ひ直した。「帰って勉強しましょう。これだけ人数が揃うなんて最近では珍しいですし」

五月の言葉に皆は頷いて帰り支度を始めた。

青い空の西の端が、柔らかな朱色に染まっていく。野球部のノック

や、声を出しながら走る陸上部に、吹奏楽部の音出しの音色が青春の交響曲を奏でる。風太郎は部活動に入らなかつたことを後悔してはいないが、ここ最近ではあるが話すようになったクラスメートが努力している姿を見ると、不思議な感覚に捕らわれた。あれも努力の一つの形か。

「一花がいなのが残念だなー。上杉さん、今度のドラマは大きい仕事らしいので応援しましょうね」

ぼんやり部活動を眺めていると、話しかけてくる四葉の声で現実を引き戻される。どうやら話題は今ここにいない一花の事のようにだ。

「応援って、俺はテレビを持ってないんだぞ」

「録画して何かにコピーしてあげますから、うちか図書館のパソコンでも見ましようよ。改編期にある特番、宣伝の為に出演するバラエティー、番組前に差し込まれるCM、選り取り見取りですよー」

「今の時期に撮影してるって事は、放送するのは秋か冬くらいだろ？」

その時はもうドラマがどうこう言っていられる状況じゃないぞ」

呆れと共に吐き出された風太郎の言葉に、四葉の背筋を冷たい物が流れる。

「あはは……」

「笑ってる場合か」

修学旅行という高校生活最大といつても過言ではないイベントが控えているのだ、浮ついた気持ちになる事もしようがないのかと風太郎は思った。

だから先生は最近締め付けがきついのだろうか。まあそのあたりを俺は思いつきり受ける羽目になったのだが。

零したため息は誰に聞かれる事も無く風に紛れて行く。

「フータロー？」

と思っていたら、三玖は気が付いてくれたらしい。自分を見てくれている事に嬉しくなった風太郎は小さく言った。

「ありがとう、三玖」

「どうしたの？」

「いや、言いたかつただけだ」

「変なフータロー」

三玖はくすくす笑って彼の手をとった。

「私達の方こそ、ありがとう」

そう言つて華やぐ笑顔を向けられると、くたびれた心に活力が戻つてくるような心地になる。この子の事が好きなんだと改めて思うと、今更ながら照れる気持ちが顔を熱くさせる。

「赤くなってるよ」

「夕日のせいだ」

「そういう事にしておいてあげる……えへへ」

そう三玖自身の顔も赤くなった。繋いだ手から、交わした目線と言葉から、相手と心が繋がっていると感じれる事は幸せだな、と二人に共通の認識が芽生えた。

「なにイチャイチャしてんの？ 置いていくわよ」

先を行く二乃が大きく手を振つて呼び掛けてきている。

二人は顔を見合わせて苦笑いすると、姉の下に駄げけ出して行つた。

「おー上杉君。おいでおいで」

風太郎は教室に入った瞬間、あの茶髪の女子に声をかけられて、今日は厄日に違いないと確信した。三玖は素知らぬ顔で離れて行つたが、怒っているに違いない。後でご機嫌をとりに行こうと思ひながら、とりあえず目の前に迫る面倒事の対処をしなければ。

「おいでおいでって、上杉君の彼女かよ」

周りの席に座っている彼女の友人達が、はやし立てるよう言い放つてからから笑う。

「この結果によつては要検討もありえる」

「武田君からハードルを下げていくスタイル」

「おまえー、人を前にしてハードル下げるとか失礼だろー」

あははは、と集まった女子特有の甲高い笑い声が響く。居心地の悪さを感じながらも、茶番に付き合っていられないぞとばかりに風太郎は切り出した。

「何の用なんだ」

「そうそう。上杉くーん、昨日はやってくれましたね。あんなに喜んだのに、全然ヒントじゃなかったんだから」

「俺は嘘はついていない」

「分かってるよ」

そう言うと彼女は机の上になにやら蛍光色なプラスチックの入れ物を置いた。その蓋を捻って開けるとスツと鼻を抜けるような甘い香りが鼻に飛び込んでくる。中身は白いクリームのような物が入っており、風太郎にはそれが何だか分からなかった。

怪訝そうな顔をする学級長に、彼女はおかしくなりながら説明した。

「へアーワックスだよ。カッコよくしてあげるから、気分よくしてどんどん口を滑らしてね」

「……じゃあな」

逃げようとする風太郎の肩を、そうはさせまいと掴む人がいた。

「逃がさん、お前だけは」

昨日一緒の机に付いていた彼女の友人達だ。右肩と左肩、おまけに首元を掴まれたので、仮に風太郎が男子の平均程度の体力があっても逃げられなかっただろう。

「まあまかせなさいって。悪い様にはしないからさ」

ワックスを手になじませた彼女は、ニツと唇をゆがめると無遠慮に風太郎の髪を弄りまわした。

……………

「おおー。いいじゃん。どうですかーお客さん。ダメな韓流アイドルみたいな髪形やめて、こつちに鞍替えしませんかー」

髪を弄っていた彼女はしばらくすると、満足そうに手鏡を見せてきて仕事の成果を報告した。

まず全体の形が、風太郎の今までの髪型は跳ねた所がなく黒いヘルメットを被ったといった風だったが、ワックスによりとところどころ跳ねて鋭角な物がのぞくシルエットになっていた。重く垂れこめるような前髪が分けられ、跳ねさせられ、尖らせられ、イマドキな物に仕上がっている。目にかかるような前髪が分けられた事で、闇の底から

見据えるような黒い瞳に光が入り、普段の怖いという印象からクールな印象へと軟着陸する。

「整髪剤つて結構するんだろ。そんな無駄遣いをしている暇はない」

そういうぶっきらぼうな言い方も、髪形のせいもあって「ツンデレ」「ツンデレだわ」と言われると調子が狂う。

「おはよう。皆集まって何か楽しい事でもあったかな？」

教室のルクス値が跳ねあがったかと思えば、ダイヤモンドダストを放っているかのようにキラキラした武田祐輔が入って来ていた。

武田は風太郎を認めると、ふむと一言呟き、少し考えてから口の端を釣り上げてこう言った。

「君は新しい仲間かな？ 歓迎するよ。イケメン税高額納税者ランキングはマンネリしていたから、新顔が加わってくれと刺激があつていい」

「本気で言ってるのか？」

「まさか。君の友人は髪形を変えた程度で誰だか分からなくなるような、そんな薄情な男だったかな」

「というか自分で言つてて恥ずかしくないのか。イケメンがどうこうとか」

「もう言われすぎて麻痺してしまつたね。君も呑気している場合じゃないよ。イケメン税は累進課税だから自分磨きするたびに重くのしかかってくる仕組みさ」

「とんだクソ税だな」

「恋人がいたら控除もあるけれど」

「誰が決めたんだよ……」

くだらない雑談をしていると、次第に人が増えてくる。そこで風太郎は馬鹿みたいな名前であるイケメン税とやらの一端を垣間見た気がした。

なにせ人が来るたびにいじられる。笑われて、笑つてと言われるのはまだいい方で、「写真撮つていい？」なんて言われる事もあった。

朝休憩が終わつても受難は終わらない。

昼休みには何故か二乃も混じつてきて様々な髪形を試された。ワ

イルドな容貌が好みの彼女はオールバックがお気に召したようで、ピンの写真もツーショットも撮られた。連射で。

「なあ二乃。三玖が全然会ってくれないんだが」

風太郎は隙を見つけて、撮った写真をによよ見つめている二乃に聞いた。

「おかしいわね。興味津々であんたの事見てたのに」

「そんなそぶりは全く無かったが」

「これ見てそんな事言える？」

二乃はカメラモードからギャラリーへと切り替え、こつそり撮影したのだろう、カメラに全く気が付いていない三玖がそこには映っていた。

風太郎は息が詰まって涙が出そうになった。それは写真の中にいる三玖が、背ける様に顔を伏せ、けれども気になり上目遣い、頬に朱色が差したとて、物憂げな色は消せはせず。なんとも複雑な表情を浮かべていたからだ。

急に会いたい気持ち胸を打ち、駆け出しそうな思いが体を巡る。

「三玖がどこ行ったか知らないか」

「知ってるわ」

「どこだ？」

「それは……」

そこで二乃はもったいぶる。焦れている風太郎は、そんな駆け引きに付き合っていられないぞと問い詰めようとしたが、すぐに二乃がもったいぶったその意味が分かった。

——キーンコーンカーンコーン

「教室にいるわよ」

くすくすわらって二乃は立ち上がった。

今鳴つたのは予鈴だ。予鈴という事は、もうすぐ授業が始まるという事である。授業が始まるという事は、該当教室にて待機しておかなければならない。五時間目は現代文で、これに選択は無いのでクラス全員が受ける。つまり当然三玖は教室に戻ってきている。簡単な論理の帰結だ。

しかし求めていたのはそんな状況ではない。

二人きりで会って、そして彼女のあの物憂げな色を拭ってあげて、抱きしめて、あわよくばキスをして、そういう状況を風太郎は求めていたのだ。

教室に戻ると当たり前だが三玖がいる。一瞬目が合うと視線を反らされて、らしくもなく落ち込んだ。絶対に放課後は三玖と話そうと、決意を新たにして授業を受ける事にした。

ホームルームが終わり、風太郎はようやく解放されると伸びをした。今日の日直は真面目な奴だったので煩わされる事は無いだろう。このクラスになって二月も経っていないが、面倒事を引っ提げてくるはた迷惑な奴くらいは風太郎も覚えていた。

「あ、上杉君」

声の方を向く。その女子の茶髪を見るだけで気が滅入る思いがした。ここ最近の厄介の種である。厄介すぎて厄介筆頭伊達政宗などとくだらない冗談を思いついてしまうのは、疲れているのだろうか。

「何だ。急いでいるんだが」
「あげる」

と、彼女は言うど蛍光色が毒々しいヘアワックスの入れ物を手渡してきた。どこぞの不良ではないが、貰えるものは病氣以外貰うとばかりに、風太郎はとりあえず受け取ろうとする。しかし彼女は風太郎から伸ばしてきた手をよけた。

「何のつもりだ」

「まあ迷惑料？ そんな高い物でもないし、あげるよ」

「なら早くよこせ」

「ヒントと引き換えになります」

こいつ小賢しい策を弄しやがって、と風太郎は舌打ちしたくなる気持ちを抑えながら答えた。どのみち通路を塞がれているから、答えなければ通れないだろう。

「Kだ」

ひったくるようにヘアワックスを取り、開けられたスペースを通って教室から出た。今度こそ一花ちゃんでは、と思ったが候補に

残った四人のうちKを使わないのは二乃だけだ。あいつやりやがるぜ、とバトル漫画みたいな事を彼女達は思いながら、かいてもいない汗を拭って悔しさを誤魔化した。

教室を飛び出した風太郎は廊下を左右に見やる。当然だが三玖の姿はない。時間を取られすぎたか、と思って悔やみながら、仕方なしに近くにいたクラスメートに尋ねた。見覚えのある女子だ。読者諸兄に分かるように言う。「上杉君すごいね」「ありがとう」の二人である。

「すまない、三玖を見なかったか？」

「え、三玖ちゃん？　ねえ見た？」

「んー……、そういえば屋上階段の方に歩いて行くの見たよ。上ったのか帰ったのかは分からないけど」

「いや、充分だ」

気が逸る風太郎は礼もそこそこに駈け出した。角を曲がり、上りと下りの階段にそれぞれ目をやるとはたして三玖は上の踊り場にいた。

「三玖」

何を買うでもなくぼうつと自販機の前に立っている三玖に一声かけて、階段を一つ飛ばしで登っていく。

「ふ、フータロー……」

声をかけられた三玖は風太郎の姿を認めると、彼が一步踏み出すごとに一步後ずさる。いつもと違う様子の三玖に首をかしげながら、しかし気持ちを抑えられない。誰も来ていない事を確認してから、ゆっくりと歩み寄るが、また三玖は後ずさる。

「三玖、どうして逃げる」

一步、もう一步、また一步。風太郎は進み、三玖は下がる。とうとう逃げ場の無くなった三玖は壁を背に感じた。風太郎はそんな三玖に逃げられないよう、両手を彼女の顔の横の壁についた。

「あ……」

三玖の口から熱いため息が零れる。どうやら嫌われた訳ではないらしい。そのことには安心しながら、取り去れない疑問をぶつけた。「怒ってるのか？」

「ち……違う……」

「ならどうして」

三玖のそのミステリアスな印象をいや増す前髪が、はらはらと心を隠すように顔も隠す。彼女の奥に秘められた思いを知りたくて、そつとその前髪をはらうと真つ赤な顔が露わになって、潤んだような瞳がきらりと光った。

「フータロー、今から、面倒くさい事言う」

「何だ？ 言ってみろ」

三玖は風太郎のシャツの胸元をきゅつと握ると、ためらいがちに囁く。

「嫌だよ、フータロー。勝手な事って分かってるけど、でも、フータローが皆の物になっていくのが怖い」

「三玖……？」

「昨日、嘘ついた。フータローは私の物じゃないって、分かったような事言っただけど、本当は言いたいよ。この人は私の物だから取らないでって……」

大きな瞳が、波打つようにゆらゆらと揺れる。

「フータローが、他の誰かに取られちゃうんじゃないかって思うと苦しくて。ごめん……フータロー、弱くて。あんなに言葉をくれても、いつも行動で示してくれても、こんな所で臆病な私で」

「馬鹿な事を言うなよ、三玖。誰かに取られる？ そんなくだらない事考えるな」

「……ごめん」

「ああ違う、責めたいんじゃないよ……。だって、三玖」

風太郎は閉じ込めるように伸ばしていた腕を曲げる。ゆっくりと恋人達の顔が近づいて、そして重なった。

「んっ……」

触れた唇は灼熱のように熱く感じて、溶け合う砂糖菓子ほどに甘い。

「フータロー……」

「君が世界で一番綺麗だ」

その思いを伝えるために、風太郎は三玖を抱きしめた。

その言葉と、触れ合う体温に三玖は心臓が雷を送り出して痺れるように体中の力が抜けた。

「はっ……あ……フータロー」

三玖は壁に体重を預け、するするとへたり込んだ。

「三玖、どうした？」

「こ……」

「こ？」

「腰が抜けちゃった……」

あはは、と力なく笑う三玖に今まで悩んでいたあれこれがどうでもよくなるのを風太郎は感じた。我ながら現金な奴だ、と自嘲気味に笑うが、目の前の彼女が可愛らしく笑う顔を見る事がこんなにも幸せなのだから仕方がない。

「フータロー、大好き」

「俺もだ」

水を打ったように静まり返った踊り場に、水の一滴が落ちるような音がした。

ぴちやり、と瑞々しくも艶めかしい音を、キスを交わす物だと気が付く人はいない。一步踏み出すだけで、呆れかえる程の日常に戻るとは思えないほど、二人にはこの場が特別なものに感じられた。

唇を互いに話して、微笑みながら目線を合わせる。しかし少しすると三玖は耐えられないように息を吐いて風太郎から目線を外した。

「何だよ三玖」

そうつと彼は三玖の細い顎に指を這わせて、それに少し力を入れてこちらを向かせた。

三玖の赤い顔が、ますます赤くなって伏せられた睫毛が震える。

「いや、本当にどうしたんだよ」

「うう……フータロー、かつこいいよ。し……死んじやうからあんまり見つめないで……」

そんな言葉を怪訝に思いながら聞いていた風太郎だが、そういえば髪をいじくりまわされたままだった。

お洒落をした女の子に男がときめくように、三玖の心臓は脈打った
びに痛いほどのドキドキが体を駆け巡った。

「はっ……あ……フータロー、フータロー……私はフータローの物だ
よ。壊れるくらい抱きしめて。息が出来ないくらいキスして。……
ずっと、ずっと、そばにいさせて」

三玖の泣きそうな顔が、必死にそんなことを言うのでたまらない気
持ちになる。その細い肩を抱き寄せて、愛を確かめて送るように背中
に手を回した。

「フータロー……」

とうわ言のように自分の名前を呼ぶ恋人に、そっと口付けを落と
す。三玖の思いつめたような顔から力が抜けて、笑顔の花がふわりと
咲いた。

「フータロー、大好きな人とするキスって、どうしてこんなに気持ち
いいのかな？」

壁に背中を預けていた三玖は、風太郎の方に身を乗り出して、倒れ
こむような押し付けるキスをした。

はあ、とキスの合間に開いた口から互いに赤い舌がのぞいた。自制
心が学校というくびきから解き放たれてしまいそうで、交わる視線が
悩むように反らされたり伏せられたり、しかしとうとうその意識を飛
び越えた。

「あ……んんっ……」

互いの舌先を遠慮がちに舐めると、確認は終わったとばかりに唇を
重ねて、開けたその間で意思を持った赤い炎が絡まり合う。温かい甘
い麻薬が口の端から一筋零れて、もっともっと、際限なく二人は深い
キスをする。

「はっ……は……、私、フータローとするキスが好き」

息をする合間に、三玖はうつとりと頬を染めながら言葉を紡いだ。
彼女はそっと頬にキスをすると更に言葉を続ける。

「ねえフータロー。気持ちいい事、もっとしよ？」

そう笑う三玖は何て蠱惑的だろうか。その大きな瞳に、抗える男は
存在しないだろう。大きな蒼い宙に、きらきらと銀河の光が瞬く。彼

女は宇宙のように深い愛をもって、恋人を見つめるのだ。

「三玖が……」

風太郎は三玖の頭をなでながら、思った事を言った。

「私がなに？」

「いや、三玖が戦国時代のお姫様とかじゃなくて良かったな、と思ったんだ」

三玖はその言葉に要領を得ず、首をかしげて言葉の続きを待った。

「三玖を手に入れるために、男達は血みどろの争いだってするだろう」

「そんな……フータロー、言いすぎだよ」

風太郎の冗談に、くすぐったそうに笑う三玖はそれでも嬉しそうだ。

彼は三玖の瞼に口付けて、それだけの価値があるんだと知らせるように気持ちを送った。

「耀変天目茶碗って知ってるか？」

「知ってるけど……」

「三玖の瞳を見ると、それを思い出した。黒目の中に、きらきら光が星のように輝いて触れる事が怖いくらいに美しい。戦国時代は茶器のために戦争した武将だっているくらいだから、お前のために争ったっておかしくない」

「あはは、何それ」

ころころと鈴が転がるような、涼やかで穏やかな笑い声が踊り場に響いた。もうあの悲壮な顔色はどこにもない。

「フータローは同じ時代にいたら、私を迎えに来てくれる？」

そのからかう瞳、ほころぶ笑顔に風太郎は笑いかけて、そつと口付けた。

「もちろん。毘沙門天の信仰を曲げてでも三玖の下に行こう」

「上杉だから？」

「ダメか？」

「ううん、嬉しい。ありがとうフータロー。私の為にそんな話をしてくれて」

三玖は風太郎の首に手を回し、頭を抱きかかえて頬を触れ合わせ

る。甘えてくる猫の様に、その白い頬をすりつけてきた。

「大好き」

いたずらな猫は妖しく笑う。そのままゆつくりと近づいてきて、鼻を触れ合わせることもつたいぶるように、

「好きだよ、フータロー」

そう言っただけでなかなかキスをしてこない。その言葉自体は嬉しいのだが、目の前にぶら下がっているキスというご褒美に、どこか聞く集中力が続かない。

「むう……聞いている？」

「あ……ああ、聞いているぞ」

「本当かな？」

「本当だ。だから三玖……」

「なあに？」

三玖が話す度に、その息が顔をくすぐる。

「フータロー、言ってくれなきゃ分からないよ」

くすぐすと笑う彼女は、例えようもない程に魅力的で、風太郎はその唇に触れる榮譽を今か今かと待ちわびているが、その事を分かっているのだ。三玖は、普段どんな気持ちで言わされているのかフータローも分かればいいんだ、とやり返す機会に楽しくなった。

「だから……キスしてくれ」

そう風太郎は言う。と照れくささに目を伏せた。その瞳に、次第に懇願する色が混じって三玖を見つめ、それを彼女はお菓子を買って欲しい子供のようにだと思っておかしくなった。

「フータロー、かわいい」

文句を言いたげに歪んだ彼の眉を愛しく見つめて、ドキドキと逸る胸の内を抑えながら、三玖は一文字に結ばれた風太郎の唇を舐めてゆつくりとキスをした。

「んっ……はあ、んんっ……」

裂けた傷口が血によって塞がるような、そのまま唇がくっついてしまふのではと錯覚するほどの、舌が糸の如く絡まる深いキスだった。

大きく跳ねた心臓の鼓動が、唇の薄い肌を突き抜けて、心に直接突

き刺さる錯覚を覚えるキスが、何回も唇を重ねる中で不意に訪れた。心と体が一致した時に起きる不思議なそれは甘美な麻薬だ。

そして麻薬は、じくじくと、胸の内を苛む。

ここがどこかも忘れて、三玖は眩いた。

「したい」

それを聞いた風太郎は氷漬けにされたのかと思うほどに固まる。一瞬してその言葉の意味を早とちりした体が、燃え上がるように熱くなって、熱さはとある場所に集まった。

「そんな事を言われた俺は、どうすればいいんだ」

「フータロー？」

風太郎は三玖のあごに手を当てた。しかしそこから、三玖が描いていた行動とは違う動きをする。

首筋に指が来て、のろのろと下っていく。彼女のトレードマークでもあるヘッドホンの耳当ての隙間を抜けて、その間にあるブラウスの第一ボタンに、彼は手をかけた。

「したい、三玖。ここがどこかも忘れて」

熱い瞳に射竦められれば、嫌でもその真意が分かった。風太郎と三玖は、したい事の方向は同じだったが、その歩幅が大きく違った。三玖はキスが出来ればそれでよかったが、男の風太郎はそれだけで終わらない。

全てを露わにして、全てで繋がりたい。あの天にも昇るような快楽をもう一度味わいたいと、雄の本能が雄たけびを上げる。

しかし、それはどうしても叶わない。分かって言っているなら、こいつはとんだ悪女だな。風太郎は三玖へそんな事を思う。

「修学旅行が終わるまで」

彼は耐えるように口を一文字に結んで、どうにか思いを零した。

「したいけどしたくない。……したくなるから」

何て語彙のない文だろう。とても全国模試二位の秀才の言葉とは思えない。

しかし三玖はその込められた思いを完璧に理解した。

つまり、キスはしたいけどキスをしたくない……セックスしたくない

るから、と。

三玖の顔が燃え上がるように真っ赤になる。あの震えるほどの幸せと、気絶しそうなほどの気持ちよさが思い起こされて、体の奥から気持ちが溢れそうになる。

「や……ん」

もじもじと三玖が身をよじると、風太郎は文句の一つも言いたくない。その可愛らしい姿を見せられたら、ますますしたい気持ちが抑えられなくなりそうだ。

「三玖……」

せめてもの慰みとばかりに、三玖の体を抱きしめる。その細い肩、甘い香りが立ち昇る髪、服越しに感じる彼女の大きな胸。そのどれもが風太郎を魅了してやまない。自分の恋人がこんにも魅力的なことは、嬉しいはずなのに胸が痛くなる。

「あ……んっ、ちゅっ」

もつとしたくなるのだから止めておけばいいのに、けれども三玖の瞳が物欲しそうにきらきらと光ると、どうしても引き寄せられた。

タン、タン

自分達のすぐ下から物音がした。室内履きが階段を叩く音だ。焦りを感じて、慌てて逃げるように距離をとって、

「また明日」

風太郎は何事もなかったかのように立ち去った。

踊り場の影からいきなり出て来た風太郎に、不審な視線を向ける二人組の横を抜けて教室に戻った。

教室に戻ると残っていたのは二人の女子だけだ。それはさつき三玖の行き先を教えてくれた女子達で、風太郎を見ると朗らかに笑った。

「三玖ちゃんに会えた？」

「ああ。助かった」

「よかった」

二人は顔を見合わせると、またおかしそうに笑う。

「あ、お礼じゃないけどちよつと教えて欲しい事があるんだけど、いい

？」

最近は教わる事がブームなのか？ と教える機会が急増した事を思い出しながら、三玖がどこに行ったか教えてくれた恩もあるので前向きに答える事にした。

「何だ」

「私の友達が話してた恋バナなんだけど」

サイドの髪の一束をリボンで留めた方の女子が話し始めた。

こいつらどんだけ恋バナが好きなんだよ、と呆れながら黙って話の続きを促す。

「たぶん付き合ってる二人が、ていうか絶対付き合ってる二人がね、なんと学校でイチャイチャしてたんだよ」

「はあ」

「人気のない学校の端っこの方で……こう！」

そう言う勢いよく前髪ぱつっんの女子を壁に追い詰め、顔の横に手をついた。

「……ん？」

「それから、こうちゅーって」

「ちよつとやめてよー」

「いいじゃーん」

いやお前らがイチャイチャすんな、という言葉を飲み込んで風太郎は咳払いをする。彼女達は自分は何を見せつけているのか改めて認識して少し頬を赤らめた。

「ごほん。それで彼氏君の方が、彼女ちゃんに抱き着いて何か言ったら、彼女ちゃんは何ろへろになっちゃってさ」

鈍いだとか言われていたとしても、ここまで言われればさすがの風太郎でも分かった。

見られていたんだ、こいつらに。

「どうしたの上杉君。友達の話でそんなに真っ赤になって、うぶなんだね」

にやにや緩む頬を隠そうともしないで、なおも話を続ける。

「ねえ上杉君、彼氏君は彼女ちゃんに何て言ったのか、分かる？」

なんとという新手の拷問だろうか。好きだと言った言葉に嘘はないが、改めてその言葉を言ってみると指示されるのは辛いものがある。「帰っていいか」

そんな空しい現実逃避を試みようとしても、こと情報戦略においては彼女達の方が熟練者である。

「そっかー、上杉君でも分からないか。しょうがない、皆に聞こうかな」

「み、皆?」

「そうだなー。高校生カップルの胸キュン動画をアップして、浅ましくいいねを稼ぎつつ意見を求めようかなあー。教えてくれたら、カップルのお二人に悪いから動画消そうと思うんだけど」

サイドテール気味の髪型の彼女は意地悪く笑いながら、スマホをゆつくりと振った。世事に疎い風太郎でも、それがどれだけまずい事かはラジオのニュースを聞くだけでも十二分に理解している。

世界中に発信するという事の洒落にならなさと、彼女の友人達に伝わるのと、どちらがましだろう。

「そ、そうだな。きつと……その彼氏はこう言ったんじゃないのか」
天秤は傾いた。全世界に発信するのは重過ぎる。せいぜい身内の恋バナくらいにとどめておいた方が賢明だ。

女子二人の瞳が期待にキラキラ光る。

くそ、何でこんなことをしなければいけないんだ。

忌々しく心のなかで毒づいて、渋々口を開く。

「お前が世界で一番綺麗だ、って」

「キヤー!!」

どんな顔をしてこの場にいればいいんだ、と風太郎は熱くなった顔を反らした。彼女達はお構いなしに盛り上がっている。

「上杉君凄いいねー」

「ありがと」

興奮した赤い顔で二人はそんなことを口走った。彼女達のその無駄にややこしい褒め言葉に風太郎は頭を抱えた。素直に受け取れば分からなかった事を教えてくれてありがとうだが、もちろんそれだけ

ではない。

お前学校でそんな事を言ったのか、凄いな、と彼女は言葉の裏でザクザクと刺してくる。いつそ殺せ、と恥ずかしさに消えそうな心境になった風太郎を誰が責められようか。

「帰らせてくれ……」

「もうちよつと聞きたいことが」

「もう答えただろ」

「友達はねえ、カップルちゃん達のイチヤイチャを邪魔されないように、階段の前に立って他の人が現場に行かないように気を遣ってたんだって。その事をカップルちゃん達が知ったら、きつと恥ずかしがりながらもありがとうっておもうよね」

ああ、と風太郎の中で合点がいく。どうりで放課後とはいえあまりに人が来なさすぎた訳だ。

あれ、もしかして俺やばい？

冷静に自分の置かれた状況を考えると、どうしてもその考えに行きつき、冷や汗が額を流れる。

学校内でイチヤつくなどという咎められる行為を動画という決定的証拠に残され、しかし恋人の戯れをささやかな手法ながら守ってくれたという恩に思う気持ちが胸の内にあって強く言い返せない。

詰みでは？

風太郎はこの先の高校生活に暗雲がたちこめてくる気配をひしひしと感じた。

そんな彼を見ていた彼女達は声を上げて笑うと、スマホの画面を風太郎に見せながら操作してくる。赤い部分をタップすると『削除しますか』という文字が現れて、その質問に『はい』の方をタップした。処理作業を行っている事を知らせるサークルが数回くるくる回ると、データはこの世のどこからも消えた。

「これで安心した？」

「ああ……でも、良いのか。いい脅しの材料だったろ」

「ひどー。私だって人並みの良心はあるんだから」

「変わりに上杉君、あの動画のカップルの馴れ初めとか、どんな付き合

いをしているか、一緒に考えようよ」

「いいね、それ」

二人は顔を見合わせてにたーっと笑った。考えよう、などと言っているが、その実風太郎に全部話させるつもりだろう。

やはり厄日だ。

血縁である姉妹以外にも、こんなに丁寧に三玖とのお付き合いを話す羽目になったのだ。これが厄日でなくて何だろう。

そして翌日からしばらく、恋バナに鼻が利く奴らにあれこれ言われる日々が続くと、厄日ではない、厄年だったかと認識を改にしたのだった。

僕らを取り巻く衛星の

「三玖ちゃんお願い！ 自由班に入れて！」

私がフータローと付き合っている事が半ばクラスの公然の事実となつたところから、こんな事を言われるようになった。

理由は簡単。武田君がフータローと班を組むから、フータローの彼女である私と一緒にの班になれば、もれなく武田君が付いてくるという状況を、彼を狙う女子達が見逃すはずがない。

「でも……」

「お願い、ね、ね。だって三玖ちゃんあれでしょ、サテライト組でしょ？」

「さ……サテラ……何？」

「知らない？ 班を組んでるけど抜け出して二人きりになる人たちの総称なんだけど」

「知らなかった」

「上杉君と二人きりで京都を回るんでしょ？ 邪魔しないから班に入れてよー」

彼女はそう自分の言いたい事を言いきると手を振ってどこかへ行ってしまった。

私はため息の一つでも吐いて、ノートのとあるページを開く。そこにはさっきの彼女のような頼み事をしてきた女子の名前が書いてある。ノート半ページ分ほどにもわたる名前の羅列は、彼女達の恋心が立ち昇ってくるようで、そこから一人を選ばなければならぬ自分のおこがましさに頭が痛くなった。

「どしたの三玖？ うわ、女子の名前がいっぱい。え、何、殺すの？」「殺さないよ。発想が島津すぎる……」

ノートを見て唸っていた私を見かねてか、友達三人が声をかけてくれた。三人は回し読みし終えると、

「もしかして一緒の班に入れてくれてっかって女子の名前？ これ」

「そう。ちよつと相談にのつて欲しい」

「はあく？ 小早川秀秋に話す事なんかからなく」

「三玖さん彼氏が出来たからって頭高くのうござりませぬか？」

「どうする？ 処す？ 処す？」

ここぞとばかりに攻め立ててくる。フータローと付き合っていると知られてからちよくちよく当たりがきつい。

「お慈悲を……」

「三玖——」

お奉行に裁かれる罪人ごっこをしていたら後ろから私によく似た声を読んでいる。

「あ、すみません。お話中でしたか」

長い髪を振って、星のヘアピンがきらりと光る。

「あ、五月ちゃん。いいよ、しようもない話しかしてないから。用事があるなら言って、どうぞ」

「いえ、私もそんな大そうな用ではないのですが……」

あれ、と五月は机に置いてある女子の名前が書かれたノートに目を止めた。友達是我的許可なくそれを差し出す。

「なんででしょうか、この女子の名前の羅列……。上杉君に色目を使った女子リストですか？」

「あはは——」

皆は五月と似たり寄ったりな発想だった事がおかしくて声をあげて笑った。

「五月まで、私を何だと思ってるの」

「嫉妬深いお姉ちゃんでしょうか」

思わず怒りに頬が膨れてしまう。私ってそんなに嫉妬深いかな？

……いや嫉妬深いか。

「あはは。そりゃあ嫉妬深いお姉ちゃんが女のリスト作ってたらそういう発想になるよ」

「もういい。もう頼らないから」

「結局これは何のリストなんですか？」

「男の為にあんまり話したことの無い人にもすぎる哀れな女の名前だよ」

「言い方ア——」

「間違っていないのがなんとも」

「返して」

好き勝手言われている源であるノートを取り返して机にしまった。

「ごめんごめん。でも本当にどうするの？ 誰を選んでも角が立つ状況に追い込まれた訳だけど」

「本当にどうしよう……」

「皆さんの中から誰かが班に入ればよろしいのではないでしようか」

「嫌だよ。松風に蹴られて死にたくないからね」

「いやそつち？」

「あはは」

一人が冗談を飛ばすと、私達は笑った。

「あの……すみません三玖。どういう意味でしようか？」

しかし五月は分からなかったようだ。私の袖をひいて説明を求めてくる。

「えっと、これはね……」

「ちよつと冗談を解説しないでよ」

「でも分からないって言うし」

「解説しないでー」

「してよし」

「同じく」

冗談を解説されたくない派とさせたい派の争いは、一対二の数の有利によりさせたい派の勝利に終わった。その戦いを見届けた私は五月にさっきの冗談の解説をした。

「まず松風っていうのは馬の名前」

「馬の名前ですか」

それを聞くと五月は理解できたとばかりにぱつと顔が笑顔に変わる。

「人の恋路を邪魔する奴は馬に蹴られて死んじまえ、という言葉ですね。なるほど」

「もう少し意味が込められてる」

「松風に馬以上の意味が込められてる、という事ですか？」

「そう。松風は『花の慶次』って作品で前田慶次が乗っていた彼の愛馬の名前で、前田って言ったら？」

「そういえば上杉君は武田君と前田君と班を組むと言ってましたね。その前田君ですか」

「うん。だから松風って言うと、前田君の事だよ」

「そう……ですね。松風の主は『前田』慶次、ですから」

「で、前田君って彼女が……いるんだよね？」

「そうだよー」

「だからさっきの冗談は『いや私の方じゃなくて前田君の方の心配してるのかよ』というボケの重ね合わせ」

「ああ、なるほど。そういう事だったんですね」

解説を終えて理解した五月は、今更ながらくすくす笑った

「渾身の冗談を真面目に解説された気分はどう？」

「私は貝になりたい……」

「あーあ、ふさぎ込んだじゃった」

「す、すみません。私の理解力が足りないばかりに」

「うっ……眩しい。そんな真つすぐな目で見ないで」

「私はそういう事に頭が回らないので素直に凄いとします。えっと……三玖なんて言いましたっけ？」

「え、ボケのダブルチーズバーガーの事？」

「そんな発言じゃありませんでしたよね!? ……ダブルチーズ……」

五月はどこか遠くに目を向けると、じゅるりと唾を飲み込んだ。余計な事言っちゃったかも。

「三玖、今日ポテトLサイズが百五十円のクーポンが使える日なので行って半分こしませんか？」

「やだ」

「お金は私が出しますから」

「お金じゃなくて、五月と行くとハイカロリー過ぎてみてるだけで胸やけしそうになるから」

「君達は五つ子なのにそんなに食が違うのかな？」

疑問から口を挟んだ友達は、首をかしげながら答えを待っている。

私達は体型もほぼ同じだから、きつと同じような食生活を送っているのだろうという先入観からくるのだろうか。

「だって五月、フルーリーを頼んで『飲み物ですし白いので実質カロリーゼロ』とか言うんだもん」

「ええ……そんな好感度めっちゃ高なお笑いコンビみたいな事言ってるの？」

「言ってます！ フェイクニュース、フェイクニュースです！ 失礼ですよ、嘘つきの記者は退室してください！」

びしつと五月に指を突きつけられた私は抹茶ソーダでも買いに行こうかと席を立った。

「あー！ 嘘です、嘘ですから退室しないでください」

「五月、結局用事って何？」

「ああ、そうでした。お昼に二乃が話があると」

「二乃が？」

「はい。おそらく上杉君の事とは思いますが」

「フータローの事？」

いや、より正確にいうならフータローと班を組む武田君を狙う女子の事だろうけど。

期せずして渦中の真ん中に巻き込まれたフータローを横目に見ると、何人かで固まって勉強を教えているようだ。

「だからここの虚数*i*がな……」

「おお」

「 \sqrt{i} が……」

「はあ……」

数学をしているみたい。

解説を受けている男子はガリガリ頭を掻いていた。フータローは注意をしようと口を開くが、

「うおー！ アイアイうるせー！ 南の島のお猿さんかよコノヤロー！」

「ひどい言いがかりを見た」

……よく分からない理由でキレられていた。

「もうさ、上杉君と二人班にしたらいんじゃない？」

「そうそう。どうせ途中で抜けて二人で京都を回るんでしょーが」

「でも……せっかくフータローに男の子の友達ができたんだから、楽しんで欲しいし……」

「うわー正妻発言出たね」

「これはエモいですな」

「……私、悩んでるんだけど」

「火事は江戸の華っていうし、それはもう轟轟燃えてください」

「他人事だと思つて」

「見てる分には面白いもん」

けらけら笑う友達は、普段は良い人なんだけど、今は面白がつてそれどころじゃない。

「あの……それで二乃が」

私達が話していると、忘れられたのではないかと五月が不安そうな顔をしながら私の袖を引く。雨に濡れた子犬のような潤んだ瞳は、人に何かしなくちやと訴えかけるものがある。

「分かった」

「はいー」

光が差し込んだみたいに五月の顔がぱあつと明るくなると、ぴよんぴよん跳ねながら私の手を握つて来た。

「おーおー、可愛えーのう」

「お嬢ちゃんちよとこっちおいで」

「五月あんなほぼ犯罪者に近づいちゃダメだよ」

「友達甲斐がないなあ」

「妹に手を出そうとする人とは友達付き合いを考えないと」

「えーやだー、私達は兼続が愛の兜かぶるまで三玖にべったりするつもりだからね」

「気が早い気が早い」

「あははは」

「……あの、今のはどういう」

「あれはね……」

「だから人のネタを懇切丁寧に解説するなー！」

私達は一際大きな笑い声をあげた。そして遅れて五月の笑い声が聞こえた。ちなみに解説しておくのと花の慶次のスピノフ『義風堂々直江兼続』という作品において直江兼続は上杉謙信の嫡男という設定で、つまりフータローとの子供を見るまでくつついてやるぞという言葉である。友情に厚いのか、ただ面白がっているだけなのか。楽しい友達であることに変わりはない。

「別に解決法を考えてくれてもいいんだよ？」

「パス」

「同じく」

「陽キャこわい」

……頼りにはならないけど。

「来たわね」

昼休憩になって手短にご飯を済ませると、私は中庭に向かった。真ん中に位置する屋根付きのベンチに、残酷な天使が窓辺から飛び立ちそうなアニメに出てくる司令みたいに指を組んで肘をつけて口元を隠して二乃は神妙に言った。横に四葉が背筋を伸ばして立っているから余計にそれっぽい。

「今日はおんたも私達も悩ませるあの問題に決着をつけましょう」

「……やめていい？」

真面目に立っていた四葉はむずむずと身を震わせると、固い表情を崩したため息を吐いた。

「そういえば一花も五月も来ないの？」

「どっちも先生に話があるそうよ」

「最近多いね」

「一花は休んだ授業分の補習の話。五月は受験の話だし、大学受験を考えているなら、考えすぎ話しすぎて事は無いでしょ。東大を目指す子はそれこそ小学生のころから準備しているって一緒に見たテレビで見たじゃない」

「あはは……未知の世界だね」

「……じゃなくて！ 今はとりあえず目の前に迫る問題を解決しないと」

「武田君と班を組みたい女子多すぎ問題」

「それよ。三玖、五月から聞いたけど件のノート見せなさい」

言われた私は持つて来たノートを開いた。

「うわあ……これってクラスの女子半分くらいかしら。武田ってそんなにモテるの？」

「この前友達が話してたけど『明るい花沢類がいるみたいなもんだから、そりゃモテる』なんだって」

「誰よ花沢類」

『まぐきのっ』てやる人」

「ああ、あの芸人がやってる小栗旬の役ってそういう名前だったっけ」

「友達のお姉ちゃんがすっごいそのドラマが好きで、何回も見させられたんだって。私も歌だけだけど何回も聞いたよ」

「へえー。どんな歌なの？」

「たぶん分かるよ。有名な歌だもん」

あの、問題の方は……

私の戸惑いはお構いなしに四葉がドラマの歌の準備をする。

「確かに聞いたことあるわ」

「紅白にも出てるからね」

「……いい？」

話題がひと段落した所で口を挟んだ。二人はバツが悪そうに頬を掻いて、仕切り直しとばかりに口を開いた。

「こほん……それでこの由々しき事態に、私は一つ解決策を提案したい訳だけど」

「本当？」

悩んでいる私にとってその一言は、地獄に下りてくる一筋の蜘蛛の糸のようにキラキラ光って見えた。

二乃は自信ありげに微笑んで、そして一人の名前を指さした。

「この子を選びなさい」

そう言って指さしたのは、いわゆるスクールカースト上位な女の子

だ。可愛くて頭も良くて、部活でも結果を出して友達も多い。

「どうして?」

「そりゃあ一番角が立たないからよ。この中で一番凄い女子がこの子でしょう? 圧倒的一位を選ぶのはつまらないかも知れないけど、納得せざるを得ない力がこの子にはあるわ。例えば隣のあの子に勝てないから悔しいとは思っても、大坂なおみに勝てないから悔しいって思う人はいないでしょう?」

「確かに……」

その提案には一定の効果があるように思えた。凄い人には負けたって仕方がない、と思う心理は私にもよく覚えがある。

「私から言いたいのはとりあえずそれくらいかしら」

「……でも、それでいいのかな?」

ポツリと息を吐くように小さくそう言うと、耳ざとく聞きつけた二乃は眉を顰める。

「どういう事かしら」

「あ、ごめん。二乃の提案は確かに良いと思う。でも、どうしてかな、納得できないというか、したくないというか……」

そんな私の言葉に、理解できないように二乃は睨みつけてきた。

「二乃、三玖はそんなつもりで言ったんじゃないよ」

隣の四葉はそつと二乃の肩に手を置くと優しく語り掛ける。その四葉の体温にほどけたように笑って、四葉を撫で返した。

「分かってるわよ」

顔から険のとれた二乃は、それでも力のこもった目線を真っすぐに私に向けて言った。

「でもね三玖、あんたにどうしても味方したいとか、あの子の恋を応援したいとか、そういうのがないなら私の提案は充分に検討の価値があると思うわ。どうせ人の恋路なんだから、何がベストかなんてわかりっこないんだから」

二乃はからかうように微笑んだ。

「ごめんごめん。思ったより話が長くなっちゃった」

「どうですか? 結論はできましたか?」

しばらくすると一花と五月も合流してきた。五月はいつも通りだが、なんだか一花は疲れたように笑っている。きつと出なければならぬ補習の量だけで気疲れしてしまったのだろう。

「ダメね。クラスのマドンナでも私の班に加わるのは相応しくないんだって」

「二乃、そんな事言っていない」

「納得してないのはそうなんだけどねー」

私達五人は女子の名前リストを中心に置いて議論を戦わせた。といってもそんなのは最初だけで、次第に普通の会話になって気楽なものになっていく。

気の重たい事柄から離れた会話をしていても、その事柄の渦中の人物を見れば引き戻されてしまう。

「あ、フータロー。武田君と一緒にだ」

渦中の人物、武田君はフータローと何人かの男友達を食堂の方から引き連れて教室に帰る所だ。その中から一人が躍り出ると、くるりと回って後ろに滑るように進んでいった。

「上手ーい。無駄にムーンウォーク上手い」

一花は小さく手を叩いて気の抜けた声を出した。

その彼はフータローを引っ張りだして、俺がやった事をやれと言っているのかもしれない。フータローは足元に視線を落として、見様見真似でマイケルになりきる。ギギギ、ギギギ、と油の差していない口ポットののような動きに男子達も、そして私達からも笑い声があがった。今度は武田君の番のようだ。軽やかにステップを踏むと、帽子を押さえる仕草をしながら後ろに滑って行った。

「おー」

私達の口から関心する声が出てきた。

「ほんと武田君ってなんでもできるんだね」

ふんふんと四葉は何に納得したのか頷いている。たしかに皆、彼が出来ないと言った所を見た事がない気がする。

しかしこう彼らが楽しそうにしているのを見ると、

「面白くないわね」

二乃がそうつぶやいた。

「私達がこんなにあれこれ悩んでるのに楽しそうにしちゃって。本人が責任取りなさいよ」

確かに悩みの種がこちらの気も知らないで楽しそうだと嫌味の一つも言いたくなる気持ちは分かる。

「おーい！ ちょっと男子——！」

二乃は大きく手を振って男子の一団に声をかけた。こちらに気が付いたフータロー達は皆一様に首をかしげてこちらに向かってきた。

「そろそろ来るんじゃないわよ！ 来なさい女の敵」

そう言われると武田君は苦い表情になって周りの友達からばしばし肩を叩かれた。武田君は大げさに肩をすくめながら、ゆっくりとこちらに歩を勧める。

「こらー、一年ダツシュだよー！」

そんな武田君にしびれが切れたように、一花はふざけつつそんな事を叫んだ。

男子の一団からは大きな笑い声があがって、武田君はバツの悪そうに頭を掻いて駆け出した。

「やあ中野姉妹の皆。女の敵とは穏やかじゃないね」

「武田さん、これを見てもそんな呑気な事を言えますか」

四葉は女子の名前リストを武田君に突きつけた。

「この女性陣がどうかしたのかい？」

「あんた、薄々察してはいるんでしょ？ しらじらしい真似は止めなさい。年貢の納め時よ色男」

「これは手厳しい。でも、申し訳ないけどもう他の人を班に入れる気はないんだよ」

「はあー!? 私達が悩んだのは何だったわけ!?!」

二乃は武田君の言葉におかんむりだ。私も、悩んでいたのにその時間が無駄だったと突きつけられると、胸の内がもやもやした。

「何て言えばいいんだろ……」

それと同時に気分が重くなった。彼女達に何と言って納得してもらうのか。

「まあそれは僕が言うよ。女の子にばかり苦勞を押し付けていられないからね」

「当然よ」

二乃がふんつと口を尖らせて言った。

解決法が見つかってしまえばなんて簡単な事だったんだろう。後の事を一切合切武田君に丸投げしてしまうという、いささか無責任な方法ではあるけれど。

「終わったか？」

「あ、フータロー」

武田君が立ち去った後すぐに、フータローが話しかけて来た。

「終わったわ」

「そうか。何の話だったんだ？」

「フータロー君には関係ない話」

一花にそう言われると、フータローは口をへの字にして不満を露わにさせる。私はそんなフータローの頬を突つついた。

「妬いてる？」

「……別に」

「かわいいな」

「やめろよ、三玖」

困ったように笑う彼に、ついついちよつかいをかけてしまう。

「こほん、お二人、ここが学校だと分かっていますか」

五月が真面目な顔をしてそう言うから、浮ついた気持ちの波がさあつと風いでいった。

「ごめん」

「まあまあ、面倒な問題が無くなったんだからお固い事は言いつこ無しで。ね、五月ちゃん」

一花は怒ったような五月の肩を叩いてなだめる。

「私達は私達で初日のプランを考えましょう」

「そうだね」

四葉は懐から旅行ガイドブックを取り出すと机の上に広げた。四人の輪の中に私も加わる。

「こら、三玖は違うでしょ」

「こつちに来ちやつたらフータロー君不貞腐れちやうよ」

「俺は子供か」

「じゃあ三玖は貰っちゃって良いんですか？ 上杉さん」

「……そうは言っていない」

その照れくささを隠すようにつつけんどんな態度に、私達はくすくす小さく笑った。

「上杉さん、後悔のない修学旅行にしましょうね！」

高校生活最大のイベントは、もう目の前だ。

運命あれかし【修学旅行・前日】

夜空に三日月が笑っている。

私はそれを見て明日からの修学旅行の前途は良いものだとぼんやりと思った。

温かい初夏の風が頬を撫ぜる。そのまま風のなすがままに髪を遊ばせた。

「三玖、寝ないの？」

ベランダの窓がからりと音を立てて開かれると、そこには風呂上りのリボンをつけていない四葉が立っていた。

「うん……ちよつと寝られなくて」

「上杉さんと一緒に京都を回るんだもん。楽しみだよね」

月光に照り返された四葉の顔がぴかぴかに光って眩しい程だ。私もその笑顔に笑顔で返した。

「楽しみ」

ポケットからスマホを取り出してメモにまとめた明日の予定を確認する。あまり明るい画面を見て目が冴えてもいけないのですぐにしまったが、もう見る必要もないくらい覚えてしまうほどに何回も見ただから大丈夫なはずだ。

「フータロー」

愛しい恋人の名前を小さく呼んだ。会いたい切なさに胸がつきりと痛んだが、それすらも明日からの旅行の前には些細な事だ。

君と一緒に私の大好きな物がいっぱいある街を回れる事は、何て嬉しいんだろう。

「もう寝よ」

「うん。そうだね」

くつと伸びをして外の空気を吸い込んで部屋に戻った。

「あ、二人とも。もう一花と二乃は寝ましたよ」

そこには髪の毛の乾かしがどこか甘い五月が眠たい目を擦りながら座っていた。ちゃんと乾かさなから二乃に髪が跳ねてくすぐったいと文句を言われるのでは。そう思ったが今更な気がして言わない

でおいた。

「そう？　じゃあ私達も寝よう」

「ふわーあ。寝よ寝よ」

五月がリビングの電気を消して、私達三人は寝室へと向かった。

「おやすみ」

布団に寝転がった二人にそう言うてから横になった。

しかし、彼の顔が思い浮かんでドキドキと胸が高鳴る。顔が熱い、眠れそうにない。深呼吸を一つ二つして、逸る胸の鼓動を落ち着かせた。

フータロー。

掛布団を彼に見立ててぎゅっと抱きしめた。

明日からの修学旅行が楽しみだな。

夜空に浮かぶ三日月は、微笑む三玖の目のようだ。

もう少し時間をかければ古文の問題よろしく短歌でも詠めそうだが、明日の新幹線の時間に間に合わないなんて間抜けな事は避けたい。敷かれた布団の上で考えて、眠たくなったら躊躇なく寝るくらいで考え事をしよう。

俺はすやすやと寝息をたてるらしいはの横にそつと寝転んで目をつぶった。

京都と聞いて思い出すのは、小学校の修学旅行で出会ったあの女の子の事。今はあの写真は手元がないが、何回も見た物だから目に焼き付いている。そういえば零奈の奴は写真をちゃんと持っているだろうか。

あの子は誰なのだろう。もしあの少女が三玖なら実に運命的だが、そうでなくてもあの少女は俺が変われたきっかけだから特別な感謝の気持ちを抱いている。あの時一人だった俺が、今では友人と、そして大切な女の子と一緒にいられるのは彼女のおかげに他ならない。

……こんなに他の（と決まったわけではないが）女の子の事を考えていたら、三玖は怒るかな。むくれている三玖がありありと想像でき、隣で寝ているらしいはを起こさないように忍び笑いを漏らす。

修学旅行のしおりに書き込んだ一日目の予定表を思い出す。けっこう街中を歩く事になるが、三玖は大好きな物に溢れた街並みを、どういう顔をして歩くだろうか。

へばってその辺にあるベンチに座りこむかもな。まあその時は俺も一緒にへばってているんだろうが。そうなたら適当な店で、何か冷たい物でも買って休もうか。バスを逃して武田と前田に呆れた顔をされるかもしれない。そんなトラブルも旅の楽しみだと言い訳させてもらおう。

使い捨てカメラを手にとって眺める。俺の携帯は大したカメラが付いていないから、綺麗な写真を撮るならこういう物が必要だ。三玖はどういう顔をして映ってくれるだろう。

修学旅行というものはこれが最後だから、四葉の言葉ではないが、後悔のない物にしたい。

明日からの修学旅行が楽しみだ。

運命あれかし【修学旅行・一日目】

「皆、忘れ物はない？」

「大丈夫だよ。一花こそあの一角に持っていく物埋もれてるとかないよね？」

「何回も確かめたから大丈夫」

「じゃ、行きましようか」

「はい。では」

「ふわあ……お兄ちゃん大丈夫？ 忘れ物ない？」

「大丈夫だ。らしいは、別に寝ても良かったのに」

「修学旅行の予行演習と思っておくね」

「そうか。じゃあ」

「行つてきます」

いつものような慌ただししい朝の駅内に、いつもと違う彩が一塊あった。白い上に、黒い下。皆一様に同じ格好をした、つまり修学旅行へ向かう俺達学生の一団だ。

俺は先に来ていた班員、武田と前田と合流して出発までの時間を他愛もない話をして潰している。

「フータロー」

少しすると最後の班員も合流してきた。目の前の男どもはにんまり唇を釣り上げて振り返れと顎をしゃくる。

そのニヤケ面が気に入らないと小突いてから振り返った。

そこには五人の女子が立っていて、その中から一人が一步前に出た。

「おはよう、三玖」

右側にかかる髪をちよつといじって、俺の恋人は優しく笑う。その柔らかい髪がトレードマークでもあるヘッドホンにふわりとかかかって、特徴的なシルエットを表す。初夏の陽気に青いヘッドホンがきら

りと光って、身にまとう青いカーディガンと相まって三玖の涼やかな印象を増す。

「おはよう」

姉妹の中では小さい方な声だが、俺には良く通って聞こえた。

後ろの四人はからかうように笑って、右端にいる一花が口を開いた。

「じゃあフータロー君、三玖をよろしくね」

「分かってる」

「といっても最初の伏見稲荷は一緒に行くからね」

「そうだったな。二乃、お前は神社やお寺ってガラじゃないと思っていたが」

「上杉さん、二乃は映えが欲しいんですよ映え」

「映えねえ……」

京都への期待からあれこれ他愛もない話を交わしていると、五月が眉間に力を込めて難しい顔をしていたので声をかけた。

「どうした五月。腹でも減ったのか？」

「なっ……違います！ 私を何だと思ってるんですか!？」

「悪かった。じゃあ何だ、そんな難しい顔して」

「それは……その」

五月は口をつぐんで黙りこんでしまった。修学旅行のどこにそんな難しい顔をする必要があるのだろうか。

「もうすぐ新幹線が来るぞ。一組から移動しろ。学級長、点呼」

黙ってしまった五月からの言葉を待っていると、先生が声をあげた。

「五月、お前が何に悩んでるか知らんがせっかくの修学旅行なんだ。そう難しい顔をするな。皆心配するぞ」

「……はい」

五月は納得していないようだが、不承不承に頷いた。もう少し辛抱強く付き合っても良かったが先生直々のお達しを無視するわけにはいかない。

「おい、四葉、行くぞ」

「あ、はい上杉さん。行きましょう」

出発時間前の点呼の後、ホームに到着した新幹線に一組から乗り込んでいった。

「赤のスキップです。上杉君が赤を持っていない事は知ってるんですよ」

「くそっ。だが五月、お前、ウノって言ってないな」

「えっ？ あ！ いえいえ、言ってます。よね、一花」

「言つてませーん」

「詰めが甘いのよ」

「ははは、スキップで上杉君が出せないとなると三玖さんかな」

「最後の勝負だから、五月の納得いくようにしてあげようと思う」

「三玖〜」

「甘ちゃんね。いいわ、私が叩き潰してあげる。出しなさい五月。あんたのカードを」

「行きます。黄色の2ドロー、そしてウノ！」

「おっと、俺のワイルド4ドローだコラ。上杉、お前が赤を持ってない事は分かっているが、それじゃ面白くねえ。それ以外の三つから選ぶぜ。そうだな……青、だ」

「しやあ青の2ドロー」

「前田君、上杉君は青に愛されているのに不用意な事をするね」

「は？ ……あー、なるほど、青ね」

「青ほんと好き。マジ青サイコー」

「ふ、フータロー……」

「どうした三玖。俺はただ色の話をしているだけだぞ。そんなたまたま着てるカーデイガンが青だからって自分の事だと思うのは自意識過剰ぢゃんじゃないのか？」

「ばかっ！ もう知らない」

「おっと君も青の2ドローかい。僕も出そうかな。とっておきのワイルドカード」

「はあ!? あんたドロー持つてるの!?!」

「そうとも。さて何色にしようか……そうだね、黄色なんてのはどうかかな？」

「い……やったー！ 唯一持ってたドローの色！」

「あれ？ という事は私の番……」

「五月の2、前田君の4、上杉さんの2、三玖の2、武田君の4、そして二乃の2。えーっとつまり……え、16枚のドロー!？」

「あはは、もう笑うしかないね」

「うう……」

「五月ちゃん？」

「うわーん！ 皆がいじめます！」

「よしよし。まだあきらめちゃダメだよー」

……

「あがり」

「結局五月の負けか」

「あの後もドローの業を一身に受けてたらそりゃあね」

「もう絶対やりません。絶対っ対」

「あ、着きますよ。上杉さん、クラスの先導をしに行きましょう」

「ああ。じゃあ後で」

京都駅構内に学生がごった返すが、行きかう人々は気にした様子がない。京都へ修学旅行に来る学生など珍しくもないからだろう。

彼らにとっては見慣れた日常の一つでも、俺達にとっては非日常の始まりの一つだ。キョロキョロと落ち着かなく視線をさ迷わせる生徒に注意をして教師は主に三点を言った。

・ ホテルに戻ってくる時刻は5時。

・ しおりに載っている京都市内の範囲から外に出ない事。

・ 時間に間に合わない時にはすぐに知らせる事。

京都駅のほど近くにあるホテルに徒歩で向かい、大きな荷物を預けて、さあ自由散策の開始である。

「皆そろったね。で、どうやって行くの？」

「一花、お前話聞いてなかったな」

「あはは……ちよつと最近お疲れだったもので」

そういえばここ最近学校を早退したりしていたな。撮影場所が遠いと帰りが遅くなる日もある、と三玖の話にも出ていたが、ギリギリまで予定を詰め込んでいたのだろう。

「そうだったな。これから京都駅に戻って奈良線に乗るんだ。そして稲荷駅で下りる。下りたら目の前に鳥居が見えるそうだからまあ迷う事は無いだろう」

「うん。オツケー」

「じゃあ行こう？ フータロー」

音もなく俺の隣に来た三玖が、そつと俺の手をとった。俺はその手を握り返して先を歩く武田達について行く。

他にも京都駅から端を発する予定の班がちらほら道を歩いていた。その中でも四人班と四人班が一緒に行動する俺達はかなりの大所帯だ。

数分歩いて京都駅にまた戻って来た。その階段を見ると、小学生のころの修学旅行を思い出す。

あの時憧れていた女の子に仲の良い男の子がいて、あぶれ者だと沈んでいた俺を必要だと言ってくれたあの子。初めて会ったのはこの階段だったな。

少し物思いに耽っていると、三玖が不思議そうに手を引いてきた。

「どうしたのフータロー？」

「……いや、ちよつと思ひ出してただけだ」

「小学校か中学校の修学旅行も京都だったの？」

「まあそんなところだ」

まさか他の女の子の事を考えていたとは言えまい。その子のおかげで今の俺と三玖の関係があるとはいえ、あまり面白い話ではないだろう。俺だって三玖の口から『あの時会った男の子のおかげで、フータローと付き合う事ができたんだよ』と言われたら面白くない。

「電車が出るまで十分ほど時間があるから、今のうちに所用を済ませておいた方がいいだろうね」

武田はその良く通る声で俺達にそう言った。

「四葉、今のうちにトイレ行つときなさいよ。いつもギリギリまで我慢するんだから」

「二乃、しー！ 男子がいる前でそんな事言わないでよ」

四葉が真っ赤になって二乃に怒っていた。そういえば前に買い物に行つた時もそんな事を言っていたな。

「境内にいくつもトイレがあるとは限らないんだから今のうちに行つとけよ」

「もー上杉さんのデリカシー無し男！」

べーつと舌を出して怒り心頭な四葉は駈け出して行つた。さすがに言いすぎたか。隣の三玖が呆れた目で俺を睨みつけてくる。三玖に言つてもらえばよかつたな。

「三玖」

「なに？ デリカシー無し男くん」

「後で謝っておくから。あと俺もトイレに」

「分かつた」

繋いでいた手がほどけると、俺はトイレに小走りに向かつた。幸いな事にさほど混雑もしておらず、すぐに用を足せた。

皆の所へ戻ろうとすると、構内に黄昏ている四葉を見つけた。

「四葉、どうした。もうすぐ電車の時間だぞ」

「あ、上杉さん。いえ、皆の飲み物を買つておこうかなーと」

……さっきのは俺の考えすぎか。自販機を前に呑気に笑う四葉はいつも通りだ。俺の方が思い出の地に来たからって浮ついてるのか。

「自販機じゃ時間がかかりすぎる。売店でまとめて買えばいい。電車が来るぞ、急げ」

「待つてくださいいよ上杉さん」

四葉が後ろから慌てて追いかけてくる足音がして、そしてすぐに抜かされる。余裕綽綽といった様子で俺の方を向いて、軽やかにバックステップを踏むように走る。

「上杉さーん、い・そ・げ」

明るく笑って走る四葉に先導されてホームに駆けこんだ。たいした距離でもないがそれだけで俺の息は切れ切れだ。

「四葉、フータローは体力無いんだからあんまり引つ張りまわさないであげて」

「あはは、ごめんごめん」

「はあ……はあ……言い返せねえ」

最近の俺は少しずつではあるが体力作りに勤しんで、体力がついてきているんだ。ようやく三玖に勝てる程度だが。

「電車が来るよ」

「あの、……一花、さん。飲み物でも買ってきま、あー、こようか」

「大丈夫だよ、ありがと。でも前田君、彼女さんと一緒に回らなくて良かったの?」

「あ、はい。アイツは部活の仲間と一緒に回るって。むしろ付き合ってるから一緒に回るっていう上杉達の方が珍しいんじゃない」

「そうなのかな。そーなのかなあフータロー君」

「俺に振るな」

ホームに電車の到着音が鳴り響いた。ホームに滑り込み、キイツと耳障りなブレーキ音が耳朶を打つ。開いた扉から乗り込むと、さすが京都だ、外国人の乗客が多かった。

考えていたより近い場所らしい。話題の一つも消化しきれないほどの時間で稲荷駅に到着した。

下りて駅を出ると調べた通り目の前に大きな朱色の鳥居が鎮座していた。

「わ、本当に目の前なんですわね」

五月はその光景に目を白黒させる。鳥居と言うものは俺達の身近にもあるが、これだけの物はそうそうお目にかかれない。

「おーい君達」

鳥居の前にいた大人が何故か馴れ馴れしく声をかけて来た。よく見ると首にカメラを提げている。学校の雇ったカメラマンだろう。

「わお、大所帯だね。早速だけど一枚いいかな?」

「もちろんです。いいよね、皆」

「まあ反対する理由もないでしょ」

武田と二乃に促され、俺達は鳥居の前に立ってポーズをとる。何枚

かポーズを変えて撮って、うんうんと頷いた。

「ありがとう、良い写真が撮れたよ」

「あの、すみません」

俺はカメラマンが手を空けた所を見計らって声をかけた。

「これで撮ってくれませんか」

そう言っただけで使い捨てカメラを見せた。彼は意外だという顔をして、そして笑った。

「うわ、渋いね。いいよ、じゃあ皆もう一度……」

「そうじゃなくて……」

旅の恥はかき捨て。俺は三玖の手を握ってこう言った。

「二人で」

「ししし、そういう事なんですカメラマンさん」

呆気にとられた顔をしたカメラマンに、四葉はおかしそうに笑いながら語り掛けた。

「ああなるほどね。ははは、そりやもちろん構わないよ」

俺は持っていた使い捨てカメラを渡した。とすると、三玖は俺の袖を引っ張ってきて、赤らめた頬のまま言う。

「フータロー、何でそんなすぐに言っちゃうの？」

「せっかくだからプロに撮ってもらえばいいだろ。どうせ俺達の積み立てからあの人の給料は出てるんだし」

「フータローの貧乏性、久しぶりに見たかも」

どうやら納得してくれたようだ。観念したようにため息を吐いて鳥居の前に立つ。

「もうちよつと近づいて」

十分近づいているが、プロの言う事に従っておこう。隣の三玖にもう半歩近づいて、その肩を抱いた。いつになく大胆な事をしているように思えたが、周りの観光客を似たようなポーズをとっているのだ。木を隠すなら森の中、ということわざではないが、いまさらカップルの一組二組増えた所で気にする人はいないだろう。

「ふ、フータロー……」

「旅の恥は掻き捨て、だ」

「ばつちり記録に残るんだから捨てられないよ……」

三玖はまごまごとして俯き気味な顔は暗く見える。こうあつてはせつかくの可愛い顔も台無しだ。一つ策を弄してみよう。

「嫌か？」

これは少しいじわるだろうか。こう聞けば、

「嫌じゃない……けど」

と答えてくれる事は分かっているんだから。

「ごつち見て。背筋を伸ばして少し顎を引いて」

言われた通りに姿勢を正してシャッターが押されるのを待つ。

「はい、撮るよー。はいチーズ。……はいオッケー」

「すみません、もう一枚」

「使い捨てってスマホみたいに何枚も撮れないけどいいのかな？」

「お願いします」

「はいもう一枚いくよ」

俺は三玖の肩に置いていた手を腰に回す。

「撮るよー」

カメラマンは手をあげて撮る時を知らせてくる。シャッターを押そうとするその瞬間に、俺はそつと三玖に囁いた。

「好きだぜ」

「えっ……ええっ!?!」

驚いて、そして真っ赤に染まった顔がぽかんと大口を開けて、そこからびっくりする声があがった。

「あはは、三玖ー、良い写真じゃないの」

「もう！ フータローのばか！」

「ははは。修学旅行のベストショットが撮れてよかった」

「まだ一日目ですけれど」

「それでもだよ」

カメラマンは笑顔のまま使い捨てカメラを俺に返す。それを鞆に収めて礼を言い、俺達は境内の奥へと入って行った。

「大きいね」

朱色の鳥居をくぐり少し歩くと、これまた朱色の門が目の前にあ

る。

「この楼門はね、豊臣秀吉が造営したんだよ」

三玖の目がキラキラしてそんな事を話し出す。最近は鳴りを潜めていた三玖の歴女な所が顔を覗かせて、俺はその話に聞き入る事にした。

「秀吉はお母さんの祈願が成就したら一万石寄付するっていう『命乞いの願文』があつてね。昭和48年に楼門の解体修理をした時にその願文の年次と同じ秀吉の墨書が見つかって天正17年に建てられた事が分かつたんだって」

三玖史上一番の長文に並ぶほどの長文を一息に言っていると、満足したように息を漏らす。

「三玖ー、フータローくーん、早く千本鳥居に行こうよー！」

話に夢中になって気が付かなかったが皆は本殿の横まで行っていて、一花が大きく手を振って呼んでいる。少し罰当たりかもしれないが手短かに参拝を済ませて皆の下へ合流する。

「これがそうなんですか？」

「いや、五月さん。僕たちが想像している千本鳥居はもう少し先だよ」
本殿の横を抜けて少し階段を登ると、大鳥居の立ち並ぶ場所へ出た。早とちりした五月がぱつと顔をほころばせてスマホ撮りだったが、武田の指摘に赤くなつてポケットに収めた。

「別にいいじゃねえか」

「もちろんこの鳥居だってここでしか見られない物だよ。ごめんね五月さん、そんなつもりで言つたんじゃないんだ」

「いえ、私の方こそ……」

「お詫びじゃないけど写真を撮ろうか。ほら、中野姉妹は集まつて」

武田の声に俺の持っているパンフレットをのぞき込んでいた四人は顔を上げる。

「強引ね」

「いいじゃん。二乃、あんな嬉しそうな五月ちゃんを裏切るつもり？」

「うっ……そんな事言つてないでしょ！　いくわよ四葉」

「わわっ、引つ張らないでよー」

先に行く三人に、三玖は俺を一瞬ちらりと見上げてからついて行った。

五人が鳥居の前に並ぶと周りにいた男どもの視線が突き刺さる。やっぱりあいつら顔がいいよな。普段はそんな事特に考えないが、今ばかりはそう思った。

「いくよー。1+1は？」

「「「にー」」」」

にこやかに、華やかに、密やかに、元気いっぱい、生真面目に、五者五葉の笑顔を写真の一枚に収めた。周りの視線がチクチク刺さる事に気が付いた五人はさつと忍者のように散り散りになった。

「ただいま」

それこそ忍者かと疑うほどに静かな足音の三玖が、いつの間にか隣に来ていて俺の手を握った。

「うお、びっくりした」

「失礼な」

むつと頬を膨らませた三玖は握っている手の力を込めて抗議の意を表する。

「悪かった。行くぞ」

そそくさと大鳥居の先に行っていた皆を見つけたので慌てて追いかけた。朱色の太い柱が、間から見える苔むした緑と不思議なコントラストを生み出し、異世界のように感じられる。人が来たがる訳だ。一人納得しながら千本鳥居の前に到着した。

「うわーこれが有名な千本鳥居かあ……」

四葉が開いた口から驚きと、そして圧倒される声が零れ落ちてくる。口には出さないが皆同じような事を思っているだろう。

朱色の鳥居が幾重にも重なるように並んで、赤の幻想的なトンネルをつくる。鳥居と鳥居の僅かな隙間から光が木漏れ日のように漏れて、行き交う人々の髪をキラキラと煌めかせる。

「ねえ二手に分かれてるけど、どっちがどっちとかあるの？」

スマホを片手に写真を撮りだした二乃が三玖に聞いた。

「どっちでもいいらしいけど、でも巡礼の基本は時計回りって何かで

見たから、向かって左側から行く方が正しい……と思う。四国のお遍路巡りも徳島高知愛媛香川の順で時計回りでしょ？」

「当たり前のようにお遍路を引き合いに出さないですよ」

「あれ、どこがどうだっけ？」

「もうしつかりしてください四葉。四国の右上が香川県でその下が徳島、その左が高知県で上に愛媛ですよ」

「地理の問題だと0点の説明だぞ。なんだ上とか下とか言いやがって。北とか南とか言え」

「あ？ 何か変だったか？」

「喜べ四葉。同レベルがここにいたぞ」

「ヨツバ、マエダ、トモダチ」

「なぜカタコト」

「写真撮っておこうよ皆」

くだらない話に終始しそうだったところに一花の救いの手が差し伸べられた。人がごった返す合間を縫って、千本鳥居の前に立つ。

俺達の班、姉妹、そして俺と三玖のツーショットの順で撮り、俺のカメラでも一枚撮っておく。

「さあ行こーう」

四葉が切込み隊長となつて先頭を進んでいく。

しかし、人が多いとは言えここの不思議な魅力はいささかも薄らぐことがないようだ。

鳥居の足元が黒だから、下の方がこころもち薄暗くて気味が悪いような気がするのに、朱色に光が当たって起こる明るさとの対比は、そこに人ならざる何かでもひよっこり顔を出してきそうだ。連なる赤が緩やかに湾曲していつて、視界に映るのは赤赤赤。先の見えない道は、永遠にこのままではないだろうかと楽しくもあり、ぞわりと心をかき立てる。霊なんてものは信じていないが、ここにいとそんな心情も奉納したくなる。

「凄いですね。世界がここだけになったみたいな、そんな錯覚を覚えます」

五月がそう言うのと他の姉妹も、武田や前田すらもうんうんと頷く。

目もくらむほどの朱色の世界に終わりの兆しが見え始めた。ずっと続いていた鳥居が途切れてお社が見える。

先頭の四葉が飛び出すと狭い箱から解き放たれたように大きく伸びをした。

「うくん、圧倒されすぎて気疲れしちゃいました」

「私もだわ。凄いわ、さすがパワースポット」

先を行く二人に追いついて参拝所に手を合わせる。こっちこっちと三玖に手を引かれ建物の横を抜けると上に石が乗った灯籠が二つあった。

「おもかる石。フータロー、一緒にしよ」

願いを込めながら石を持ち上げて、それが軽かったら叶いやすく、重かったら叶いにくいという伝説をもつ石だ。

にこりと笑う三玖に水を差すわけにもいかないので一緒に持ち上げている人達の列に加わる。

「あ、三玖抜け駆け。私達もやろう」

そんな俺達を見つけた一花が皆を引き連れて来た。

「明日あいつと地主神社ってところでなんとか石の試しをするとか言われてんだよ。京都って石ばかりじゃねえか？」

「えー前田君恋占いの石やるの？ いがーい」

「言われてだよ、言われて」

「もつと乗っかってあげないと。そんなんだと彼女さん傷つけちゃうよ。結構気にしてたりするんだからね」

「そ、そういうもんスか」

「そうツスそうツス」

苦い顔をした前田の肩を一花はバシバシ叩いて笑った。

「こういう物に女性は恋愛の願いを込めるのかな。くくく、上杉君と三玖さんがしたら紙屑のように軽いんだろうね」

「女性は恋愛ばかりっていう偏見だわ偏見」

「おや、それは申し訳ない。では二乃さんは何を願うのかな？」

「人に聞くなら自分から先に言いなさいよ」

「僕かい？ 僕の願いは宇宙飛行士になる事さ」

「えー！ 武田さん宇宙に行くんですか!？」

「四葉、声が大きいですよ」

「あ……す、すみません、えへへ」

いつものような声を出してしまった事を恥じ入りながら、四葉は誤魔化すように小さく笑った。

「私達の番だよ」

ぼけつと後ろの会話を聞いていると、三玖がくいつと袖を引いてきた。ちよこんと小首をかしげて上目遣いな彼女は相も変わらず可愛らしい。

そんな三玖の頭を一撫でしておもかる石の前に立った。

何を願うか、なんて……

「？」

隣にいる三玖の大きな蒼い瞳が瞬いて、俺が映っている。

俺の願いは、もちろん。

石を握る。指の腹にぎりぎりとその感触を感じながら持ち上げると、あつけない程に軽く感じた。リレーで持たされるバトンのように、これを持ったまま走りだせそうにすら思えてくる。

石を戻して後ろの人のために横にどいた。

三玖はにこにここと微笑みながら尋ねて来る。

「フータローどうだった？」

「紙みたいに軽かったぞ」

「えへへ、私も」

「何を願ったんだ？」

「んー？ えつとね……」

そのまま踊りだしそうなほどに上機嫌に体を揺らしながら、三玖は俺の手を握って来た。

「こういう事、だよ」

今日の京都の陽気のように、爽やかに笑いながら、首元の青色が光る。

「フータローは？」

「分かってるだろ」

「聞きたい」

三玖は手を離すと、俺の真正面に向き直る。その期待に光る顔をちよつと驚かせたい。

俺は一步踏み込んで、そつと三玖の背中に手を回した。

「こういう事、だ」

「……うん」

小さく声を漏らした三玖が背中に手を回し返す。

「そ・こ・ま・で！」

華奢な体から伝わってくる温かさを感じていると、頭を思いつきり叩かれた。

「いてえ。何すんだ二乃」

「何すんだはこつちのセリフよ！ あんたこんな京都くんだりまできていい加減にしなさい」

「旅の恥は……」

「うるさい。それは普段秘めやかに過ごしている人間だけが言つて良いセリフだわ。ただでさえ恥ずかしい事を平気で普段からしているくせにまだしたりないの？」

「人生という旅を生きているから、普段から恥はかき捨てても良しという結論を俺は最近考えたんだが」

「いちびつてんと!?!」

「え、何？」

「お、使うか分からなかったけど、調べた京都弁出たね」

「ふざけてるの、つて言つたんですよ」

「ああ、なるほど」

「お喋りはそのへんにしておこう。早く行かないとお昼の時間が遅くなるよ」

「下で稲荷寿司食うんだろ」

男二人は呆れ顔で俺の背中を叩いて先を進んで行つた。そうだ稲荷山の上まで行って帰ろうとすると二時間近くかかると事前に調べたじゃないか。今の時間から言えば、参道を巡って下れば昼食の時間に丁度よくなるが、こう話し込んでいては予定が狂ってしまう。

「行くう」

俺は三玖の手を引いて歩き出した。

「そうそう。こっちはお荷物二つも抱えてるんだから、早め早めに行動しないよ」と

「誰の事」

「あら三玖、心当たりが御有りのようで」

「大丈夫だよ。いざとなったら私がおんぶしてあげるから」

「ははは、じゃあ上杉君は僕がおんぶしてあげようかな」

「俺史上一番運動に対してやる気が出たぞ」

そこからは足を止めずに、回る口も止めずに歩き出した。額から軽く汗が流れるほどに歩くと、ある階段を登ったところで五月の目が輝きだした。

「甘味処ですよ。ちよつとお団子でも食べて休憩しましょう」

反対されるとは全く思っていない五月が一花と店に入っていった。やれやれと肩をすくめながら他の皆も入って行く。

「俺、小学生の時にもここに来たんだけど、そのときはここまで登ってこなかったな。班の女子が『高いの清水寺で十分じゃん』とか言つてよ」

甘い物が出てくるまでの会話で前田がそんな事を言い出した。途中の女子のセリフを甲高い調子で言う物だから、その顔面のおっかなさとのギャップに皆吹き出した。

「あはは、確かに小学生の足だと厳しいかもね。ここだけ見るならいいけど、他に行きたい所があるならちよつとここは時間がかかるから一部諦めるのも手かな」

一花がそう話を区切ると、図ったかのように団子とお茶が出て来た。

「そういうえば、皆は過去に京都に来たことがあるのかい？」

武田は団子を食べながら皆に聞いた。五姉妹は顔を見合わせて、二乃が答える。

「私達はそうね。前田と同じで小学生のころに来たわ」

「フータローもなんだよね？」

「ああ」

「そうか。じゃあ修学旅行で京都に来てないのは僕だけかな」

「どこだったんですか？」

「小学校の時は北海道だったよ。行ったのが秋でね、本州は熱いのに北海道は涼しかったな。冬でも半袖短パン君は震えていたね」

昔を思い出しながら、武田がくつくと小さく笑っていた。二乃は四葉を見て思い出し笑いをする。

「そういうやらかす人ってどこでもいるのね」

その視線に呼応するように、三玖も思い出したように笑い出した。

「そういえば私達にもあったね。あの時は四葉が……」

「やめて」

四葉の口からピシヤリと会話を遮る、さほど大きくはないのだが良く通る声が飛び出す。俺のみならず、姉妹も驚きを隠しきれない顔で四葉を見つめていた。

「いや、その……あはは、小学生のころの黒歴史を掘り返して欲しくないかなーって」

「あ、そう？」「ごめんね四葉」

「私こそいきなり大声出してごめん」

二乃と三玖は正直よく分かっていないような顔で、けれども怒っているかもしれない妹の機嫌を損ねないように優しく謝った。

皆が食べ終えて会計を済ませると、参道に戻り頂上を目指して歩き始めた。四葉は普段通りに五月と会話を交わしている。よほど恥ずかしい思い出だったのだろうか。

道中には小さな祠と、納められた大小様々な鳥居が数えるのが億劫なほどに溢れている。

「あそこだけかと思っただけどよ、結構どこでも千本鳥居みたいな感じに並んでるんだな」

「そりゃあそうさ。なんたって納められた鳥居は万を優に超えるらしいからね」

そんな話をして、俺と三玖の体に汗の一筋でも流れるころになつてようやく頂上へたどり着いた。

稻荷山の頂から京都の街を一望できる。クラスメートの誰かが言っていたが昨日の夜に少し雨が降ったらしい。そのおかげか空は澄み渡って、街の遠方までをはつきりと見通せる。

「見て、さっきまでいた京都駅が見えるよ」

隣の三玖が晴れ渡る京都の街を指さしながら笑って言った。その言葉にどこか引つかかる物を感じながら、その指の先を目で追う。

特徴的な作りをしたタワーが見えるので、すぐそばが京都駅なのだという事は用意に分かった。

それだけだ。ただ、それだけなんだ。……しかし俺は、何が引つかかっているのだろうか。

「どうしたのフータロー？」

三玖は心配そうに俺を見つめてくる。

「いや、ちよつとな」

自分の中で言語化できていない物を、人に伝える事ができるだろうか。この朝の霞のような不確かな胸の内をさらけ出すのは、少しカッコ悪い気がして、この事を話すのならもつと自分の中で固まってからにしよう。

「むむ……」

「そんな顔するな」

不満そうに眉根を寄せる三玖の髪をさらりと触れながら誤魔化す。こんな変な事を思うのも、京都の街がそうさせるのだろうか。

「まだ見るのー？ 先に下りてるよー」

「すまん、今行く」

スマホを片手に大きく手を振る一花に手を振り返し、

「行こう、三玖」

隣の手を取って歩き出した。ちよつと誤魔化し臭いか。三玖は膨れて言え言えと言葉には出さないが伝えてくる。

「なあ」

「なに？」

なおも口を尖らせて不満そうな三玖の額にそつと顔を近づけた。

「ひゃっー！」

「機嫌直してくれ」

「ご、誤魔化されないんだから」

握っていた手を離して、三玖は両手で額を抑える。山登りで良くなった血色の頬に、それ以上の赤色が上書きされて、わなわなと口元が震える。

「さ、行こう。五月が怒りだしそうだ」

一度笑いかけて、そのまま一人で歩き出した。

「あれ、三玖は？」

「置いてきた」

「ふふ、そうなの？　じゃあお姉さんが隣にいてあげよつか」

皆の後列にいた一花は振り返ると一人の俺に不思議そうな顔を向けたが、俺の言葉に悪戯っぽく笑ってそばに来た。

後ろから力ない足音が立つ。その発信源は俺と一花の間に割り込んだ。

「だめ」

「あはは、取らないよ」

一花はおどけて両手を上げると、今度はおかしそうに笑った。そのまま一花を交えて会話する。しかし、余裕そうな一花とバテだしている俺達を見るとどれだけ体力がないんだとがっくりくるな。

下りは千本鳥居の通っていない方を通り、祭場、本殿、楼門と戻っていく。

「えーつと……稲荷駅から、あ、こっちですー！」

食事は五月が伏見稲荷大社に行くなら稲荷寿司を食べたいと言っていて、あいつが事前に調べていた店に向かった。

少し古めかしい木の外観の店に入ると、俺達のような修学旅行に来た学生や、観光に来た外国人が席に座っていた。

席は少し空いていたが八人がいっぺんに座れるほどには空いていない。

「あ、武田くん」

どうしようかと悩んでいると、とある一団から声がかけられた。その方向を見ると同じクラスの班がおいでおいでと手を振っている。

俺達は相席にも助けられて皆で席に座る事が出来た。武田と、友人がその班にいた二乃が相席する事になった。残された六人は残念ながら少し離れた席に座る。

事前に決めていた稲荷寿司とうどんを注文して舌鼓を打つ。

「美味しいね五月。お稲荷さんでお稲荷さんってなんの冗談かと思っただけど、来てよかった」

「でしよう?」

四葉に褒められた五月は誇らしげにふふんと鼻を鳴らしながら答えた。甘い油揚げと酢飯のコントラストがきいていて、黒ゴマの食感が口を楽しませてくれる。ここの稲荷寿司は持ち帰りもできるらしいが、さすがにிரいはのお土産に持って帰る事はできないだろう。

「そういえば、お前らはこれからどうするんだ?」

「わはひ……」

「あーもう五月ちゃん私が話すよ。とりあえず京都駅まで是一緒に行くよ。そこから二乃について行ってショッピングしたり、いろいろかな」

「京都に来たのにお寺を見ないなんて……」

「まあ京都っていくつもお寺あるから、駅の近場の建物を適当に見るよ」

二乃と並んであまり神社仏閣に興味のない一花は気楽に答えた。

「あ、じゃあ私達と本願寺見に行く?」

「本願寺? うーん二乃は早く買い物に行きたいだろうからどうかなく」

「私がどうかしたの?」

早めに食事を終えた二乃がこちらの席にやって来た。三玖の席に無理やり座って会話に加わる。

「邪魔なんだけど」

「いいじゃない」

ケンカするほど仲が良いと言うが、二乃と三玖は姉妹の中でも特別な感じがするな。なんとというか一番想像しやすい姉妹っぽいとも言おうか。

食事を終えた俺達は駅に戻り、京都駅への電車に乗った。

疲れた体を電車の席に沈めるように深く腰掛けると、肩にポテンと何かが乗る感覚がした。

「ありや、三玖寝ちやったのかな」

四葉の言う通り三玖は寝てしまったようだ。俺の頭に乗ったのは三玖の頭だった。その白い肌に昼の光が差して真珠のように光り輝く。伏せられた瞼に、長い睫毛が虹色に彩られて、桜色の唇から小さく息が漏れる。

可愛いな、こいつは本当に。

そつと起こさないように頭を撫でてやると、むずむずと嬉しそうに身をよじってへにやりと笑った。

甘い少女の香りが俺の鼻をくすぐる。満腹になった事と、温かい日差しに思わず俺の瞼も重くなる。

「おい上杉、寝てる場合じゃねえぞコラ」

「ふぁ……分かってるさ」

この電車はすぐに京都駅に着く。のんびり眠っている時間なんて無い。

「起きろ三玖」

「ん……」

伏せられた瞼がゆっくりと開かれると、三玖の青い瞳がぼうつと焦点を結ばないまま、何となく俺の方へ向けられる。寝ぼけ眼が俺を捉えると、柔らかく、優しく、温かく、愛しく、およそ恋人に向けられる全ての好感情を込めた笑顔がふわりと三玖の顔にまとう。

「おはよ……フータロー」

息が出来ないほどに胸が跳ねる。こんな他の人に見られる場所でそんな笑顔を見せるんじゃない、と文句すら言いたくなる程に、その顔は魅力的だ。じりじりと三玖の顔が近づいている事に気が付く。俺は磁力に引かれるように、三玖の唇に引き寄せられそうになっていた。

《次は京都、京都》

車内放送が響く。自分の置かれた状況を思い出してさすがに赤面

した。三玖はまだ状況がつかめないのかふにやふにや笑って俺に抱き着いてきた。

「本当にお前らいつもベタベタしやがって。クラスの奴らが公認カッブルの誕生だとかアホな事言うのも領けるぜ」

「は、あいつらそんな事言ってるの?」

もつと詳しく聞こうと思って前田に質問を差し向けようとするが、電車は止まってドアが開き、皆はさつさと下車の支度を整えた。

「薄情者」

「さつさと三玖さん起こして来い」

言われなくても。

「三玖、起きろ」

立ち上がりそうにない三玖を無理やり引つ張って立たせる。正直おも……いや何でもない。

三玖は毛づくろいする猫のように顔をこすると、小さくあくびを漏らして体を震わせる。

「ふあ……」

「お前ほんと可愛いな」

「え、何?」

「何でもない。もう京都駅着いたぞ」

三玖の手を引いてホームに下りた。駅構内から出て皆と合流する。

「三玖、大丈夫ですか? 疲れているのでしたら私達と一緒に行動しますか?」

京都駅から出て来た俺達を真っ先に見つけた五月は、眠たさの残る眼付きの姉を心配して労わるように体に触れた。

「ううん、大丈夫。せっかく京都に来たんだもん。めいいっぱい楽しみたい」

三玖はぎゅつと握っている手の力を込めて、俺の方に顔を向けて微笑む。

さて、それは誰とでしょう? と質問をされているように感じて、なぜだかむずがゆい気さえしてくる。握っていた手の力を抜き、そして指を一本一本絡ませた。答えは、俺と。

「じゃあ、私達とはここで解散ね」

二乃はそんな俺達を見て呆れたように笑うと、一步二歩、通りへと足を向ける。いわゆるお洒落な店に行つて買い物を楽しんでくるのだろう。

「上杉さん、学級長なんですから点呼の時間には帰つてきてくださいよ」

「あれ、点呼つてそんなすぐだっけ？」

「ご飯の前、としおりには書いてありますけど」

「そうやって余裕だと危ないんだよ。自爆、誘爆、御用心」

「物騒な事言わないの。四葉また何かのアニメか映画でも見たんでしょ」

「ししし、バレた？」

「じゃあまた後でねー」

一花が先だつて手を振ると他の三人も手を振り、そして街の方へと歩いて行つた。

俺達はしおりに書き込んだ一日目のスケジュールを確認した。

「さあ僕たちも行こうか。タイトなスケジュールになるから覚悟しておくように」

と前を歩いている武田はさらりとそんな事を言う。こいつらは平気なんだろうが、俺と三玖に向けて言ったセリフだろう。

「なあ予定決めの時から気になってたんだけどよ、何で最後に一番遠い所に行くようになってんだ？」

「何だい前田君、金閣寺には行きたくないのかな？」

「そうじゃねーけど、普通こういうのって先に遠い所に行つて段々集合場所に近づくルートを作らないか？」

確かに学級長の仕事の一環で他の班がどう行動するかを見たが、前田のいう通り先に遠方に向かつてホテルへ近づいて行くような、集合時間に間に合うように考えられた物が多かったように思う。

「ふふふ、実は時間を越えてもいいのさ」

「えっ？」

「どういうことだ？」

「超えてもいいとは正確じゃないね。まあ、カメラマンがホテルに戻ってくるまでに帰っておけばいいと言い直そう。そしてここにカメラマンの予定表がある」

「お前そんな物をどこで……」

「おや、上杉君は覚えがあるはずだけど？」

憎たらしいほどの爽やかな面を見ながら記憶を辿ると、そういえばあったな。模試の時、関係者以外が入手できないような回答を持っていたっけか。今回もこいつの親父が特別に用意でもしてくれたのだろうか。

「これによると彼は最後に金閣寺に立ち寄るそうだ。そしてその帰りについて行けばなんとか怒られずに済むという具合さ」

「普通に帰ったほうがいいと思うけど」

「いいじゃないか、たまにはこんな事も。それに信頼できる大人と一緒になんだから、他の遅刻する生徒よりよっぽど良いと思うけどね」

にやりと少し意地の悪い笑みをこぼして武田はそのコネの塊みたいな紙を鞆にしまった。

「馬鹿とハサミと金とコネは使いようってね」

「何か増えてるぞ」

軽口に軽口で返しながら、京都の街を歩いて行く。あまり旅行というものに縁のない俺としては、少しでも楽しめるならそれに乗っかるのは、まあやぶさかではない。少しの悪知恵くらい使ってやろうか。

三玖の顔を見て、ふっと微笑みをつくる。

俺達の京都散策を始めよう。

乙女の園へ

夕食の後は自由時間である。

ホテルから出なければ、他の宿泊客の迷惑にならないければ、何処に行っても大体許される。多くの生徒はフロントの待合スペースに行くか、友人の部屋に遊びに行く時間として使っている。

「鍵は誰が持とうか？」

風呂上りのラフな私服に着替えた俺達は、扉の前で一枚のカードキーを巡って話し合いをしていた。

「上杉に渡すのだけは絶対にならないな」

「なんだと」

「お前が明日の朝まで帰ってこなくても驚かないぜ、俺は」

「ははは、じゃあ僕が持つておこう。君達と違って愛を語らう天使もいない事だし」

しばらくの協議の結果、武田が持つことになった。

「しかしお前は女子連合軍の最中に飛び込んでいく訳か。死ぬ気かよ？」

「骨は拾ってくれたまえ」

「骨が残ってるか？」

「墓を建ててやるから成仏してくれ」

「笑えない冗談は罪だよ」

俺達はそんな事を言いながら部屋を出た。オートロックの扉ががちやりとカギを締めた。

廊下には俺達のようにどこかに行こうとしている男子に、部屋に遊びの誘いにきた女子が溢れている。他の高校はどうだか知らないが、少なくとも俺達の高校は女子の区画に行くことも特に禁止されていない。しかしこのどこでも行ける自由時間は少ないのでそこで帳尻を合わせているのだろうか。過去にやらかした生徒がいらないからこういう事ができるのか、と俺にしては珍しく先輩への感謝を捧げた。

「では皆、先生に怒られない程度の時間には帰ってくるように」

「分かってるっての」

女子が泊っている階層でエレベーターが止まり扉が開いた。

「じゃあな」

俺はそこで降りた。エレベーターのすぐ前には教師が立っていて、じろりと見定めるような目を向けてくる。

「変な事してたら分かるからね」

女教師はそう冷たく言い放つ。大切な子供を預かっている身なのだ、男どもを警戒するのは当然だろう。

俺は中野姉妹の、珍しい五人部屋のチャイムを鳴らした。室内からパタパタという足音がすると扉の前で止まり、ゆつくりと開かれた。

少し開いた扉の隙間から恥ずかしそうに三玖が顔を出した。招かれるままに部屋に入ると、後ろの扉が閉まって鍵がかかると同時に三玖が身を寄せて来た。

「待つてた」

「皆は？」

「友達の所で遊んでくるって」

三玖は俺のシャツの胸元をきゅつと摘まむと、物欲しがるような大きな瞳で見つめてくる。その顔の右側にかかった髪をはらって、顎に手をやり少し持ち上げる。

「ん……」

三玖はゆつくりと目を閉じると、切ないような吐息を漏らして、俺がしようとしている事を受け止める心を決めた。

俺はそつと触れるだけのキスをして、三玖の背中に手を回した。

華奢な体から風呂上りの香りが立ち昇ってきて、その甘い匂いにくらくらと目が回りそうだ。その色っぽい首筋に噛みつくようにキスをすれば、三玖の体が震えて息を切らす。

「何してたんだ？」

目を開けた三玖から体を離して笑いかけながらそう尋ねると、ベッドに歩いて行った。俺はそれについて行くと、三玖はベッドライトが置いてあるサイドテーブルの上にある京都の観光パンフレットを手にとった。

「これ見てた」

「まだ回り足りないのか？」

ベッドに腰を落ち着けると俺達は肩が触れ合うほどに身を寄せる。三玖は俺の肩に頭を乗せると、パンフレットを広げながら話し始めた。

「だって、まだまだ見てない所いっぱいあるんだもん」

上目遣いに俺を見上げながら、楽しそうに笑って言葉が続ける。

「銀閣寺でしょ、東寺に、京都御所も行きかけたな。あ、平等院にもいけばよかった。伏見稻荷の流れで行けたんだし……」

「そこまでだ。そんないつぺんに回れないだろ」

「でも……」

「なあ三玖」

想像する嬉しさに顔をほころばせる三玖の頭を撫でる。少し濡れた髪を指で丁寧に梳きながら俺は語り掛けた。

「また来ればいい」

「え？ でも受験なのにそんな余裕あるの？」

「そうじゃなくて」

俺は疑問に目を白黒させる三玖の唇を奪った。

「んっ……もう……」

口では文句を言いつつも、嬉しそうに緩まる口元からは幸せが溢れてくる。三玖は俺に体を預けながら、その潤んだ瞳で見上げてきて捉えて離さない。

「来年でも、再来年でも、もっともっと先の未来でも」

「フータロー……」

「またここに来よう。今度は二人で」

俺はゆっくりと三玖をベッドに押し倒しながら、被さるようにキスを重ねた。そのまま首筋に手を這わす。

「や……あ」

その立ち昇る色気に自制心を手放しそうになるのをなんとか堪えながら、俺は三玖の隣で体を横たえた。

その愛しさと慈しみに満ちた笑顔にそっと触れながら、もう一度唇を重ねる。

薄い肌が触れ合えば、その心も全て触れ合えるような気持ちになる。これが互いを思いやる恋人の特権なんだ。三玖の優しい心が、俺も知らない自らを照らし出してくれる。ずっとこうあれますように、そう思いを込めながら、もう一回、また一回とキスをする。

「でも……」

くすくすと悪戯っぽく三玖は笑うと、

「大丈夫かな。お金とか。無駄遣いさせてあげないよ?」

たまに見る機会のあるテレビに出てくる街の奥さんのような事を言う。

「稼げる所に就職するさ。らいはにどこだって受験させてやる。三玖とどこにだって行けるようになる。そのために勉強するって、あの時約束したんだ」

「あの時?」

「えっ……と」

しまった。失言だっただろうか。

京都の出来事だからと口が滑ってしまったのか。こういう状況でも言い出さないんだ、あの子は三玖じゃないのだろう。こんな調子では三玖にも、あの子にも失礼だ。

「もしかして、女の子?」

「あー、いや」

俺のはつきりとしれない答えに、三玖はむっと頬を膨らませると俺の上に馬乗りになってきた。しなやかな足が横腹をぎゅつと挟んできて、下腹のあたりに柔らかいお尻が置かれる。

「妬げちゃうな」

冷やりと氷のような視線をよこすと、俺の胸板に手を置いて爪でひっかいてきた。その咎めて俺の全てを暴こうという手つきに、弄ばれるままに情けない息を吐いた。

「う……あ……」

「その子はフータローの大切な人かもしれないけど」

その氷の視線が解けると、微笑ましい物を見るように目を細めた三玖は、ゆっくり俺の胸板に置いた手に体重をかける。三玖はどちらか

と言うと嫉妬深い方だが、子供の頃に交わした無邪気な約束に怒る程ではないようだ。だが……

「今、隣にいるのは私だよ」

そう言うと、そつと俺の頬にキスをしてきた。三玖らしい、密やかに訴えかけるそのいじらしさにやられる。どきりと温かい思いが脈打って、汗でもにじみ出てしまいそうなほど体が熱を帯びた。

「だから、そんな目しちゃ、やだ」

ゆらゆら揺れる青い瞳が、思いつめるような色を含んで俺を見つめる。

「そんな目って、どんな目だ？」

「悲しいみたいで、懐かしいみたいで、でも……ううん、えつと、そんな目」

「そんなだったか、俺は。……すまなかった、三玖。楽しい旅行に水を差すような真似をして」

「あの、私も変な事言つてごめん」

「いいんだ。懐かしんでたつてのは嘘じゃない。女々しいな、俺は」

「それだけ大切な思い出なんですよ？」

「確かにそうだ。でも……」

俺は確かに思い返している。あの子との思い出を、楽しかった記憶を、そしてあの約束を。それは、そうすることで感謝を捧げているような、そんな気持ちからだつた。けれどもそんな事をしていたつて満たされるのは、自己満足の感情だけであつて。

思い出は大切だが、今日の前にいる女の子ほどじゃない。

「三玖、お前より大切な物なんてない」

長い三玖の前髪をはらつて、その綺麗な顔立ちを見つめる。

俺は三玖の頭を引き寄せて、唇を触れ合わせた。

「んっ……ふあ……」

触れ合い、離れて、そう繰り返すたびに、自分からか相手からなのか、それとも互いからなのかすら分からない溶け合ったような吐息をこぼして、時間を忘れてキスをした。

「ふ、フータロー……はげし……」

と三玖は声を小さく上げると、体の力が抜けてしまったようで、俺の体にのしかかる。

「フータロー……ちゅっ」

小さいが確かに響くキスの音を部屋中に残して、三玖はもぞもぞ俺の体をまさぐって来た。

すぐ目の前に愛している女の子がいて、その子はケーキのように甘い香りをたてて、女の子の柔らかいあちこちが体に触れているなんて状況に、男の俺がどうなるかなんて、分かっているも止められはしない。

つまり

「あつ、フータロー……これ……」

三玖の、俺を見つめる顔がみるみる赤くなった。居心地が悪いように腰を浮かせるが、体の力が入らないからか、すぐに下ろして密着することになってしまう。

これは仕方がない、と自分で言い訳しながら、謝罪の気持ちも込めつつ三玖の肩に手を回して力を込めた。

「フータローのえっち」

「……否定はしない」

俺の体の不屈き者は、三玖の体の柔らかさと反比例するように固くなってしまうていた。

仕方ないだろう。と、誰にも言えない言い訳を心の中で重ねた。

だって、風呂上りの三玖が色っぽくて、女の子の香りを振りまくんだ。その抜群のスタイルを覆うのは薄い寝間着一枚であって、そんな心許ない布切れ越しに彼女の豊かな胸が当たってしまったては、男なんてしようもない生き物は反応せざるを得ない。

「ダメだよフータロー」

三玖はつんと唇を尖らして、可愛らしく怒っている。

「すまない」

そう言って体を離そうとしたのだが、三玖はあろうことか起き上がる為に俺がベッドについた手をはらってそのまま体重をかけてきた。

「ダメ……だからね」

そう、咎めるのだ。しかし、言葉とは裏腹に三玖の目は、俺を捉えて離さない。

「あ……んう……」

三玖は舐めるようにゆっくりと唇をこすり合わせるキスをすると、その間から舌が覗いて本当に舐めてきた。

「み……んう」

俺の喋る為に開いた口に、そつと舌を忍ばせてくると、そのまま絡まる舌に俺は捕らわれてしまい離されそうにない。しかしそれは、俺自身も望んでいる事なのだ。

口の中に、自分以外の誰かが入ってくる。それは歪な状況のようであり、どうしてこんなに幸せなのだろう。恋人の甘い蜜が、自分を塗り替えてしまう行為が、こんなにも甘美な物だとは、この世のどこにもそれを十全に教えてくれる本は無い。

「ちゅっ……んんっ、んっ、あ……」

あなた以外に何もいらないとばかりに口内を蹂躪してきた三玖は、行動の限界を迎えて息継ぎの為に離れてしまう。

「フータロー」

息をしていない事による体の救難信号からの涙なのか、それとも心荒ぶる愛のさざめきが瞳から漏れた物なのか、青い湖のような目が波打つように光って揺れている。

俺の固くなってしまった物に乗っている三玖が身じろぎをした。

「はっ……三玖、本当にダメだ……」

俺の警告を確かに聞いたはずの三玖は、もう一度身じろぎして、蠱惑的に笑ってこう囁く。

「ダメ……だよ？」

俺の首に手を回してきて抱き着いて、その大きな胸がぎゅつと押し付けられる。

「この……」

されるがままの状況に、男としては反撃を試みたい。その場で寝がえりをうつつように回って、俺と三玖の上下を入れ替える。

「フータロー……」

「男をからかいやがって」

組み伏せた彼女の肢体が震える。見上げてくる瞳が期待しているように妖しく光った。その光に照らされて暴かれるのは、俺の中にある三玖と触れ合いたい欲望だ。

「フータ……んっ……」

ずっと首筋に手を這わして顎を少し指で上げさせる。三玖の唇が優しく弧を描いて言葉を紡ぎ出した。

「愛してる」

その愛の調に聞き入れれば、俺の心から溶岩のように愛しさが溢れてくる。痛いほどの鼓動が胸を打つので、俺は盛りのついた動物のように我慢できなくなって、三玖のその白磁みたいな白い肌を俺の指は這いまわり、そうしてキスをする。

「やつ……あつ、は……」

三玖の赤く染まった顔から桃色の吐息がふわふわと零されると、その桃色の唇に吸い寄せられた。

燃えるような恋と愛の熱さに動かされて、俺の手は三玖のその大きな膨らみに伸ばされようとしていた。

「だ、ダメだよ……フータロー」

「ああ、ダメ、だからな」

そう言いつつも、俺の手は止まる事無く三玖の胸に指を沈めた。

「あつ……やあ……もう」

真っ赤に照れた顔が、喘ぐような囁きをかすかにそよがせる。この手に掴んだ三玖の胸の温かさと柔らかさと相まって、俺の自制心なんてものは遙か彼方へと飛んで行ってしまふ。

「三玖、愛してる」

震える心そのままにキスをして、そのまま、そのまま……

カチッ

「おーいお二人さん。もう時間だよー」

扉の方から聞こえてくる一花の声に、俺は弾かれるように飛び起きた。夢中になっていて時間の感覚がなくなっていたようだ。

「四十秒で支度しな」

「あつ！ それテレビでやってるの忘れてた。ねえ二乃、録画予約してくれな？」

「いいじゃない何回も見てるんだから」

「不純です……不純ですけど、恋人同士としては健全なんでしょうか……」

「どんどん増えてくる姉妹の声に急かされて、俺は身だしなみを整え、三玖の少し乱れた髪を直してやった。」

「フータロー……」

切なげに呼ぶ声は、なんとも離れがたい気持ちを芽生えさせる。

「また明日な」

「おやすみのキスを交わしても、離れがたい気持ちは無くなってくれないが、何とか意思を振り絞って体を離れた。三玖のその俺を捉えて離さない視線の糸が、絡みついて動けなくなる錯覚を覚える。」

「また明日……フータロー」

微笑む三玖の頭を撫でて、部屋を後にしようとして立ち上がった扉に歩き出した。待っていた姉妹がニヤニヤとからかう色味を増した顔をしてくる。

「あなた達、大人気ね」

「なんだそれは」

先鋒の端を発するのは二乃だ。その覚えのない言葉に思わず首をかしげる。我がクラスの大人気の代名詞といえば武田祐輔ではないのか。

「出て見たら分かりますよ上杉さん。ししし」

「はあ？ お前らもまた明日な。早く寝ろよ」

そう言っただけで部屋を出ると、不自然に壁に寄りかかる女子が何人か立っていた。見覚えのある人もちらほら。

俺はわざとらしく口笛を吹いている一人の女子に話かけた。武田を狙う急先鋒だったはずの彼女がどうしてここにいるのか、顔を反らした茶髪の彼女に尋ねてみた。

「お前らと会ってくると武田は言っていたんだが、そうじゃないのか」「武田君は次の戦場に旅立って行ったよ」

「歴戦の傭兵かよあいつは。じゃあお前らは何してたんだこんな所で」

「べ、勉強をしに……」

「気まずそうに彼女は友人と顔を見合わせて、頬を搔いて苦笑いをした。」

「勉強？ 何の」

「いやー……我がクラス公認カップルはどんな風に部屋で過ごしているのかと、後学のために」

「つまりこいつらは部屋の真ん前まで来て、聞き耳を立てていやがったのか。」

「散れ」

「あー酷い」

冷たく言い放って彼女達を散らせた。まったく女子高生という生き物は、どうしてこう恋のあれこれに興味津々なのだろうか。

重苦しい視線を感じたのでその方向を向くと、教師がこちらを見ていた。まだ自由時間が残っているので表立って文句は言えないが、さっさと男部屋に帰れと言いたいのは痛いほどに伝わって来る。

俺は帰って来た名も知らぬ女子達と入れ違いにエレベーターに入り、男部屋の階に戻った。

エレベーターに一人静かに乗っていると先ほどの行為の残滓が漂う。服に残った三玖の香りが、甘い余韻をじりじりと脳内に呼び起こして体が熱くなった。

こういう事が出来る距離というのはとりあえず横に置いても、こんな夜にすぐ近くに三玖がいるこの状況は何だか不思議と嬉しい。

三玖の柔らかさを思い出しそうになる頭を軽く振って部屋に戻った。

やはり先に帰っていた武田に迎えられて部屋に入りベッドに横になる。

京都のあちこちを歩き回った事で体はくたくただ。ベッドや枕が違ってから寝付けない、なんてことは無い俺はたちまち夢の中へと落ちていく。

明日は清水寺に行く予定だ。はつきりあの子と向かい合って
言えないのは残念な気持ちもあるが、あの思い出の地で俺は彼女にこう言
葉を捧げよう。

ありがとう、と。

運命の鎖を解き放て

慣れない部屋に、聞き慣れた音が響く。

その音に私の意識は引き上げられて半覚醒の瞳を開いた。

真っ白な天井が私を見下ろしている。その見慣れなさに私はここがどこかゆっくり思い出した。

修学旅行で泊っているホテルだ。柔らかなスプリング、嗅ぎなれない洗剤の匂い、そしてベッドは分かれているので寝ぼけた四葉が私にのしかかってくるかもしれない。

私は体を起こしてアラームを響かせるスマホを操作して音を止めてベッドから下りる。体を大きく反らして眠気を振り払うとお茶でも飲もうかと冷蔵庫へと向かう。

「あ、おはよー」

洗面所の方から一花が顔を覗かせた。先に起きていた姉の顔はしつとりと濡れている。化粧水でも叩いていたのだろうか。奥の方から音がしている、ということは二乃も起きているはず。

「起きた？」

やっぱり。お洒落に特に気を遣う上二人の朝は、寝坊などをしなければ下三人より早い。

髪の毛の跳ね方、肌の調子、ニキビや吹き出物ができていないか、女子のチェックには余念がない。

「うーん……」

私達の話声が意識の奥底を揺らしたのか、四葉は身じろぎして目を開けた。

「……知らない天井だ」

「ベタねー」

乳液をパタパタなじませながら、二乃は四葉の起き抜けの言葉に笑った。二乃は櫛を片手に四葉のそばに寄って、絡まった髪をとかしてあげている。髪に櫛をいれられている四葉は次第に目が冴えてきたようで、そばに置いていた修学旅行のしおりに目を通していった。

「今日は清水寺に行くんだよね」

「そうね。私達のクラスは先に清水寺に行く方のはず」

今日は奇数クラスが先に清水寺に行き、偶数クラスが伝統工芸体験に行くというスケジュールだ。私達は3年1組なので先に清水寺のコースとなる。

「五月、起きて。朝ご飯の時間」

私は幸せそうにスヤスヤ眠る五月を揺り起こした。

「んん……三玖？ ふあ……おはようございます」

「おはよう」

五人で一番長い髪をあちこち跳ねさせた五月は、その髪を鬱陶しそうに払って起き上がった。

「うわ、五月ちゃん髪ぼさぼさ。お手入れしてあげよう」

一花は四葉の髪を丁寧に梳かし終えた二乃から櫛を受け取って、五月のぼさぼさ頭に櫛を入れ始めた。

「境内まで結構歩くの？」

制服に着替えだした二乃は、頭にリボンをつけている四葉に聞く。初夏の緑のようなあざやかな色のリボンを揺らして、四葉はしおりを見ながら言った。

「そこそこ？ でもお土産屋さんもいっぱいあるから楽しいよ」

「見て来たような事言うじゃない」

「え？ えつと……」

「ま、それなら楽しめそうだわ」

頭にいつものリボンを着けた二乃が、手鏡で変な所がないか確認して鏡の中の自分ににこりと笑いかけた。私はヘッドホンをかけて、五月も星のヘアピンを着けて準備完了だ。

京都一番の名所と言っても過言ではない清水寺に、私はどきどきと胸が高鳴る思いでホテルの部屋を後にした。

バスから降りて整列すると、一組つまり私達から移動し始めた。古い町並みの趣を残した緩やかな坂道を登っていく。

「人がいっぱいね」

「はぐれないようにしろよ」

そう言うとフータローは私の手を握ってくれた。

平日とは言え、京都の一番の観光地である清水寺へ続く道には人がごったがえしている。私達学生は小学校の教科書にでてくるエーミールみたいに一塊になっていた。学生服のシャツの白がぞろぞろひしめき合い、そうそうはぐれる事はないだろうけど、それでもこっぴどくやっつて気遣ってくれるのが嬉しかった。

「おい四葉、転ぶなよ。この坂で転んだら二年で死ぬらしいぞ」
「ええ〜!? し、死にたくないです!」

そう言った話は色々な日くのある京都では珍しくもない話だ。修学旅行の前に私がフータローにいくつか話した事の中にそういう話も混じっていたはず。

「冗談だ。その話が言われてるのは二年坂って所でここじゃない」
「よかったです」

そうフータローに言われると、四葉はほっと胸をなでおろした。
私がフータローに話したとりとめのないような蘊蓄まがいの事を、ちゃんと覚えていてくれる嬉しさに頬が緩んでしまう。

「何か有名な物あるかな」

一花はキョロキョロと辺りを見渡しながら、スマホで写真を何枚か撮っていた。

「あれはどう? 七味屋さん。四百年近くの歴史があるらしいよ」
「うーん。二乃は?」

「調理系があるとすぐ私を呼ぶの止めてくれない? まあ有名な物なら一つくらい買ってでもいいわね」

「フータローは?」

「そうだな。買って行ってもいいが、消え物つてのがどうも。お守りだけでも結構するつてのに」

「私が買ってあげるよ?」
「一花みたいな事を言うな」

いきなり出て来た一花の名前に、その当人の顔を見た。視線を向けた先にいる一花は照れくさそうに頬を掻いて笑った。聞けばフータローが欲しがっていた、そこそこのお値段が張る参考書を買ってあげ

たらしい。

「あはは、見得を張りたいお年頃だったんだよ」

「ずるい。私もフータローに何か買ってあげたい」

「気持ちだけ貰っておこう」

呆れたようにフータローはそう言うと、進みだした集団に合わせて手を引いてきた。人混みの先に、朱塗りの建物が見える。

お土産屋に気を取られている女子の方が女の子らしいのかもしれない。けれど、私はその荘厳な建物の方が好きだった。分かっているのかな？ この清水寺の形を作ったのは坂上田村麻呂なんだよ。あの教科書に載っている偉人が遺してくれた物が、今の今まで人々を魅了してやまない事に、想いを馳せたりしないのだろうか。

仁王門を前に私達のクラスは整列しなおして自由行動となった。清水坂で買い物してもいいし、境内に入って参拝するもよし。

私達は昨日の八人で境内を見て回る事にした。

私の気持ちとしては真つ先に駈け出して行きたいけれど、昨日の散策が堪えたのか足がピリピリと筋肉痛に陥っているので、ゆつくりと歩き出した。多分フータローも同じ体の状況のはず。

「えい」

「いっ……いっ……」

ふとそう思ったので確かめるべくフータローの太ももを突いてみた。突かれたフータローは顔をしかめて跳ねた。自分でしでかした事だけど、そんな姿が笑いを誘う。

「何するんだよ三玖」

「ふふふ、お客さん凝ってますね」

「くそつ。……どうせお前もだろ」

「きやつ」

笑いすぎてしまったかな。フータローは手を伸ばして私が見たみたいに太ももを突いてきた。

「いたた、やめてよフータロー。恋人同士でもセクハラは適用されるんだよ」

「ならお前のさつきした事だつてそうだろ」

「女の子のした事なら受け止めてよ」

「男女平等の観点に背く考えだな」

「もう、その公民意識なに？」

「あんた達そのトリツキーなイチャイチャを止めなさい。早く清水の舞台行きましょう」

声のした方を向くと、仁王門への階段を登った二乃が呆れてそう言っていた。

私達は顔を見合わせて苦笑いすると、皆の下へ歩いて行った。

人波をかき分けながら石段を登って行く。一步ごとに大きな赤い門の威圧が増すようで、これが歴史の重みだろうか。首が痛いほどに見上げて、その感動を隣にいる大好きなフータローと一緒に感じれる事は、なんて嬉しいんだろう。

「写真撮ってやるよ」

「一緒に映って」

フータローからの嬉しい提案に、私はもう一つ嬉しいを付け加える。仕方ないなと苦笑いする彼に甘えて傍に近寄った。

「あ、三玖写真撮るの？ 撮ってあげるよ」

パンフレットを見ながら話し込んでいた皆から、四葉がこちらを振り返ってそう言ってくれた。その言葉に渡りに船とばかりに飛びついて、写真をお願いすることにした。

「はい、チーズ」

「ありがと四葉」

「お安い御用でございませす」

恭しく頭を下げ、宝物を差し出すようにスマホを返してくる、おどけてみせる四葉に、

「うむ、苦しゅうない」

私も一角の主君になったつもりで答えた。四葉はいつものように歯をみせながら、しししと笑ってくれる。私は笑い返して皆と本堂への進みだした。

「あ、五重の塔ですか？」

「五月、あれは三重の塔。五重の塔は京都駅の近くにある東寺にある。

……あのあと行かなかったんだ」

昨日帰ってからした話の中に、一言もお寺や建物の話が出てこなかったからもしかしてと思っていたけど。

「いいじゃない。京都に来たからって、お寺に行かなくちゃいけない法律がある訳でもないんだから」

「そうだけど……」

だからと言って全然行かないのは、京都に来た画竜点睛を欠くというものではなからうか、と思うのは私の押し付けかな。

色々見たい物はあるけれど、先に皆と清水の舞台を見たいから本堂へと真つすぐ向かう。

本堂に入ると人がある場所で集まって声をあげている。

「重たー」

「こんなの持ってたとか嘘だろ」

苦しい顔をしながら持ち上げて、それを周りにいる人は楽しそうに写真に収めている。

清水寺の七不思議の一つ、弁慶の鉄の錫杖だ。持ち上げるとご利益があるとされているので、皆が持ち上げようとしている。

小さな錫杖と大きな錫杖の二つが並べて置いてあり、小さい方はさすがの私でも持ち上げられる。両手を使ってだけ。だけど大錫杖は女の私達ではびくともしない。

「ふぬぬ……、あー！ ちょっと浮いたよ」

さすがの四葉は持ち上げる事が出来たけど、それでも少しだけだ。男性陣は、文武両道武田君はその涼しい顔にらしくない汗を一筋流しながら持ち上げる。

「さすがにおいそれとは持ち上がらないね」

武に偏重気味の前田君は一番高く持ち上げた。

「ま、こんなもんか」

凄い。素直に凄いと思った。

フータローは……うん。

「三玖、その端から期待していない目を止めろ」

「だって一花や二乃に五月が持ち上げられなかったんだよ」

「前とは違う俺を見せてやる」

と言うと錫杖に向き直ってしつかり掴んだ。ふうつと息を吐いて、一気に持ち上げようと力を込めた。錫杖の上についている輪っかがチャリチャリ音を立てて期待を煽ったけど、やっぱり持ち上がる事は無かった。

「大丈夫だよフータロー。力が無くてもフータローはフータローだから」

「優しさが辛い」

「幸せ者だねえ上杉君は」

隣にいた武田君がからかうように笑った。

最初のころは見られるなんて恥ずかしくて、こんな風にからかわれるなんて考えられなかったけど、今ではそんなに恥ずかしくも無くなっていった。鈍くなったと、悪く言えばそうかもしれない。けれど、それはフータローと一緒にいるのが当たり前になったからだと前向きに言いたいな。

「お前なんかいつだって幸せ者になれるだろ」

「そうなるのは、なりたいたいという自分の気持ちと、なれるという置かれた状況が一致した時になるものさ。あいにく僕は今すぐ君みたいになりたいという訳ではないからね」

「男連中が聞いたらお前の命が無いだろうな」

「怖い怖い。上杉君と前田君の両彼女持ちに盾となってもらおうかな」

「人を巻き込むんじやねえコラ」

前田君はバシツと武田君の肩を叩いた。

「あ、清水の舞台だよ」

話し込む男子をよそに歩き出して、私達だけで先に清水の舞台に立った。先を歩いていた一花は驚きに口を開く。

「うわ、写真で見た印象より結構高いね」

「手すりこんなに低かったっけ」

四葉は自分の腰あたりを叩いて手すりの低さを確かめている。ちよつと前かがみになったらそのまま落ちてしまいそうなほどの高

さだ。

「昔の日本人サイズなのかしら？」

二乃はパシヤリと写真を一枚撮って頭をかしげた。江戸時代の日本人の平均身長が男性で155センチらしいので、つまり私達よりちよつと低いくらいだ。……やつぱり手すり低いと思う。

「私達が大きくなったってことだよ」

「そ、そうですよね」

五月はちよつと余裕の笑みだが、その笑みはこわ張っているようにも見える。本当は怖いのだろうか。

「あつー！」

清水の舞台の前に立っていた四葉が手すりを掴んでいた手を滑らした。

「四葉?！」

「なーんちゃって」

心配して駆け寄った五月に、面白がっている目を四葉は向けた。こういう冗談は珍しいかもしれない。

「もー! やめてください!」

「四葉、ふざけてるとマジでやらかしそうで怖いよ」

「一花、それは私を侮りすぎ」

「ひー、でも高いわね。こんな所から飛び降りた人がいるの? 死んでるでしょその人」

「そんな事ない。飛び降りた人の85%は生きてる」

「へー結構死なない物ね……ってなる訳ないでしょ!」

カシャッ

という電子音が聞こえて私達5人は音の方を振り返る。武田君がスマホをこちらに向けて微笑んでいる。フータローと前田君は彼の肩に手を置いて写真をのぞき込んでいた。

「檜舞台の美人姉妹とは、これで賞でも目指そうかな?」

「ちよつとー、撮るなら言つてよ。写真にはちゃんと写りたいよ、プロとして」

「というか無断で撮るんじゃないわよ。あれよ、訴えたらあんた負け

るわよ」

散々な言葉を浴びせかけられた武田君は、肩をすくめて隣の男二人を見る。

「俺が撮れって言ったんだ。許してくれ」

フータローが一步前に出てきて頭を下げた。使い捨てカメラを持ってきていたり、もしかしてフータローって写真を撮るの好きなのかも。

「それで許してくれるのはもう三玖だけよ」

「すまん」

「まあまあ二乃、その辺で。上杉さんだって悪気があつてやったんじゃないんだし。無罪だよ」

フータローの目が大きく開かれて、ぱちぱちと瞬きする。四葉そんな変な事言ってる？

「じゃあ今度はきちんとお願ひするよ。皆で撮ろうじゃないか。ほら、あっちにいる友人に写真撮ってくれないかとお願ひしたんだ」

武田君は舞台から俳優の様に手を振ると、音羽の滝に通じる道の方から手を振ってくる一団が見えた。あの人たちはクラスメートじゃないけど、こんな簡単に頼み事出来るのは彼の人徳だろうか。確かにテレビでよく見る構図を撮ろうと思つたら、あそこにいる人に協力してもらわないと不可能だ。

「ほら早く撮ろう。あまり待たせても悪いからね」

清水の舞台には人の流れがどんどん押し寄せてくるので、早くしないと迷惑になってしまいそうだ。というか私達は八人もいるのだからすでになっている。

武田君は通話をしながら向こう側にいる人と人の並びやポーズを決めている。私達は全体像が見えないのでそれに従うしかない。大丈夫かな。ちゃんと撮れてるかな。

何枚か撮ってくれたらしい向こう側の彼たちは、大きく手を振って音羽の滝の方へ歩いて行った。

この場で撮る写真は、一番画質の良い武田君のスマホで撮って、後で共有する事にした。

「スマホを持ってない俺はどうすればいいんだ」

「三玖さんを見せてもらえよ」

何枚か撮ったところで、今更のようにフータローは言った。機種変更すればと言うのは簡単だけど、フータローの経済事情を考えるとそんな事言えない。

「うん。私の見せてあげるから大丈夫」

「ならまあ、いいが」

フータローは前髪をちよいちよいといじって遠くを見ている。その照れくささを隠そうとする仕草に、思わず私は笑ってしまつてフータローに睨まれた。

「なんだよ」

「何を考えてたのかな？」

写真を見るくらいなのに、そんなに照れくさい事なんてあつただろうか。

「一緒に写真を見る事を、だ」

その歯切れの悪い言葉に一つピンと頭にとある考えが駆け巡る。そうだったら嬉しいなと思いつつ、そつとフータローに耳打ちした。

「二人きり、で？」

そう言うと、フータローは言葉に詰まりながら頬を赤くして目をそらす。秘密を明かされた子供みたいな素振りに、私は可愛らしいと思つてしまった。

「えへへ……一緒に見ようね」

「……おう」

「ははは、相手を思いやって見るのも良いけど、カメラの方を向いてくれないかな」

はつとしながら声の方を向くと、呆れた顔をした六人がこちらを見ている。そうだ、皆に姉妹に男子の写真を撮ったから私とフータローのツーショットを撮る所だったんだ。

「ごめん。フータロー、カメラ見て」

「どの口が言うんだ」

にっと思地悪に笑ってフータローは肘で私を小突く。こんな名所でこんなに近いづいて写真を撮る、なんてきつと一生の思い出だね。パチリとカメラから小さく音がして、フータローはその使い捨てカメラを受け取る。

「お守りの一つ二つ買って行こうかしら」

「ご利益が喧嘩するんじゃないの？」

本堂の方のお守り販売所に二乃と四葉が行くと、それをフータローは遠くを見つめる目で見ていた。……またあの目。

「いてっ」

「フータローの浮気性」

私はそんなフータローの横腹を突つついた。隣に恋人がいておきながら、昔の女を思い出すとは何事か。

「人聞きの悪い事言うな」

「だってまた昔の女の子を思い出してたんでしょ？」

「……すまん。言い訳させて欲しいんだがいいか？」

「どうぞ」

「あとちよつとで思い出せそうなんだ」

「む……思い出してどうするの？」

「どうもこうも。三玖もあるだろう？ 思い出せそうでちゃんと思いつけない事とか」

「あるけど」

「だろ？」

と話を切るとフータローはお守り売り場の皆に合流した。なんだから誤魔化されたような気がする。

けど、あんまり昔の事をやいやい言って鬱陶しがられるのも嫌だ。私達はずっと女子校に通っていたから分からないけど、普通の共学に通っていたら、そういう恋の一つや二つが心に強く残る物なのだろうか。

フータローにも敗れた恋があるのだろうか。そう思うと、ちよつと面白くないけど、思い出は思い出だ。男の人は恋の事を名前を付けて保存して心の片隅に置いておくらしいけど、その思い出が開かないく

らしい私でいっぱいになればいいんだ、と思おう。

「三玖、受験生なんだし学業のお守りでも買っていく?」

私達の中で進学を必要としない進路を選んだ一花は、お気楽な顔をして学業のお守りを指さしていた。

「じゃあ一花はこの開運出世お守り?」

「かな」

「あ、これ可愛いじゃない皆で買いきましょうよ」

皆でお守りを選んでいると二乃はある一つに目を止めた。桜がモチーフの丸い鈴だ。私も含めて皆で気に入ったのでそれぞれ一つ買う事にした。

「これいいんじゃないか? 最強だったよ」

「らしいにも買ってやるか。一つで色んな幸せが叶うとかコスパ最強だな」

フータローが手に取ったのは幸守だった。白地のお守りの中央に青の『幸』の文字が記されている。

「私も買う」

「もう買っただろ」

「フータローと一緒に欲しいから、だからいい」

そうしてお守りを買った私達は本堂を出て、パンフレットを見ながらどこを見に行こうか考えた。

「おーい、武田くん」

悩んでいる私達に、少し高い所からの声がおりてくる。ふわふわとした優しい笑みに、けれども笑っていない目が怖いクラスの女子班がいた。武田君と班を組みたかった子達だ。なんだか居心地が悪い私はフータローの後ろに隠れた。

「やあ。どうしたのかな?」

「まだこっち来てないんでしょ? 一緒にお参りしようよ」

彼女達が立っているのは、清水寺内にある地主神社に通じる階段だ。

「俺ちよつとここで待たねーと」

「なんだよ前田。集団行動できない小学生かよ」

「うるせ。俺は……あれだよ」

「なんだよ」

「察してあげなよフータロー君。恋の伝承のお寺に、待つてまで行きたいって事は？」

「ああ、なるほど」

フータローは納得したように手を打って、らしくないと思っているのか前田君はふんと鼻を鳴らして明後日の方向を見ていた。

そのまま前田君は彼女さんと色々見たり買ったりするそうなので、時間になったら集合する事にして私達は地主神社へと足を進めた。

階段を登ると縄に巻かれた石が十メートルほどの間隔で二つ置かれていた。石に張られたお札には恋占いの石と書いてある。今も何人がその間をふらふら覚束ない足取りで歩いていった。

この一对の石の片方から目を閉じて、もう片方の石に辿り着いたら恋が叶うという伝承だ。人に助けってもらって辿り着くと、人に助けられて恋が実るとか、ただ辿り着くにもいろんな解釈が生まれるそうだ。

「あんた達がやる必要あんの？」

二乃は私達を振り返ると、すでに呆れたような顔をしている。まだ何もしていないのに、そんな顔をされるいわれはないと思う。

「そこだよ二乃ちゃん。結ばれた二人がやったらどうなるのか、気にならない？」

「うーん、ビミョー」

「俺達は実験台か？」

「そう。だから武田君と一緒に向こうの石に行つてて」

「なんで……」

「まあいいじゃないか。じゃあ僕達はむこうに行つてるよ」

いまいち乗り気じゃないフータローを引つ張つて、武田君は向こう側の石のそばに立っておいでおいでと手招きした。

先に占いをしていた人たちが向こうに歩くのを待つて、武田君を狙う女性陣は片方の石から出陣した。ここに彼を連れて来た勇ましさととは裏腹な、ゆつくりとした足取りを一步一步進めて彼女達は周りで

見ていた他のクラスメートの助けを借りて辿り着いた。

私は四葉に押されて恋占いの石の間に躍り出る。人でごった返してはいるが、この石と石の間は人がいない。目を瞑って歩く人のために皆が気を遣っているのだ。

目を瞑る前にちらりと周りを見た。ここに来ていたクラスメート達が、見知った顔があると足を止めて私を見ていた。スマホで写真か動画を撮る準備をしていた。これ以上まごついて人の耳目を集めるのはごめんだ、と私は目を瞑り、フータローがいる方へ歩き出した。ざわざわとした喧騒がどこか遠くに聞こえる気がした。交わされる会話の中に日本語以外の言語が混じっている事さえ分かる。自分でも不思議なほどに集中力が高まっていた。

十歩ほど歩いた所で、そろそろかなと思いき歩幅を狭めて手を前に伸ばした。

少し、もう少し、ゆっくりと、誰も何も言っていないから多分大丈夫なはず。

「わぷっ」

ポスツと布に当たる感触が顔中に広がった。誰かにぶつかってしまったんだ。どうして誰も教えてくれないんだろう。

「ぐ、ごめんなき……」

恋占いは失敗なようだ。いやフータローと付き合えているんだから失敗も何もないんだけど。

目を開けてぶつかってしまった人を見る。

何で誰も教えてくれなかったのか分かった。

見上げた私を見つめ返すのは、おかしそうに、悪戯っぽく笑うフータローだったから。

石に辿り着けなかったけど、きつと占いは成功だ。嬉しくなって微笑むと、鏡のようにフータローは微笑みを返してくれた。

ピュウツと誰かがはやし立てる指笛を高らかに鳴らした。それで私はここが往來のど真ん中な事を思い出す。人垣に目を向けると、ニヤニヤと笑ったクラスメート達がカメラに私達を収めている。

「お前ら」

それを見たフータローの不機嫌そうな口から、咎める声が出てきて皆をたしなめる。

「よこせ」

フータローは私から離れて、一番近くにいた男子のスマホを取り上げた。私は視線に晒される居心地の悪さに小さくなるような気持ちで人混みに紛れて逃げる。

「あはは！・ 大成功じゃない三玖」

「……うるさい」

からかつてくる二乃をじろりと睨みつけるけど、そんなの毛ほども気にならないとばかりにまた笑ってきた。

「おい、行くぞ」

先ほどスマホを取り上げた男子との、写真を巡る話し合いに勝ったのか負けたのか分からないが、楽しそうに笑う武田君を引き連れてフータローはそのまま神社を出て行った。

「待つてよフータロー」

階段を下りていくフータローのそばに行こうとしたけど、まだ皆の視線が集まっているように感じてしまっ、姉妹に紛れるようにして神社を後にした。

神社から離れた私を待っていたのは、今度は姉妹からのからかいだ。

「見て、良く撮れてるでしょ」

「あはは、三玖なんて顔してるの」

一花が撮った写真を皆が見て笑っている。二乃は頬を指さして面白い顔というジェスチャーをするので、私は小さくなってしまう。

「うう……消してよ」

「ええー、でもいい写真ですよ」

「ちゃんと現像しようか？」

「やめてよ」

一花のスマホを取り上げようとするけど、私なんかじゃ一花に動く事で敵わないのと、どうせ皆でデータを共有しているんだろうなと思ったので、無駄な抵抗は止めておいた。

彼女さんと合流したらしい前田君を横目に、私達は音羽の滝へ通じる道へと向かう。

看板に従って坂を下って行くと段々と水音が聞こえてきた。熱さを打ち払うような涼やかなその音は、一つではなく二つ三つ、と近づくとつれて分かってくる。

建物の角を曲がると、お目当ての音羽の滝が目の前だ。清水寺の起源でもあり清水の名前を冠している由来の滝でもある。

三筋に分かれた清水は向かって左から順番に『学業』『恋愛』『健康』に意味のある霊水と言われている。

私達のように霊水を飲みに来た人がつくる列に並んで待つ事にした。

「全部飲んじゃダメ？」

滝の水を飲んでいる人を見ながら、四葉がそんな事を言った。

「神様は欲張りにはご利益を授けないって話らしいけど」

「じゃあ止めとく……」

「じゃあさ、三つのご利益を五等分するのはどう？」

いい事思いついた、と二乃は悪戯な笑みを浮かべる。まさか神様も同じ顔した人間が分け合う何て思わない、かもしれない。

「順番が来ましたよ」

賽銭のために財布を取り出しながら、五月が先に一步出た。

滝の奥にお祀りされているのは不動明王だ。そこにお賽銭を納めてこれから霊水を頂きますとお祈りをした。

ひしゃくを一つ手に取って、私は健康の滝から水を汲んだ。あまり沢山汲んで業突張りと思われたくないのので一口含む程度をひしゃくに入れる。

「どっちにするか……」

フータローはひしゃく片手に学業と健康の滝を交互に見ていた。

「意外」

「なんだ？」

「どうでもいいって適当に選ぶと思ってたから」

「こんな所まで来てそんな事言うほど俺だって野暮じゃない」

「ふふ、私のご利益半分あげる」

片眉をひそめて滝を眺めるフータローに、私はまだ少し水が残っている自分のひしゃくを差し出した。フータローはちよつと驚いたように唇に力を込めて、すぐにふつと緩んで笑みを形作る。

「なら俺のご利益も半分やろう」

そう言つて学業の滝から水を汲むと、私の方に差し出してきた。

「え……フータロー」

「お前が先にやろうつて言いだしたんだろ」

ほら、とフータローは学業のご利益に濡れたひしゃくを私の口元まで持つてくる。恥ずかしさに頬が熱くなつてくるのを感じながら、それに口をつけた。

「俺にもくれよ」

はつと自分の言い出した事を思い出して、残つた健康の滝から汲んだ水を差し出す。

これつて間接キスじゃ……

飲み干すと、私は逃げるように滝から離れた。先に済ませた姉妹は清水寺の舞台の柱を見上げて感嘆の声を漏らしている。

「はえー立派だねー」

「釘を一本も使つていないそうですよ」

パチリと写真を撮つていた一花が、私の足音に気が付いて振り返つた。さつと画面を変えて私とフータローが霊水を飲ませている写真を見せてくる。

「あ、三玖、もうフータロー君とお水の飲ませっこしなくていいの？」

「も、もういい」

「何いまさら恥ずかしがつてるのよ。じゃあそもそも止めなさいって話」

「うう……」

そう言われると弱い。旅行の浮かれ気分のまま大胆な事をしてるのは、後悔はしていないけれど反省する所だ。

味方を求めて周りを見ると、四葉に五月は呆れた顔のまま笑つている。姉妹四人に味方なしのとんだ四面楚歌に陥つてしまったみたい

だ。部の悪い戦いからは引く事にした。

「あれ、どこ行くの？」

「子安塔の方。そう言えば見てなかったから見てくる」

「私達はここにいるね」

「じゃあ俺はついて行くか」

「え、いいよフータロー」

「いいから、行こうぜ」

パンフレットを広げながら歩いて行くフータローを追いかけて、その手を掴んだ。にっと一瞬吊り上がった口元に、うるさいほどに胸が跳ねて、あれだけくつついていたのにまだ足りないのかと自分に呆れてしまうほどだった。

フータローと話ながら坂を上っていると、鼻先にポツリと冷たい物が当たった。次第にそれは増えていき、手に、髪に、制服に雫を付ける。

「降って来たな」

早く行つて見てこよう、という目論見を粉微塵にするかのように、目の前も白むほどの雨に変わった。

「その木で雨宿りしよう。誰かが傘を持って来てくれるのを待つか」

丁度いい屋根がなかったなので、なるべく葉の茂った木の下に立ってやり過ごすことにする。初夏の青々とした葉っぱから、防ぎきれない雨粒が一滴落ちて私の首筋に落ちて来た。

「冷たっ」

「おい大丈夫か？」

六月とは思えない冷たさに身震いした私を、フータローは抱きしめてきた。

「フータロー……」

「濡れて風邪ひいたんじや台無しだからな。林間学校の時と同じ轍は踏まねーぞ」

「うん。あつたかい」

「そりゃよかった」

しばらくそうして、雨音と心音に聞き入って、今の事態のまずさも忘れて幸せをかみしめる。

「ねえ」

ふと思った事を口にした。

「思い出の女の子と、ここでどんな事したの？」

「なんだよ急に」

「ちよつと気になって」

だって、今でも思い出すくらいなんですよ？ と重ねて追及するのは止めておいた。気に入らないのが正直だけど、子供のころの約束なんだから。

「別に普通の事だ。写真と撮って、お守りを買って、そこらへんを探索して。気付けば夜になっていたな」

後ろから抱きしめられている私の頭上から、フータローは優しい声で思い出話を語っている。

きつと、とても大切な思い出なんだろうな。

「あの時はその子が泊っている旅館に一旦行く事になったんだっかな。先生か誰だか忘れたが、懐中電灯を持って……」

その言葉が顕現したかのように、いきなり私達を青白い光が照らしました。

「こんな所にいたのかい。あれ、四葉さんは通らなかつたかな？」

何かと思えば、傘を差してスマホをライトにして持った武田君が立っていた。わざわざ迎えに来てくれたのだろうか。

「ありがとう」

「どういたしました。この大きい傘をあげよう。二人で使いたまえ」

武田君から男性用の大きな傘を受け取ると、丁度後ろから聞き慣れた声が激しい雨音をかき分けて響いてきた。

「武田さん！ 上杉さんと三玖は……あ、見つけたんですね」

「四葉さん、君も通り過ぎたはずなんだけどね」

「め、面目ないです」

四葉は恥じるように頭を掻いた。心なしか頭につけたリボンがしょんぼりしているように見える。

「フータロー……？」

受け取った傘を開いても、一言も発さないフータローを振り返った。驚きの色の中に、どこか問題を解き終えた後のような清々しさを感ずる顔で、それはどんな気持ちなんだろう。

「そうか、四葉か」

「ねえフータロー」

「ああ、すまん」

はっとして私の方を見ると、傘を取ってきて頭上に広げた。

「二人とも悪いな、わざわざ来させて」

「いえいえ、また上杉さんに風邪を引かる訳にいきませんからね」

「さあバスに戻ろう。やっかいな雨雲がかかっていると天気予報で言っていたので、見学は中止だそうだ」

そう言つて二人は坂を下つて行つた。私も後に続いて行こうと歩き出したけど、後ろのフータローは先に行く二人を見て立ち止まっている。

「そうか、四葉か。とはどういう事だろう。それがぼうつとさせる何かなのか。」

うつすらと勘づきながらも、それを認めたくなくて、フータローの口を開かせる。

「何が四葉なの？」

「ん？」

「だから、さつき言つてた事」

「聞こえてたか」

「こんな近くだもん」

もしかしたら聞かないほうが良かったかもしれない。

「だから……」

喋ろうとするフータローが、悲しいみたいで、懐かしいみたいで、昔会った女の子が、だ」

そして愛おしいみたいなのをしてきたから。

あれからどうしたのか良く覚えていない。

予定に則れば私は伝統工芸体験に行ったはずなんだけど、気が付いたらホテルのベッドで横になっていた。

「三玖、先入るね」

四葉の声が浴室に通じる扉から聞こえる。一花と二乃と五月はテレビに釘付けで「早く入ってきて」と適当に相槌を打っている。

ああ、言わなくちゃ。フータローは、四葉を、あの六年前の女の子に会いたがっているよ。

「え、三玖、どうしたの？ 先に入る？ 私はそれでもいいけど」

「フータローに会わなくていいの？」

「どうして？ あ、そうやって上杉さんに会いたいんでしょ」

四葉は、いつものように明るい調子でからかってくる。

「京都はフータローと思い出の場所なんでしょ？」

笑っていた四葉の口がピタリと止まった。おかしそうに笑っていた目元は急に真剣な物になって細められる。

「三玖が言ったの？」

普段に無い、怖いほどの声色が四葉から飛び出してくると、私は氷の手で心臓を掴まれたみたい背筋に寒気が走った。

「うん。フータローが自分で思い出したんだよ」

「そっか……」

四葉は着けていたリボンを解くと、それを力なく籠に放り込んだ。

「どうして黙ってたの？」

「……どんな事を言ったかとか聞いた？」

「うん。必要とされる人になるために、お互い頑張ろうねって約束したんでしょ？」

「だから……分かってよ」

「どうして？ 四葉は頑張ってるよ。だから、フータローに会ってあげてほしい。四葉にいろいろ言いたい事があるみたいだから」

はあ、と力ない息が零れると、四葉は諦めたように笑った。

「会えないよ。上杉さんは頑張って、ずっと百点を取るくらい頑張ってる、それなのに私はこんなんで。あの約束をした女の子として会うなんてできないよ」

「でも、いくつも部活を全国大会まで連れて行った。だから約束はちゃんと形になってるから、会えないなんて事ないんだよ」

それにフータローは……

「彼は、努力を蔑ろにするような人じゃない。だから、頑張ったんだって胸を張って会ってきてもいいんだよ」

「三玖……ダメだよ」

「ダメじゃない。フータローは勉強で、四葉は運動で、道は違ったかもしれないけど、頑張った事に変わりはないんだよ」

私は四葉の涙を湛えて揺れる瞳に思う。

四葉はフータローの事が好きなんだ。

そして、あんな風な目をしたフータローは……

だから、私は思い出を四葉に返してあげないといけないんだ。

私は浮かれていた。そして浮かれてしたあれこれが、そのまま私を苦しめる。

「この修学旅行で、フータローは何回も四葉との事を思い出してた。今でも四葉との思い出は特別なんだよ。だから、思い出の地で、思い出話を楽しんできて」

「うん。会いたい。あの時、京都で会った私として会いたい」

抑えきれない思いが、一筋の川になって四葉の頬を流れ落ちた。

「談話スペースの所に待ってもらってるから、早く行ってあげて」

「もし私が行かないって言ったらどうするつもりだったの？」

「そのまま部屋に帰ってもらうところだった」

「あはは、三玖の悪女」

四葉の沈んだ顔色に、ちよつと明るい調子が戻っていつものように笑った。

「ありがとう三玖。私だけだったら、逃げて、逃げて、ずっと向き合えなかった」

四葉は私の手を取ってくる。その手は優しく心に訴えかけてくるように温かかった。

「行って、四葉」

「うん。ありがとう」

四葉は浴室から部屋に通じる扉に手をかけて、思い出の少女から、今隣にいる少女へと飛び立つ。

「フータローのこと、よろしくね」

思わず出てきてしまった言葉は誰にも聞こえないただの揺らめきになって部屋に響いた。

あのフータローの優しい目が、頭にこびりついて離れない。あの今まで私に向けてくれていた視線が、離れて行ってしまおうのだろうか。

いや、違う。きつとあの目は約束の女の子の、四葉の物だったんだ。顔が同じな私に言い寄られて、フータローは惑わされて、四葉の運命を奪ってしまった。

ああでも、フータローにあんな顔をさせるなんて、どうして六年前に会ったのが私じゃないんだろう。

同じような私達に、どうして、どうして。

私だって、私だって……

「う……ああ、そ、そうだ……私……」

私は自らを顧みるうちに、ある事に気が付いてしまった。そのことを自覚してしまうと、胸が切り裂かれたように激しく痛む。

私の中からフータローがなくなったら、何も無い、つまらない女なんだ。

勉強だって、お父さんが教えてくれたみたいなの産休に育休が整った職場に行きたいからより頑張ろうと身に入ってる訳で、なぜそこに勤めたいかと言えば、それはいつか授かりたいフータローとの子供のためだ。今、その目標が消えてしまったら、また勉強を頑張ろうという気力が湧いてくるか分からない。

戦国時代の事が好きだからって、何になるだろうか。読書が趣味の人は、皆作家になるのかという質問がどれだけ愚かしいなんて、この歳になれば分かる事だ。学芸員なり、もしくは先生だったりになりたいのだろうか？ それにも、どうしたって勉強が立ちふさがるのにな。一つ、最近の私を思い出して、成したい小さな兆しを私の中に見つけた。それは料理だ。

二乃みたいにな上手くできなくて、石みたいだとか言われていたけ

ど、最近は姉妹の皆にも食べられる物を提供できるくらいにはなったんだ。これは目標に出来るだろうか。

「あ……あはは……これも……そうだ」

そして、思い返せばまた涙が止まらなくなってしまった。

料理をしたと思うようになったのも、フータローの女の子の好み
がそうだからじゃないか。

自分の中がこんなにもフータローの事でいっぱいなのは、普段だと
嬉しい事なのに、今はそれが嬉しければ嬉しいだけ心に深く突き刺さ
る。

結局フータローを取り去った中野三玖という人に残された物は、
しよせん素人レベルの歴史の知識と、あの綺麗なお母さんが残してく
れた、私自身が何かしたわけでもないけれど綺麗な体だけだ。

性格だって、一花のように人気者になれない、二乃のように友達付
き合いが上手くない、四葉のように元気で明るくなれない、五月のよ
うに真面目に何かに取り組めない。

なんて、なんてつまらない女なんだ。

こんな女、運命に負けたって当然なんだ。

「ぐすつ……こんな、こんなやつ……」

私はフータローを最初に好きになったという事以外に取り柄のな
い人だったんだ。

その取り柄も、六年前に四葉が出会っていたという事実だけで消し
飛んでしまう、とんだ砂上の楼閣だ。

私はフータローと付き合うようになった時に、これで二人は幸せに
暮らしましたとさめでたしめでたし、と童話のように締められる事を
無邪気に想像していたのかもしれない。でも違うんだ。私は、運命の
前に敗れ去るかませ犬でしかない。

四葉はフータローを変えたんだ。そして、彼が変えた生き方によつ
て二人の道は再び交わる。そこに私というお荷物は乗っかっていた
にすぎない。

「なにが、ずっと……ずっと……」

少し前までの私は無敵だった。

百年の先さえ見通せる気がしたんだ。フータローが隣にいるという、それだけをよすがに。

でもそうじゃないなら、未来なんて分からない。明日の事すら見えなくて、立ち上がる足元もおぼつかない。目の前だつてまともに見えない私に見えるのは、閉じて都合のいい私の内面に広がる夢だけ。

そこにはフータローが笑っている。それは何て都合のいい夢なんだろう。何て幸せなんだろう。まどろみのようにふわふわと心地よくて、そのぬるま湯に浸かっていたい。君も私の事をそういう風に思っているかな。少し前までそれは夢ではないと思っていた。永遠を誓う夫婦のように、その光景を私とフータローで作るんだと思っていた。隣にいるのは中野三玖なんだ、と。

でも、きつとフータローはあの愛おしい眼差しを四葉に向ける事を選ぶ。それが六年前に始まった運命の円環の、綺麗な結びだから。

私の都合のいい夢に、都合のいい言葉を唱えたい。君は都合よく笑っていてよ。それが都合のいい女の、最後の望みだから。

——愛してるよフータロー。君だけの事を、永遠に

運命を定める僕の沙汰

談話スペースで学生たちがたむろしている。繁華街の最中にあるほどの騒がしさに、俺は顔をしかめそうになる。

「遅いな」

壁にかかっている時計を見れば、ここに来てから二十分は経っている。いつもなら、三玖からの呼び出しに応じて出たら先に待っている事がほとんどなのに。

「フータロー」

俺を呼び掛ける声に振り返る。そこにいたのは普段から俺をそう呼ぶ女の子ではない。肩にかかるほどの髪は三玖より短いから、それを見ればそれは明らかであって。

「なんだ、四葉か」

迷いなくその名前が口をついて出て来た。

ししし、といつもの歯を見せる笑いをして、嬉しそうに腹のあたりを小突いてくる。

「さすが上杉さん。もう姉妹の見分けはお手の物ですね」

「お前は分かりやすいからな」

最近になって、俺はこいつらの爺さんが言っていた言葉が分かるようになっていた。確かにこいつらはそっくりだが同じじゃない。わずかな表情の作り方、声の調子、さりげない仕草。それは三玖という一つの基準が出来たからなのか、姉妹すら分からなかった林間学校の時のように、完璧に成り済まそうと変装でもされない限りは見分けられる自信がある。二乃がうるさい顔で三玖が薄い顔なら、一花が華のある顔で五月がかしこまった顔だろうか。目の前の四葉はストレートに元気な顔と言えいいのか。

「で、お前はどうしたんだ？ 三玖は一緒じゃないのか」

ここに呼んだのは三玖で間違いないはずだが。

「三玖が背中を押してくれたんだ」

四葉の口調が変わる。

いつもの能天気にも見える明るい顔が少し違った物になる。

無垢な子供のよ様な表情に、俺は昔を思い出していた。

「風太郎君」

何もかもが流れ落ちたよ様な、そんな涙をやつとの事で止めると、私は力ない足取りで姉妹に顔を見られないようにベッドにもぐりこんだ。

「三玖もう寝るの?」

「……うん」

何も考えたくなかった。

このまま泥のように眠って、そのまま目が開かなければいいとすら思う。

四葉、ちゃんとフータローと話しが出来たかな。

フータロー、会いたがっていた女の子と会えて、どんな顔してるかな。

「ひつう……ダメ、考えちゃ」

枯れたと思っていた涙が、焼けそうになるほど熱くなった瞼から零れ落ちて枕を濡らす。胸が張り裂けそうだ。でも、こんな思いをフータローを好きになった一花に、二乃に、そして四葉にさせていたんだ。災禍はあざなえる縄の如し、という言葉のように、目のくらむほどの幸せを味わった私は、何も見えないほどの絶望の淵に落とされた。運命という言葉がこんなにも憎らしいと思っただ事はない。

それは私とフータローの事だと思っていた。けど、より運命的な出会いをした人がそばにいたら、なんて空々しい言葉なんだろう。

思いでも、出会った時からの愛の深さでも負けたよ様な気がして、諸刃の剣が私に食い込む。傷ついた心からの出血は、涙になって頬を滴り落ちる。

こんな事を考えたくない。だから、早く眠ってしまいたいのに、フータローを思い出すと未練がましく胸が高鳴る。

嬉しくて、幸せだった気持ち。そしてそれを手放さなくちゃいけない痛み。

失恋は人を強くする、なんて言うけれど、それはきつと正しい。こ

んな気持ちを乗り越えた人は強いに決まっている。私は、乗り越えられるか分からないけど。

「フータロー……」

胸の内にある気持ちを吐き出すように、その名前を口に出した。何回も口にするうちに、私の中からフータローがいなくなってくれんじやないかと、下らない妄想のような事をする。

そして、その浅はかさに後悔するんだ。

「フータロー……うう……フータロー……」

言葉には力がある。上杉風太郎という言葉は、私の全てを変えて、他になにもいらないうときえ思うほどの力を持っていた。

彼は私の全てだった。いや、だから私はダメなんだ。

「フータロー……」

「どうした？」

妄想もここに極まれり、と言った具合だろうか。フータローの声が聞こえる。もしかしたら気が付かないうちに眠ってしまったって、ここは夢の中かもしれない。

「フータロー」

「だから、どうしたんだ」

夢の最中に、頭を撫でられる感覚がして、信じられない気持ちで顔を出した。

「……うそ」

そこには一番会いたくて、一番会いたくない人がいる。

「何が嘘なんだ。せつかくこうして来たってのに」

いつものような、重く垂れこめた髪からのぞく鋭い目が私を捉えていた。

「だって、四葉は？」

「ああ、会って来たぞ。お前が会わせてくれたんだろ。ありがとな」

私に会いに来てくれたのかな。いや、フータローはなんだかんだ義理堅い性格だから、面と向かって私にお別れを言いに来たのかもしれない。

「なんで泣くんだ」

「え……う？」

そう言われて私は自分の頬を触る。そこにはしつこいほどに刻まれた涙の川が、もう一筋形作られようとしていた。

「……これは、その、安心の涙だから」

「そうか」

フータローは深くは聞いてこない。それは優しさなのか、それとももう私と深く言葉を交わさないとこの事なのだろうか。

ダメだ、何を考えても後ろ向きな事ばかり。

「四葉をほつたらかしにしたらダメだよ」

「三玖、お前の方が放っておけない」

フータローはそつと頭を撫でてくれた。その優しさに嬉しくなつて、そして悲しくなる。

「せつかく、フータロー、思い出の女の子に会えたのに……」

「だから言っただろ」

大好きな手が、私の頬に触れてくる。涙が拭われて揺らめいた視界が晴れた。

「思い出は大事だが、三玖ほどじゃない」

「だって……だってフータロー、思い出の子の話をする時に、好きな子の話をするみたいだった。フータロー、四葉の事が……好きなんじゃないの？」

「そうか。三玖はそんな風に思ってたのか」

瞬きする間に、フータローの顔が目の前から消えた。かと思うと、体を包む温かい感覚に心奪われる。フータローが抱きしめてきたんだ。

「ダメだよ……フータローの、フータローの浮気性……」

「酷い言いがかりだ」

抱きしめて来ていた手が緩められて、フータローは私を真正面から見据える。

「このまま誤解されてたくないから言うが、俺は昔会ってた女の子の事が三玖だったらしいな、と思ってたんだ」

「そんなの……」

「分かってる。誰かと間違えるなんてのは、お前達が嫌う事だから、だから言いたくなかった。だが、お前をそんな気持ちにさせてしまったのは、俺の女々しきのせいだ。だから謝らせてくれ」

「謝るなんて……謝らなくていい。私には何も無いから、四葉みたいにフータローを変えてあげられないから……だから四葉との運命を選んであげて……」

「お前、酷い女だな」

フータローは呆れたように笑う。そうして、その大きな手が私の肩を掴んでくると、いたたまれないような気持ちにさせられてしまうんだ。

「私は……フータローから貰ってばかりで、何も、何もあげられない。ダメなんだよ、酷いやつなんだ」

「そうじゃなくてだな……三玖、人をこんなに好きにさせておいて、他の人を選べなんて酷いじゃないか」
「え……」

「確かに四葉との出会いと再会は運命的かもしれないが、俺は運命を好きになったんじゃない。三玖、お前を好きになったんだ」

好き、という言葉に胸がずきずき痛む。その言葉に息が出来なくなつて、どうにもならない口が、きつと間抜けに開いている。

「お前はいつも俺を気にかけてくれるじゃないか。大丈夫？つて。俺はそんなお前の優しさを好きになったんだ」

「優しいなんて……皆、皆優しいよ。私じゃなくても……」

「お前の優しいは、俺にとって特別だ」

強い光を宿したフータローの瞳が、私を射抜いて来る。その瞳に貫かれて死んでしまえたらいいのに。

「お前が俺を好きになってくれて、好意を形にしてくれる。その真つすぐな気持ち俺を変えてくれたんだ。なあ、俺はお前の事が好きだ。一緒にいたい。三玖は何もあげられない、何て言ったがそんな事はない」

壊れ者を扱うように、フータローの優しい手つきが私の髪をかき上げた。そして、露わになった額に口付けて来た。

「お前は俺に、人を好きになる気持ちをくれたんだ。嫌われたり、憎まれた訳でもないのに別の人の所に行けって言われて、はいそうですかってならないだろ」

「じゃ……じゃあ嫌い。嫌いだから、ずっと大切に思ってた四葉の所に行って」

「くくっ……ははは、そうか、嫌いか」

そうやって軽く笑うと、私に触れていた手を離して、近づけていた体を離す。それがそのまま心の距離のように思えて、切ないため息がこぼれそうになるのを唇を固く結んで堪えた。

「じゃあ嫌いな奴にこんな事をされようとしたら、当然逃げるよな」
フータローはこちらにゆっくりと前かがみになってきて、体を近づけて来た。段々と大きくなってくるフータローの姿に、私の心にいる彼の存在も大きくなってくる。

あと顔一つ分に近づいた所で、フータローは目を細める。何をするか、なんて、誰かに呆れかえられる程しても、飽きる事なんてない一時を、分からない訳がない。

「嫌いなんだろ？ 早く逃げろよ」

その突き放すような言葉を受けて、私は心がざわめく。もうすぐそこまで迫ったフータローを、私はきちんとこの手で突き放さないといけないんだ。それが四葉の運命を奪ってしまった私の償いだから。

「三玖」

けれど、その短い一言が私の全てを揺さぶる。きりきりと痛む胸の内から、どうしようもない程に抑え込んだ気持ちが溢れそうになってしまう。

嫌いだ、という言葉は何て苦しいんだろう。

大切に積み上げて来た物を粉々にしてしまいう大槌を振るった事で、関係を壊そうとした私にこんな風に優しく接してくれるフータローが、

やっぱり、どんな事を言っても、どんなに偽ろうとしても、どんなに諦めようとしたって……

「大好き……」

唇が触れ合う。

柔らかくて暖かい、フータローの心に直接触れたみたいで、悲しい気持ち溶かされていく。

雷のようにキスの心地よさが頭を真っ白に焼いて、体中が燃える。どきどきと跳ねる心臓が、胸を突き破ってきてしまいそうだ。

「三玖、お前じゃなきやダメだ」

目を開けたフータローは、優しく笑ってそんな魔法を唱える。

それは姉妹と一緒にたにされがちで、なのに優れた自分がない私にとってどんなに嬉しい言葉だろう。自分が自分だけでいるだけで認めてくれる。そんな人が自分の大切な人という事は、きつと奇跡に違いない。

「大好き……大好きだよ、フータロー……ひつく……」

枯れたと思っていた涙が溢れてくる。大好きなフータローの顔が滲んで見えなくなる前に、胸板に飛びついた。フータローに抱きしめ返されて、その熱さに包まれる。

「三玖」

優しく名前を呼ばれるだけで、それだけで例えようもなく嬉しかった。自分の存在をこの世界に浮き上がらせてくれる、そんな特別な響き。

「うう、ああ……大好き……ぐすつ……愛してるよ、フータロー」

「俺も好きだ。お前の事を愛してる」

「ごめん、ごめんね。やっぱり嫌だ」

「なにが嫌なんだ？」

「フータロー、いなくならないで。ずっと前に会っていて、運命だったって言われても諦めたくないよ。運命にだって負けたくない」

自分が勝手な事を言っただけ、勝手な事をしていて分かっていないけど止められない。私はフータローの思い出を越えたくて、滅茶苦茶に口付けた。

涙が流れて入った口がしょっぱい事を、フータローが交わしてくれた舌が教えてくれた。

「三玖、お前の口塩辛いぞ。相当泣いたんだな」

「ぐ……ぐめん」

「謝るのは俺だ。お前達はそつくりだから、三玖は自分じゃなくても良い、なんて思ったのか？」

「ぐすつ……うん」

きつとそうだ。私は怯えていた。私なんかよりも優れた姉妹に唯一勝てると思っていたフータローを好きな気持ち。その気持ちに、強力な、運命的な裏付けがある事に、それすらも負けてしまうのではという怯えに震えて、なら譲ってしまおう、最初から私のものじゃなかったんだと諦めてしまおうとしたんだ。

「俺を見くびるなよ。もうお前ら五人の事は分かるんだ。分かった上で、三玖、お前を選んだんだ」

「ふ……フータロー、ほんと？」

「本当だ。だったら試してみろよ。何回だって、誰に変装したってお前を見つけてやる。だから人に譲るとか、そういう事を言うのを止めてくれ」

なんて嬉しいんだろう。嬉しくて、嬉しすぎて、息もできないほどに胸が締め付けられる。

「うっう、あ……フータロー、大好き……大好き！」

抑えきれない気持ちのままに、フータローの首に抱き着く。全てを飲み込みたいとキスをする。

フータロー、あなたの全てが欲しいよ。そのかわり、私の全部をあげるから。

「んっ……ふあ、ちゅっ」

口付けが交わされる度に、心が通じ合った心地よさに、頭の奥からどろどろに溶けてしまいそうなほどの、焼け付くみたいな電撃が体中を駆け巡る。

「んんっ……んんくっ」

絡み合う舌から伝わり落ちてくる唾液を飲み込んで、口の中が自分のモノじゃないモノで満たされている甘やかさに、私はもつと夢中になってキスをする。

「もつと……フータロー、もつと……」

もつと、もつと、そう求める。

失っていたかもしれない未来が目の前にあつて、そばにいてくれる事にまた涙が流れて、流れ出た物を埋め合わせるようにフータローが降らせてくれるキスの雨を受け止めた。

「ひゃっ！」

フータローの手が、パジャマの裾から入ってきて、男の人の熱い手が、私のお腹をなで上げた。その撫でられたお腹の奥からじんじんと湧き上がってくる熱に、戸惑いの気持ちは不思議と無かった。

大好きな、愛している人とそういう事をしたのは普通な事だ、と私はフータローを欲しがっていることを素直に受け止めた。

「三玖……」

フータローの私を見つめる目が、貫くような物に変わって、けどその熱っぽい視線は私を求める証だ。

私はフータローのお腹をまさぐり返す。割れた腹筋に指を這わせると、その男らしい体にこれから組み伏せられるのだと想像して、体の奥がますますもって熱くなる。

「三玖……」

「フータロー……」

互いに見つめ合う瞳は求める物を何より語っている。

私達は触れたら決定的な物になるキスをしようと顔を近づけていく。

触れ合ったら最後、絞られた引き金によって弾かれた撃鉄が打ち付けて火をつけて放たれる弾丸のように、私達はきつと止まらない。

吐いた息が髪を遊ばせる。産毛すらもそよそよとなびいて、あと、ほんの数センチ……

「そこまで……」

バン！ と開け放たれた扉から、いきなり飛び出してきたのは真っ赤な四葉だった。

「あの、えっと、仲直りしたのはいい事なんだけど……仲良しすぎるのは、ちよつと、今から私達もこの部屋で寝るし……」

そんな恥ずかしさにもごもごしている四葉を見ると、今更なが

ら私にも羞恥心が湧き上がって来た。

すぐそばにいるフータローを突き飛ばして、ベッドの一番端まで逃げる。

むっと不機嫌になったフータローは、けれど四葉の言葉の正しさに領いて立ち上がる。出て行く前に、私の頭を一撫でして一言、

「明日、ちゃんと隣にいろよ」

と囁いてくるから、体中の力が抜けてベッドに深く身を沈めた。隣に、だなんて何て嬉しいんだろう。

「えーつと……良かったね、三玖」

真っ赤になつて照れた四葉が、誤魔化すように頬を掻いた。私も少し気まずいような気持ちになる。

「うん、あの、ごめんね四葉」

「どうして謝るの？」

「だって、ずっと好きだった四葉にフータローを返さなきゃって、そう思ったのに」

「そんな事、上杉さんは望んでないよ」

そばにきた四葉は、そつと私の手を取った。慰められてばかりだな、私。

情けない。四葉の過去を知って、その思いを知った。本当は今の私みたいに泣きたいはずなのに、こうして私を慰めてくれる。なんて強いんだろう。

「上杉さんは言ってたよ。ずっと頑張ってる三玖の隣で、自分も頑張りたいって」

フータローがそんな事を……。

そして、四葉は思い出し笑いを一つして、握ってくれている手の力を込めた。

「私達の事は好きだけど、三玖の事は愛してるって。こんな事、大真面目な顔して言うんだもん。だから、三玖はその同じ気持ちを返してあげて。それが一番なんだよ」

四葉が屈託のない笑みを浮かべている。それは私達が全くと言って良い程そっくりで、同じような気持ちを共有していたころの笑顔を

思い返させる物だった。

「風太郎君には、三玖が必要だもん」

きつとそれは六年前に読んでいたフータローへの呼びかけだ。幼さの残る気がする呼びかけ方に、私は奪ってしまった恋に申し訳なくなる。

「ごめん……ごめんね」

「ううん。許さないよ」

言葉の物騒さとは裏腹に、四葉は優しく目を細めて、赦しを告げる天使のように見えた。

「風太郎君とずっと一緒にいないと、許さないから」

「よつば……」

「私にごめんねって思うなら、ずっと一緒にいて。そうしたら、私は永遠の恋人を繋いだキューピッドだね」

また泣いてる、と言われながら、目元の辺りを冷たいタオルで拭われた。

「三玖、隣にいるのが、似ている私達の誰でもいいんじゃないかって、そう思うのは辛かったよね。でも違うんだよ。風太郎君は、私達が誰かちゃんと分かって、そして三玖を選んだんだよ」

さっきのフータローの言葉がぶり返すように、頭の中で痺れるほどに響いた気がした。

——お前じゃなきゃダメだ

「うええ……」

嬉しくて、自分が恋をしている事を許されたくて、ごめんねって、申し訳なくて、訳が分からない心が悲鳴を上げるみたいに、私は嗚咽を漏らす。

泣きすぎてからからの喉が擦れるような、可愛くない泣き声を部屋中響かせて、私は優しい天使に赦しを乞うんだ。

ごめんね。

ありがとう。

「いいんだよ、三玖。幸せになって。それが私を幸せにしてくれる。こんなに嬉しい事はないんだから」

紛れない本心に

旅先においてかかる病魔がある。

それは己を律している人でも、不意にかかってしまう事もあって、その防ぎ方は現代医学に置いても解明されていない。

子供よりも大人がかかると質が悪く、人が多い程、病状は深まりやすいと言われている。

人、それを悪ノリと言う。

「キウイはすっぱいはい。キウイはすっぱいはい」

「やめろー！ 私はすっぱくなーい」

俺が朝食を済ませるために大部屋に入ると、まず見えたのがそれだった。

一花と二乃と五月がキウイを片手に、上の文言を吐きながら四葉を壁際に追い詰めていた。その珍妙な光景に俺は面くらうが、周りのクラスメートは面白そうにそれを眺めているだけだ。俺は一人蚊帳の外な三玖に尋ねた。

「なあ、あいつら何してるんだ？」

「あつ……フータロー」

三玖が上目遣いに俺を見てくると、ボツと音が立ちそうなほど顔が赤くなった。それを見ると昨日の事を思い出して、俺の顔も熱くなつて赤くなつたに違いない。

「あー……三玖」

俺は空いている椅子を引き寄せてそこに座り、三玖に目線を合わせてゆっくりと語り掛けた。間近に顔を見ると、目の周りが少し腫れぼったくて、赤くなつてしまっているのをファンデーションで隠しているのが分かった。

そんな顔にさせたのは俺か。

「ちゃんと隣にいるよ」

その言葉をどう受け止めたのだろう。三玖の目が次第に潤んできて、瞼のふち一杯に涙が溜まる。

「うん」

三玖は椅子から腰を浮かせて、俺に倒れこむように抱き着いてきた。その細い肩が、少し震えていた。

「今日は目一杯楽しもうな」

「うん……」

顔を見つめ合わせると、三玖は微笑む。その息が詰まりそうなほどに美しい顔をそつと一撫でした。

「あーほんと朝っぱらからー！」

「もがっ」

こちらに気が付いた二乃が、ずかずか近づいて来ると、その手に持っていたキウイを一匙俺の口に突っ込んできた。

「……甘い」

「やったー！ 私はずっぱくありません！」

俺の味の感想に、なぜか四葉はおいおい泣く素振りまでして喜んでいた。俺の知らないネタで盛り上がるのやめて。

「良く眠れたか？」

「眠れてないからこんな奇行に走ってるんだよ」

「変な事してる自覚はあるのな」

まず大口を開けて反論してきたのは一花だった。過去に夜更かしはお肌の大敵、みたいな事を言っていたから、見られる仕事でもあるし怒っているのだろう。

ひとしきりふぎけて満足したのか、ビュツフェ形式の朝食を今度はふぎげずにとった。

「フータロー君そんなにお肉ばかり取って」

「たまにはいいだろ。それより五月、お前皿に盛りすぎじゃないか？」

「そうですか？ まだ二皿目ですけど」

「いやより悪いわ」

食事の席につきながら、いつものように会話を楽しんだ。そうすると、当然出てくるのは今日のコース選択の話だ。

「良かったのか？ 皆Eコースを選んだそうだが」

「何よ、文句あるの？ 二人つきりになれなくて残念かしら、フー君は」

「そんな事言っていないだろ」

どうも容赦ない攻めを浴びせかける二乃には分が悪い。言い返す言葉を探す時間稼ぎにオムレツを一口放り込んだ。

「皆のしたい事の最大公約数を選んだんですよ、上杉さん。有名な撮影場所もたくさんありますし、買いたい物もできますし、武将の鎧兜姿も見れますし、食べる所だってあります」

「四葉、お前から最大公約数なんて言葉が出てくるなんてな」

「日々成長する女ですからね、私は」

自慢気に胸を張る四葉が小難しい言い回しをしている事に、俺は不思議な感動を覚えた。

「人間って素晴らしいな」

「これくらいでしみじみしないでください」

「そろそろ食べるのは終わり。もうここに帰ってこないんだから、荷物をまとめないと」

一足先に食事を終わらせた一花は、一つ手を打って皆を急かした。気が付くとさつきまでいたクラスメート達は、もう疎らになっていく。一花の言う通り荷物をまとめに部屋に帰ったのだろうか。

「分かった。じゃあ後でな」

更に乗せていた物を雑にかきこんで水で流し込み、トレーを戻した。

じいっと物を言わず俺を見つめてくる三玖に苦笑をしながら、頭を撫でてやる。

「また後でな」

「……うん」

嬉しそうに微笑みながら、その目がキラキラと喜びいっぱい輝いているように見えるのは、俺の鼻根目だろうか。この顔を悲しみにゆがめさせた事、目の周りが腫れぼったくなるまで泣かせた事、それがまた俺の胸を締め付けた。贖罪の気持ちを込めて、そっと髪をかき上げる。

撫で続けた三玖があわあわしだしたのと、姉妹からの視線が厳しいものに変わったのを感じて退散した。

部屋に散らばった荷物をかき集めて鞆に収める。親しみを抱き始めていたホテルの一部屋をぐるりと見渡して、忘れ物がないか確認した。

修学旅行もこれで終わりか、と思うと寂しいような感情が胸を突きあげる気がする。三玖を泣かせてしまったからそう思うのか。それもあるが、きつと俺はこんな風に出かけるのは好きなんだろう。いつかまた三玖と来たいと思う。その時は、終始笑顔の旅にしたいと思うのだ。

「上杉、行こうぜ」

「ああ」

感慨にふけるのはここまで、そう頭を振って荷物を詰めたキャリーバックを引いて扉の方へ向かう。

全生徒がフロントに集まり、部屋のカードキーを返却する。俺は学級長として男子部屋のカードキーを回収してまとめて担任へと渡した。チエックアウトを済ました俺達は、すぐに選択コース別のバスに乗り込む準備をした。

キャリーバックをEコース行きのバスに乗せて、いつの間にかちやつかり隣に陣取る三玖と一緒に乗り込んだ。

話していると、今日の三玖はどことなくおかしいような。何かを忘れるように饒舌に話したかと思うと、不意に黙ってじつと俺の顔を見つめてくる。

「どうした、何か俺の顔に付いてるか？」

「ち……違うよ」

「じゃあ……」

何だよ、と言葉を続けようとした所でバスが停まり、バスガイドからの放送がかかった。

『修学旅行最終日、Eコースを選択された皆さま、本日の目的地映画村に到着でございます』

「ほ、ほらフータロー、着いたよ。早く降りよう」

「あ、おい」

逃げるように立ち上がった三玖は、下車する人波に乗ってさっさと降りてしまった。昨日のあれこれで気持ちが悪く落ち着いてないのだろうか。しかし普通に話してはいるし、時間が経つにつれて普段の三玖に戻るだろう。

前日に確認していたが、改めてしおりとパンフレット二つを見ながら今日の予定を確認した。このあとすぐに劇があつて、皆はそれに行くようなので俺達も見に行く事にする。

家にテレビのない、見る娯楽に触れる機会に乏しい俺にとっては、劇の内容はありきたりかもしれないが楽しめた。言つてしまえば良い侍が悪い奴らを懲らしめる程度の物だが、ここの持つ雰囲気、役者の演技の力に、終わった後にすれ違う人達は面白かつたねと口にする。

「面白かつたですね」

劇場から出ると、四葉は殺陣の真似事をしながらさきほどの劇を思い出しているようだった。運動神経が良いからか、機敏な動きは様になつている気がする。

「私達もああいふ恰好しようよ」

「いいねー」

四葉は正眼の構えを解いて一花と仮装している人を見てはしゃいでいる。町娘に侍、浅葱色の羽織は新選組の隊士の服だ。三玖なんかは大きな目をキラキラ輝かせて、散策する人の流れを見送っている。「コスプレとか、恥ずいだらろ」

しかし前田は乗り気ではないようだ。いつもの三白眼をしかめっ面に歪めて、怖い顔がより怖くなる。

「郷に入つては郷に従えだよ。上杉君はするよね」

「どうだか」

まあかくいう俺もノリノリという気分でもない。ここまで散々旅の恥をかき捨てて来た身としては、何言つてんだこいつと言われでもしたらぐうの音もでない訳なのは重々承知の上なのだが。

「似合うと思うのに、もったいない。三玖さんもそう思うよね」

こいつ、それは反則だらろ。

武田の言葉を聞いた三玖から、嬉しそうな顔色がするすると抜けていき、不満を訴えたい口を尖らせながら俺を上目遣いに見上げてくる。

「嫌なの？ フータロー」

「いや、そういうあれじゃ……」

「お金？ お金なの？」

「それも……そういういえばいくらかかるんだ？」

「五千円は軽く」

「うげっ」

軽く、という事はオプシオンをつけると値段が跳ねあがる可能性があるのか。それだけあればらいはに豪勢なお土産を買ってやる事だっけ出来るだろう。

「むむ……」

しかし、こう期待に満ちた目で見つめられると弱い。可愛い彼女からの物ともなればなおさらで。

「分かった、やってやる」

「うんっ」

ぱつと華やいだ三玖の顔に絆されてしまうのは、惚れた男の弱さというやつで、そんな弱さに俺は苦笑してしまうが、きつと大切に思う気持ちからくるそれは、悪い事じゃないはずだ。

「そうそう。思い出は後で欲しいってなっても買えないんだから、こういう機会にケチケチしないの」

二乃の言葉はもつともだろう。修学旅行に来る前に親父に散々言われたが、迷惑をかけない範囲で引くほど楽しめ、との言葉は旅行という物を楽しむ本質かもしれない。良い大人らしからぬ見た目でなければ、もつと俺に響いたのだろうか。

皆で扮装の館に行くとき、係の人にしまったま驚かれた。最近一緒にいすぎて忘れていたが、五つ子なんて天文学的な確率の下に生まれてくる存在なんだったな。

俺達男どもはそんな横を抜けて、先に扮装をして待つておくことにした。

着替えを終えた俺は、外に出ると晒される視線に何とも言い難い気恥ずかしさのような気持ちを抱いた。

俺の着ているのは新選組隊士の服だ。浅葱色の羽織は新選組の大きな特徴だが、始め難色を示されたのいうのも頷ける。単純に目立つのだ。それに後世に生きる俺達は、何となく抱いている新選組Ⅱカツコいいの構図が頭に出来上がった上でこの恰好を見るのだから、色眼鏡がかかって見るのもしようがないのではないだろうか。つまり何が言いたいかと言うと、

「知らずに見たらダサくないか？」

「そんな事ない。カツコいいよフータロー」

「うお、いたのか」

「失礼な」

突然かけられた声に驚いて振り返ると、舞子に扮した三玖がむくれてこちらを見ていた。

「お前が最初か」

「うん。五人は時間がかかるって」

「まあそれはそうか」

三玖の恰好を、頭からつま先まで一通り見る。頭には花の髪飾りをつけていて、風でゆらゆらと、桜が舞うように、あるいは藤の花が揺れるように揺れている。華やかな花柄の着物と相まって、その立ち姿は一輪の花のようにも見える。

「似合ってるぞ」

俺がそう言うと三玖は笑った。花が咲いたようだ、と言うのは旅の空気に毒されすぎだろうか。

「フータロー」

ふわふわするような甘い色恋が頭をぼうつとさせる。その呆けた頭に、するりと三玖の声が入ってきて、俺は恋人を見つめた。

そつと小さな手が俺の手を包む。少し冷たくて、しなやかで柔らかな女の子の手だ。思わずどきりと胸が跳ねて、むずがゆいような、こっぴどかしいような気持ちに今更ながらさせられる。

三玖は柔らかく微笑むと、嬉しそうにこう告げるのだ。

「お慕い申し上げております」

三玖の深い海のような青い瞳が、慈愛に満ちて俺を見つめてくる。その瞳が俺だけを映してくれる、こんなに幸せな事はないだろう。

「俺もだ」

恥じらう真っ赤な顔に、そのままキスしようとして、そしてここが往来のど真ん中な事を思い出して手の力を込めるにとどめておいた。物珍しそうに見てくる視線から逃げて、集合場所へと足を運んだ。

「やあ、二人とも。よく似合っているよ」

「他の四人はどうしたんだ？」

先に衣装の着付けを終えていた武田と前田が、軽く手を振りながらこちらに来た。

武田はお奉行の恰好に身を包んで、鬘のカツラをかぶっている姿も不思議なほど似合っている。

前田は黒づくめの服に、黒い頭巾をかぶって、これでもかというばかりに、あからさまに忍者だった。世間には紛れるかもしれないが、昼間においては逆にとても目立つ。

「一気に八人もいったからな。全員同時にとはいかないだろ」

「そりゃそうだ」

前田は頭巾にくぐもった声で納得した声を漏らす。こいつは目つきが鋭いから目だけ出ているとより怖いな。

「お前子供に近づくなよ」

「どういう事だコラ」

俺達は待つ間、そんな軽口を叩きながら時間をつぶしていた。

ポンポンと、ある時横を跳ねる何かが見えた。

「Excuse me」

横を通り過ぎたのは鮮やかな鞆だった。離れた所にいた外国人旅行者家族の、ブロンドの子供が手を振っているのだから彼の物だろう。

「私が取ってくる」

言うやいなや、からからと履物を鳴らして三玖が駈け出して行った。

「こけるなよ」

追いかけていく三玖は角を曲がって姿を消した。

「NINJA!」

いつのまにかこちらに来ていた金髪の少年は、前田の恰好を見てニンジャニンジャとはしゃいでいた。

『写真撮ってあげようか?』

『いいの?』

『もちろん』

武田は流暢な英語で少年に話しかけると、彼からスマホを預かった。

「おい何て言ってたんだ?」

英語に頭がこんがらがった、みたいな顔をしながら前田は俺に聞いて来る。

「ニンジャと写真を撮りたいんだとよ」

「何で俺が……」

と渋る前田の心境などお構いなしに、少年は期待に満ちた真っ青な目をニンジャに向けている。さしもの前田もその透き通る目にやられたようだ。胸の前で印を結んで撮られる準備は万端だ。

嬉しそうな少年に応じるままに、刀を抜く仕草に、手裏剣を投げるような素振りをしてやっている姿は、微笑ましくもあり、しかしどこかおかしい。

「笑うなコラ」

「前田君。笑ってくれないかな」

「頭巾かぶってるんだから表情は関係ねえだろ」

少年は一通り写真を撮ると、満足気にスマホを受け取り写真を一枚一枚確認していた。

そういえば、そこそこ時間を使ったのにまだ三玖が帰ってきてない。

「ちよつと見て……」

「ごめん。皆と話してたら遅くなっちゃった」

「来たか」

手に鞆を持った三玖が、少し息を切らしながら帰ってきていた。少

年に鞆を返すと、彼は笑った。

「アリガトウ」

「どういたしまして」

くすりと笑って握手を交わすと、少年の白い頬が少し赤い色になっているのが分かった。

「三玖、皆はこっちに來てるのか？」

「え？ うん、そうだよ」

話しかけて三玖にこちらを向かせた。こんな小さい子に、と自分でも馬鹿らしくなるが、どうもこういう感情に慣れないし、慣れたくないと思う。

「三玖、鞆渡せた？」

建物の角から声が聞こえた。この話し方は四葉だ。

「No way……」

少年がポカンと開けた口からそんな言葉を漏らした。

「お、フータロー君似合ってるじゃん」

「お腹が締め付けられて苦しいです」

「もうずっとそうしてたら？ 食べる量が減って良いかもね」

「二乃さすがに可哀そうだよ」

角から四人の女の子が出てくる。ただの女の子ではない。三玖も合わせて五つ子だ。

「Oh My God!!!!」

ここまで人間の目つて見開くんだな、と驚いてしまうほどに目を真ん丸にした少年は、爆発するような大声を出した。本場のオーマイゴッドである。

何事か、と思った少年の両親はこちらに駆け寄って来た。

そして、

「Oh My God!!!!」

少年と全く同じような表情を作ってそう叫んだのだった。

「し〜」

一花は一指し指を唇に立てながら、一步その外国人家族に歩み寄った。ゆつくりと、少ししなを作りながら歩く姿は、何も言葉が出てこ

ないほどに絵になっていた。

うつと三人は息を呑んで、一花の所作に釘付けになっている。

「I'm NINJA」

「おいしい！」

思わず俺は一花の頭をはたいた。

「いたー！ なにすんのフータロー君」

「なにすんのはこっちのセリフだ。お前とんだ嘘つきすぎるぞ」

俺は聞いていた外国人家族を指さした。彼らはアメージングシリアスリイと口々に言いながら、少年なんか目に涙すら浮かべている。

『ニンジャに会ったって皆に自慢するんだ』

彼らにとつては影分身した忍者に見えたに違いない。

「違うから！ 私達ニンジャじゃないから！」

おそらくキリストが降臨した時に浮かべるであろう、最上級の尊敬な顔をして見てくる彼らに居心地の悪くなった二乃は、カタカナ英語で誤解を解こうとした。

「ウィーアークインタブレット！ クインタブレット！」

果たして忍者と五つ子はどちらの方が珍しいのだろうか。そんな何ら益する所のない思考を巡らしながら、目の前の光景をおもしろおかしく眺めていた。

テンション高く写真をせがまれたり、握手を交わしたりして、嵐のような家族が過ぎ去ると、まだどこも歩いてないのに皆がぐったりしていた。

「どこか行くか？」

「ちよつと休憩……」

五人がはあ、とどこか遠い目をしながらため息を一つ吐いた。ただでさえ目立つのに同じ恰好をしているからだ。とはさすがに言わないでおいた。

珍しく最初に回復した三玖がベンチから立ち上がった。

「二人で見えてきたら？」

扇子で扇ぎながら二乃はニヤリと笑った。見透かされている、というか俺が分かりやすすぎるのか。

「お言葉に甘えさせてもらおう」

「うん、ありがと。行こ、フータロー」

俺達は手を取り合い、二人で散策する事にさせてもらう。

底の高い履物に悪戦苦闘して、歩みの遅い三玖に合わせて江戸時代を模した街並みを歩いて行く。

俺はテレビを見ないので分からないが、時代劇に使われた建物とかもあるのだろう。嬉しそうな三玖を見ればそれくらいは分かる。

歩き疲れたのか、足を気にする三玖と置いてあつたベンチに座つた。細かい骨が張り巡らされた大きな和傘がさしてある。

一息つくくと、嬉しそうな声を出してゆつくりと話しだした。

「フータローあれ見て。奉行所として時代劇にも使われてる建物。ここには私の好きなものがたくさんあるから、フータローと一緒に見れて良かった」

三玖はそのまま周りにある物を指さしていく。好きな物を語る顔は、大きい目が光を取り込んでより可愛らしく見える。

「さつき渡つた橋もそう」

「それもドラマか？」

「うん。それとね」

せつかく座つたのに、三玖はベンチから立ち上がった。

「あれも好き」

指さしたのは漆喰塗りの建物。

「これも好き」

俺の上に差されている和傘。

「知ってるぞ。ずっと楽しみにしているのを見てたしな」

三玖は微笑むと、ゆつくりと、ゆつくりとある所を指さした。

それは……

「大好き」

俺の鼻先に指が突きつけられる。

金縛りにあつたかのように、俺の全てが止まってしまった。

大好き、の言葉が頭の中を駆け巡って、嬉しさに体の奥から熱が生まれる。

「知ってるぞ」

俺は突きつけられた手を取って、両手で優しく包み込んだ。

「だが……」

手を握ったまま立ち上がる。疑問を呈したそうな三玖は、小さく首をかしげて俺の言葉を待っていた。

「俺の方がお前を好きだって事は知らないだろ」

どきどきと、自分で言っておきながら緊張するように胸が脈打つ。三玖の言った言葉を紡いで、俺なりに返したのだが、その織った言葉の布の一反は、彼女の御気に召さなかっただろうか。

三玖は呆気にとられたように口を開けて固まっている。

「なんとか言えよ」

その言葉にぴくりと身じろぎすると、段々とその白い肌に赤色が増していく。小さく息を漏らして、もの言いたげな唇が震えている。「なにそれ」

突き放すような口ぶりに反して、三玖は一步ずつ俺に近づいて来た。赤い顔に、青い瞳が映えて、その美しい顔に触れたい、と思った。「私の方が好きだもん」

ぎゅうつと、三玖は俺の胸元にしがみついてきた。それを受け止めて抱きしめ返すと、震える細い肩がとても愛おしく思えた。

「大好きだよ、フータロー」

「知ってるぞ」

「ううん。分かってない」

いきなり、三玖は背伸びをした。求める物を追いかけるその動きで、何を求めるかと言えば、これも俺は知っているんだ。

「んっ……」

しゃらんと髪飾りが揺れる音すら聞こえてくる。それは普通なら聞こえる事のない、ほんの少しの小さな音。それすら聞こえるのは、すぐ傍に髪飾りを着けた頭があるからだ。

キスをして、その感覚だけが俺の世界になる。

柔らかい唇が触れ合うと、体中突き抜けるような雷撃にも似た感覚に捕らわれる。触れ合った箇所感覚が鋭敏になって、わずかに動く

唇の震えすらも感じ取る事が出来た。甘い女の子の匂いが、バカになりそうなほど俺の頭を揺さぶる。

「フータローと、いつもこうしたい私は知ってた？」

恥ずかしそうにはにかむ三玖に、俺の胸がうるさい。

「知らなかった」

そう言えば、三玖はもう一度背伸びをしてくる。閉じられていく瞼を見ながら、俺自身も目を閉じてゆっくりと近づいて行く。

ピコン

間の抜ける電子音に、俺達は二人だけの世界から引き戻される。先ほどの陶酔の極みのような気分は雲散霧消して、少し気ままずくすらなってしまう。

「も、もう時間だって。戻ろう、フータロー」

逃げるように、慌てて駆けだした三玖は、慣れない履物もあって足元がグラついた。

「おい、危ないぞ」

「え？ わー！」

倒れそうになった三玖の腕を掴むと、体勢が良かったので幸いにも俺も三玖もこける事は無かった。

「あ、ありがとフータロー」

「気を付けろよ。弁償なんてことになったら、いくらかかる事か」

「もう、私より着物の心配？」

間近にある三玖の体の柔らかさから目を反らすように、そっけない軽口を飛ばしてやれば、いつもの他愛ない会話が生まれていくらか心が落ち着いた。

扮装の館の前に戻れば、もう制服に着替え終わった皆が待っていた。

「遅ーい。五月ちゃんなんてご飯の時間があるかビクビクしてたんだからね」

「一花、その事は言わないでくださいと……」

「すまん」

いつものような気安い会話が起ると、平常な気持ちに戻った事に

安堵して、皆で昼食をとりに行った。

「うわ、早く食べないとバスの時間じゃない」

「もー上杉さんがのんびりしてたからですよ」

「だから謝ってるだろ」

慌ただしく昼食を済ませて、俺達はバスへ乗り込んだ。ありがたい先生のお小言を頂きながら席に座って、過ぎゆく映画村の景色を見送った。

「また」

隣に座った少し眠たそうな三玖は、袖を引いてきて言葉を促してきた。

「また来よう。今度は甲冑の着付けもしようか」

「うん……きつと似合うから見たいな。フータローの甲冑姿」

それを言うとう頭がこちらにもたげてきて、穏やかな寝息が聞こえて来た。その頭をそつと撫でて、未来を見るように遠くに目線を送った。

差し込んでくる光が温かくて、俺も思わず眠ってしまいそうだ。

こんなに温かい未来が待っていてくれるだろうか。

きつと、もつと冷たくて辛い事も待ち受けているだろう。

いや、馬鹿馬鹿しい。未来を、夢を考えるのは良いが、今から待ち受ける苦勞に気を落ち込ませるなんて利口じゃないな。何かの本で見たが、明日の苦勞は明日の自分に任せておけばいい。

それに、

「う……ん」

三玖が身じろぎして、その髪が俺の首をそよぐようにくすぐってくる。

隣にいてくれる人がいる。それだけで十分だ。

疲れたのか気が抜けたのか、バスに新幹線のほとんどを眠って過ごしてしまった。

一つあくびを噛み殺してクラスの点呼を取っていると、四葉に注意されてしまった。それくらい見逃してくれ、と文句でも言いたくなる

が悪いのは俺なので黙っておく。

「月曜から普通に学校あるから休むんじゃないぞ。それでは解散」

学年主任のその言葉で、修学旅行の全日程は終了した。皆はまだ日の高い平日の街に繰り出す気のように、コインロッカーに荷物を預けてでも遊びに行くようだ。

よくそんな体力があるなど感心半分呆れ半分に見ていた。

「ふあ……」

また一つあくびをして、帰って少し昼寝してから勉強しようと荷物を持ち上げた。

「フータロー」

「どうした三玖？ 今日くらい勉強は休んでいいんだぞ」

歩き出そうとした俺の前に、三玖は姉妹の中から躍り出た。リュックの肩紐をいじりながら何かを言いたそうだ。そう言えばこいつのキャリーバッグはどこ行ったんだ。

「じゃあ三玖のキャリーバッグは持って帰っておくね」

ゴロゴロと三玖のバッグを転がしているのは四葉だ。

「ちよつと待て。持って帰っておくってどういう事だ」

「もう、察しが悪いなあ」

何か呆れたような顔で一花は俺の肩を叩いてくる。いわれのない誹謗中傷では。とも反論しなかったが、いよいよ限界なほどに赤くなった三玖の方が気になったので、小さく声をかけて聞き出そうとした。

「三玖？」

「えつとね……フータロー」

そんな三玖は耳元にそつと近寄ってきて、囁く。

「フータローのお家行きたい」

その言葉に、どくと胸が甘く痺れるように疼いた。したい気持ちが膨れ上がって、寸止めを繰り返されて、というここ数日を思い出すと、優しいだけではいられない気がした。

耳打ちしてきた三玖は、文句なしに可愛い。可愛いが、だからこそ問題とも言おうか……

「……フータロー」

そんな目をして見てくるな。

「行こう」

「いいの？」

「何だ、いまさら」

「うん。ありがとう」

荷物を持っているので手は繋げなかったが、それでよかったかもしれない。どんな顔をして歩けばいいかわからない、なんて醜態を晒さずに済んだからだ。

鍵を開けて三玖を迎え入れる瞬間、言い知れない緊張のようなこわばりが俺の体を包んだ。

いやいや、もうすぐらいはも帰ってくる。それまでちよつとくつついてるだけだ。ちよつとだけ。

「フータロー、おかえりのキスして」

三玖は後ろ手に玄関の扉を閉めると、見上げてきていつになく大胆なお願いを口にした。

「馬鹿」

「むう……」

まったくこいつは。男の家に来て言うその言葉が、どんな意味を持つのか分かってしているのか。……分かっていいるから質が悪いのか。

文句の乱射が始まりそうな三玖から逃げて部屋の奥に荷物を持って行った。

そして部屋の真ん中の机に、一枚の紙と一枚の紙幣が置いてある。

○風太郎へ

悪いが泊まり込みの仕事が急に入ったので家を空ける。らいはも学校の行事で日曜まで帰ってこないなので飯は自分でどうにかしてくれ。君は生き延びる事ができるか。

と乱雑な親父の字で書かれたメモと千円札が置いてあった。最後の文は悪ノリがすぎやしないか。

はつと息を呑む音が聞こえた。隣に来ていた三玖も親父のメモを見たようだ。

「フータロー」

嬉しそうに、柔らかく笑顔をつくると、もじもじと身をよじりながら言った。その羞恥に染まった顔に、けれども抑えきれない期待が輝いているのを見ると、俺は言い知れない感覚に襲われる。

「一人きり、だね」

息が出来ないほどの気持ち胸の内にときめいているのは、きつとどちらもなのだろう、と疑うことなく思った。けれども、下らないとは分かっているのだが、あまりがつつくのもどうなんだと自分に言い聞かせて、ちよつと思いとどまる為に言う。

「三玖、そういう事言うの止めろよ」

「どうして？」

「どうしてって、分かるだろ」

「分からないよ」

三玖は、落ち着かない心の様に指先を弄ぶ俺の手を取った。

「お、おい」

そして、自分の胸に押し付けた。

いつまでも触っていたい柔らかさを手に収めている事に、頭が回らない。

「知ってるでしょ。私、馬鹿だから、ちゃんとやってくれないと分からないよ」

恥ずかしさを押し殺すように、笑顔を作る。そんな顔をさせているなんて、男として情けない事この上ない。

「だから、三玖」

俺はそこから手を離れさせて、三玖の少し震える両肩を掴んだ。

どこかから血が吹き出しそうなほどに速くなる鼓動を無視して、逸る気持ちを抑えて、ゆっくりと、ゆっくりと顔を近づけて、唇を触れ合わせる。

誰も見ていない状況に、キスだけで俺の感情が爆発しそうになる。

「お前としたくなるから、あんまりそういう事を言うな」

「じゃあ、言うのを止めない」

三玖の目は、固い決意に光っているようで、その瞳が俺を狂わせる

んだ。

「二人きりなんだよ。私はフータローと、そういう事したいよ?」

甘えるようにそう言いながら、三玖は抱き着いてきて、俺の背中に手を回してくっついてくる。

一際大きく跳ねた胸に、俺は吐き出しそうだった。物をじゃなくて、気持ちだ。

この腕に収めた三玖が大切だから、思いやろうとするのだけれど、こうなってしまうのは男の浅ましい所だろうか。

俺は見上げてくる三玖の、その桜色の唇に噛みつくようにキスをした。

「んう、んっ……あ、はっ」

触れ合わせて、啜えるように挟み込んで吸い付いて。タガが外れてしまったように何度も何度もキスをする。

「私の全部をあげるから、フータローの全部をちょうだい」

涙が零れそうなほどに潤んだ目が、俺を捉えて離さない。

「俺なんかで三玖が貰えるなら」

「フータローじゃなきゃいやだ」

ゆっくりと、心と体の全ての輪郭を確かめるような手つきで、三玖の顔を撫でる。そこから首筋を伝っていき、首にかけているヘッドホンを取った。固いそれが取り去られた心許なさに、三玖はちよつと首をすくめて抵抗する。

そんな様子をおかしく思いながら、制服のボタンに手をかける。

少し身を震わせながら、自分でも服のボタンを外していた。シャツの前が開くと、その白い肌が露わになって、淡い色の下着と相まって目に毒だ。

「あ、えっと、フータロー、ちよつと待って」

「嫌か?」

「そうじゃないんだけど……しや、シャワー浴びたい。今日汗かいちゃったし」

と恥ずかしそうにシャツの前を閉じた。そうかなと思いつつ、普段は守られている首筋に、かかる髪をはらって口付けた。匂い立つ甘

さに、ずっと口付けていたくらいなのに。

「俺は三玖の匂い好きなんだが」

「で、でもやつぱりやだよ」

「分かった、分かったよ」

名残惜しい気持ちになりつつ、三玖から手を離して距離をとる。布団も敷いてなかったし丁度良かったかもしれない、と前向きに捉えながら準備をする。

「ねえフータロー」

「どうした。タオルならこの前来た時と同じ所にあるぞ」

「そうじゃなくて……ねえ……」

布団を敷いていた俺の服をくいつと引っ張ってくるので、顔をそちらに向けた。

脱いだシャツを体の前で丸めて胸元を隠しているのが何とも煽情的だ。それを取っ払って、露わになった胸を目に収めたい、と荒っぽい欲望が顔を覗かせる。

「一緒に入る」

そんな誘いに、胸が痛いくらいに嬉しく弾む。

キスを重ねて、俺もそうしたいと伝えた。

蝶は羽ばたいた

ぼやける目線の先に、台所に立つ人が見える。

まだ夢を見ているのかと思うが、肌を貫く日の光に、漂ってくる何かを焼く匂いに、俺の意識が次第に覚醒していく。

一つ寝がえりを打とうとすると、引きつって痛いような感覚が下半身から始まって、起き上がる気力を根こそぎ奪ってくる。

なんでこんなに体が痛いんだ、と疑問に思うと、その答えが鮮明に脳裏にフラッシュバックした。

目の前に広がる肌色に口付けて、そんな俺に笑いかける顔にも口付けをして、恍惚に喘ぐ姿に口付けをして、男の欲望を最奥に突き入れながら吐き出した事を思い出す。

そうだった、昨日は散々三玖と……

そう思い出すと、昨日のように下半身が熱を帯びてくるように思った。節操のない体だ、と自分に呆れながら無理やり体を起こした。

力の抜けそうな膝に心をくじかれそうになるが、もう起きて朝食の用意をしてきている三玖に申し訳ないと思っただけで自分の体に鞭打って立ち上がった。

菜箸でフライパンの中をちよんとつつきながら、湯気の上がる鍋の様子を気にしているようで、その右に左にキョロキョロする姿から、慣れないぎこちなさみみたいな物を感じ取れて、なぜだろう、そんな姿がとても愛おしい。

ふとこちらに視線を向けた三玖は、起きた俺に気が付いたようで、嬉しそうに微笑みながら、いつものように落ち着いた声で俺を呼んだ。

「おはようフータロー。もうちよつとでご飯出来るから待ってて」

「……ああ」

さつきまで見ていたはずの夢が霞のように消えて、それでも残っている温かい気持ち、俺の言葉を詰まらせた。こんなにも嬉しいのに、泣きそうな気持ちにさえなるのはどうしてだろうか。

らしい以外の女の子が台所に立っている慣れない状況に、違和感の

ような物を覚えながら、それが嬉しきからくるむずがゆさだと理解すると、温かい気持ちで満たされる。

少しして三玖が出してくれた皿に乗っていたのは、スーパーで見ただけで俺は終ぞ買った事のないイングリッシュマフィンとかいう代物に、ベーコンと……なんだこれゆで卵か？ とにかくその二つが乗って、上に黄色いソースがかかっている。

「ありがとう。旨そうだぞ。このえつと、ゆで卵乗せ」

「エッグベネディクトって言うんだよ。二乃から作り方を教わったから作ってみたんだ」

「なるほど」

「分かってないでしょ」

「分かってるって。それよりこんな家にあつたか？」

「近所に二十四時間営業のスーパーがあつたから、そこで買ってきたの」

「起こせよ」

「でもぐっすり寝てたから、起こすの悪いかなって思って。ほら、こんな顔して」

差し出してきたスマホの画面には、ぐっすりと眠った間抜け面の俺が映っている。三玖のちよつと呆れたように笑う姿に、それに腹が立ったりしないのは、軽んじたりという所がないからだ。心くすぐられるような会話をしながら、俺は作ってくれた朝食に口をつける。

「食べながらでいいから聞いて欲しいんだけど」

「？」

半熟の卵に歯を立てて、中からとろりと溢れてくる黄身とかかったソースとのハーモニーを口の中で楽しみながら、俺は三玖の言葉に首をかしげた。

先に食べ終えた三玖が、口の端に付いたソースを指で拭って舐め取ってから言う。

「最近の私って変だったよね」

「そうか？」

「うん。変だった。あんなにうじうじ落ち込んで泣いたり、面倒くさ

かったよね。ごめんフータロー」

「いや、俺が悪かったんだ」

「ううん。よく考えなくても、人に歴史ありなんて当たり前前の事なのに」

三玖は肩にかかる髪を指で弄ぶと、眉を歪ませる。

「私は自分に自信が持てないのを、フータロー通じて自信が持てるようになった」

「それは、いい事じゃないのか？」

「うん。きつとそうなんだろうけど、私は自分の価値をフータローに拘泥しすぎてたと思う。だからフータローに選ばれない自分は価値がないんじゃないかって」

「そんな訳ないだろ。俺も、皆だって三玖が価値がないなんて言ったら怒るぞ」

「フータローは優しいね。そんな所が好きなんだけど」

思わぬ好意のカウンターだ。にこつと笑って言う三玖は、自虐めいた物はあるが暗い所はない。髪をかき上げて露わになった両目には強い光が宿って、優しい微笑みを際立たせる。

「私はあの春休みの旅行でフータローに見つけてもらってから、好きになって貰える自分を目指してたけど、そのすぐ後に付き合うようになっちゃったから、自信が私の中に出て来てなかったんだと思う」

「俺のせいかな？」

「あはは、そうだよ。フータローに好きって言ってもらえたから、それだけで満足しちゃったのかも。だからフータローが私の隣にいてくれないんじゃないかって思うと、怖くなって、でもそれじゃ駄目なんだ」

三玖はそこで言葉を切ると、ボウルに入れたサラダからトマトを一かけら口に入れて口を湿らせる。噛みしめる、もごもごとした動きと共にどんな言葉を絞り出そうかと探しているようだ。

「例えば、フータローと私が別れるなんて事になっても、私は消えてなくなる訳じゃない」

思いがけない言葉に、口に含んでいた麦茶を気管に入れてしまっ

た。ゴホツと空咳をしながら三玖を睨むように見据えた。

「言うなよ。例え話でも別れるなんて」

分かつてはいるつもりだった。それは恋愛に関する一般論だ。大好きな恋人と別れても、死ぬわけではない、時間が解決してくれる、というのはよく言われる事で。ずっと一緒にいようとかが、永遠を誓うなんて言葉より、よっぽど現実を見ているような言葉を、三玖から聞きたくはなかった。

「うん、ごめん。なんて言うのかな……フータローが好きになつてくれた私が好きだったら、この先フータローは苦しくなっちゃうんじゃないかなって。何をするのもフータロー、しないのもフータロー。おしどり夫婦って言葉があるでしょ？ でもおしどりだつてずっと同じ場所に置いてたら別れちゃうんだって。そんなの嫌だよ。だから私はフータローに寄りかからない何かを見つけたい」

三玖はふと目線を上げて、どこか遠くを見る目線をした。きつと姉妹の皆を思い浮かべているのだろう。

夢に向かつて邁進する一花に、社交的で家庭的な二乃、全国レベルの運動能力を持つ（本人はあまり良く捉えていない節があるが）四葉に、母親を目標に努力を重ね続ける五月。それぞれが自分の色を出しながら重ねていく努力に、自己評価の低い三玖は焦りのような気持ちを抱いたのかもしれない。だから修学旅行で、あんな風に落ち込んだのだろう。そしてそれを、三玖は自分の自信のなささと答えを出して、今乗り越えて変わろうとしている。

「三玖」

「私は私を好きになれるようになりたい。それが出来るようになったら、寄りかかる歪な形じゃなくて、きちんとした形の、並び立てるパートナーになれると思うんだ」

その柔らかい微笑みのまま、三玖は作った朝食を一つづつ指さした。俺の前にある齧りかけのエッグベネディクト。瑞々しいレタスとトマトのサラダ。ブルーベリーの乗ったヨーグルト。

三玖の優しさと、身につけた技術をもって振る舞われたそれを食べる事ができる俺は幸せ者に違いない。

「これは、弱かった自分への反撃の嚙矢つてところ？」

「嚙矢ねえ」

「む……なんか気のない返事」

組んだ手の上にぶくつと膨れた顔を乗せている三玖は、大人びた美貌に浮かんだ子供っぽい表情のコントラストがなんとも可愛らしい。「そんな事ない。お前のそういうひたむきに頑張る所が、俺は好きなんだ」

「えっ……あ、ありがと……」

さっきの仕返しとばかりにさらりと告白すると、喉に物がつかえたように息を吞んで頬を染めて俯いた。小さく笑ってその頭を撫でると、さらさらと指を通り抜ける絹糸のような髪にどきりとさせられる。昔はこんな事をして何も感じなかったなんて、自分でも信じられない気持ちだ。

「頑張れ三玖。自信っていうのは、成功を重ねた先に芽生えてくる小さな花だ。教科書に載ってた歌は、それを咲かせる事に一生懸命になればいいなんて歌ってるだろ。俺もそう思う」

「ぶぷっ……フータローの口から歌が出てくるなんて」

「笑うなって。流行りの歌なんてのは知らないが、教科書に載ってる歌くらいならさすがの俺でも知ってる」

小学校の頃に合唱祭で散々歌った記憶が蘇ってきた。あのころの俺は、髪を金髪に染めたとびきりの馬鹿でクラスの女子に怒られる筆頭だったな。だからか無理やりに歌わされて、今でも覚えている。こんな小さな事も、人に歴史ありだろうか。

三玖は撫でていた俺の手をとって、自分の顔の前で両手に包むように握った。

「うん。私、頑張るから、だから見ててフータロー」

そんな晴れ晴れとした笑顔が、三玖が変わっていきこうという意志の表れに感じられて、この子の未来を見たいという気持ちにさせられる。

例えるならば、羽化した蝶だ。

三玖は閉じこもっていた殻を脱ぎ捨てて、多彩な羽を広げて世界へ

と飛び立っていく決意を固めたのだ。もしかしたら、俺なんか縛られるべきではないほどに大きな女性になるのかもしれない。

「三玖」

「なあに？」

嬉しそうに、楽しそうに、愛しそうに微笑む。そんな三玖の隣にいられるだろうかと、こちらの方が不安になるくらいだった。

「こっち来いよ」

握っていた手をほどこいて、おいでと胸を広げる。離したくないと思う気持ちは、俺の方がよっぽどだなと内心苦笑した。

「ふふ、じゃあお言葉に甘えて」

腰を上げてゆっくり、ととととにじり寄ってくる姿が目の前まで来て、そのまま両手に収めるように抱きしめた。

「なあ三玖」

「んー？」

「見てるぞ。一番近くで」

「うん」

心境の変化に合わせてか、ちよつと前髪を横に分けて、普段は隠れている右目が露わになっている。

美しさという物差しの話をするなら、姉妹は一ミリにも満たない違いしかないはずなのに、俺にとって三玖の顔が一番綺麗に感じて、胸を鷲掴みにされたような感覚に陥るのは、これが恋という物だと強烈に教えられる。

「んっ」

頬にそつと触れて、ゆっくりと唇を指でなぞる。ふわふわと柔らかい三玖の桜色の唇から力が抜けて、静かに目を閉じたので、俺は近づいてキスをした。

重ねた唇から伝わってくる唾液の奥に、先ほど食べた料理の味がしたのがおかしくて、思わず笑う。

同じように思ったらしい三玖と目が合って、俺は力の掛け方を少し変えてより深くキスをしていった。

「美味しいな、これ」

しばらくして離れると、俺はまだ皿に残っていたエッグベネディクトを指さして言つて、残りを一口に平らげた。

こう言ふと文句を言われたりするが、やっぱり普通に美味しい。味音痴な俺でも好きな味くらいあつて、らいはの料理と、そして三玖の料理だ。味に鈍い俺だが、その皿に込められた思いなり努力なりは感じ取れる。だったら一番に思っている妹と、一番好きな恋人の味が好きになるのは道理と言ふものではないだろうか。

「えへへ、でしょ？」

嬉しい、と言いながら三玖は唇を寄せてきて、口の端に付いたソースを舐め取つて来た。

お返しとばかりにキスをして、やったなと言ふようにやり返される。

愛に羽ばたく蝶のように、恋の歌をさええずる鳥のように、触れて、離れて、重なり、外れる。

愛の模様を織るように、俺達は優しく相手に触れ合い続けていた。

不思議な関係

うーん。ちよつと気まずいかなあ。

私ที่บ้านの前でうんうん唸っているのは、間違いなくお兄ちゃんのせいだ。学校行事のせいで土日返上してきたから、いない間に溜まった家事を片付けたいのに。

少し前の私だったら、そのまま扉を開けて「お兄ちゃん生きてる？」なんて冗談くらい言ったかもしれないけど。

でもお兄ちゃんが三玖さん連れ込んでいたらどうしよう。

中野三玖さん。

お兄ちゃんが家庭教師をしている五つ子姉妹の真ん中で、私と仲良くしてくれる四葉さんと五月さんのお姉ちゃん。

そしてお兄ちゃんの恋人さん。

初めてその事をお兄ちゃんの口から聞いたときは話半分に聞き流していたけど、ちよつと前に三玖さんが家に来た時、私が玄関の扉を開けるとお兄ちゃんと恋愛ドラマみたいにキスをしていた出来事は強く印象に残っている。いや家にはテレビがないから電気店のテレビとか友達の家で見たくらいの知識しかないけど。残りすぎて軽くトラウマの域なほどだ。

この休みの間はお父さんもいないし私もいないし、二人きりになるには絶好の機会だから一緒にいるに違いない。一応メールをしておいたけど、携帯の扱いがぞんざいなお兄ちゃんは見えていないかも。

「えーい行つちやえ」

もう知らないという気持ちで扉を勢いよく開けた。

「ただいまお兄ちゃん」

「ああ。おかえりらいは」

玄関に飛び込むと、いつものお兄ちゃんの声が聞こえて、男物の靴が一足あるだけだった。

なーんだ、私の考えすぎか。

靴を部屋に放り投げて靴を脱ぐ。そうすると、ふわつとやさしい甘い匂いがただよってきた。

「女の匂いがする」

「どこで覚えて来たんだそんなセリフ」

お兄ちゃんは呆れたような顔をしながら、参考書に落としていた視線を私の方へ上げた。

さすが姉妹と言うべきなのか、五月さんが泊まっていた時にしていた匂いと同じ物だ。二乃さんのように香水をつけたりしなかったら、五つ子だから同じ匂いがするのは当然なのかも。

「三玖さん来てたの？」

「ああ。さつきまでな」

「えー、会いたかったな。何で呼び止めといてくれないの」

五つ子姉妹の中でよく遊んだりしている四葉さんや五月さんとの、友達の間とは違う距離感の三玖さんとの関係は結構好きなんだけどなあ。

お兄ちゃんと付き合っているという事は、そのまま二人が結婚なんて事になれば三玖さんは未来のお姉ちゃんだ。二人は気が早いなんて言ったりするけど、本人同士はまんざらでもないようだし、私はそうなるんじゃないかって思ってる。

三玖さんは年上だけどちよつと頼りない妹みたいな所もあるけど、優しく目を合わせてくれる優しい所が、私は思い出はほとんどないけれど、お母さんみたいだなんてちよつと思ったりもするんだ。

誤解を与えがちなお兄ちゃんの良い所をちゃんと見てくれる、良い恋人だ。と私は考えているけど。

「疲れて帰って来た所に、他人がいたら休めないだろとか何とか言つて帰ってつたぞ」

「別にいいのに」

自分で言うのもなんだけど、私って結構人と仲良くなるのは得意な方だと思う。そして仲良くなった人と過ごす事は、全然苦になつたりなんてしない。

けど、今日の所はお姉ちゃんの好意と受け取っておこうかな。溜まっていた家事もしないといけないし。

「お兄ちゃんどいて。掃除するよ」

「ああ、掃除なら三玖がしてたぞ」

「え？」

「勝手に泊まったお詫びだとき」

そう言われて部屋中見わたすと、確かに部屋が綺麗だ。隅っこに積もっているホコリやゴミなんかが無い。シンクもピカピカに光っている。

私は毎日掃除するからほどほどに手を抜いてやっているけど、たぶん三玖さんは大掃除みたいに徹底的にしてくれたんだろうと思うと、ちよつとした申し訳なさと一緒に嬉しくなった。ちゃんという事をしてくれる人がいるお兄ちゃんは幸せ者だね。

「幸せ者〜」

「らいは、そのニヤニヤ止めないか？」

お兄ちゃんは何だかバツが悪そうに前髪をいじると、コップに口をつけて中身を飲み干した。いつものガラスのコップじゃなくて、メタリックな細長いコップ。知ってる、タンブラーってやつだ。

「あれ？ なにそのコップ？ 家にそんなのあったっけ？」

「ああ、これか。昨日買い物したときに三玖が買ってくれたんだよ。コップから机に水滴が落ちないから拭く手間がいらないうしよってな」

「へー」

「らいはと親父の分もあるぞ」

三玖さんが買ってくれたんだ。あ、だから青い色を使ってるんだね。

三玖さんといえればあの首にかけた青いヘッドホンに青いカーディガン、青色は三玖さんのパーソナルカラーだ。

これを私と思って手元に置いてて、ってなんて恋人っぽい事するんだろ。クラスの友達に彼氏がいる人がいるけど、中学生では使っている鉛筆やシャーペンを交換して使うとか、それくらいがせいぜいだけど、こうやって長く使える物をプレゼントするって、なんだか大人っぽい。これが高校生。

お兄ちゃんの体の後ろに隠れてたビニール袋を受け取って、その中

の二つの箱を確認した。赤い色の物とグレーの物が入っている。今は喉乾いてないから後で開けよう。

「えーっと、じゃあご飯の用意しないと」

机に座り込んでいるお兄ちゃんは放っておいて、夕ご飯を作らなくちゃと冷蔵庫の中身を確かめに立ち上がった。お兄ちゃん一人だつたらお米だけ炊いて済ませるかもしれないけど、さすがに恋人と一緒にそんなひもじい食事はしないだろうから、買い物した何かが入っているはず。

「あれ、タッパーに何か……」

冷蔵庫を開けると大きめのタッパーに料理がぎっしり詰まっていた。蓋に紙がテープで貼ってあって、三玖さんの綺麗な文字が書かれている。手紙？

へらいはちゃんへ　まずは勝手に家に泊まつてごめんね。お詫びとっては何だけど、料理を作ったので置いておきます。五月にも味を見てもらった料理だから大丈夫とは思うけど、口に合わないならフータローにでも任せてください。らいはちゃんさえよければまた遊んでね。　三玖

「おおー」

「どうした？」

「三玖さんからの手紙読んだ」

「あいつそんなの仕込んだのか」

お兄ちゃんはちよつとだけ笑って嬉しそうだ。あの優しい微笑みを思い出しているのかな。

私は冷蔵庫を閉めて畳に横になった。

「何かやることがあったんじゃないのか」

「気が利くお姉ちゃんが全部やってくれたからゴロゴロする」

そうか、と小さく言ってお兄ちゃんは参考書に向き直った。こうしているとお前までのお兄ちゃんと同じだけど、話をすると変わったなあって思う。

私がクラスの友達の話をしてても、良かったなと他人事みたいな顔をしていたのに。三玖さんと付き合ってから、家族の前で大っぴら

に喜ぶのは気恥ずかしいからなのか顔にはあまり出さないけど、楽しそうに三玖さんとの話をポツリとしたりして、普段の行動の端々に嬉しさがにじみ出ている。

きつとあれだ。すっぱいブドウって言うやつだったのかな。

お兄ちゃんは私が物心ついたころからずっと勉強して、し続けて、し続けすぎて友達も全然いなくて一人だったから、人間関係をちよつと捻った目で見えていたのかもしれないけど、三玖さん達五つ子姉妹に会って、人と関わる楽しさを知ったんだ。高い木に生っていたブドウは、きつと美味しかったに違いない。

いいなあ、恋って。こんなにも人を変えちゃうんだ。

このまま二人には仲良くしていて欲しいな。

そうして結ばれたらお兄ちゃんはもちろん嬉しいだろうけど、私も嬉しい。

だって一気にお姉ちゃんが五人も増えるんだもん。しかも、知らない人じゃなくて5人全員友達だ。特に五月さんとはよく遊んでるし、妹にしたいなんて言ってくれる四葉さんはよくしてくれている。

お姉ちゃんかあ……。

……あれ？

「ねえお兄ちゃん」

「どうした」

「あのね、なんだっけ……役柄ってあるでしょ？」

「役？ 一花がすぐに死ぬ役が多いとかそういう話か？」

「そうじゃなくて、ほら、書類に書いたりするでしょ。上杉風太郎、兄、とか」

「ああ、続柄な」

「じゃあそれ。それってさ結婚して義理の姉妹が出来たら、関係って結婚した人が基準になるよね」

「ん？ どういう事だ？」

「だから……お兄ちゃんが三玖さんと結婚したら、三玖さんの妹の四葉さんと五月さんは私の義理の妹って事になるのかな？」

はあ、とため息をするみたいに開いたお兄ちゃんの口が、しだいに

笑う形に変わっていった。おかしそうに肩を震わせて、口元に手を当てて隠しちゃったけど、きつとその下はにんまりと吊り上がった口があるはずだ。

「ふふっ、よかったならいは。昔妹が欲しいとか言ってただろ。お姉ちゃんになれるぞ」

「お姉ちゃんかあく。えへへ」

年上の妹っていう不思議な響きに、自分で言い出しておいておかしくなってきた。四葉さんは私を妹にとってよく言うけど、私がお姉ちゃんになったらどんな顔するんだろう。

「まあ年齢で決まるから妹だけだな」

「えー、さっきまでのワクワクを返して」

せつかく面白い事に気が付いたと思ったのに。まあでもそうだよ。そうじゃないと関係性が滅茶苦茶で訳が分からなくなっちゃうし。

でも一回くらい良いよね……

「と、いう訳で」

「え、何がという訳でなの？」

高校と中学の定期試験が終わってから、お疲れ様会としてお姉ちゃん達と駅前のファミレスでパフェを食べていた。ちなみにお兄ちゃんはお留守番です。

「三玖さんとお兄ちゃんが結婚したら、三玖さんの妹の四葉さんと五月さんは私の妹になるって話な訳だけど」

「ええ!? らいはちゃんがお姉さん!?!」

鳩が豆鉄砲を食ったよう、という言葉そのままみたいにびっくりした四葉さんが大きな声をあげた。口の端っこについた生クリームにも気が付かないほどだ。

「あはは、可愛いお姉ちゃんが出来て良かったね四葉、五月ちゃん」

「そんなく、せつかくお姉ちゃんぶれると思ったのに」

「私は末っ子のままですか？」

一花さんはからかうように隣に座っている五月さんをつついた。

一花さんは面白きに流れるといった感じでいつも冗談に乗っかってくれる。

「だからこのらいはお姉ちゃんを頼ってくれていいんだよ」

そつと指を組んで、その上に顎を置いて微笑んで目を細める。一二三の私史上三大お姉ちゃんの技を結集した最強お姉ちゃんフェイスで四葉さん……いや、四葉ちゃんを見つめた。

「うっ……らいはちゃんのお姉ちゃん味が凄い」

「お待たせ……ってどうしたのよ？」

「一花、そんなに笑って、何か楽しい事あった？」

冷たい物をずつと食べてると甘さを感じる部分がバカになると言って、温かい紅茶を淹れに行ってた二乃さんと、紅茶じゃなくて緑茶がいいと言って緑茶を淹れに行つた三玖さんがお盆にカップを乗せて帰って来た。

「楽しい事？ お姉ちゃんが爆誕した事かな」

「何よそれ」

二乃さんはそれぞれの前に紅茶の入ったカップを置いて席に座つた。

ちなみにテーブル席に四葉さん、私、三玖さん。

向かい合っている席に一花さん、五月さん、二乃さんの席順で座っている。三玖さん、二乃さんの方が通路側だ。

「あはは！ それは傑作ね。良かったじゃないおねーちゃんが増えて」

「良くないよ〜」

「……？」

和気あいあいとした輪の中で、三玖さんは頭を捻っている。もしかして私がお兄ちゃんとした話を聞いているのかも。

「ほら四葉さん……いや、四葉ちゃん、何か相談したい事ある？」

「四葉ちゃん!？」

「ぷっ」

「三玖〜」

「ごめん、でも……ふふっ」

小さく吹き出した三玖さんを責めるように、四葉さんが睨みつけた。そのままむうつと膨らませた頬つぺたの中で、何か言葉にならないうめきをあげている。

「あつたよ、相談したい事」

にこーつと四葉さんは笑うと、表情をころりと変えて泣きべそをかいた。そのまま私をぎゅつと苦しい程に抱きしめてくる。

「うわーくん、らいはお姉ちゃーくん。初恋の人を実の姉に取られましてあー」

「え、そうなの三玖さん!? 略奪愛?」

「ちがっ……わないけど人聞きが悪い!」

三玖さんは反論したげに私の肩を掴んできた。四葉さんとの板挟みになった私は、そのままぐわんぐわん引つ張られる。

「止めなよ二人とも、らいはちゃんがかわいそうだよ」

「そうよ。それに私も慰められたいから三玖席変わりなさい」

「慰め……えっ、もしかして二乃さんも」

「そうなのよ、らいはおねーちゃん。酷い話と思わない?」

「ほんと、おねーちゃんのお兄さんは罪な男だね」

「一花さんまで!」

何てこつたお母ちゃん、とヒゲの配管工でなくても言いたくなくなってしまう。何てとんでもない事態が巻き起こっていたんだらう。五つ子ってだけでも教科書に載るレベルの珍事なのに、その五人が一人の男の人に恋するなんて、石にでも掘って残したくなるくらいの出来事だ。

「五人って事は五月さんも?」

「らいはちゃんの頭の中でどんな事が繰り広げられたのか分かりませんが、私は違いますからね。確かに上杉君は信頼できる友人ですが、それだけです」

「そうなんだ」

「そうなんです」

早とちり? いけないいけない。

「でも凄いなあ」

「ほんとにね。こーんな美少女達に言い寄られるなんて中々ないよ」

一花さんは胸を反らしながら両手を頭の後ろにそえて、雑誌に載ってるグラビアみたいなポーズをとった。一花さんは女優の仕事をしているからか、自分の魅せ方を知っていて、その仕草にはドキリとさせられる。

そんな風にする一花さんは、恨みがましいというか、負の感情を表だって出したりはしていない。そりゃあ、全然ないって言ったら嘘なんだろうけど。

「それもそうだけど……」

「何々？」

「友達に、好きな人を取られたって仲が良かったのに今じゃ全然話さない人がいて……でも皆はそんな事ないから、だから凄くなって」

「えー中学生でもそんな事あるの？」

「あるんですよ。私達は女子校だったから知らないけど」

あー、と皆は懐かしむように遠い目をした。そういえば忘れかけてたけど、お兄ちゃんに家庭教師の仕事が来たのはお嬢様がこっちに転校するからって切っ掛けからだったっけ？

「で、好きな人を取り合いしたのに、何で仲が悪くならないかって話だったよね」

「うん」

「やっぱり姉妹だからってのもあるけど、フータロー君に感謝してるからかな」

「感謝？」

感謝って言葉はこちらのセリフだと思う。

独りぼっちで、出不精で、自分の事ばかりなお兄ちゃんを変えてくれたお姉ちゃん皆には、こっちが感謝したいくらいだ。

「たまに思うんだよね。フータロー君に合わなかったら私達どうなってたかなって」

「私が一番ダメダメな人生歩んでそう」

「三玖が一番変わったもんね」

「私達だってなかなか変わったわよ」

「そうですね。私も先生になりたいという夢を抱かなかったかもしれない
ません」

「そういう事。だからねこう……フータロー君を大きな意味で愛して
るって言うか」

嬉しそうに微笑みながら、その口からワツと飛び出してくる言葉の
洪水に私は圧倒された。真剣な言葉が変えてくれたとか、向き合っ
てくれたとか、くらくらしちゃうような、のろけみたいな言葉に胸やけ
しそうだ。

「ごちそうさま」

「どうかしましたか、らいはちゃん」

「皆のおのろけでお腹いっぱいになっちゃった」

「あはは、らいはお姉ちゃん話に付き合っよ」

「あつ」

盛り上がる会話の中で、三玖さんは何かに気が付いたように短く声
をあげた。その声は私達の間によく通って、水を打ったようにとい
うか、そんな感じで静まり返った皆は三玖さんを見た。

「どうしたのよ三玖」

「思い出した。フータローがらいはちゃんと一月前くらいに姉だ妹
だって話をしたって事」

「それで上杉さんは何て？」

「年齢で関係性が決まるかららいはちゃんは誰に対しても妹だぞつ
て」

あ、やっぱりお兄ちゃん話してたんだ。

「らいはちゃん？」

「バレちゃった」

四葉さんの顔がさっきまでと打って変わって、お姉ちゃんとしての
生気を取り戻してきた。めっ、と小さい子に叱るように私の口に人差
し指を当ててくる。

「どうしてそんな嘘ついたの」

「お姉ちゃんになってみたくて」

「うーん、分かるよ。でもだからって嘘ついちゃうらいはちゃんはこ

うだ〜」

「ひへー、ほへんははい」

ふにふにと四葉さんは私の両方の頬つぺたをつまんであちこちに引つ張りまわす。ごめんなさいの言葉は歪んだ頬つぺたに合わせて変な音になった。

「えへへ」

「どうしたの、らいはちゃん。四葉に引つ張られすぎて顔が変になっちゃった？」

「えっ、そうなの？ ごめんね」

「違うよ」

引つ張っていた指がなくなると、感じる頬の違和感をかき消すように、なんだかおかしい感情がこみ上げてきて、意図せず笑いになつて零れた。そんな私を氣遣うように、三玖さんがそつと頬つぺたに触ってくれた。ちよつとひんやりしてて気持ちいい。

「皆の仲良しの輪にいるのが嬉しくて。私もお兄ちゃんが皆と繋げてくれた事に感謝しようかな、なんて思ったら、えへへ……なんだか照れくさくて」

お兄ちゃんがいなかったら、こんな風に年上の友達が五人もできなかったし、しかもこのままいけばその五人がお姉ちゃんになるかもなんて事も当然無い訳だから。

私は凄く幸せ者だ。

皆が皆、お互いを尊重し合う奇跡みたいな姉妹の一幕にいられるなんて、きつと私が思っている以上に価値のある事に違いない。

これから築いていく皆との不思議な関係性は、一生の宝物として私の中に輝いているんだろうな。

「これからもお兄ちゃんの事よろしくね」

両隣の三玖さん四葉さん、目の前に座っている一花さん、二乃さん、五月さんに視線を送ってそう言うのと、皆は楽しそうに微笑んでくれる。ピタツと合わさった五人の声に、私はもつともつと嬉しくなった。

「いちばんよろしくね、らいはちゃん」

僕らは探し始めたよ

暑い。

六月も終わりに差し掛かり、梅雨明けから一気に夏の気候へと移り変わった空に恨みがましく目線を送る。うだるような暑さに、立っているだけで体力に知力に色々と奪われるような心地だ。

はあと息を吐いて、凍らせた水が入ったペットボトルを首筋に当てながら、こんなんじゃないやあいつらに悪いなと思いつつ、萎えそうになる心を奮わせる。

額を流れる汗を袖で拭いながら、アパートの階段を上がって部屋のチャイムを鳴らした。

「フータロー、いらっしやい」

扉を開けてくれたのは三玖だった。ノースリーブの花柄のワンピースを身に纏った夏らしい装いで、晒されている白い腕が眩しい。俺は太陽を見上げた時のように目を細めた。

しかし、似たような服装は姉妹がしているのに、どうしてこう三玖の恰好はどきりとするのだろうか。

こういった肩を出す恰好は、意外にも五月が良くしている。オフショルダーの信徒ではないのかと疑うほどだ。いつか本人にそこんとこどうなのと聞くと、「そうですね、華奢に見えるので……って何て事言わせるんですか!」という事らしいが。

「どうしたの？ 冷氣逃げちゃうから早く入って」

「ああ、すまん」

不思議そうに眉根を寄せて、早く来いと手招きされたのでさっさと入った。いつもなら四葉あたりが一声かけてきそうだが、部屋には他に誰もいないようだ。

「そういうえば皆はどうした？ 今日午前から家庭教師をする事は言ってただろ」

「皆？ 用事があるって出かけたけど」

「……まさかとは思うが俺達に気を遣ってるのかという理由じゃないだろうな」

「そんな事ない。一花は事務所に台本を貰いに行っただけだし、二乃は買い出し、四葉は五月と一緒に参考書を買ったからすぐ帰ってくるよ」

「そうか。三玖は用事は無かったのか？」

「ここにいる事が用事かな」

「は？ どういう……」

ピンポーン

用事とやらを聞き出そうとした所でチャイムが鳴った。宅配便のお兄さんがかけて来た声に三玖は返事をして玄関に向かう。受取証書にさらさらとサインをしてダンボールを受け取った。

「持とう」

「ありがと」

重たそうにダンボールを抱える姿を見て、俺が持つことを提案して、三玖は投げ出すように俺によこした。持った瞬間前につんのめりそうになった。

「重いな。何だこれ」

女の子と同じくらい力つてのはまずいだろう、と思つて少しずつ鍛えていたおかげで持てたが、見た目に反してかなり重い荷物のようにだ。

「お爺ちゃんから荷物を送るつて連絡はあつただけど、中身は知らない。開けよう」

こいつらの爺さん、師匠からの荷物か。受験があるから年度内はあの旅館に行けないだろうが、近いうちに皆で行ければいいなと思う。五人の顔を見分けられるようになった報告もしたいしな。

春休みの旅行の事を思い出している間に、三玖は鋏でテープを切つて封を開けた。

……：そういえばあその鐘の下でキスされたんだつたな。

あの時はそれが誰か分からずに、しばらく自分の中に出来た想いに悩む日々を過ごしていたが、旅行の後に三玖が告白してくれた事で気が付くことができた。あの時、三玖を見分けられたのは、彼女に対して愛を抱いているからだ。

改めて思い出すと気恥ずかしいな。

見上げて来た三玖の肩に手を置いて、開けてくれと促した。

「……お米？」

「重い訳だ」

ダンボールの上を開くと、見えたのは大きくコシヒカリと書かれたビニール袋。十キロの米袋が詰まっていたのだから重いのも道理という事か。

「うーん、でももうすぐ引越すのに使いきれるかな」

「引越す？」

「あれ？ 言わなかったっけ？ 契約更新があるから、更新料払う前にあっちのマンションに帰ろうって話を皆でしたんだ」

「そうだったのか」

改めて部屋を見渡すと、確かにこぎつぱりしている。

見る？ と言って三玖が寝室の扉を開けると、そこにはいくつものダンボールが積まれていた。驚くべきことに一花が寝ているスペースも片付いているようだ。やはり単純に荷物が多いんだろうな。

「来週の休みに引越すから、よかったらフータローも手伝いに来て」

「業者は何時に来るんだ？」

「頼んでないよ。江端さんが運転してくれる車で運ぶから」

「あの運転手の人か」

江端さんという名前から、俺はあの初老に差し掛かるくらいの年齢の男性を思い出した。人の趣味をどうこう言う気はないが、春休みに見た時は真っ黒に日焼けしている姿で違和感が凄かったな。今は日焼けは引いて元通りになっているらしいが。

米びつの横にでも置いておこうと袋を持ち上げると、紙が一枚はらりと机の上に落ちた。

「手紙？」

その落ちた紙をつまんだ三玖は、広げて見るとそうつぶやいた。

米袋を置きながらどんな内容か聞いてみると、受験に挑む孫の為に参考書代として図書カードを贈ると同時に、掃除しているとある物を見つけたので皆の役に立てばと思い送ることにした、と書いてあるら

しい。

「これ……お母さんのノートだ」

ダンボールの底に置かれたノートを拾い上げて眺めると、表紙には【数学】や【日本史】と綺麗な字で書かれていた。

三玖は感慨深そうに息を一つ吐くと、宝物を扱うように丁寧にノートをめくる。綺麗な字に、ところどころ赤色の簡素なレイアウトのノートは女子らしくはないかもしれないが、きつと華美を喜ばない人だったのかもしれない。三玖は少しだけ見ると、パターンとノートを閉じて机に慎重に重ねて置いた。大きな目が波打つように潤んでいて、母との思い出を思い返しているのかもしれない。

「いない方がいいか？」

「え？ ううん、大丈夫。これは皆と見る事にするよ」

「そうか」

ノートとプリントを挟んだファイルを一つ一つダンボールから撮りだしていくと、底に入っていたファイルから一冊のノートが転がり落ちてきた。

「何だこれ」

俺の足元に来たそれを摘み上げると、三玖達の母親の字とは異なる達筆な字で【名前】と書いてある。名前を書くんじゃない【名前】と書かれているなんて、どういうノートだ、と思って広げてみた。

ぱらぱらめくるとそこにはいくつもの漢字が並べられていて、その中に赤丸で囲まれたものがあった。

一花 二乃 三玖 四葉 五希

「三玖、これ」

「なに？」

「お前達の名前案ノートじゃないか？」

「本当だ。あ、五月の漢字が違うね」

机に置いて、三玖と肩を並べてノートに見入った。最初のうちは色々な名前が書いてあったが、途中から一から五までの漢数字をつかった名前が多くなってきている。そのあたりで五つ子だという事が分かったのだろう。

という事は、これが書かれたのは十八年ほど前だ。だが爺さんが丁寧に保管していたからか、少しかすれてはいるが問題なく読めた。

「一人だったら香菜ちゃんだったかもね」

「いや綾音だったかもしれないぞ」

ノートを眺めながら、もしかしたらこういう名前だったかも、なんて話をしてみる。大きな赤丸の、今の名前、つまり『一花 二乃 三玖 四葉 五月』と書かれたページを最後に名前候補は書きこまれなくなり、白いページになった。

「これも後で皆に見せよう」

「勉強の後でな」

「分かった。それまでは内緒にしとく」

そう言つてノートを閉じようとする、エアコンの風に吹かれてページが繰られた。

そこには、比較的新しい文字がまた同じように並んでいた。

新大（あらた） 春希 永一郎

愛子 太陽（あかり） 夏月美

「また名前？ 私達について考えてた名前じゃないよね」

「だろうな。男の名前も混じってるし、ひ孫って考えるのは気が早すぎるだろうから、何の名前だ？」

「ひ……ひ孫」

一瞬、俺の顔を見つめた三玖は真っ赤になって頭をふらふらさせるとそっぽをむいた。

もう一枚二枚ページをめくると二つ折りにされた紙が挟まっていた。広げると、ノートにある文字と同じ筆跡で書かれている手紙だった。季節の挨拶から始まって、軽く近況報告し、皆元気でやっているか、という普通の手紙だ。メールではなくわざわざ手紙なのが、なんとなく「らしい」と思ってしまった。

そっぽをむいていた三玖も気になったようで、ちらりとこちらを見上げて、けどすぐに恥ずかしそうに目を伏せながら手紙に視線を落としました。全くこいつは。

手紙の最後まで目を通すと、この比較的新しい名前達に込められた

想いを理解した。

「体調が悪い事も理解しているが、どうか諦めるような事はしないで欲しい。」

五人を一緒に引き取ってくれる男と再婚を考えていると以前教えてくれたが、だったらいなくなる未来ではなく生き続ける未来を考えてくれないか。

同封したノートに儂の考えた子供の名前を書いて送る。

一花、二乃、三玖、四葉、五月の名前を考える時に使っていたノートだ。

再婚する彼と、このノートが必要になる未来を故郷から祈っている」

「この名前、お父さんと再婚する時……苗字が中野に変わる時に合う名前を考えてくれてたのかな。子供を産めるくらいに元気になってくれたって」

「そうだな」

三玖は小さく鼻をこすると、もう一度ノートの中を確かめた。自分の名前候補を見て幼いころの母親の思い出に想いを馳せているのだろう。五人の子供を女手一つで育てていた生活は苦労の連続だったに違いない。けれどもそんな生活でも、数えきれないほどあった幸せな事に溢れていたのだろう。皆を見ていれば分かる。

「……ごめんね、なんだか湿っぽくなっちゃって」

「いや。いいんだ」

「お爺ちゃんきつとこのノートをファイルに入れてた事忘れてたんだろうね」

「まあそうだろうな。手紙なんていう宛てた人以外には見せたくない物が挟まっているからそうだろう」

「悪い事しちやったかな」

「黙っていようぜ」

「うん」

三玖は目元をこすると、少し赤くなった目に光をきらりとさせて微笑んだ。その赤らんだ目元にそっと手を当てて、優しく撫でる。

「えへへ……」

朱が差した頬から手を離して、なおも幸せそうに笑う三玖に、俺も小さく笑いかけた。

あつと何かを思いついた三玖は、スマホを取り出して言葉を打ち込んでいる。

「ねえ見てフータロー。新大君の姓名判断、大吉ばかり」

そうやって見せてきたスマホの画面は姓名判断サイトだった。名前の画数の横に大吉と書かれ。苗字と名前の組み合わせにも大吉と書かれている。

「ああ。太陽ちゃんも相当良い名前だな」

いくつか書かれた名前候補を片っ端からサイトに打ち込んでいくと、吉や大吉ばかりの名前で、爺さんが真剣に考えた事が窺える。

「ほら。もう勉強始めるぞ」

「ちよつと待って。最後に一つだけ……」

画面をタップしながら、今日一番の笑顔で言うので、それを見せられたら俺としては何も言う事ができない。惚れた弱みと言うやつだ。その体中を駆け巡る温かい感覚に、嬉しいような恥ずかしいような。

「えっ……」

「どうした？」

三玖は先ほどまでのニコニコ顔から、奈落にでも突き落とされたような暗い顔に一変してがっくりとうな垂れた。握っていたスマホが力なく床に転がり落ちる。

「何見たんだよ」

がっくりと肩を落としたままの三玖に一応お伺いを立てるが、無視されてしまったので悪いなと思いつつ勝手に見る事にした。

その画面は変わらず姓名判断サイトで、何をそんなショックを受ける事があるのだろうかとスクロールすると、その原因が現れた。

上杉三玖

という名前の評価が、苗字の組み合わせ、全体の字画、全て《凶》だったのである。全部だ全部。三玖はテレビの占いを毎朝チェックしていると言っていたから、こういう物を気にしてしまうのか。

「あー、何だ、三玖。気にするなよ」

せめてもの慰めになれば、と思つてうなだれたままの三玖の頭を撫でてやった。さらさらと細い髪が指の間を流れる度に、柔らかい甘い香りが立ち昇ってきてドギマギさせられる。

機嫌が直つたのかこつちを上目遣いに見ると「あつ」と言つてその大きな目をパチリと瞬かせる。

迫力のある大きな蒼い目が、見開くように広げられて、瞬きも少なく段々俺の方へ近づいて来た。

「フータロー……」

「み、三玖さん？」

じりじりと迫りよってくる三玖は、音もなく忍び寄ってくるホラー映画の何かみたくて怖い。俺は少し後ずさりながら呼び掛けに答えた。

三玖はひしつと俺の両手を取ると顔の前に持つて来て、息がかかる程に近づけた。

「フータロー」

「な、何でしょう」

「フータローは中野風太郎になる気はない？」

「えっ」「えっ」「えっ」「えっ」「えっ」「いたっ！ 急に立ち止まらな
いでください」

俺の声と重なるように、玄関の方から女性の声があがった。同じような声が四つ。もちろん帰つて来た三玖以外の四人だ。

「お前ら、帰つてたのか」

ニヤニヤしている一花に二乃からその目線を反らすように一声かける。

「そうだよ。三玖がフータロー君にプロポーズした所から帰つてたよ」

「あんたねえ、告白を女の子にさせてプロポーズまで女の子にさせるってどういう了見なの！」

「とんだ言いがかりだ」

「へえー。じゃあ何でそんな話になつたのか聞きましょうか」

二乃は買い物袋を置いて俺の真正面に座った。化粧でより大きく見える目が、刃のように俺を刺し貫いてきて、寒気すら感じるほどだ。いつか肝試しをする機会があれば二乃に睨まれるだけのコーナーを作ろう。世の男どもの心胆寒からしめること請け合いだ。

「それは、ほら、お前らの爺さんから荷物が来る事は知ってただろ?」
「そうだね。だから三玖にお留守番をお願いしたんだし。そういえば荷物って何だったの?」

「お前達の母親が使っていたノートやらの勉強道具だ。その荷物の中にお前達の名前の候補が書かれたノートがあつたんだ」

「へー。ねえ見せて下さいよ」

「机に置いてあるぞ。ほら、三玖の目の前」

「はい。五月も一緒に見ようよ」

「私はお母さんのノートの方が気になります」

四葉は五月と一緒に三玖の隣に腰掛けて、ぱらぱらとノートをめくり始めた。

「それで、なんで上杉風太郎君は中野風太郎君になる事を勧められたのかしら?」

「それはだな、書かれている名前で姓名判断していたんだが、その流れで三玖が《上杉三玖》なんて入力して、その結果が散々だったからだ」
「散々って?」

「組み合わせが全部凶」

「二ははっ」

占い結果をそのまま言うと、冷たいすまし顔が笑いに歪んで、くつくと忍び笑いを漏らしながら肩を震わせる。四葉と五月と一緒にノートを見ていた三玖は、こちらの笑いに何やら良からぬものを感じ取ったのか、不思議そうに小首をかしげながら声をかけて来た。

「なに?」

「何でもないよー」

「そうそう。何でもないわよ。三玖って名前と上杉って苗字の組み合わせが悪いくらい何でもないわ」

「……ちよつと気にしてるのに」

三玖はむつと頬を膨らませて不満を露わにさせた。しよせん占いだと思うのだが。まあ大安に結婚式を挙げたがる人が多いのと同じで、ゲン担ぎというのは気にする人にとっては馬鹿にできない物なのだろう。

「ねえ、一花も二乃も見てよ。私達の名前だけど、五月の漢字が違うよ」

「見せて見せて。本当だ。五つの希望ちゃんじゃん」

「ごがつちゃんと言われるよりは良いと思うのですが」

「その理論でいくとごきちゃんになっちゃうわよ」

「うわー、やだなあそれ」

「五月という漢字で良かったです」

四人は書かれている名前を見ながら、これが可愛い、これがカッコいいと話に花を咲かせている。

「そうだ。フータロー君と三玖の為に私も名前考えてあげようか？」

「いらん気を回さんでいい」

「まあそう言わずに。うーん、ぱっと思いついたのは一太郎君かな」

「ワープロが上手そう」

「一花、さらつと自分の名前を入れないで」

「あ、だめ？」

「だめ」

だから気が早いと言っているのに。

話の輪の中に三玖も混じって行って、上杉ならこれだとか、中野ならお爺ちゃんが考えてくれたこの名前を使えばとか、議論は盛り上がりを見せている。

これは少なくとも午前中は勉強は無理だな。

「はあ……」

「何ため息吐いですか？」

「お父さんも話し合いに参加しておかないと、子供が大きくなった時にお母さんから文句をいわれますよ」

「い、言わないよ……」

「分かった。午前中は思う存分付き合ってやるから、午後はちゃんと

勉強しろよお前ら」

「えー」

「は？」

「いえ何でもないです……」

しゅんとした四葉を慰める五月に一度目線を送り、少し身を乗り出して話し合いに加わる姿勢をみせた。

こんな少しで決まったりはしないだろうが、きつとこうやって皆で考え合う事が大切なんだろう。こいつらの爺さんも、母親も、こうやって五人の名前を決めて行ったに違いない。

いつかというのとは分からないが、子供が大きくなって名前の事を聞いてきたらこう言おうか。

こんな風に俺達は君の名前を探していたんだ、と。

これから正義の話をしよう

「「「……」」」

ある日の夕食の前、私達の間にも重苦しい沈黙が広がっていた。ケンカして口もききたくない……という事ではなく、これから繰り広げられる光景に緊張しているからだだった。

自宅で何を大げさな、と言われるかもしれないけれど。

「ただいま」

と玄関から地の底から響くような低い声がする。

お父さんだ。

七月に入る前に、私達はあのアパートから元のマンションに戻ってきていた。

そんな中、まだ荷解きも終わっていない数日のうちに、お父さんが帰ってくるとスマホにメッセージが飛んできて、私達の間にも緊張が走った。

私はこの前話をしたから、そんなに嫌だとかいう意識はない……と思うけど、やっぱりあの鉄仮面を前にすると背筋が伸びる思いにさせられるのは間違いない。

お父さんの声に皆の肩がびくつと震えて、慌てて玄関の方へ向かって迎えた。そういえばこんな事ってほとんどした事ないんじゃないかな。表情の変わらないお父さんにしては珍しく、驚いたように目を見開いていた姿を見て、ふとそんな風に思った。

お土産と言つて手渡してくれたケーキを、嬉しさに目を見開いた五月が冷蔵庫に収めに行く姿は、食べ物に関してはそれはそれ、これはこれという思考の持ち主の五月らしい。

お父さんはスーツから着替える為に自室に向かうと、私は二乃と一緒にご飯の用意をしながら台所に急いだ。

焦げないように、冷めないように火を入れていた舌平目のムニエルをお皿にのせてテーブルに並べた。他の家庭だったらお父さんにお酒を出すのかもしれないけど、我が家のお父さんは特別な日以外はお酒を口にしないので、私達と同じようにグラスにミネラルウォーター

を注いだ。

自室から部屋着で出て来たお父さんは、クラスの友達の間から出てくる、パンツ一丁で歩き回るとかそういう事はなくて、今も夏らしく薄い生地だけどきちんと折り目のついたズボンに襟のついたポロシャツを着ている。お父さんの普段着はラフだけど、このまま来客を迎えても失礼に当たらないくらいの恰好のラインを下回った事を、私は見た事がない。

お父さんが椅子に腰かけたのを見て私達も座った。

「どうかしたかな？」

座ってから黙ってしまった私達に、お父さんは箸を持ちながらそう聞いてきた。

「いや……えつと……なんでもないわ、パパ」

「そうですよ。今日は久しぶりにお父さんが帰ってくるので、皆気合が入ってるだけです」

二乃がそう言って口火を切ってくれたおかげで、私達の寒い日のようにかじかんだ感すら覚える口元がほころんで、まず動いたのは、今すぐにでもいただきますと言って料理に手を付けたい五月で、私達もそれに倣って食べ始めた。

「帰ってきてくれて嬉しいよ。一人でいるにはいささか広い部屋だからね」

料理を半分ほど食べた所で、お父さんは優雅な所作で水を飲んでグラスを置いた。その口ぶりは、本気なのか冗談なのかいまいち分らないけど、そんな言葉にきつと皆同じ事を考えたと思う。いつも帰って来ないじゃん、って。

そんな思いを感じ取ったのか、お父さんは自嘲するように小さく笑って語りかけて来た。

「そんな顔をされるのも仕方ないか。僕は忙しさにかまけて、君達とあまりにも関わらなすぎた。恥ずかしい話だが、君達がどうして飛び出して行ったのか、いまいち分かっていないんだ」

言葉を頭から絞り出すみたいに、こめかみに指を当ててさすってお父さんはゆっくりと話す。慣れない事をする子供が目一杯知恵を絞

るような仕草に、私達は顔を見合わせて笑った。

お父さんは益々バツの悪そうに目を伏せると、けど誤魔化さないと
いった風に顔を上げる。

「だから、教えてくれないか？」

「お父さん？」

「君達が変わったのは上杉君のせい……いや、おかげと言うべきだろ
う。彼と過ごすうちに君達がどう変わったのか、何を思ったのか、僕
は何も知らない。今更、と言われても仕方がないけれど、どうか教え
てほしい」

お父さんは座っている上座の方から私達の顔を見た。

びつくりした。

あのいつも正しいお父さんが。家庭教師をつける事も、その家庭教
師が目標を達成できなかった時に解雇する事も、家を飛び出した娘に
帰って来いと言う事も、家庭教師一人での成績向上が難しいならもう
一人をつけようとする事だって、冷徹に正しい事を行うお父さんがこ
んな風に言うなんて。

「私達も知りたいわ、パパの事。ね、皆」

二乃が真つ先に言った言葉は、私達の総意でもあって、皆でこくり
と頷いた。

この人が私達の父親になってから、もう何年もの月日がたっている
のに、認められないなんて器量が小さいとなじられても仕方がない、
とここ最近思うようになった。

ことさら注意深く思い返さなくても、私達が放蕩三昧なバカ娘な事
は疑いようがない。けど、それをお父さんは許し続けてくれた。それ
を私達に興味がないからと言ってしまうのは簡単だけど、この人の不
器用な愛をそんな言葉で切り捨ててしまうのは、とても悲しい事だ。

お母さんがくれた物は、私達皆好きだった。

抱きしめてくれる温かさ。ふわふわのパンケーキ。何より、同じ日
に生まれた姉妹。

だったら、天国に逝く前に現世に残してくれた、お父さんとの縁も、
きつと大好きになれるはずだ。遅すぎる、なんてことは無いと思いた

い。

だからここから、歩み寄って行こう。

「って事があってね」

「そうだったのか」

あれから数日して、私は放課後に教室で勉強しているフータローに話していた。お父さんの言葉が出て来た瞬間に、ピタツと動きを止めて冷や汗を一つかいていたのがなんだかおかしい。

「で、どうなんだ。上手くいつてるのか？」

「え？ うん。楽しくできてるよ」

「楽しくねえ」

「この前カラオケ行った時ね」

「えっ、あの人カラオケ行くの？」

「付き合いで行ったりするんだって。それで……ふふっ」

この前皆で行ったカラオケの事を思い出して、あの光景がよぎった。お父さんの、あの真面目な顔そのままに、一花や二乃が歌う可愛い歌に合いの手を入れていく姿。

「あははは！」

「なにしたんだよあの人」

「気になる？」

「そりやな」

「でも教えない」

「なんでだよ」

「知リたかったらフータローもお父さんとカラオケ行ったら？」

「ええ……」

今度こそフータローは嫌そうな表情を浮かべた。

雇用主という事と、恋人の父親という気の進まない二代要素を盛り込んだお父さんと話す事は、気が進まないのは私でも分かる。

フータローは苦い顔をしながら手元の紙にさらさらと何かを書いて、とん、と点を打って頷いた。

「よし。出来たぞ」

「何が？」

「試験対策の問題集がだよ」

ほら、と言いなながらフータローは私に紙束を渡してくる。主要五科目の科目ごとに何枚か、姉妹事にばらつきはあるけどそんな問題集が五セット。

フータローが作ってくれるこの手書きの問題集との付き合いも長くなつたなあ、と思う。これを作る労力は分かっているつもりだけど、けど問題一つの一文字一文字までフータローの気持ちがかもつていると思うと、とても嬉しくなる。

「ありがと」

「今日俺バイトだから、三玖から皆に渡しておいてくれ」

「うん。分かった」

問題集を丁寧にファイルに挟んで鞆に入れて、筆記用具に参考書にノートにと机に広げていたフータローの片づけを手伝う。

忘れ物がないかと鞆をのぞき込む頭に、そつと手を置いてみた。いつもしてくれるみたいに、ゆつくりと髪を梳くように頭を撫でた。

「何だよ」

「えへへ……いつもありがとね」

「安くない金を貰ってる身だからな」

「素直じゃない」

「ほつとけ」

拗ねたみたいにそつぽを向いたフータローに、こつちを向いてとお願いするように腕に抱き着いた。三年生の教室だけど残っている人は今日はいないので、こんな大胆な行動をとっても平気だ。

胸いっぱい広がる嬉しさとありがとうの気持ちを送るように、そつと頬に口付けた。

恥ずかしそうに眉根を寄せた彼に、ますます嬉しいような、楽しいような気持ちになって、跳ねるような足取りで途中まで一緒に帰った。

「という訳で問題集貰って来たよ」

「ありがとう」

皆がそろった夕食の後に、私はフータローのお手製問題集を渡した。四葉と五月は「はい」と素直に喜んで受け取り、一花と二乃は苦い顔をして受け取る。そんな顔してるけど、内心フータローがかけてくれた手間が嬉しいのは皆の知っている。

「そうか。もうそろそろ期末試験か」

食後のコーヒーのかぐわしさを漂わせながら、お父さんは優雅にコーヒーカップを傾けた。

もう慣れたのか、皆お父さんがいる風景に緊張したりしないようになっていた。さすがに馴れ馴れしく、という訳にはいかないけど、少しずつ距離を縮めていけていると思う。

「二乃、もう破つちやダメだよ」

「もう一花。しないってば」

「破る?」

「えつと……ち、違うのよ。パパ」

「えー、二乃あんなにビリビリに破って」

「四葉、あの時怒ってたのね」

「何の事かな?」

「悪かったってば」

「それはいつの事かな?」

「二学期の期末の前だよ。フータロー君あつちこつちに大変だったって」

「そう言えば二乃の家出騒動もその頃だったかな。といっても、僕は彼から聞いたただけだったけれど。言われたよ、父親らしい事をしろとね」

お父さんが言ったフータローの言葉に、真剣に考えてくれてるんだと優しさに嬉しい気持ちになる。二乃はきまりが悪そうに顎の辺りを撫でるけど、唇の端が上がっていた。

「結局の所、どうして出て行ったんだい?」

「ドメスティックなバイオレンスを振るわれたからよ」

「もう、二乃」

それから私達はあの色々な事があつた二学期の期末試験の話をした。といつても私と、そして一花も蚊帳の外な感じだつたから、お父さんと一緒にほうほうと頷くばかりだ。

「なるほどね」

二乃が髪を切つて、四葉が受けていた陸上部の強引な勧誘を振り切つた話で一区切りすると、お父さんは指を組みなおして興味深そうな顔をした。

「そんな事があつたのか」

「私も知らない事けつこうあつたよ」

「自分のダメな所ペラペラ話したくないでしょ？」

「確かに」

「五月君が姉妹にそんな事をするなんて。どんな問題集か興味あるね。誰か見せてくれないか？」

「あ、じゃあ私のをどうぞ」

お父さんがちらりと紙束を見た視線を察して、四葉が机に置いていた問題集を手にとって渡した。ありがとうと小さく言つて問題集を繰る。

「手書き……」

「ね、ほんとフータロー君の努力には頭が下がるよ」

「どうしてこんな無駄に時間のかかる事を？」

と言う、お父さんの素朴な疑問に、私達の空気が固まった。せつかくのフータローの努力が蔑ろにされた気がして、自分の意思に関係なく眉に力が入ってしまう。一言で今の気持ちを言うなら「は？」という感じだ。

「どうしてって、上杉君の家庭の事情はお父さんも知っているでしょう？」

「もちろん」

「だったらそんな事言わないでください」

「……まさかとは思うが、彼はパソコンを持っていないのか」

「そうです。だから……」

「言えばパソコンくらい買ったんだが」

「「「えっ」「」」」

皆の少しピリピリした空気が、急に弛緩していく感じがした。

「何か変な事を言ったかな？」

「へ……変じやないと思うけど」

「三玖君、君のバイト先は設備費を払わせるかい？」

「そんな事ある訳……」

「それと同じ様な物だよ。僕に買ってくれと言い辛いなら、誰か貸してあげればよかっただろう。特に一花君」

「え、私？」

「君達のパソコンは起動した記録が僕の方に送られるようになってるが、一花君は全くと言って良い程起動してないだろう。使ってもらえばよかったんじゃないか」

「パパ、私達がパソコンで何してるか見てるの!？」

突然の事実にも、二乃は髪が逆立ちそうな程に怒って食って掛かる。変な物を見ているつもりはないけれど、確かに見られているのは良い気分じゃない。

「分かるのはログインしたかどうかだけだよ。何をしているかまでは知らない」

「それなら……いいんだけど」

「彼の努力を否定する訳じゃないが、手書きの問題集なんて時間がかかり過ぎる。頼んでいる身としては手をかけてくれるのはありがたいけれどね」

四葉から借りていた問題集を返して、お父さんはいつものような冷静な表情に戻った。

確かにお父さんの言う通りだ。手書きの問題集は、フータローの間を厭わない仕事に対する真摯な姿勢を感じられて好きだけど、時は金なりって言葉もあるし、改めないといけないのかな。

「今度送っておこう」

「ご、ごめんなさいお父さん」

「いや。でも今度からは言ってほしいな。今更君達の勉強代を惜しむことはないから」

「うん、分かった」

カタンとお父さんはコーヒーカップをソーサーの上に置く。

中高と私立に通わせて、しかも高校の時に起きた退学騒動の顛末は転校をいう形で今の高校に来させた際に、どれほどお金や人脈を使っただのか。そんな不良娘の勉強の環境を向上させるためなら、言葉通り今更お金を惜しまないのだろう。

改めて考えると、お父さんって見た目は怖いけど甘いなあって思う。

「私もフータロー君に何冊か参考書はあげたけど、さすがにパソコンはねー」

「貢ぎ癖……」

「なーに、三玖」

「むっ」

むにむにと一花が私の頬を摘まんでいじくってくる。

「一花君、その参考書の領収書は？ レシートでもいいが」

「え？ 捨てちゃったよ」

「……なるほど、捨てた、ね」

「あ、あれ？ まずかったかな？」

「まずいね。経費として落としてもよかったが、買った証拠がないなら、それもできない」

「お、お父さん？ ごめんって」

「……最近君達と過ごして分かった事だが、君達はお金の使い方が下手だね」

はあ、と零れたため息が本当に心底呆れた響きで、私達は近くの姉妹と手を取って「ヒエツ……」と恐れおののいた。

「君達はカードで色々な物を買ってきただろう？ それは別に否定しないけれどね。母親を失った悲しみを物が埋めてくれた部分もあるだろうし」

「そ、その節はお世話に……」

「だが」

「」「」「はいつ」「」」

「お母さんが天国に逝って六年ほど経って、君達ももう大人と言っても差し支えない歳だろう。この家を飛び出して、バイトもしてお金を稼ぐ大変さを知ったのに、そんな下手な時間やお金の使い方をしていると、こちらもいささか不安になるよ」

あ、お父さんから感じた事のない気配がする。これは落第寸前生徒だった私達が、何度も先生から向けられた気配に似ている。

お説教の気配だ。

そーつと二乃は手を取り合ってた四葉と部屋へと続く階段に足を向けるけど、もちろん見逃すお父さんではない。

「待ちなさい二人とも。話はまだ終わっていない。聞かないと言うなら、必要ないと言えるだけの大人の対応をして欲しいね」

「お、大人の対応とは何でしょうか、お父さん」

「君達が少し前までしていたように、住んでいる家賃を払ってもらおうか。そうだな……半分とは言わないけど、六分の一くらいというのはどうかな？」

「六分の一？ それなら何とかなるかも」

どんな無理難題が繰り出されるのかと身構えていた二人は、馴染みのある事に肩の力を抜いた。そういえばこのマンションってどれくらいかかっているんだろう。高い事は分かるけど、六分の一なら何とか払えるかな。

「これくらいだが、払えるかな？」

お父さんはスマホに先月の家賃の引き落とし完了画面を表示して皆に見えるように机に置いた。

「無理無理無理！」

二乃はそれを見て素っ頓狂な声をあげる。私達もぽかんと開いた口が塞がらない。

その額は六等分しても、前のアパートの家賃を五等分しないで十倍にしたくらい金額だったから。

「そうか。では聞いてくれるね」

「分かったわよ……」

二乃はしよんぼりして席に座った。私達も座って、そして顔を見合

わせる。嬉しくないけど、こういう事もちやんと親子の関係を築く上で重要かもしれない、と自分を納得させようとした。というより、今までの言われなき過ぎたんだ。

「ではこれからお金の話をしよう」

もう無駄遣いしません。

と皆の心が一つになった瞬間だった。

「お届け物です」

「はい。えつとサインで」

「はい。ありがとうございます」

「お疲れ様です」

「お兄ちゃん、何それ？」

「えつと差出人は……げ、お父さん!?!」

「お父さん？」

「中野のお父さんな」

「あの目つきの鋭い男の人？ 春休みにも皆と一緒にだったよね」

「ああ、その人だ。まあとりあえず開けてみるか」

「うーんと。あ、お兄ちゃんこれパソコンだよ」

「パソコンと……手紙？」

「セツティングしていい？」

「任せた。俺はちよつと手紙を読んでるから」

『上杉君へ』

家庭教師の仕事が順調なようで何よりだ。娘達はまた赤点だろうかと思ひ悩む日々がなくなつた事は素直に感謝している。

さて突然の贈り物で困惑していると思うので理由をここで述べておこう。問題集を作ってくれているようだが、手書きなんて非効率的な事は辞めたまえ。君の勉強時間をいたずらに奪うだけだ。家庭教師業にかかる手間を減らす為にパソコンとプリンターを送らせてもらう。

ネットに接続できるようにしてあるので君の調べものに使っても構わないし、妹さんとヒ〇キンでも見ているので存分に活用し

てくれ。

そのパソコンとこちらにあるプリンターはネットで繋げてあるの
で、宿題を送ろうと言う場合に使ってくれたまえ。電源は常に入っ
ているようにしておくので、いつでも送ってくれて構わない。

「これからも娘達の勉強をよろしく頼むよ」

「なるほど。ありがたく使わせてもらおう。しかしらいはがユー
チューバーに興味ある訳……」

『ブンブンハローユーチューブ』

「見てる……」

その心は

「ととのいました」

朝ぼらけ、と四葉に和歌の解説をしていると、俺の少し後ろに控えた三玖がそんな事を言ってきた。

雲一つない朝空を指さして、ほらあれが有明の月だと言う解説にぶんぶん首を縦に振っていた四葉は、その縦の勢いを横に転じてぐるりと三玖を振り返る。首が痛くなりそうさ。

「どうした？」

ゆっくりと体ごと振り返ると、くすくすと忍び笑いを漏らす一花と対照的に落ち着いた表情の三玖がいつものようにいるだけだ。

「だから、ととのいましたって」

整いましたと言われても、今の状況と整うという言葉が頭の中で繋がらない。

皆でする話を聞いたのか、先を歩いていた二乃と五月もこちらを不思議そうに振り返る。朝食では足りなかったのか、紙パック飲料のストローに口をつける五月の姿を見てそういう事か？ と聞き返した。

「腸内環境が？」

「指差さないでください」

図らずも会話のだしにされてしまった五月は、三玖がよくやるみたいに膨れて手に持っていた紙パックを後ろに隠した。むくれた五月にフグみてえと思つて、そういえば夏はフグの毒が強くなる時期だったかなとどうでもいい事を考える。

「何でわざわざフータローにお腹の調子を教えないといけないの」

「それはぐもつともだが、じゃあ何だよ」

「なぞかけどよ」

「はあ。あれか？ 何々とかけまして、それぞれとく、その心は、っていうアレか」

「そのアレ」

「それは分かったが、急にどうしたんだ」

「昨日動画見てたんだけど」

「おいテスト前生」

「そこで出て来たギャグがなぞかけだったの」

「まあ三玖の成績なら十分二十分の動画を見るのをあれこれ言いたくないが」

「1時間」

「おい受験生」

まあ根を詰めて勉強していると他の事がしたくなるのは分からんでもないが。俺だって数学に疲れたら現代文の問題に手がふらふらつと、と言うと三玖は「変態」と罵って来た。なぜ。

「天下の覇者とかけまして」

「いきなりだな」

「フータローから見た私達とときます」

「その心は？」

「それではお考えください」

「おい」

クイズ番組の司会者のように、ちよつとの茶目つ気を出しながら三玖は指差してくる。勉強に飽き飽きしてるのは分かったが、それでも言わせてくれ。勉強しろ。

「私答え知ってるから教えてあげよつか？」

「一花、フータローのためにならない」

「ためにならないって何だ。テストの何の役に立つんだよ」

「……古文？」

「教授クラスの知識があっても楽しめるかどうか分からんぞ」

「じゃあ私とのコミュニケーションに役立つ」

「ならいい」

「そこで納得しちゃうんだね」

一花に果てしなく呆れられた顔をされているが、甚だ心外だ。

「うう……余裕組の呑気な会話が身に沁みるよ。頑張ろ……」

「頑張りましたよう四葉」

「こんなので頑張ってくれるならもつと見せつけるが」

「鬼！ 仮にもあなたの事が好きだった女の子に対して、上杉さんに

は人の心と言うものが無いんですか!」

「今のはないよ」

「サイテー」

「ええ……」

先を歩く四人が一斉に振り返り、見上げるように、見下すように、冷たい視線を投げかけて来た。いや確かに軽い気持ちで適当な事を言ってしまった自覚はあるが、そこまで冷たい目をされるほどか。

味方を求めて隣の三玖を見るが、すっぱい物でも食べたかのように眉を寄せて考えていた。そして顔の前で×印を作る。

「ほら三玖御墨付き上杉さんのノーデリカシー」

「悪かった」

「トイレとかけまして!」

「え、なに?」

「喧嘩した友達ととききます。その心は?」

「トイレ? やっぱり腸内環境が整ってるんじゃないか?」

「だから何で私を見るんですか」

「これが解けたら許してあげます」

ししし、と歯を見せるように四葉は笑って小走りに駆けだして行った。古文の解説はいいのかよ、と思いつながら、これを解かないと口をきいてくれなさそうだと少しばかり考える事にした。

とはいえ、俺は笑いの趣味がある訳でもないし、クイズ番組だって数えるほどしか見た事がないから解き方の要領と言うものがいまいち分からない。

「テストの前だつてのに……」

「そんな事言わないで、トイレにでも行って気分を変えて考えてきたら?」

周りを見るといつの間にか学校の前まで来ていたようで、登校する生徒達であふれかえっている。

答えが分かっているのだろう、三玖は楽しそうにくすりと笑うと俺を放って友達の方に駆け出して行ってしまった。

「おはよう上杉君」

「いる気はしてたが」

鞆を教室に雑に放り投げてトイレに行くと、いつものように無駄に眩しい武田の奴がいた。こいつとのトイレでの異常なエンカウント率はどういう事だと問い詰めたくもなるが、藪蛇な気もするのでこの所は今はいいとしよう。

「おや、難しい顔をしてどうかしたのかな」

「ちよつと分からない問題があつてな」

「珍しい事もある物だ。僕で良ければ力になるよ。……あ、三玖さんのご機嫌取りという問題ならあらかじめ言っておくがお断りだよ」

「ちげーよ。お前、なぞかけは出来るか？」

「ミニスカートとかけまして、結婚式のスピーチととく、その心はどちらも短い方が良い、というあれかい？」

「なんだそれ」

「三代目三遊亭遊朝の作なんだけど、知らないかな」

「俺が落語家なんて知っているような男に見えるか？」

「教科書に載っているなら知ってそうだけど、君が娯楽方面にはからつきしな事は分かつてるよ。で、なぞかけにでも目覚めたのかな」

「俺じゃなくてあいつらがな」

「ほう」

「トイレとかけて、喧嘩した友人ととく、その心は？ という問題を出されて、答えるまで口をきいてやらないとかいう変な怒らせ方をしてしまつてだな……」

「トイレに、喧嘩ね。はあ、なるほど」

「分かったのか」

「少なくとももう怒つてない事は分かったよ」

「そうか？」

「そう。だから」

そう言うと、武田は意味ありげに蛇口をひねって手を洗った。洗い終わってハンカチで手を拭きながら、細く水を流したまま何かを語り掛けるように俺の方を見ている。

「こうしたまえ」

「早く止めるよもつたいない。流しっぱなしに……」

小さな水音と共に、排水溝を滑り落ちて行くちよろちよろという音が何とも無駄の極みの二重奏のおかげか、俺の頭に一つある事がぼんと思い浮かんだ。

「気が付いたかな」

「下らねえ……」

「ははは、そういう物さ。早く謝りに行った方がいいんじゃないかな？」

「そうしよう」

四葉の怒りの回路がどうなってるか理解しているとは言い難いが、姉妹なんだ、三玖と同じようにほったらかしにしておいたら後が怖くなる事は想像に難くない。

「おい四葉」

「はい上杉さん、どうかしましたか？ あ、そうだ。古文の続き教えて下さいよ」

「口を利かないんじゃないのか」

「おっとそうでした」

「……その心は、水に流そう」

「え、何言ってるんですか」

「自分で言った事を忘れるんじゃない。トイレとかけまして、喧嘩した友達ととく、その心は、どちらも水に流したい、だ」

俺の答えに、四葉は大きく開くせいで時折三白眼に見える目をぱちりと瞬きさせると、あつと思ひ出したかのように息を漏らした。

「正解です」

「ちよつと忘れてただろお前。別に怒ってもないのに人を試すみたいな事をするな。女の悪い所だぞ」

「あーそういう事言うんですか」

「ああ、そういう事を言うね俺は。知ってるだろ」

「そうでした」

四葉はこてつと首を傾けて、からかうように呆れ顔をした。……俺は一生分の呆れ顔をここの一年でこいつらから見せられた気がする。

なぜだ。俺はかなり頑張っているのに。

「行きましよう上杉さん。古文の続きと、あと数学を教えてくださいよ」

「そういえば前の数学の小テストはどうだったんだ？」

「ぎ……ギリギリセーフでした」

「見直しは？」

「ギクツ」

「あのな、先生だって鬼じゃない。定期テスト前にする授業ってのはヒントをちりばめておいてくれるんだ。絶対小テストの問題に似た物が出るぞ」

「分かってますけど……あ、三玖」

すすーつと逃げるように向けた視線の先に、四葉は救いの糸を見出したようだ。姉妹の中で、こと勉強において一番頼りになる姉の姿が廊下の角で走っている。……走っている？

「どうしたんでしょう三玖。あんなに走ってるのは珍しいですね」

四葉の疑問も最もだ。こと勉強において一番頼りになる三女は、こと運動においては一番頼りにならない。あんな走り回る用事をする事はなるべく避ける彼女が、どういった心境の変化か。

「え？ 今日私日直だよ」

と、聞いてみれば実にくだらない。

せわしなくぴよこぴよこ走る三玖を呼び止めて聞けば、帰って来たのはそんな返事で、俺はちらりと見た黒板の墨に書かれている今日の日直の欄を思い出した。確かに手には次の授業で使うであろう資料が入った段ボールを持っている。

「お前一人か？ 男子の奴は何やってる」

「今日病欠なんだって」

「じゃあ手伝うよ」

学級長の面目躍如とばかりに、四葉は元気よく諸手を挙げて協力を申し出る。

「……この前の数学の小テスト」

「えっ？」

「一緒に勉強したよね」

「う……うん」

「結果は？」

「ギリギリ……」

「勉強してて」

「はい……」

せっかくの提案をすげなく断られた四葉はうな垂れて、それに釣られてか頭のリボンもしょんぼり頭を下げていた。

知らない間に二人で勉強していたのか。俺の提案、というほどの事でもないが、言った事を実践し続けてくれているのは教師冥利に尽きる話だ。

「さあ、勉強だ四葉。三玖、人手がいるようなら呼べよ」

「うん。ありがとう」

抜き足差し足の不穏な足取りでこの場を離れようとする四葉に、三玖の持っている荷物を手分けして持つように言い、逃げられないようにする。ほいほい頼まれごとを受けてしまつててんやわんやになる所は困りものだが、頼み事をすればそれを果たそうとする美点はこう言つてはなんだが扱いやすい。……急にこいつの将来が心配になつてきたな。

三年生になったとはいえ、休み時間に机に突っ伏して寝るような奴はいなくならない。別にそれをどうこう言う気はないつもりだが、それでも見知った真面目な奴がそんな事をしていけば気になるのが人というものではないだろうか。

「何してんだ五月」

真面目な五月のらしくない居眠りに、声をかけてみると、クラスの女子の中でも特に長い髪を揺らしながら緩慢な所作でこちらを見上げて来た。

「上杉君でしたか」

「珍しいな。いつもは休みも勉強しているお前が。体調でも悪いのか？」

「悪いと言いますか」

「なんだ」

唇の端を舐めつけるように口をもごもご動かして、どうも歯切れの悪い。

「真言宗の名僧とかけまして」

「はっ。」

「このくらいの時間にかけて欲しい言葉ときます」

「お前もかよ」

「どうぞ考えてください。私は頭を空っぽにするのに忙しいので」

何もしない事が忙しいとは、哲学かよ。

投げかけられた問題を解かないのは、何となく俺の心にもとる気がして、その場で腕を組んで考えてみる事にした。

今は三時間目終わり、四時間目の前の休み時間だ。今日の日程半分終わったとか腹が減ったとか考える時間だ。

それと五月に失礼かもしれないが、彼女が知っている真言宗の僧なんて限られている。つまり。

「……くうかい（空海・食うかい）？」

「お昼に焼肉定食焼抜きを頼む人からの施しはちよつと……」

「めんどくさっ。なんだよお前、自分で言わせといて」

「まあまあ、これを差し上げますのでそう言わないでください」

お前なあ、と口をついて出てきそうなのを飲み込んで、五月が鞆から個包装を受け取った。お洒落なフォントの英語で書かれた袋で、何が入っているのかと思つて振ってみると、パラパラと固い物同士がぶつかる音がする。

「何だこれ？」

「この前街中を歩いてる時にもらったサプリの試供品です」

「いらねーよ」

「あなたに一番必要な物だと思いますけど？ 安いからって炭水化物ばかりの食生活を送っている上杉君には」

「いいんだよ俺は。お前と違ってあれで足りてるから」

「余計な一言が多いです。あんな食生活だからカタボリック（筋肉を

分解してエネルギーにしてしまう現象)を起こして体力が付かないのではないですか？ 正直私も眉唾物だとは思っていますけど。今日は暑いですし、飲んでおいて損はないと思いますよ」

「今日が暑いのとこれを飲んでおけに繋がりを感じられないんだが」「五時間目は体育ですよ。栄養の足りてない上杉君が熱中症にでもなるのではないかと危惧しているのです」

「人を飢餓野郎呼ばわりするんじゃない」

「そうですね。では誰かにでも差し上げて下さい。私には必要のない物なので。ええ、上杉君と違って多様な食生活を送っている私には必要ないので」

「……怒ってる?」

「富士山五合目くらいには」

パンと机を軽く叩いて立ち上がり、五月は財布片手に教室を出て行った。

結局何か飲み食いに出るのかよ……。

俺は受け取ったサプリの試供品をポケットに突っ込んで、そのポケットに入っていた単語帳をめくり始めた。

しかし、富士山五合目辺りだと？ 最近になって五つ子に婉曲表現のブームでも来たのだろうか。俺はテストに出題されそうな話題は知っているが。例えば標高3775メートルであるとか、世界文化遺産に登録されたのは2013年である事とかそういった事柄だ。登山のルートなんてものは知らない。知らないが、五合目というくらいだから、まあ怒り半分くらいか。と、まとまらない頭で単語帳を繰る手を止めると、今日は何かと忙しそうな三玖が教室に入ってくる姿が見えた。

「三玖、今日はついてないな」

「あ、フータロー。こんなに忙しい日直は初めてかも。こういう時に限って男子はお休みだし」

「やっぱり手伝うか?」

「ううん。あとは何も頼まれなければ日誌くらいだから大丈夫」「そうか」

体力のないなりに駆け回ったせいか、三玖の白い頬に汗が一粒流れていた。そのせいで額にペタリと張り付いていた前髪を払うと、汗なんだから触らないでと口を尖らせて怒ってきた。悪い、と短く謝って話の一つでもと口を開いた。

「話題を変えるが、富士山の五合目ってどれくらいか知ってるか？」

「富士山の五合目？ 登山にでも目覚めたの？」

「そうじゃなくて、五月を富士山五合目くらい怒らせてしまったらしくてな」

「何言ったの？ ……やっぱり言わなくていい。想像つくから」

「五合目というくらいだから半分くらいなんだろうが、それってどれくらいの怒り模様なのかと思ってな」

「怒ってないと思うよ」

「そうか？ まあ本当に怒ってたらこんな表現しないとは思うが」

「だって五合目って車で登れる範囲だもん。人によっては富士登山は始まってすらない」

「歩いてすらないのか……」

「うん。だから五月も今日暑いなあくらいにしか思ってないよ」

なるほど、暑い日のふざけんな地球くらいの怒りか。

確かに大した怒りじゃない。外を走り回る運動部にでもなれば違う感想を抱くのもかもしれないが。

しかし知恵がついたのは良いが、こういう風に人を試す小狡い知恵はいらなかったな。

食堂は学校内で最高の場所の一つだと思う。クーラーは効いてるし、冷たい水は飲み放題だ。「上杉君一人だよ」「ヤバー」などと心ない言葉をかけられる事もあったが、それも今は昔である。

最近はおっぱら三玖と、そこそこの頻度で武田と前田と昼食を共にしているの、一人でいる事を揶揄するようなセリフを言われた記憶は少し遡らなくてはいけないほどだ。

「上杉君今日一人だよ」

「三玖ちゃんと喧嘩したのかな」

「ヤバー」

……遡らなければならぬほどだ。(強弁)

言い訳をさせていただと、三玖は日直の用事がと言って捕まえられなかったのと、武田は女子に引きずられて行ってしまったのと、前田は彼女と昼飯を食いに行行ってしまったので仕方なく一人なんだ。決して喧嘩したとかそういう事実はない。

最後の手段として一花や二乃、四葉に五月とでも食事をご一緒すればボツチの誹りは免れたかもしれないが、そうすると今度はたらしの誹りを受ける羽目になるだろう。

まあどうでもいいか、と思って単語帳を取ろうとポケットに手を突っ込むと、普段にない感触が指先につるりと走った。

そういえば五月から効果のほどの分からないサプリを貰っていたな。ポケットから出したその封を切って袋を掌にひっくり返してみると、二粒ほどの錠剤が転がり落ちて来た。ビタミンBだかCだかでうつすら黄色いそれを眺めて、とりあえず飲むだけ飲んでみようと思う。タダだし。

ぐつと飲み下したところで、いつもならもう少し食堂でゆっくりと勉強する所だが、次の授業が体育な事もあり、早めに準備しておこうと食堂を後にした。

「大丈夫かなー」

「大丈夫よ。ていうかさささいよ」

教室へ戻ろうと歩いていると、聞きなじみのある声が二つ通り過ぎて行くのが聞こえた。顔だけでその方向を向くと思っただ通り一花と二乃がいて、中庭の奥まった所へと消えていく場面だった。

あの方向はたまに不良生徒がたむろしているという、良くない評判が流れている場所だ。こんな真昼間に滅多な事は無いとは思いますが、馬鹿に常識は通用しないとも言おうし、もし変な輩に怪我を負わされたと後で知ったら俺は後悔するだろう。ちよつと覗いて確かめるくらい、なんてことない労力だ。

建物の角を曲がって……。

「お前ら」

「うわっ、いたんだフータロー君」

「どうかした？」

「ああ、不良生徒の摘発だ」

「不良？ 学級長はそんな事までするの」

「怖いわね。私達の安心な学校生活のために頑張っつてねフー君」

「お前らの事だ！」

結論から言うとな不良生徒はいた。

名前は中野一花と中野二乃という。

ええー、と二人は文句をたれるが自分で分かっているはずだ。

こんな人目のない所まで来て並べた、ベンチの上のマニキュアがそれを物語っている。

この高校は校則が緩い事は、一花がピアスをつけたまま通えている事からも分かると思う。だがさすがにマニキュアのようにシンナーの匂いがする物の使用を許可するほどではない。

「見逃してよフータロー君」

「このまま鞆にしまえば許して……っつておい準備するんじゃない」

「一花、手出して」

「おねがーい」

「おい」

俺の忠告も空しく、聞こえてないふりをしつつ二乃は一花の爪を丁寧に拭いていく。透明な液体が入った瓶を開けて、ブラシで爪を撫でて行く。

「お前らなあ」

「夜の子供とかけまして！」

「えっ、何？ お前らの中で流行ってるのそれ」

「女のたしなみととく。その心は？」

「どういう事だ？ 子供？ 女のたしなみ？」

あまりに突飛な質問、というよりなによりなぞかけなのだから、そうでなくては簡単すぎるのは分かっているのだが。

「ほら今の内にするわよ」

「フータロー君考え込むと行動が止まっちゃうからね」

うるさいぞ。

しかし、何だ夜の子供がする事って。歯磨きか、トイレか、夜更かしか、まくら投げか恋バナか？ それに女のたしなみってのもピンとこない。三玖なら「茶道か薙刀」とでも言いそうだが、目の前にいる二人は今どきの女子なのでそんな事は言わないだろう。化粧か？
今やっているのはネイル……ねいる……

「分かった」

「え嘘早」

「ちよつと二乃、簡単すぎだったんじゃないの？」

「まだ答えと決まった訳じゃ……。それで、答えは？」

「ねいる、だ。ネイルと寝入る」

「正解」

「答え言うのが速いわよ。これでCMまたごとく思ったのに」

「何がCMだ。動画の途中に挟むんじゃない、飛ばすのが面倒だろ」

「フータロー君がユーチューブに染まっている」

とんだ知恵を働かせやがって。一花の片手の爪を塗り終わるくらい時間稼ぎされてしまった。

「俺じゃなかったら反省文ものだぞ。もう諦めろ」

「むむむ。じゃあこれはどうかなフータロー君。芝居とかけまして」

「まだあるのか」

「初夢ととく。その心は？」

今度のお題は芝居か。こいつら出題するなぞかけが自分の個性に合いすぎだろ。昨日考えてきたのか？

「もういいだろ」

「あれー？ 分からないのかなフータロー君」

「ふぎけるのはその爪だけにしろ」

「ひどい。頑張って磨き上げた爪なのに」

分からない、だと。ふぎけやがって。お前らに勉強を教えたのは誰だと思ってる。いや勉強はあまり関係ないか。

しかし芝居と初夢ね。芝居、といえば目の前の一花、つまり女優だ。女優、俳優、演出家、舞台、演技、映画。どれもピンとこないな。

初夢の方からアプローチしてみよう。初夢と言えば『富士二鷹三茄子』が縁起が良いとされているが……これじゃん。

「どちらもえんぎ（演技・縁起）が良いのが見たい、だ！」

……

……いねえ。

「演技が良いのが見たいんですけどー」

「何してるのフータロー」

「おお三玖か。一花と二乃知らないか？ さつきまでいたんだが」

「え、知らないのフータロー？」

「何がだ」

「今日一花仕事で早退だよ」

「そうだったか？ それじゃ学校を出たのか。なら一花は良いとして。じゃあ二乃は」

「二乃？ 一花のネイル塗ってくるって言ってたけど、済んだなら教室に戻ってるんじゃないの？」

二乃のやつ、撮影に挑む一花のネイリストのつもりだったのか。もちろん褒められた事じゃないが、ここは姉妹への献身という事で先生には言わないでおいてやろう。

しかし両手の爪にマニキュアを塗り終わるくらいここにいたのか。結構な時間を食ってしまった。

「俺達も戻ろ……なんだそれ？」

改めて三玖の姿を見ると、普段にない手荷物を持っている事に今更ながら気が付いた。体の後ろに隠している、身長のはあるうかという黒い円筒形の物だ。

「これ？ 先生に世界地図持って行ってって頼まれたから」

「それで昼休みにどっか行ってたのか。頼みすぎだろ先生も」

「本当にね。五月じゃないけどさすがに私もお腹が空いたよ」

「食べてないのか？」

「え？ うん。ちよつとバタバタしてたし」

「これ持って行くっておくから何か食べてこいよ。次体育だぞ」

「そう？ じゃ、お願いねフータロー」

三玖から長い長い世界地図の一巻きを受け取ると、その重さに一瞬よろけそうになる。手ぶらになった三玖は、ちよつとした開放感に顔をほころばせて額の汗を袖で拭うと、小走りに食堂の方に駆け出して行った。

こんな重い物、女の子に一人で持たせるなよ。休んだ男子の日直に内心文句を言いながら、人にぶつからないように気を付けて教室に吊るしておく。端の方を叩きながら微調整していると、昼休憩の終わりを告げる予鈴が鳴り響いた。

窓の外に目を向けると、景色が白むほどの激しい日差しが照り付けているのが見える。何て気の進まない授業だろう、と思いつながら体操服を手にとって更衣室へ向かった。

学校生活において腹が立つ事とは何だろうか。

抜き打ちで小テストをされた時と言う人もいるだろう。皆持って来ているのに自分のスマホだけ没収された時だろうか。俺は、

「体育委員、後片付けよろしく。なに、今日は休み？　じゃあ学級長、片付けておいてくれ」

と体育の終わりしなに言われた時だろうか。体力の無い身としては、おい勘弁してくれよとげんなり気分が落ちてしまう。学級長という立場はそういう物だと言われれば、まあそうですねとロクな反論はできないが、いやでも他に暇な奴いっぱいいませんかと思わず先生に進言したくなる。

しかし体育倉庫の鍵を取りに行った先生に言う事能わず。まあ大した荷物じゃない、面倒くさいだけだ。

ボールの入ったカゴを持って倉庫の扉を開こうとするが、疲れているからか上手く開かない。何で体育館の倉庫にしても資材倉庫にしても扉はどこも無駄に重たいんだ。

上げた腿の上にカゴを乗せて、片手で開けようと格闘していると不意にカゴが軽くなった。

「手伝うよ」

そう声をかけてきたのは三玖だった。こういう時真っ先に駆けつ

けてくるのは四葉だが、と思つて辺りを見渡す。予想本命の四葉は女子に背中を押されて困つたような顔をしていた。集団の中でこくり笑つてこちらに手を振っているのは、俺はほとんど言葉を交わした事はないが三玖の友人だったはずだ。あいつらの差し金か。

「どうかした?」

「いや、何でもない。早く終わらせようぜ」

カゴを持つてくれた三玖の頭にポンと軽く手を置いて倉庫の重い扉に手をかけた。三玖がはつと吐いたため息の表情は、運動のせいで火照つた赤い頬のせいで、何となく艶めかしい物に見えた。しかし、今日一日使いつ走りされたせいで体が運動するモードにでもなつたのか、あまり汗はかいていないようだ。

倉庫に入ると日陰のひんやりした空気に乗つて石灰の匂いが鼻をついた。一番奥の棚に置いておいてくれと言われたんだつたなど思い返して、少し高い所にある開いたスペースにカゴを置いた。

「はあ……」

三玖は力なくまたため息を吐いてその場にへたり込んだ。体力のある時でも元気澆刺と声を出す事は無いが、それにしたつて弱々しい。さすがに今日のような雑事をこなした後に、追いつちのような体育があればそうなるか。

「大丈夫か?」

「う……うん、だいじょうぶ」

体調の悪そうな三玖に合わせて俺もその場に座り込む。

「ねえ、そういえばわかつた?」

「え、何がだ?」

「けさのなぞかけ」

「ああ、あれな」

確か、天下の覇者とかけまして、俺から見た三玖達ととく、だつたかな。分かつてはいたんだ、三玖がちよこちよこ忙しいので言う機会を逃してただけで。

「その心は、どちらもとくがわ（徳川・解く側）だ」

「えへへ、あたり」

ふらりと三玖の体が揺れたかと思うと、身を投げ出すように俺の方へと倒れこんできた。突然の事に驚きながら受け止めるが、完全に油断していたので春休みの旅行の時のように二人一緒に倒れこんだ。一つ違うのは、下が畳ではなくコンクリートなのでガツンとみつともなく頭を打ってしまった事だろうか。

痛えと思いつながら後頭部をさする。危ないだろ、と文句でも言おうと思つて体を起こし、俺の胸元に顔を押し付けている三玖の頭を揺らした。

カシャン

「……カシャン？」

この感じ、覚えがあるぞ。あの時は今日とは真逆の寒い日だったか。一花と倉庫に閉じ込められた日の出来事が頭によぎつて……

「つて思い出してる場合か！ 先生！ せんせーい！」

前に閉じ込められた時は、木製の扉の倉庫で最終手段として扉を壊すという手も取れた。寒いとは言つてもしのげる術があった。

だが転じてこの状況はどうだ。扉は鉄製の分厚い物で、内側に鍵はついていないし、壊すなんて出来るはずもなく、外と比べて涼しいとは言つても優に三十度は超える暑さはあるだろう。扇風機なんて物も、もちろん冷房なんて気の利いた物などもあるはずない。

「おい三玖、どいてくれ。まだ先生が気付いてくれるはずだ」

ぐいっと三玖の肩を押すが、一向に俺の上からどく素振りをみせない。抱き着いて離れないと言う訳では無く、むしろ腕が力なく床に投げ出されている。

「……三玖？」

「はあ……は……」

「おい、どうした三玖」

どうにもおかしい。三玖はサボろうなどと言う質の人間ではないし、次の授業はどちらかと言うと好きに分類される世界史の授業だ。

体にのしかかる女の子の体を真つすぐ持ち上げるといふ力のない俺は、寝返りを打つように体を回して三玖の体を下にした。

真つ赤な頬は照れたからではなさそうで、三玖はいつもちよつとぼ

やつとした目をしているが、こんな虚ろな感じではない。

大丈夫か、と声をかけながら頬に触れると、らいはが熱を出した時よりも熱く、否応なしにただ事ではないと理解した。

意識が混濁した様子、異様に熱い体、なのに汗をかいていない。

間違いない。これは熱中症だ。

「おい三玖、しっかりしろ」

「うう……」

不審に思った四葉が助けに来てくれるだろうか。最悪一時間待たば部活に出る生徒の為に開けてくれるかも……いや、今はテスト前で部活はやっていない。自分でどうにかするしかないようだ。

とりあえず三玖をどうにかしないといけない。熱中症の症状が出た人はどうするんだったか。まず日差しを避けて、涼しい恰好をさせて、体を冷やして水分補給くらいはしなくては。

涼しい恰好とは首筋と脇と腿という、太い血管がある場所を開けるという事だと保険の教科書にも夏に入って貰ったプリント類にも書かれている。

……脱がすか。三玖には申し訳ないとは思いますが、今は恥ずかしいとか何とか言っている状況ではない。

「三玖、暑いかな？ 脱がすぞ」

「ふうたる……」

ぼうっとした、文字通り熱に浮かされた様子の三玖の服に手をかけて、ゆっくりと脱がしていく。露わになった首、肩周りに今はドギマギする余裕もない。服で風を送りながらどうするか考えた。

チャイムが鳴り、六時間目の授業が始まった。見回りの先生でもいなければあと一時間は閉じ込められっぱなしだろう。

ぐるりと倉庫を見渡すと、外へ通じるルートは表の重い扉か俺の身長の数ほどの位置にある窓だけだ。鉄製の扉をこじ開ける事は出来そうもないので、窓から出るルートを取らざるを得ないだろう。

「三玖、少し待ってろ」

胸元に三玖の体操服をそっと置いて窓からの脱出を試みる。幸いにも足場になりそうな用具があちこちにあるので窓に手をかける事

自体は難しくなさそうだ。だがもし羽目殺しの窓だったり、ここから見えないだけで鉄柵でもあったら厄介だ。と思いつつ、サッカーボールの沢山入った移動カゴの車輪にロックをかけて、そこにバレーボールに使うポールを突き立てる。

まさか小学生の悪ガキの時にやったりアル脱出ゲームごっこがこんな所で役に立つとは、人生とは分からないな。怒られた甲斐があったと言うものだ。

ゆっくりポールに足をかけながら登って行き、窓枠に手をかけた。どうやら普通の窓のようで、真ん中をはね上げて開錠できる馴染みのあるタイプだ。

誰も開け閉めしないので滑りが悪いが、歪んだりしているわけでは無いので普通に開いた。そこから顔を覗かせると、グラウンドを取り囲む防球フェンスの範囲内のようで、帰りはこれを登れば戻って来れるだろう。

「よっ……と」

狭い窓から引つかからないように肩を出して、防球フェンスを掴む。地面に下りた俺は誰かいるだろうと、とりあえず体育教員室へと向かう。

「何でこういう時に限って誰もいないんだ！」

電気の消えた体育教員室に、俺の叫びは空しく響いた。全体管理なので消えていないエアコンから吹き付ける風が侘しきを感じさせる。この冷たさを三玖の所に持っていったら……と思う。学級長で出入りした時に見た鍵束置き場には一本の鍵もないし、悪い事というのは続くものか。使われていないバインダーが団扇変わりにはなるかと背中に差し込んで部屋を後にした。

さあどうしようか。職員室にでも行けばマスターキーで開けてくれるかもしれないが、あまり三玖を放っておきたくない。先に三玖を落ち着かせれば、後でいくらでも助けを呼びに行けるだろう。鍵を探している間に悪化して入院しました、何て事になれば目も当てられないし、絶対に悔いるだろう。

とりあえず俺は途中の更衣室で取って来た財布から千円札を出し

て自動販売機に突っ込んだ。スポーツドリンクと、体を冷やす為に冷たい水を四本ほど買って、両手いっぱい抱えて持って行った。

もつと見ていてやれたら。気にかけていれば。そんな事がぐるぐると頭の中を駆け巡る。

起こった事に後からあれこれ言うのは簡単だ。けれど、どうしてもこんな暑い日に限って三玖に仕事を抱えさせた教師に、なんとも怒りのくすぶるような気持ちにさせられた。

いつものクラスメート達の鬱陶しい程の雑踏は無く、遠くでセミの鳴く声だけが聞こえる今は、俺と三玖を見捨てたのかと感じるような不思議な寂しさがある。馬鹿馬鹿しい。危機に面して視野が狭くなっているだけだ。

開けた窓から買ってきたペットボトルを放り込んで、自分も体を滑り込ませる。

はあはあと熱い息をする三玖の下に、買ってきたペットボトルを持って近寄った。背中に手を回して体を起こしてやる。

「三玖、ほら飲め」

「は……うん」

「ゆっくりな」

スポーツドリンクを傾けてゆっくりと流し込んでやると、ほっそりとした白い首がこくりと動いて飲み込んでくれている事に一先ず安心した。ゆっくり、少しづつ、ペットボトルの半分ほど飲ませた所で一端キャップを閉めた。両脇と首筋に冷水の入ったペットボトルを当てて、かっぱらってきたバインダーで三玖の体全体に風を送ってやる。時折水を飲ませて、扇いで、どれくらい経ったのか分からなくなるくらいそうしていると、赤い顔で固く目を瞑っていた三玖が、ゆっくりとその目を開いた。

「う……うん」

「三玖、大丈夫か？」

少し赤みの引いた顔をこちらに向けてくると、申し訳なさそうに眉を下げて笑った。

「ごめんねフータロー……迷惑かけちゃった」

「何が迷惑なんだ」

「だって、フータロー、ずっとここにいてくれたんでしょ？」

「当たり前前だ。どこの世界に倒れた恋人をほったらかしておく奴がいる」

「私はもう大丈夫だよ。少しでも授業受けてきたら？」

「馬鹿」

「いたっ」

俺は扇いでいたバインダーで三玖の頭を軽く叩いた。確かに三玖は起き上がれるようになっていいるし、自分で水分補給できるくらいに回復したが、自覚症状がないだけかもしれないし離れる気なんてのは更々ない。

「余計な事考えるな。林間学校の時みたいに五月か誰かが開けに来てくれるから、それまで待つてればいい」

「でも」

「青色とかけまして」

「え、なに？」

「献身ととく」

「その心は？」

「それが分かるくらい回復したら、俺だって安心して出て行けるから頑張つて考えてくれ」

考え事は朦朧とした頭では出来ないだろう。という俺の目論見通り、三玖は考える為に目を瞑り、ともすれば眠っているような穏やかな息使いをしだした。

そもそも授業はもう終わる時間だろうな、と扇いで風を送りながら考えると、いまさら慌てて授業に出ようなんて無駄な事だ。一回の授業くらい武田の奴に聞けば、遅れを取り戻す事はできる。

「あっ」

気の抜けたような声が三玖の口から零れ落ちた。チャイムが鳴つたのだ。

テスト前でなければ部活に出る生徒が倉庫を開けてくれるのは確実な事なのにな。というか教師の責任問題じゃないのか、こんな事態

は。三玖が少し回復した事で余裕の出て来た頭の端っこでそんな事を考えた。

「フータロー」

閉じていた目を開けて、そつと三玖は俺を呼んだ。首筋に置いていた水を取って、キャップを外して口元に持って行ってやる。差し出されたそれを舐めるようにちびちび飲んで、三玖は熱の抜けた顔で笑いながら言った。

「青とかけて、献身ととく、その心は、どちらもあい（藍・愛）から出てきます」

「正解だ」

答えを導き出せた、少し誇らしげな顔を見せると三玖はそのまま俺の方に、今度は明確に意思をもって倒れこんできた。

「ありがとう、フータロー。本当はね、怖かったんだ。頭がぼうつとして、体が動かなくて、私どうなっちゃうんだろうって。だからフータローが呼び掛け続けてくれて心強かった」

三玖は背中にしてきた手にぎゅつと力を込めて、嬉しそうに、笑う時のように空気を揺らした。三玖のセミロングの髪がさらさらと俺の頬を撫でて、悪戯好きの子猫のようにくすぐる。

カシヤン

「カシヤン？」

後ろのほうからどこかデジャブを感じる音が響いた。一つ違うのは、最初に聞いた音とは真逆の結果をもたらしてくれる福音であるという事か。

ガラガラという重たい音と共に外の西日が差し込んでくる。どうやら受難は終わりのようだ。

「こっから出たらとりあえず保健室に行くぞ」

「大丈夫だよ」

「大丈夫って言い続けて最後に倒れたのはどこのどいつだったかな」
「む……分かった」

まだほのかに熱が残るが、一番熱かった時よりだいぶマシになった三玖の体を触診するように触れて、ぽんと肩を叩いた。

「お前ら何してるんだ！」

開ききつた扉の先にいた先生がかけてくれた第一声がそれだった。ちよつと待ってくれ。何も俺達は好き好んでこんな暑い所に閉じ込められている訳じゃないんだが。

「何組の生徒だ、今すぐ生徒指導室まで来い！」

「はあ」

「ちゃんと服を着てからだぞ」

「ああ」

そう言われれば、三玖は体育を行う生徒なら纏っているべき体操服を脱いでいるんだった。熱を逃がすために俺が脱がせたのだが、俺達の授業を受け持っていないこの先生にはそんな事預かり知らぬことだ。

授業をサボって密室に男女の二人きり。おまけに女子の方は全部ではないが上を脱いでいる状況など、生徒指導室どころか下手すれば取調室にぶち込まれかねない。

「三玖、とりあえず服を着てくれ」

「私いつの間に脱いでたの？」

「暑いだろと思って俺が」

「何ぼそぼそ言ってる！早くしなさい！」

怒った声に押されたようにカゴからサッカーボールが一つ転がり落ちて来た。こびりついていた土が乾いて白み、ぱらぱらと剥がれ落ちて俺の膝を汚す。

はあ、と自分の意思と関係なくため息が零れた。

ほとんど空になったペットボトル達を持って立ち上がる。足元に転がったボールを苦々しく見つめて蹴り上げた。

踏んだり蹴ったり。

俺はなぜかボールに同情するような気持ちが起きて小さく笑った。

幸いに、といわれても慰めにもならないが、俺の訴えにより閉じ込められていたのは教師の確認不足という事に落ち着き、俺達は反省文や奉仕活動は無しという処分が下された。

心配したよ、と困った風に笑いながら、訳知り顔な武田はその後の事を少し教えてくれた。どうやら体育教師には後日追って沙汰が伝えられるらしい。

「その心は」

「それ流行ってるのかい？ そうだね、下手すれば死亡事故にすらなりかねなかった事件に、救った人が処分を受けて、原因を作った人が処分を受けないなんて事が知れたら大炎上だろうからね。解雇処分が出たっておかしくなかったよ」

「死ぬって」

「聞く限りではかなりギリギリの状況だったと思うけどね」

へえ、と生返事をして姉妹と話している三玖を見る。冗談でも言ったのか、四葉の言葉に口元に手を当てて楽しそうにくすくすと笑っている。あの笑顔が失われていたのかもしれない、と思うと変な感覚だ。

「それで何か教訓でも得られたかな」

「迂遠な物言いは辞めるべきだと思ったな」

「ほう。その心は」

「お前も乗っかるな。だってそうだろ。言葉の裏を読む遊びをしていて、表に出ていた三玖の不調を見逃すなんて、これほどバカな事はない」

俺の視線に気が付いた三玖と四葉が笑ってこちらに小さく手を振って来た。俺もそれに小さく答えて、胸に広がる嬉しいという感情に頬が緩むのを、目の前でニヤつく武田に指摘されるまで気が付かなかった。そのニヤケ面をしつと払って、手元の参考書に目線を落とす。

考察、なんて大層な物じゃないが、壁をよじ登って無理やり脱出したあのらしからぬ無茶をしたのは、俺は三玖のためだったらどんな事でもしてやれる、そんな言葉が上つ面だけでなく心の底から思っている事を知れたのがそうだろうか。

卵とかけて、愛ととく、その心はどちらもきみが大事です。

慣れない遊びは頭のリソースを使うな。もういいよ、と下らないと

笑いながら、今は元気な三玖をそつと見ていた。

恋する二人の噂とは？

「頼んだよって言われてもねえ……はあ……」

ひらりひらりと揺らめく蝶のようなりボンはためかせながら、彼女は窓の向こうで小さくなっていくヘッドホンを首にかけた姉妹を見てため息を吐いた。

期末試験が終わり、テスト週間のせいで止められていた部活が始まり、それに駆け出す生徒達をクーラーの効いた教室から見下ろしている。

からからと引き戸が開く音がして、外に向けていた目をそちらに向けた。黒髪と金髪の、二乃がこの学校に転校してから仲良くしている女生徒だ。

「やつほー二乃。なにブルーになってるの」

「そうそう。せっかく試験が終わったのに、悩むような事ある？」

「ん？ まあちよつとね」

ここ数か月の二乃の主な悩みと言えば、喜びとしてのイエローと憂いを帯びたブルーと恋愛戦線を張ったのちに世の果てで青と風が交じった事なのだが、二乃は友人にも風太郎が好きだという事は秘密にしていたので、軽く頷きながら言葉を濁した。

「何々？ 赤点取ったの？」

「いやいや、今更取らないわよ」

「ていうか赤点で取らない物なんだけど」

「それ」

「もう」

三年になってから、というよりは、二乃が赤点を取らなくなってからこういう冗談も交わせるようになっていた。

あつ、私って気を遣われてたんだな、と思ったのは二乃史上最もへこんだ事の一つである。

「というよりこの高校レベル高くない？ なんで全国トップ10が二人もいるの？ そんな超進学校だっけ」

「二乃、勘違いしてもらっちゃ困る」

「あの二人は完全にヒュー・ジャックマン」

「そうそう。蜘蛛に噛まれたトムホ」

「……突然変異って言いたいの？ あと私、スパイダーマンはアンドリュー・ガーフィールド派だから」

「えー、トムホかわいいじゃん」

「可愛すぎじゃない？ 私ワイルド系の方が好みだから」

「そう言えば二乃はそうだったね」

例えばお気に入りの俳優が出ている映画を見に行った時、二乃の反応が良いのは俺様系の役柄を演じている時なのは二人の共通認識だった。

「でもうちの学校に二乃の好みっていなさそう」

「武田君はタイプ違うし」

「あ、そうだ。五つ子なんだから男の好みも同じになるの？」

「は？」

唐突としか言いようのない言葉にピキリと顔が固まって苦い顔になった。ホテルの一室で三玖から緑茶を受け取って飲んだ時のような苦い顔だ。

「もしそうだったら地獄すぎないそれ？」

「昼ドラも裸足で逃げ出すね」

「あんた達ねえ、どうせ三玖の事面白おかしく聞きたいだけなんですよ？ スツと聞きなさいスツと。なんでいちいち妹の恋バナの始めに私がダメージ受けないといけないの」

「えっ、聞いていいの？」

「いいから。今の私は試験が終わって無敵だから」

「じゃあ聞けど二人が体育倉庫でヤツてたってマジ？」

「ぶっ！」

ヤツただのと生々しい質問に、飲み込もうとしていた唾が変な所に入ってしまった。どんな質問も受け止める準備が出来ている無敵モードだと言ったのは嘘ではない。ただ質問の内容がハイパームテキを突き破ってくるような内容だったただけで。

「げほっ！ な、何て？」

「だからヤツ……」

「あー！ やっぱいい、分かったから。……そういう事……」

「え？ どうかした？」

「どうかしてるのはそっちでしょ!? どうしてそんな発想になるの」

「いやだって鍵かかった狭い部屋で恋人がする事って……ねえ」

「しかも上脱いでたんでしょ？ 有罪でしょ」

「事実無根よ……と言いたいけど事実が織り交ざっているだけに何も言えないわね……」

風太郎と三玖が閉じ込められていた倉庫を開けていた教師がポロッと零したのであるだろうか、それともたまたま見ていた生徒でもいたのだろうか、どちらにせよ面倒の種を投げ込んでくれたものだともめかみのあたりをトンと叩いた。

「三玖とあと身内である私達の名誉の為に言っておくけど、いかがわしい事はしてないからね」

「嘘だー」

「というか噂に弄ばれすぎ！ なんなの、初陣で昌幸に弄ばれた秀忠なの？」

「は？」

「何言ってるの？」

「ほら前にやってた大河の話。草刈正雄にやられた星野源って言った方が分かりやすいかしら？」

「あ、大河ドラマの事言ってるの」

「意外。見てるんだ」

「三玖がね……。くつ、あの時パーを出していれば……」

「録画すればよかったんじゃないの」

「リアタイで見れるのに見ないのは何か負けた気がするじゃない」

「そういう物？」

「あれ、何の話だっけ」

「だから日曜の夜は大河よりイツテQを見るべきよねって話じゃないの」

「違ーう！ だから噂の二人が校舎の端でヤツてるのかとかどうかっ

「話でしょ」

「ま、お下品」

「お上品ぶるの止めない？」

「そんな強引な舵取りするなんてやっぱしてないってのは嘘？」

「嘘じゃないわ。閉じ込められて熱中症にかかったから脱がしたって言ってたんだから。保健室の先生にでも聞きに行ったら一発で分かる嘘ついてもしようがないでしょ？」

「それはそうだけど」

「それと、保健室からのお知らせがあったでしょ？ 熱中患者が出たので皆さんも注意して下さいってやつ」

そう言われて二人は先ほどのホームルームを思い出した。確かにこれから最後の部活に向けて頑張る中で汗をかいて熱中症にかかったり、涼しい部屋と外の気温差で体調を崩す事がないように、と担任から言われたのだった。

「あつたあつた」

「あれ出たの三玖のせいだから」

「えーそうなの？ 確かに終業式の連絡事項でまとめて言えば良くない？とは思ってたけど」

「大体、やらかしてたら反省文なり奉仕活動なり停学なり処分されるはずでしょ」

「そっかー、つまんないの」

「噂話の真相って、案外つまんない物よ」

はくあ、と二人は大きいため息を吐いてスマホを取り出してせわしなく画面をタップし始めた。ため込んでいたメッセーに適当に返信しながら気の抜けた会話をしていたが、不意に何かを思い出したように元気になって話出した。

「ね、これからあの店行かない？」

「タピオカ？」

「何言ってるの。二乃が美味しいパスタ出す店があるから今度行きましょうって言ったんじゃない」

「あつ、ガチの方の食べ歩きね」

「そうそう」

楽しくふくらませれそうな噂話を失ってがつくりしていた二人は、気を取り直して楽しい事に目を輝かせ始めた。

「おい、三玖、いないのか?」

スマホでお店へのルートを確認しながら話していると、無粋に割って入る声が扉の方から響いてきた。

怪訝な目をしながらその方を振り返ると、平均身長よりも高いすらりと、というよりはひよろりとした体型の男子。さっきまで噂していた上杉風太郎その人だった。

噂を持ち込んでぶつけて来た二人は思いがけないラッキーに目を輝かせた。

「ここに……」

「上杉君、丁度良かった」

「聞きたい事があるんだけど」

「は? ……まあ別に構わないが」

「やった。こういうのは本人から聞くのが一番だよね」

「二乃はやっぱ第三者だから」

「散々聞いておいて最後それは酷くない?」

女子達の会話を風太郎はいつものような、ぼうつとしているわけでは無いが覇気のない雰囲気聞いていた。そこから椅子にでも座ろうかと思っていると、「ん?」と頭を捻り、「は?」と零した。

「二乃」

「何よ?」

「二乃……二乃!」

「何なのよ。人をゴリラの学名みたいに連呼しないでくれる?」

「何そのピンとこない例え」

「どういう事?」

「ゴリラの学名はゴリラ・ゴリラって言うのよ」

「ぷっ、連呼するなってそういう」

「中野・中野さん」

「誰なのよそれは」

また脱線しかけた話の流れを風太郎はこほんど一つ咳払いをしてせき止めた。三人の女子の内、二人は何を聞こうとしたか思い出して、残りの一人は鋭い目つきを更に尖らせてそのまま流されておきなさいよと彼を睨んだ。

何で俺睨まれてるの、と釈然としないまま風太郎は聞きたい事があるならどうぞと促した。風太郎はここ一週間、何かにつけて勉強の質問を受けていたので、俺に質問があるなら勉強の事だろうとアタリを付けていた。受験生とは言え試験直後に勉強したいとなる人間は少ないが、そんな事を風太郎は知る由もない。風太郎は人の心が分からぬ。

「あれなの？ 忘れられない夏にしてあげる♡されちゃったの？」

「……なあ、なに言ってるのこの人」

「無駄無駄。そういう迂遠な物言いは分からない奴だから。それと……」

「えー、彼女と同じ顔の姉妹がCMに出てたらチェックするんじゃないの？」

「無理ね」

「無理って。いくら忙しくてもテレビくらい見るでしょ？」

「だってこいつの家テレビがないんだもの。物理的に無理なのよ」

「は？ 吉幾三じゃん。ウケる」

そう言う二人はけらけら笑い出して、ついて行けない風太郎は笑う二人とそれを見守る一人を見比べた。聞きたい事があると言われて、良く分からない事を言われて、そしていきなり笑いだされた。しかもよく知らない相手に。質問が勉強の事ではないと分かった事であるし、急に風太郎は帰りたくなった。

「帰ろうぜ」

「駄目駄目上杉君、これから二乃は私達とご飯食べに行くんだから」

「三玖ちゃんと付き合ってるからって、姉妹を独り占めはいけないなあ」

「独り占めって、人間きの悪い事を言うな」

「でもさ、姉妹の皆ってけっこう君にべったりじゃん。実は皆と付き

合ってるんじゃないやって噂もあるくらいだし」

「噂、噂ってなあ、俺はみ……」

「わー！　そ、そんな事ある訳ないでしょ！　しょう物なら私が絶対に許さないんだから！」

反論でもしようかと手をあげた風太郎を勢いよく制して、どこかしどろもどろな調子でそんな事を言った。

「二乃、なんか必死すぎて逆に怪しいよ」

「あれあれ？　実は？」

「怒るわよ。そもそも五つ子って言っても好みなんて全然違うんだから」

「へー、例えば？」

「三玖の好みはそれこそあれね、草刈正雄ね」

「そうなのか？」

「いや何で当人が疑問形なの。好きな俳優の話くらい聞かないの？」

「聞いてないな。だから今聞いている」

「本人から聞きなさい」

「だから」

「もうこの話は終わり終わり！」

これ以上の話をさせないように、パンパンと手を叩いて会話を打ち切ると、行く準備してと二人に声をかけた。変な二乃、と思いつつ二人は荷物を手に取った。

「なに焦ってるの？　ランチは二時までやってるんだから余裕だつて」

「だとき。恋バナしようぜ恋バナ」

「上杉君自分の事なのに、君結構いける口だね」

「そういう訳でもないんだが。ほら二乃、無いのか？　こういう事三玖が話してたとか、そう言う話」

「あ・ん・た・ねえ」

「興味あるある」

「大体三玖とほとんど会話した事もないでしょ、二人は」

「話した事は無くてもああいう大人しい感じの子がどんな付き合いを

してるのかは興味あるよ」

「ほら三対一でお前の負けだ」

そう言うと、我が意を得たりとばかりに風太郎は調子付いた。普段多数決を取ると、好みがバラバラの五つ子姉妹とはいえさすがに姉妹、風太郎の意見は少数派に追いやられてしまう事が多いので、珍しく多数派になれた彼は気分が乗っていた。俗に言うイキってる、というやつである。

「うう……」

そんな三人に詰め寄られて、さしもの彼女も困り果てる。蝶のようなりボンは心なしか気弱な犬の耳のように垂れさがって見えて、困ったように下がった眉に、つぐんだ口がもの言いたげに震えて不思議に色っぽい。

そんな顔出来るじゃん、と二乃の友人二人はどこからの目線かわからないがそんな風に思った。

「じゃあ言わせてもらおうけど。上杉！」

「はい？」

「はい？　じゃないわよ。あんたいつもデートって言ったら家の中とか図書館で勉強とか、そんななんぼっかりじゃない。三玖は確かにインドアだけど、変な所でアクティブなんだから偶にはどっか出かけなさい」

「は、はあ」

「聞こえなかったの？」

「はい。分かったよ」

「何か上杉君って偉そうだけど尻に敷かれてるのが似合う男だね」

「武田君みたいな爽やかに対等なパートナーがいそう感とは真逆」

「酷くないか」

「はいお終い」

「今度は良い方の話を聞かせてよ」

「そうだよ。あんなにベタベタなんだから姉妹にのろけ話の一個や百個はしてるんでしょ？」

「俺もそれ聞いたら帰るから何か教えてくれよ」

「何讓歩してやった感出してるの！」

ぶんすか怒っているがのろけ話と聞いて何かを思い出したのか赤い顔をしていて、怒り顔も効果薄だ。

「何怒ってるの？」

「別に二乃の事を話せて誤じゃないじゃん」

「そうだぞー」

「覚えてなさいよほんとに」

ぎゅつと拳を固めながら絞り出された言葉に、睨まれた風太郎は背中に穏やかでない感覚が流れたが、毒を食らわば皿までよと無駄に覚悟を決めて話せよとせつついた。

「言ってたのは……そうね。いつもは難しい顔してるくせに、見せてくれる優しい笑顔が可愛いって言ってたわね。それと、なんだかんだ言ってもきちんと向き合ってくれるのは嬉しいとか何とか。女の子の事にちよつと察しが悪いのはまあご愛敬ってところで。頑張ったなって褒めてくれると泣きそうになっちゃうくらい嬉しいって。だから上杉、困ったらとりあえず褒めておけば？　ま、まあそんな感じで、非の打ち所がない彼氏だと……三玖は思っているみたいで……はい……。あとクラスメート達と交流が出来き始めているのは喜ばしいけど、私だけが知っている彼の一面っていう特別感が薄れているのはちよつと寂しいと……えー、そんな事を言っていました、まる」

最初の方は普通に話していたが、言葉を進めていく内に気恥ずかしさが押し寄せて来たようで、段々と身を竦めるようにして縮んでしまつて行つた。

「愛されてるねえ上杉君」

「……」

「あはは、照れちゃってかわいいー」

蚊帳の外な二人は気楽な立場と決め込んで呑気に笑っていた。その呑気さが気に障ったのか、赤かった顔は鳴りを潜めて嘘くさい程の笑顔を浮かべた。それを見た三人は、笑顔とは本来攻撃的な物である、という言葉が脳裏に走った。

「うふふ、人から散々恋バナ聞いたんだから、じゃあ次は自分が話す番

よねえ」

「いや私達の事はいいじゃん」

「えーと、あの坊主頭の……山内くんだけ？」

ぴしっと金髪の彼女を指差しながら、不敵に笑みを浮かべてにじり寄った。

「人の事、っていうか人の妹の事ばつか言わせて、お店に行ったら根掘り葉掘り聞かせてもらうんだから」

「乗った」

「やだー」

さつきまでの余裕は一転攻勢により立ち消えて、そのまま金髪の彼女をいじるように攻め立てて、逃げるように鞆を持って教室から飛び出して行った。

「あつー！」

「こら待てー！」

その後ろ姿を追いかけて、二人もひったくるように鞆を手にとって教室から駈け出して行く。あつという間に一人にされた風太郎は、結局あれはどういう事なんだと頭を掻いた。

「ごめん忘れ物。先行ってて」

ちよいちよいとスマホをいじりつつ、もう帰るかと思っている所に、いきなり扉を開け放たれて風太郎はビクツと肩を竦めた。

「あら、いたの？」

「いたよ。なあどういいう事だよ二乃。いや——」

——三玖」

「何の事かしら」

「お前今更俺がそれくらいの変装でだまされる訳ないだろ。で、結局これはどういいうつもりなんだ」

「話は聞かせてもらった」

ピシャーン！ と勢いよく扉を開けたのは意外な人物、三玖だった。風太郎は不審な物を見るように彼女を見つめて、その視線に気が

付くと微笑みながら手を振った。

「三玖……いや二乃。どういうつもりなんだ。話を聞かせて欲しいのはこっちだよ」

「何の事？ フータロー」

「……その見え見えの嘘について楽しいか？」

「ちえっ、フー君には通用しないわね」

「でも二乃の目的は果たせたと思うから、それでよしとして」

風太郎の言葉に、二人は観念したように髪に手をかけた。艶やかに流れる髪がごっそり頭から取れたかと思うと、その下からもつと鮮やかな髪が露わになった。

二乃の姿は三玖に、三玖の姿は二乃に、それぞれ普段から見慣れた姿に戻った。

「で？ こんな事しようって言ったのは二乃か。二乃に決まってるよな。絶対二乃だ」

「ちよつとその熱い信頼なんなの!？」

「違うのか？」

「違いますけど？」

「開き直るな。どうしてこんな事したんだ」

「あー。友達待たせてるから手短に話すわね」

「さっさと話せ」

二乃は三玖になるためのウィッグを鞆にしまいながらスマホをいじり、「さて」と小さく言ってから机の上に腰掛けた。

「端的に言うよと嫌だったのよね」

「嫌？ 何が」

「この前の体育の後で二人が閉じ込められたでしょ？」

「ああ、あれか。中々に肝が冷える体験だったよ」

「ね」

「それは私達は分かっているんだけど、他の皆は面白い方に飛びつくのよね」

「何か面白い事なんかあったか？」

「三玖の上を脱がせてたでしょ？ そこだけが独り歩きしてね……」

「なんだよ」

「だーかーら、二人で変な事をしてたんじゃないかって疑われてるのよ」

変な事？ と風太郎は小さく口にしながら首をかしげた。何が変な事だ、当人としては大変だったんだぞ。そんな事を考えながら腕を組むと、頭の中に一つ思い浮かんで、その答えに軽く赤面した。

「馬鹿かあいつら」

「馬鹿みたいでしょ。だから嫌だったのよねえ。何で妹がヤツただのヤツてないだのを私がわざわざ話してあげないといけないの」

「……まあなんでこんな事をしたのかは分かった」

「そう。で、三玖、お願いした通りの展開になった？」

「うん。適当に私達の事を話して友達の恋バナに矛先を向けておいた」

「ありがと。待たせてるから行くわね。二人はどうする……って聞くまでもないか。じゃーね」

おどけたように二乃は手を振りながら、頭に付けたアゲハ蝶のようなりポンを飛ばたくように翻らせて教室を後にした。

「行っちゃった」

「私達も帰ろう？」

呆れ交じりに風太郎は言う。それを見てくすりと笑った三玖は音もなく隣に立って手を取った。愛しい掌に指を這わせて、くにくにとしっかりと確かめると、ゆっくりと指を絡ませる。

「そうだな」

風太郎は握って来た小さな手をぎゅっと握りしめると、バイトもない気楽な帰り道についた。

「どうする？ 二乃みたいにどっか食べに行くか？」

「うーん。最近新しい料理を覚えたから、食べて欲しい」

「そうか。材料は？ 買い物に行くか？」

「いい。家に材料はあるから来てくれれば」

「分かった。じゃあ行くか」

二人は仲睦まじく手を繋ぎながら、そんな会話をして穏やかな気持

ちで帰って行く。

それを聞いた生徒がまた新たに噂話を広げて、聞かれた二乃のこめかみがピキツたのはまた別のお話。

知らない罪と知らせない罰

「時に上杉君。君は付き合いを大事にする方かね？」

「はあ？」

試験結果が返却された日の昼休みに、俺は武田と答案用紙を突き合わせてテストの復習をしていると、武田の友人の一人が突然そんな事を言いだした。

明るく染めた茶髪を摘まみながら、ぎよろりと蛇のように睨んでくる。敵愾心というような悪意ある視線ではないが、何とか探るような視線は居心地が悪い。

「お前らに沢山噂してただけるほどに付き合いは大事にしてると思うけどな」

「そっちの、中野さんの話じゃないって。男同士の付き合いってやつだよ」

「柳生君。もしかして、あの話をしたいのかい？」

理由を知っているらしい武田は呆れながら肩を竦めた。人当りの良いこいつがこんな反応するなんて、あまり良くない物事なんだろう。

「武田、お前が一言「はい」と言ってくれば俺もこんな事しなくていいんだがな」

「君もこりないねえ」

「うるさいモテ男。俺らみたいな奴はこーいう事しないといけないんだよ」

「俺、席を外すか？」

「いや、お前がいてくれないと困る」

「なんで」

「他の学校の奴も誘って遊びに行こうって話してたんだけど、こいつ、「上杉君が来るなら参加するよ」とか言いやがってよ」

ふつと面倒な事態を目の当たりにした時みたいに、武田の友人は短くため息を吐いた。それを見た武田は悪びれもせず笑うと、ウイंकをパチンと飛ばしてきた。女子だったら喜んだかもしれないが、生憎

と俺は男子でおまけに彼女持ちだ。……だからそうしてくるのは止めてくれないか。三玖と付き合ってる事が一部の女子の間でカモフラージュ扱いされてるんだが。

「まあ、武田に賛成だな。そもそも受験生だぞ俺ら。夏休みを前に遊んでる暇なんてある訳ないだろ」

「分かってないな。夏休みの前だから遊ぶんだろ。どうせ皆予備校の夏期講習に行くんだから」

「言わんとしたい事は分かるが」

「だろ。分かってくれるよな。そうだ忘れてた。上杉、来てくれたらこれやるよ」

というと彼はポケットから財布を取り出してお札を入れるスペースをまさぐった。まさか金で釣る気じゃないだろうな。いくら年中金欠の俺でもそれは断るぞ。

「あった。これ、どうだ？」

俺の顔の前に突き出されたのは、無駄に色鮮やかな名刺程度の大きさの紙きれだった。小さな紙面の上段に学校の近くのカラオケの名が大きく書かれ、イメージキャラクターが手招きしている。

「何だこれ。えっと、一時間無料券？」

「お前お金が無いからって中野さんとロクなデートしてないんだって？ これでも使って一緒に遊んだらどうだ」

「ちよつと待て。何でお前がそんな事知ってるんだ」

「そういう噂」

「もう噂はいいよ……」

二乃が噂に嫌気がさして入れ替わりを頼んだ理由がよく分かるな。俺も変わって欲しいくらいだし。

しかしカラオケか。近いしそこそこ楽しめるし……密室に二人きりだし、タダで行けるなら悪くない選択肢だ。

「いいぞ」

「え、本気かい上杉君」

「よっしや。聞いたか武田。上杉が来るってよ。約束だからお前も来いよ」

「分かったよ。君の勝ちだ。僕も男だ、約束は守ろう」

「よーし」

「おい、一応言っておくがあんまり長い時間は無理だからな」

「あー、そんないいって。最初にちよろつと顔出してくれるだけで、女子のお目当てはこいつになるんだろうし」

女子……え、女子って言った？

「おいやっぱ……」

「はいこれ券な。先に渡しておくからちやんと来いよ。学級委員長が約束を反故になんてしないよなあ。じゃ、俺は向こうに連絡してくるから」

「やっぱいらな……」

「じゃあまた後でな！」

俺の言葉を遮って、封じて、話を聞かないままあつという間に走り去って行った。言質を取らせないという点では賢い選択なのかもしれない。スマートとは言い難いが。

「やられたね」

「まさか女子もくる集まりだったとは。合コンってやつか」

「だから僕は断ってたんだよ」

「言えよ」

「言おうとはしたんだよ？ 君は気付かなかったかもしれないけど、その度に機先を制されたというか、行動の起点をつぶされたというか」

「いやな新陰流だな。もういい。行くと行った以上は顔を出すさ」

「顔を出す？ フータロー、どこか行くの？」

「うわー！」

どんなに好きな物でも、状況によっては嬉ばしくないというシチュエーションはあるが、今の俺は正にそんな感じだ。合コンに出るだの出ないだのという話をしている時に、どこか出かけるの？ などと、何て心臓に悪いんだらうか。いや知らなかったんです許してください、と言ったら許してくれるか。……駄目そう。

「うわって酷いよ」

「す、すまん。いきなりで驚いただけだ」

「ふうん」

心持ち一つで見方は大きく変わる。きつと普段の俺ならいつも通りだなと思うのだろうが、今の俺は三玖の目がやましい事あるんじゃないのと責めている様に見えた。

「あー、三玖。今日はちよつと武田と、その友達の集まりに呼ばれたから一緒に帰れない」

「そうなの？」

「うっ……ああ。だよな」

「そうなんだ。ごめんね三玖さん」

「良いよ。フータローは友達少ないんだから大切にしないと」

「酷いなお前。自分だって大して変わらないくせに」

「そういう事言うんだ」

ぷくつと膨れて可愛らしく不貞腐れながら、ぺちぺちと俺の肩を叩いてきた。

うわ、普通の会話のはずなのに凄い罪悪感が。きつと上司に女の子が接待してくれるお店に誘われたのを誤魔化しながら奥さんに伝えるサラリーマンってこんな気持ちなんだろうな。いや知らんけど。

何も知らずに良かった良かったと嬉しそうな三玖に申し訳ないの、放課後は行ってもさっさと帰る事にするから許してくれ、と心の中で謝っておいた。

「はいーこちら放送部の椿です。今私は駅前のアミューズメント施設にやってきています。あ、あちら学校終わりの学生さんでしょうか？ ちよつとお話聞いてみたいと思います。こんにちは」

「……楽しいか？」

「ちよつとした暇つぶしには」

ニコニコと陽気に笑っていた、明るい髪色を横で一つ結んでレポーターのようにマイクを持つ仕草をしながら、俺を呼んだ男子の構えるスマホに向かって話かけていた椿という女子は、俺の言葉に興がそがれたみたいに笑顔を手放してガードレールにもたれかかった。左側

のサイドテールが退屈に跳ね回る子供のよう揺れていた。

「ていうか遅ーい。まだ来ないの?」

「もう少しで到着するって来てるんだけどな」

椿が文句を垂れると、男子は文句を受け流しながら自分のスマホを触って、相手先に連絡をとっていた。

「そう言えば何人くるんだ」

「ん? 向こうの奴が女子を四人連れてくるって」

「男女比がすでにおかしい。こつちが女子を連れてくる必要はなかったんじゃない」

俺は武田と話し込みだした椿の方を見た。彼女を呼ばなければ男子は俺、武田、こいつ、他校の男子の四人で、女子はその他校の男子が呼んでくる女子四人で4:4で丁度良いのに。

もしそうだったとしても俺はすぐに抜けるつもりなので一対面の形は崩れる事になるだろうが。

「しようがないだろ。あいつが椿ちゃんを狙ってるんだから」

「なに? 私の話した?」

「したした。可愛い将来の局アナって話」

「褒めてくれるのは嬉しいけど、上杉君いけないんだー。三玖ちゃんに言っでやろ」

「一言も言っでないんだが」

「冗談だよ。どうせ知らずにつれて来られたんだろうから言わないでおいてあげる」

「この度は格別のご高配を賜り……」

「やめてよー」

からからと笑いながら、ノリよくレスポンスを返されると、自分がコミュニケーション強者になった錯覚に陥るな。しかしこんなやつらに恋人がいなくて、勉強ばかりしていたような奴にいてなんて人の巡り合わせは分からない物だ。自分に降りかかってきた幸運に感謝しながら、すぐに帰るから許してくれますようにと心の中で三玖に謝っておいた。

心の中にいる三玖は「有罪。市中引き回しの刑」と言っ腕を引い

て俺をデートに連れ出した。……だつたらいいなあ。

「あ、来た来た」

その声にはつとして顔を上げると同じ制服を着た男女の集団がぞろぞろと歩いて来ていた。あれが今日来るもう一人の男子だろうか。短い黒髪の、いかにも爽やかなスポーツマンといった風体の男で、周りに四人の女子を引き連れている。一人の男子が四人もの女子を引き連れている様子は、何というか凄いな。

周りから見たら俺もこんな風にみえているのか。やべー奴扱いされる訳も良く良く理解できた。

「おせーぞ」

「ごめんごめん。お、武田の奴本当に来てる」

「偶にはね」

言葉は短いが親し気に今来た男子と言葉を交わして、予約を取っていたらしい大部屋へと入って行く。

「じゃあまず自己紹介から。俺は柳生」

「武田だよ」

「上杉だ」

「徳川でーす」

徳川と名乗った他校の奴は椿の方を向いて軽く手を振っていた。分かりやすい。だが椿はクラス内に好きな相手がいるとかいう話があるらしいぞ。野暮だから言わないが。

「はい、椿です」

「本多だ」

「酒井だよ」

「井伊」

「榊原です」

おい徳川が四天王連れてきてるぞ。

遊びに行くという建前で来た以上、何らかの土産話は持って帰るつもりだったので助かるな、と一人で満足した。三玖が好きな話題だし。もう帰ってもいいな。

「じゃあ飲み物でも取ってくるから、先に始めてくれ」

「まあ待ちなよ上杉君。一曲くらい歌ってから出て行っても遅くないだろう。ね☆」

『ね☆』じゃねえよ。『ね☆』じゃ。

こいつ俺が飲み物取ってそのまま流れで帰ろうとしているのを察しているのか。確かに普段大きな声で話さない奴はどんな歌声をしているのかというのが気になるのは理解できる。俺がカラオケ無料券でこんな良く分からない集まりに釣られたのも、三玖ってどんな歌声なのだろうという興味があつたからだし。

しかし同時にこいつは知っている。俺の家にはテレビが無くて流りりの歌など全くと言って良い程知らないという事を。

いや。一つこの前の事があつて覚えた歌があつた。

まあ一発ネタみたいな感は否めないが。

——俺ら東京さ行くだ 作詞・作曲 吉幾三

その曲が流れている間、武田にだけは糞ほどウケたが他の奴らにはポカンとされた哀れな男がいたそう。これ知り合いには効くな。

結論から言うと最後まで参加してしまった。

俺が知ってる曲なんて小学校の時歌った合唱曲くらいだと言うと、じゃあそれでもいいよと馬鹿にする事なく合わせてくれたのだった。人間が出来ている。

そんな感じで俺が歌っていると、女性陣がマイクを取ってソプラノパートを歌いだして、突如として合唱の練習が始まってしまい、男性陣には悪い事をしたか？と思つたが、椿を狙っているらしい徳川は隣に件の彼女がきてデレデレしていたのでまあこれはこれで良しと思う事にする。

終了五分前の電話がかかって来て、じゃあこれで最後と歌つたのが今日一の出来だったのには奇妙な感動すら覚えたほどで、恐らくもう会う事は無いのだろうが無駄に仲良くなつてしまった。……いやいや、無駄とか言っている様では成長がない。

勉強をやりたがらなかった中野五姉妹が「勉強なんてしても無駄」

とか言い出していたのを、「やってから言っただけいいんですけど?」と内心怒っていたのと同じような物だろう。初対面の印象が決して良くない三玖と付き合うようになったみたいには、人の繋がりが自分にとってどんな物をもたらすかは、すぐには分からないのだと思う。

「ねえねえ最後の録ってた?」

「ばっちり」

「あとで送ってよ」

「分かった。グループチャットに乗っけとくね」

店内の階段を下りながら、女子達は今日の歌の出来栄を録音していたようで喜々としてそのデータを共有していた。その興奮っぷりはこのまま二次会に行こうとすら言い出しかねない。

「上杉。お前もいるだろ?」

女子達の集団から一人が振り返って馴れ馴れしく声をかけて来た。長い髪をポニーテールにまとめた髪型で切れ長の目をした女子、名前は本多とか言ったか。なんでも剣道の大会で五歳の初陣から今まで一つとして傷を負った事がないらしい。それ何て忠勝?

「いや、俺はいい」

「なんだ、お前の家にはテレビだけじゃなくて携帯もないのか」

「持つてる。いじりが酷いなお前」

「じゃあいいだろ。交換しよう」

「だからいいって」

「もしかして女子と番号を交換するのが恥ずかしいのか? うい奴うい奴」

「ばっ止めろ」

本多はふつといたずらっぽく笑うと、俺の脇腹を無遠慮に突っついてきた。何で体育会系の奴らはこんな感じでちよっかいをかけてくるんだ。

「ほらほら教えろー」

「止めろお前。教える、教えるから」

「……フータロー?」

突如として後ろから響いて来た声に、それは聴きなじみのある声に

俺の全てが凍り付いたように固まってしまった。

振り返ると想像した通りの人物、中野三玖が立っていた。

「み……三玖、今日はバイトじゃなかったのか？」

「今は店のシナモンパウダーが切れたからそのスーパーに買いに行くように頼まれたんだけど。……ふうん。へえー。なるほどね」

「三玖、これには理由……というほどの事も無いんだが……」

三玖の声の温度が、どんどん下がっていくのを肌でしつかりと感じた。ふうん、ともう一度言いながら、段々笑顔になって行くのが何と恐ろしい事か。

その冷気にも似た怒気を感じたのか、さっきまでうっとおしい程周りに付きまといていた本多がいつの間にかいなくなっていて、女子陣の輪に戻ってひそひそ話を繰り返している。

「あれはそういう事ですか椿さん」

「お察しの通りだよ」

「リアル修羅場!？」

修羅場ってるのはお前ら女子陣がいるからなんだけどな。

「どういう事が説明してくれる？」

「どうって……三玖の考えてる通りで」

「フータローの口から聞きたい」

「そうだ上杉君。男らしく自分で言えー」

「ちよつと椿さん黙っててくれませんかねえ！」

こちらを見ている外野は、他人事だと思っってはやし立てるような事を言ってくる。

ちらりと三玖が目線を投げかけるとひゅつと小さく息を呑んで黙りこくった。だがすぐさま「あの子中野一花に激似じゃない？」とか「本人？」とか言っている。

「で、早く男らしく教えてよ。早くお店に帰らないといけないし」

「そのだな……武田の友達の集まりに行くって言ったのは一応嘘じゃないんだ。ただこう、女子と遊ぶ集まりだったのを知らなかっただけで」

「ふんふん」

「言い訳くさい事は百も承知で言うが、ここの無料券を先に貰っちゃまったから、その分の義理は果たそうとしてだな」

「へえー」

「だから今度は二人で行こう。な」

「うーん」

俺の必死の弁明にも、三玖は肩眉を僅かに動かすだけで響いたのかそれとも怒りの炎に油を注いだだけなのか判別がつかない。ただその言葉を待っている俺はまな板の上の鯉という感じだ。どうやって包丁を入れられるのか待っている。

「ねえフータロー」

「なんだ？」

「フータローは友達と遊びに行ってくるって言った私が男の子と遊んでたらどう思う？」

「三玖が他の男と……？」

俺のした事を反転すればそう言う事か。

友達と遊んでくると言って送り出した三玖が、現場に行つて見るとどこぞの知らない男と楽しそうにしている……

「ぐはっ」

「膝から崩れ落ちた!？」

「他の男とどうたらが相当効いたみたいだね」

「それでフータロー、そんな他の男の子からもらった何かでデートして嬉しい?」

例えば遊園地にデートに行つたとして、そのチケットが他の男と遊んで『三玖ちゃんありがと。これお礼ね。彼氏と遊んで来たら(笑)』みたいな感じで貰ったものだったら。

「つらい……」

「泣いた!？」

「これは大した打ちひしがれっぷりですね……」

泣いてない。己の犯した罪に頭を抱えているだけで。

しかし考えるだけで何て胸糞の悪い。三玖が怒るのも無理のない話だな

「すまなかつた三玖。自分がされたと思うとこんな気持ちになるんだな」

俺は教会のステンドグラスを見上げる信徒のように三玖の顔を見上げる。見下すような冷たい眼差しを、赦しを乞いながら見上げているとふつと三玖は柔らかく微笑んだ。

「私もいじわる言っちゃってごめん。遊びに行ったら女の子がいるなんて状況、普通にある事なのにね」

三玖は一步近寄ってくるとそつと抱きしめてきた。俺が膝をついている状態なので自然と彼女の豊かな胸に顔を埋める形になって、両頬を柔らかく包み込まれる。

バイト先で付いたのだろうか、小麦粉を焼いたような香りが制服からかすかに漂ってきて、その奥から三玖の甘い女の子の匂いが俺の頭を揺さぶる。

「でも今度からはそういう集まりならちゃんと言つて欲しいな」

「悪かつた」

「いいよ」

俺は膝についた砂埃を払いながら立ち上がった。優しく笑ってしかたないなと許してくれる三玖をもう裏切らないようにしようと、俺は心に決めたのだ。

「……私達は何を見せられているんだろう」

「さあ?」

そういう感じの日

夏休みが始まった。

夏休みに入った俺は、まとまった勉強時間の確保という名目で家庭教師業を抑えていた。クリスマス前あたりから始めたケーキ屋のバイトは、店長が事故にあってしばらく休業となってしまうので、何日かおきに送る宿題と、その添削が夏の俺の俺の主な収入源となる。

その家庭教師業も、あのお父さんから頂いたパソコンを使ってデータを送り、答案用紙をスキャナーに取り込んで送ってもらって添削する方式をとるようにしているので、手渡すという手間が無いため、俺の出不精が加速していた。

夏休みに俺が見た顔と言えば、毎日顔を突き合わす親父とらいは、こんな事してるよと写真を送ってくれる三玖、そして毎日らいはが見ているヒ○キンというありさまだった。我が妹にお前ええ加減にせえよという顔をされるのも仕方がない。

そんな風に夏の陽気な空模様とは裏腹に鬱々とも表現されるような夏休みを送っていた罰でも当たったのか、最近よくない妄想に囚われる。

『フータローは私が男の子と遊んでたらどう思う?』

と、この前言われた事を思い出して、見ず知らずの男が三玖の手を取ろうとする想像が、朝でも晩でも気の抜いた拍子に脳裏によぎって、ぎりぎり俺の胃をいじめてくる。女子と遊んでいた俺への意趣返しのような発言なので、言った本人も気に留める所は無いは分かっているとはいえない。

それから逃げるように必死に勉強に打ち込むという受験生にとっては好循環ともいえるかもしれない悪循環に陥っていた。

「お兄ちゃん外出たら?」

一番集中できる勉強法の一つ、実際の試験と同じようなタイムスケジュールで過去問を解くを実践していて、終了のアラームが鳴った所に昼食の用意をしてくれていたらいはが呆れたような顔を隠そうともせずそう言った。

安売りの素麺を茹でてざる一杯に氷と一緒にあけ、大葉と刻みネギを小皿にのせていかにも夏休みの食事だ。

「らいは、受験生の生態系は基本こんなものだぞ」

「えー、でも中学受験した男の子とは塾が無い日は結構遊んでたけど」
「そりやその子が優秀だったか進学先がそうレベルの高い所じゃないかのどっちかか、どっちもだろ」

「じゃあ優秀なお兄ちゃんは時間があるって事だよな」

「都合のいいように言葉尻を捉えるな」

「でもお兄ちゃんが行けない大学なんて日本に存在しないんじゃない？ そりや全然勉強しなくなったら駄目だけど」

「らいは、あんまり偉ぶるような事は言いたくないが、受験を舐めすぎだぞ。」

「私が受験を舐めてるならお兄ちゃんは恋愛を舐めてるよ」

「らいはは何故か憤懣やるかたないと言った様子で一氣にコップをあおった。今日はえらく突っかかってくるな。」

「このまま一か月も三玖さんに合わないつもりなの？」

「いやそんなつもりはないが……」

「もう！ お兄ちゃんの馬鹿！ 全国トップクラスだけど馬鹿！ そんなうじうじ勉強してるなら会いに行けばいいのに」

「うじうじって。それに集中したいからあんまり勉強を見に行けないって言った舌の根の乾かないうちに……」

「そんなのやっぱり気が変わったって言えばいいでしょ。彼女に会いに行くのに、友達に会いに行くのに理由なんていらナイよ」

「そうか？ という疑問が口から零れそうになるのを唇を一字に結んで口の中で押し殺した。怒り気味ならいはに、無駄に反論して火に油を注ぐ必要もあるまい。それに言っている事はもつともなことであるし。」

正直言っ忘れていた。小学生の頃は用が無くても友達の家を押しかけて遊び倒した日々の事を。まあさすがに高校生の時分にもなってまるつきり同じようにはいれないが、そんな気安さで会って、話して、きつとそんなのでいいんだろう。

「そうか。別に用が無くても合に行ったりしてたよな。友達なんて
久しくいなかったから忘れてたぜ。はっはっは」

「お兄ちゃん……」

「……泣かなくてもよくない？」

『わっ、ほんとに来た』

いまだ精神論や根性論の跋扈する体育会系の界限にあっても、休息
や水分補給の必要に迫られるほどの猛暑の中を乗り越えて来た俺を
迎えてくれたのは、三玖のそんなあんまりな声だった。らいはに持つ
てけと言われたハンカチで汗を拭いながら、インターホンの前で少し
意地悪に笑う三玖が見えるような、露骨にふざけた声色だ。

「何だよその言い草。あつつい中歩いて来たのに」

『うそうそ。来てくれてありがと、今開けるね』

カチツと自動ドアのロックが解除されると、ゆっくりと開いてエン
トランスのひんやりした空気が足元に流れ込んできた。エレベー
ターホールに行くのと丁度降りて来たエレベーターから、夏休みらしい
半袖短パンに野球帽をかぶった小学生の一団が勢いよく飛び出して
きたのを見て、不思議と懐かしい気持ちになる。俺にもあんなころが
あったなと爺くさい事を考えながら乗り込んで最上階のボタンを押
した。

「フータロー」

最上階に到着したエレベーターから降りるとすぐ横から呼び止め
られた。少し間の抜けた呼び方を嬉しそうにする声色の方を向くと、
夏らしいワンピースに身を包んだ三玖がお出迎えしてくれている。

「三玖。今日はいきなり行くとか言ってすまなかったな」

「ううん。私はフータローが夏休みは勉強するって言ってたからあん
まり会えないのになって思ってた。だから来てくれて嬉しい」

コツンと三玖が一步踏み出すと、ワンピースの裾と長い髪が軽やかに
翻る。そのまま俺のそばに来て、にっこり笑いながら手を取られる
と、それだけでらいはの言う通り来て良かったと思えた。

「それに私達もまだまだフータローに教えて欲しいし」

「そんな事言つて、次会った時にもう必要ないつて言う前振りじゃないよな」

「え？ あ、春休みの……」

「せっかく良好な関係を築けてたと思ったのに、傷ついたぜ」

「ご、ごめんつて」

からかうとコロコロ変わる彼女の顔を見ていると、鬱屈としていた気分はどこかに飛んで行った。らいはが美人と話すと健康になるとかいう、エビデンスがあるのかないのか分からない話まで繰り出した時はどうかと思つたが、あながち嘘じゃない気もしてくる。

と、そこまで話した所でようやく三玖がヘッドホンをしていない事に気が付いた。どうしたんだ、と聞くべく口を開こうとした所で先に三玖が振り返つて来たので少し黙っておく。

「あ、フータロー、静かにね」

「なんだ？ 誰か寝てるのか？」

「そうじゃないよ」

唇の端を少しにつと上げて、少し三玖らしくない笑顔を見せてくると、自分の言つたように静かに玄関の扉を開けた。

姉妹がいるとは思えないくらいにしんと静まった部屋がお出迎えしてくれて、思わず靴を脱いでる三玖に聞いてしまう。

「今日は誰もいないのか？」

「ううん。今は……」

「はい、終了ー。ペンを置いてくださーい」

「ちよ、ちよつと待つてください！ あと三十秒、いえ十秒」

「あんたね……そんなのが受験会場で通用する訳ないでしょ」

「うう……」

「……ね」

「なるほど」

今日の姉妹は何の因果か俺と同じように試験形式で問題を解いていたようだ。いつもヘッドホンを装着している三玖も、さすがに試験の時は外しているのでその状況を再現しているのだろう。 受験を

しない一花が試験官の役として辣腕を振るい、渋る五月の手から答案用紙を引つpegがした。そのまま回答を左手に赤ペンを右手に採点を始めた。

「ふー、疲れた。短いって言っても朝からぶっ通しで試験したからくたくただよ」

「でも本番はもつと長いでしょ。……なんか今から憂鬱になってくるわね」

「……」

「五月ちゃん？ どうしたのブツブツ言って」

「……ゲテイスバーグの演説、1863……。関数 $F(x)$ に対して

「 $\text{rb:limF} > x \downarrow a$ 」 (x) を $F(x)$ の $x \parallel a$ における極限と呼ぶ……。ルシヤトリエの原理……。難消化性デキストリン……」

「最後の試験に出る訳ないだろ。絶対お前の朝ご飯の成分表だろそれ」

頭を抱えてブツブツ言っている五月を見ながら、ああ本当に頭から知識が零れないように耳を抑える奴っているんだな、と思って黙っていたが、最後の最近ありふれている健康志向な単語に思わずツツコンでしまった。

「何ですか来て早々」

「いや、根詰めてそうな割に役に立ちそうにない言葉を覚えようとしている生徒に注意を」

「そんなおせっかいは結構です……と言っている場合でもないんです。来てくれて助かりました」

「はあ」

いつもの五月ならもう一言二言棘のある言葉が飛んできておかしくないのだが、むしろあって然るべきなのだが、やけにしおらしい。気味が悪いほどだ。

「どうしたんだお前」

「……」

そんな問いかけにも応じずに、五月はまた何やらブツブツ言いながらリビングを歩き回る。テスト直前に一個でも単語を詰め込もうとする学生のような。

「なあ、あいつどうしたんだ？」

息抜きにテレビをつけた三玖に耳打ちすると、リモコンを持っていない方の手でそつと髪をかき上げて耳にかける。ほっそりとした真っ白な首筋が覗いて、普段あまり晒されない耳元と合わせて艶めかしい。

手を伸ばそうかと思つめていた所で、俺の邪な視線に気が付いたのかはたまた偶然か、三玖はてくてくテレビの前まで歩いて手の届かない所に行つてしまった。三玖はテレビ前のソファーに腰掛けながらリモコンを操作すると、ドラマの再放送をしていた画面から録画リスト画面に変わり、そのうちの一つを選択した。

「……三玖？」

「五月が夏期講習に行ってるのは知ってるよね」

「それは、まあ」

「私も受けようかなつてこの前ちょっと見に行ったの。そうしたら私を五月と間違えたへーハチに塾内試験の勝負をしないかって言われて……」

「……へーハチ？」

聞き捨てならない言葉が三玖の口から出て来た事に、自分の顔が歪むのをはつきりと自覚できた。

へーハチつて男の名前だよな。どう考えても。

知らない間にどこぞの誰かと仲良くなったのだろうか。確かにこれだけ可愛い顔をした女の子を世の男どもが放っておく道理はないが。

面白くない。俺はぐつとまだ胃の中にある昼飯が逆流しそうな不快さを感じていた。

「誰だよそのへーハチつてのは」

「どうしたの？ 怖い顔して」

ん？と小さくたしなめるように喉を鳴らして、ふわりと微笑む三玖

は見ているだけで並大抵のことは許してしまいそうになる魔力を放っているが、知らない間に男の影は並大抵の事ではない。

内心複雑な思いが渦巻く俺をよそに、三玖はテレビをぴんと人差し指で指した。

それはドキュメンタリー番組で、画面には竹刀を振り回している小さな女の子が映っている。家族が撮ったホームビデオのようで、画質はあまり良くない。これが何だと言うのか。

『警察官のお父様の影響で剣道を始めると、みるみるその才能を開花させ出場する大会全て一位を総なめ。あまりの強さに彼女はこう呼ばれました。絶対女王』

『その後も無類の強さを発揮し続け、県内屈指の強豪校、江戸高校へと進学し、今年インターハイ三連覇を狙います』

表彰状を片手に笑顔の幼い女の子の写真が切り替わり、今現在の姿に変わるとちよつと前に見た事ある人物が映っていた。

切れ長の目に、ポニーテールにまとめた髪。内心勝手に徳川四天王と呼んでいた本多という女子だ。

『その強さを剣道関係者はこう賞賛します。へ江戸高に過ぎたるものが一人あり、徳川四天は女平八』

「ほら、へーハチ」

「いやいつの間にあだ名で呼び合う関係になつてんだ」

「バイト先にやあやあ我こそはつて来て」

「武士じゃん」

「徳川に忠義を尽くす大義があるから君の彼氏は狙ってないから安心してくれって」

「いや三河武士じゃん」

そう少し語気を強めに言いながら、俺は内心のムカつきが急速に落ち着いて行くのを感じていた。へーハチつてのは本多平八郎の平八、という事か。絶対に女子に着けるようなあだ名ではないと思う。と
うかテレビにも徳川四天王呼ばわりされてるのか。

「……あ、もしかして男の子かと思っただの?」

「そんな事は無い」

「ほんと？」

「で、だ」

「誤魔化した」

「五月はその本多に勝負を吹っ掛けられたからあんなに必死なのか？」

「それも……」

「そうなんです」

「うわ、いきなり来るなよ」

空に何かを書くように指を動かしながら問題集を眺めていた五月が、いきなり鼻息荒くこちらに食って掛かってきた。

「あ、すみません。でもこれ見てください」

五月は解いていた問題集から目をあげて件の剣道少女の密着番組を見始めたので、俺ももう一度テレビに目を向けた。

一日のメニューを紹介しているようで、朝五時には起きて練習を始めて、朝食を食べて学校の朝練を務め、授業を受けた後に部活をこなして、終わった後も道場に行って稽古漬けといった生活ぶりだ。

「どう思います？」

「どうって、よくやるなあって感じだが」

「ですよ。では、これだけの生活をしている人に模試の成績でギリギリ勝った私はよくやってると思いますか？」

「別にいいんじゃないか？ こいつはこいつ。お前はお前だろ」

「そう言われると返す言葉が無いのですが……」

ああ、こいつなまじ成績が上がったから負けたくないっていう気持ちが出て来たのか。

俺なんかは、言っちゃなんだがこいつらと成績が隔絶しすぎて対抗心があまり沸いてこなかったのだろう。足の速い奴に「でもお前ポルトより遅いじゃん」と言っても悔しいと言う気持ち起きないみたいな感じで。

丁度いい感じに自分より下の成績の奴というのが良いのか。部活をしていて、引退したらその時間を勉強に当てれば、成績の伸びる余地は大いにある。

マイペースな五月でも思う所があるのだろう。だからいつにも増して真剣に勉強していて、それに触発された姉達も合わせて勉強しているのだ。

こいつらに必要なのは丁度いい勉強面でのライバルだったか。

「何であれやる気になってるのはいい事だ。まあ分からない所があったら聞けよ」

「えっ、何ですかその消極的態度は？」

「だって俺今日家庭教師するつもりで来てないし……」

「あつきた。あんたが勉強しないなら何するのよ」

「勉強しすぎに呆れたかと思えばしなくて呆れたり忙しい奴だな二乃」

「悪うございましたね。じゃあ何しに来たのよ」

それは結局の所三玖に会いに来た、と言えはいいのに、見得を張りたいのか出て来たのは違う言葉だった。

「いや、らいはに外出しなすぎって言われて家の外に放り出されてだな。暑いし冷房の効いた所にも行こうかなと。飲み物も出してくれそうだし」

「凶々しいにもほどがあるわよ」

「そんな色気のない理由で美少女の所に来たの？ フータロー君てば」

「何だよ全員ひっかけてやるぜみたいな理由で来て欲しかったのか？

……いや冗談だから。だから三玖そんな目で見るな」

「ふーん」

三玖は柳眉をつり上げながらぷっくり頬を膨らまして、怒ってますよと分かりやすく教えてくれた。こういう時は手でも握ってすぐに謝れば許してくれて笑顔になる、俺は三玖の事には詳しいんだ。

さてご機嫌取りしようか、と言う所で採点をしていた一花がうーんと唸るように声を絞り出した。その深刻そうな声色に、俺の出来の良くない冗談がどうでもよくなったように心配そうに駆け寄って行った。

俺は三玖の手を握ろうと軽く開いていた右手を所在なさげにぶら

りとさせて、やや投げやりな気持ちで一花の手元の方を見た。

「この前からあんまり変わってないね。ちよつと停滞期な感じかなー」

「そうですか……」

答案用紙を眺めながらしよんぼりと肩を落とす五月を見た姉達はどうするの、とチラチラ見てくる。さすがに落ち込んでいる友人を見てどうこう思わないほど俺も血が冷たい人間ではないと思う。

「やるか、勉強」

「でも上杉君、気がないとさつき言ってたじゃないですか」

「お前はやる気がないと呼吸をしないのか？俺にとつての勉強はそのレベルだから気にすんな。見せる恥ずかしい点数を」

「恥ずかしくありません！」

「でも？」

「そんなに良くもありません……」

「素直でよろしい」

か細い声を出しながら、五月はぶるぶる震える手で答案を差し出した。

五教科の合計点は300点だが、それは得意の理科系の科目で稼いでいるからであって、国語に社会といった文系科目が足を引っ張っているのは一目見ただけでも分かる。引っ張っているとは言っても、昔の彼女から考えれば相当な進歩ではあるのだが。しかしそれでも行ける大学は限られてくるだろう。

「よし分かった。お前、新しい事に手を出すな」

「ど、どういう事ですか」

「極端な事を言えば復習だけすればいい」

「それで大丈夫なんでしょうか？」

「お前は勉強量なら他の奴らにも負けてない。だが点数は負けているのはどうしてだ」

「私が馬鹿だと言いたいんですか」

「答えは理解が甘いからだ。やってるだけで満足するな。何度もやって、百点を取るまでやれ」

「百点まで」

「そうだ。目の前の問題にこだわる悪癖のあるお前だが、だったらこだわり抜け」

「ですが、テストの時は出来ない問題は飛ばして次の問題に行け、とよく言ってたじゃないですか」

「そりゃテストはそうだろう。次の大問に行けば最初の一、二問は解きやすい基礎問題なんだから、そこで点数を稼がなくてどうする。だがこれは点数稼ぎの話じゃなくて勉強の話だぞ。大学試験では稼がせてくれる基礎問題があまりない所だつてある。そんな時に必要なのは点数稼ぎの小手先じゃなくて深い理解だ。それに勉強の先にあるのは教師つて夢だろ。お前は理解していないような先生に教わりたいのか？ お前が憧れた先生はそんないい加減な奴だったか？」

「……」
言ってから俺は少し後悔した。五月の目標であり憧れは母親の事だから、故人を持ち出すのは卑怯に思ったからだ。

お茶の用意をしてくれている二乃が、複雑そうな顔をして見てくるのが視界の端に映って、バツの悪さを誤魔化すように頭を掻いた。

「分かりました」

答案用紙を眺めながら思案を巡らす五月が口を開いたので、髪の毛をいじくっていた手を止めてそちらを見た。

「もう少し復習に時間を割いてみようと思います。確かに私は理解が甘かったんだと思いますから」

「自分で言っておいて何だが、いいのか？」

「最初から上杉君の言う事を聞いている三玖の成績が一番良いんですよ？ 愚問というものでしょう？」

「うわああああ……」

「あ、四葉が死んだ」

「この流れでなんでよ!？」

「最初に家庭教師を受け入れたのは自分なのにとってショックで」

「偉そうな事を言ったが、お前の成績がすんなり上がるかは分からん。壁を超える瞬間つてのは突然だからだ。だがし続けなければその

瞬間は来ない。やれるか？」

「私、諦めが悪いんです。こうと決めたら中々変えられません。ですから、上杉君の教えを受けて成績を上げると、そう決めました。あなたが一番の生徒になります」

「うう……一番最初の生徒だったのに一番になれなかった自分が憎い。……はっ、もしかして当てつけ……？」

「あ、四葉が黒四葉に」

「ブラッククローバーになってる」

外野がうるせえ。

「二乃、お茶くれよ」

「凶々しいわね……。あんたの熱血な説教に反してお湯が冷めちゃったから沸かしなおすわ」

「え、こんな暑い日に熱い紅茶かよ。麦茶でいいぞ」

「今うちで冷やしてるのはルイボステイーしかないんだけど」

「何でも横文字にすればカッコいいと思いやがって」

「で、どうするの？ お茶請けにスコーンを出すけど」

「死ぬほどクリームを乗せるから俺の分も沸かしといてくれ。トイレ行ってくる」

「黙って行きなさい！」

下品な事言うな、という怒りに顔を赤らめながら叫ばれたので、逃げるようにリビングを後にした。

フローリングをばたばたとスリッパを鳴らしながら歩くと、そっと後ろの方から俺の足音に重ねるように小さな足音がしているのが付く。ホラーにはまだ早い時間だぞと思いつつ振り返ると、ヘッドホンで押さええられてないからか、べろんと前髪が重く垂れた三玖が後ろ手に組みながら立っていた。どうでもいい事だが三玖ってあだ名をつけられたら絶対に貞子だよな。

「何だ、三玖」

「ありがとうフータロー」

「あれくらい何でも無い。それに結局の所頑張るのはお前らだしな」

「でも私達だけじゃ頑張り方も分からなかったと思うから。やっぱり」

ああいう言葉を真剣に言ってるフータローはカッコいい」

「そ、そうか」

「それで、えっと……フータロー」

後ろ手のまま一步、二歩と三玖が近づいて来る。ワンピースの裾がふわっと翻り、真夏でも身に着けたタイツに包まれた足がちらちら覗く。あと一步、と言う所まで近づいて来ると、礼をするように体を前に倒して、そのまま顔だけ上げて上目遣いに見上げて来た。

顔を見ればくりくりと大きな目がこちらを捉えて、少し目線を反らすと服の上からでも分かる膨らみに目を奪われる。男の視線を独り占めするにこれほど最適なポーズは無いのでは、と思えるほどの仕上がりっぷりだ。非常に可愛らしい。

そして物言いたげな唇が艶めかしく動く、もしかして、と期待している自分に気が付いた。

もしかしてキスして欲しいんじゃないかなろうか。さっきの話の流れと、とんと脈絡のない事ではあるが。まあ三玖っていきなり突飛な事言ったりする奴だし。

一步とも言えないほど、もう足一つ分近づく。恥ずかしそうな表情がくつきりと表れて、俺は確信した。

三玖の右目にかかった前髪を指でつまんで耳にかけさせると、そのまま肩に手を置いた。息を小さくしながら顔を寄せて行くと、青い瞳に視線がぶつかった。ニコツと微笑まれたので、それに同じ気持ちを返して目を瞑る……前に目の前が真っ暗になった。

ぺちつと気のない音が俺の額からした。壁のような物が現れてそれにぶつかったようで、鼻っ面から非常に嗅ぎ馴染みのある香りがする。

「英語、教えてほしい……何してるのフータロー」

キスを交わした相手は英語の参考書だった。甘い女の子の香りではなく、長らくの友であるインクの香り。

「……いや、何でもない。休憩したらやるか」

「うん。お願い」

それだけだったようで、いや本当にそれだけだったようで、そのま

ま参考書片手に三玖はリビングに戻って行った。

……確かに勘違いしていた俺も悪い。

けど今更勉強の事で照れるんじゃない！

初めてこいつらに出会った時と比べると、感激するほど広がる光景が広がっていた。している教科はバラバラだが、それぞれが率先して高い目的意識を持って勉強をしている。分からない所は解説を読んだり、姉妹に聞いたり俺に聞いたりといった具合でつつがなく勉強は進んでいた。

俺はすぐ五月の質問に答えられるように左隣に座り、そしてその俺の左隣にさも当然という風に三玖が座っていた。

俺はどんな恰好でも勉強できるが、右利きという性質上少し左に参考書なり資料なりを置いた方が視線の移動が楽だ。少し視線を左に向けて問題を眺める。するとどうだ、左隣にいる三玖の横顔がチラついてしかたがない。勉強できないよー、と女々しい事を言うつもりは更々ないが、さっきの事があつて集中が若干削がれるのが偽らざる今の俺の気持ちだった。

「上杉君、ここ分からなかったので教えてくださいませんか？」

三玖の横顔にチクチク自制心を刺されながら問題を解いていると、右隣の五月がくいつと俺の半袖を引いてきた。

塾でやっている数学講義のプリントのようだ。

理科が出来れば数学も出来るという相関関係がある物だと世間一般には思われているし、俺自信もそう思っていたのだが、どういう訳か五月は数学に弱い。

しかしそんな事をぼやいている暇はないので、右手を伸ばして解説を書き込むように開けていた余白に式を書きながら解説を添える。

「フータロー、ここ分らないんだけど」

数学の解説が終わった頃を見計らって、三玖が英語の長文問題を指しながら尋ねてきた。

再び同じ事を言うが俺は右利きである。右隣にいる五月にはそのまま右手を伸ばせばそれで相手の手元に書き込めるが、左隣にいる三

玖には利き手を近づけるために身を寄せるなり上から覗き込むような形を取らなければならぬ。

「あー、フー君勉強って言いながら三玖にくっついてやらしー」

「やらしくない。フータローは書きやすいような体勢を取っているだけ。でしょ」

「そうだぞ二乃」

そうだこれは勉強のための体勢なのだから、二乃にいじられても堂々としていれればいい。三玖の言葉に同調するように頷きながら、もう少し身を寄せた。

大体俺達は恋人同士だぞちよつと距離が近いくらい問題な「フータ

ロー」

「はい」

「暑い」

「はい」

大ありだった。

俺は少しだけ離れてすまん、と小さく呟いた。

なぜだか内心寂しい物を感じながら英文に区切りを入れていく。すると覚えた英構文の形を思い出したように軽やかにペンを走らせた。

「分かった。ありがとう」

「ああ」

にっこ小さく微笑むと、すぐに真剣な面持ちになって問題に目を落とした。大した成長ぶりだ。あの隣にいただけでドキドキして顔を真っ赤にしていた三玖がこんなにも動じていない。

……やっぱり何か物悲しい。

こじやれた響きのルイボステイーを飲みながら、しばらく姉妹皆の勉強を見ていたが、仕事だからと一抜けした一花が仕事の台本やこれから受けるオーディションの原作を読んでいる姿に集中力が途切れたようで、四葉、二乃と勉強を切り上げた。

まだ勉強を続けているのは五月と、英語にうーうー唸っている三玖の二人だ。五月は解いては直し、解いては直しの繰り返しだが計算そ

のものは間違っていないので放っておく。

対して三玖は、とノートを見てみると、原文の訳を間違えているために選択肢のどれにも当てはまらず悩んでいるようだ。

「三玖、ここに違うぞ」

俺はペンを弄んでる三玖の手を取って間違った分の作り方を訂正させる。少しひんやりした小さな手が俺の手にすっぽりと収まっているのを見ると、勉強の状況に不謹慎かもしれないが、可愛いなあと思ったり。

「フータロー……」

そんな俺のデレデレした内心に反して、三玖は絶対零度の青い目線をよこしてきた。はっと気のない息が零れて、思わず手を離す。

「真面目にやって」

ツンとすげない態度は、全くもって正しい。こんな事をしている俺の方が間違っているのだから憤る三玖につける文句はないのだ。ただ俺としては何となく寂しいという感傷であって。

「悪い」

「まだフータローには全然敵わないけど、私だってそんな手取り足取りされなくても分かるようになったんだから」

三玖も勉強が出来る様になって自尊心が芽生えて来たようだ。侮られたように感じて怒った気持ちが目に現れたのだろう。

「それでこの問題だが、ここの文の解釈が……」

「終わった……」

「終わりました……」

「二人ともお疲れ。お茶淹れてあげるから一休みしなさい」

問題を一通り済ませた三玖と五月の二人は軽いため息を吐いて、固まった体をほぐすように首を回した。

「フータローもありがと……あれ、どうしたの？」

「何でもない。トイレ」

「だから黙って行きなさいよー」

また二乃に罵倒を浴びせかけられながら俺はリビングを後にする。

少し離れた所で振り返ると、英語をしていた三玖は二乃に、数学をしていた五月は一花に話を聞いていて、俺はもう役目を果たしたかなどと弱気な事を考えた。もちろん五月を放っておくなど出来ないの
で思っただけだが。

「はあ……」

「フータロー？」

どうも俺は疎外感を感じるといやに卑屈になってしまいう傾向があるようだ、と自分の性格の一面に新たに気が付いたところで、もう納得のいく答えが聞けたのか三玖が会話から離れてこちらに來た。ヘッドホンを付けて、いつもの三玖といった出で立ちだ。

「どうしたの？ ため息なんか吐いて」

「いや。お前らが教え甲斐のある生徒になってくれたから頭を使って疲れたなつため息」

「そうなの？ 息抜きに外に出てこっちに來てくれたのに、疲れるよ
うな事させてごめん」

「なあ、俺が適当にここに來たと思うか？」

「え、違うの？」

「ただ涼しい所なら図書館にでも行けばいいだろ」

「飲み物を出してくれそうって」

「大体ああいう所には冷水器が置いてある」

「あ、そう言えば」

「そう言えばつてお前……」

恋愛で頭が一杯なのは三玖の特権かと思つていたが、どうも最近はどうでもないらしい。少し前の三玖ならこんな風に意味深な事を言う
うと「もしかして私の事……」と照れて赤くなつてくれたのに、強くなつたと言
うべきなのか、一人立ちしたと言
うべきなのか、それとも端的に言つて俺に飽きたのか、「そう。で？」みたいな事を平気で言う
子になつてしまった。

そんな様子は癪なので、俺は好意の刃を大上段に振りかぶつて叩き
つける。

「ここにはお前がいるだろ」

「私？」

「そう。俺はだな……」

一歩、三玖に近づく。手を伸ばして肩を掴む。右手をそつと首筋に当てて、

「んっ……」

流れるように、さらりとキスをしてやった。

「こういう事、するつもりで来たんだぞ」

「へ……あ、え……うわ、わ……」

どういう訳だか、そういう事をされるかもという考えがぽつかりと抜けていたようで、三玖はキスされた唇を押さえ、真っ赤になってオロオロしだした。

「うう……」

「そんな反応されると困るんだが」

「だ……だって、久しぶりにされた感じが、こう……ううう……」

初心な反応に少しだけ苦笑しながら、細い髪の毛をそつと指で梳く。

「前に三玖は私が男の子と遊んでもいいのって言っただろ？」

「え……うん、言った。でも」

「自分がされて嫌な事はするなって言いたかったのは分かってる。そうだな、三玖の口から男の名前が出た時、すげえ嫌な気分になった。まあそれは剣道少女のあだ名だった訳だが」

「嫉妬した？」

「した」

「恥ずかしい内心を吐露すると三玖はくすくすと可笑しそうに笑った。

「嫉妬深いんだ」

「悪いか」

「ううん。私もそうだし、お似合いだよ」

そう言うと、俺の顔に手を伸ばしてきて顎のラインをなぞって来た。形を確かめると言うより、存在そのものを確かめるような慎重な手つきだ。

お返しとばかりに同じ事をしてやると、目を細めて甘える子猫のように喉の奥で笑った。

「上杉くーん、一花が撮影先で貰ったお菓子がありますけど、らいはちゃんのお土産やあああああ！」

くるくると喉を鳴らす三玖猫を手懐けているとリビングの方から五月の声がして、足音も近くなったかと思うと突然叫び出した。ポトリと個包装された色鮮やかなマカロンが足元に転がる。

「あ」

「ふ、ふふ不純です！」

「失礼な。純愛だ」

「別にそこに愛はあるんかって大地真央みたいな事を言いたいんじゃないじゃない！」

「五月、フータローに芸能人の例えをしても伝わらないから意味がない」

番犬のように牙をむいている五月に、三玖はちよつとずれている答えを返した。そこはいいだろ。確かに誰か知らないけど。

「そんな事言うなよ。俺は塾が無い日に来るつもりだぞ」

「やっぱり結構です」

「遠慮すんな」

「遠慮じゃないです。私はあなた達のイチヤツキの口実ではありませんん！」

「落ち着け五月」

「何ですか言い訳ですか」

「俺はお前のために勉強を教えるのは嘘じゃない」

「はい」

「それはそれとしてこういう事をするだけで」

「帰ってくれませんか？」

「分かった」

「あれ、意外とあっさりですね」

「だがお前の姉が帰してくれるかな」

「フータロー、まだ帰らないで」

「ほら」

「ほら、じゃないですよ！ 三玖もそんなダダ甘えしないでください」

「でも私達にはフータローの力が必要」

「むぐぐ……」

潔癖な五月の事だから勉強に余計な水を差されるような気がして嫌なのだろう。俺も図書室とかでイチヤつくカップルを鬱陶しいと思うタイプだから気持ちには分かるぞ。

「まあ安心しろ。こういう事はしないようにするから」

「えっ？」

「最初からそう言ってくださいよ」

「そんな……」

やらない、という俺の意思表示に五月は安堵し三玖は落胆した。そんな様子におかしくなってくしやりと三玖の頭を撫でる。もう、もう、と言いながら乱された髪を直している三玖に言ってやった。

「夏休みは長いから、二人でどこかに行く日でも作るか。偶にはそういう日があつてもいいだろ」

文句を言つてた五月も、二人でどこかに行く分には文句が無いようで、羨ましいです、と少し嫌味っぽく言いながらリビングに戻って行った。

「うん」

髪を整え終えた三玖が、仕方ないなど笑顔を作る。やる事が色々あるが、こうでなくては。充実した夏になりそうな事に、俺も笑い返した。

偶然だらけの夏休み

電車の窓からコバルトブルーの海が臨むと、一心不乱に外を見ていた子供達から無邪気に喜ぶ声飛び出してきた。

ある子は久しぶりに会う遠方の友人とどんなことをして遊ぼうか、車両中に響くのもお構いなしに兄弟と話している。ある子は大きなキャリアバックに乗って、両親に行儀悪いと怒られながら、ハワイの海はこれより綺麗かと夏の日差しのように目をキラキラさせた。

ある女の子は、そんな海を見ながら歌を口ずさんだ。夏の海で恋に溺れるのだと、軽やかに歌っている。

それから駅を二、三通り過ぎて、窓から見える青が、海の透き通るような青から夏草の青々しさに変わっても、そのまま海の歌を歌っていた。

「二乃」

「何よ？」

「これから山に行くのに海の歌を歌ってるのは未練がまし過ぎるから止めて」

機嫌よく歌っていた女の子、二乃は妹にそう言われると、ぷっくりと頬を膨らませて山へと向かっていく景色の流れを不機嫌そうに見送る。

「何で山のコテージなのよ。海の方が良かったのに」

「もー、貰い物に文句言わないでよ」

「らいはちゃんも海の方がよかったわよね」

「えつと……」

「答えにくい質問止めてあげて」

連れてきてもらった立場からはつきり物を言いにくい上杉らいはは、あははと愛想笑いをして誤魔化した。

中野姉妹と上杉兄妹は、中野マルオが知り合いから貰ったりリゾート施設の宿泊券を利用して旅行に出ていた。山間にある湖のすぐ傍にあるホテルの施設の一つであるコテージに、この時期に泊まれる中々の代物だ。

「もう着くんだから、諦めて」

「もう、分かっているわよ。次は海行くんだから」

「そんな余裕がお前らにある訳がないだろ。夏の遠出はこれきりだ」

「えー。一花ともどこか行きたいのに」

二乃は一花がいない自分の隣を眺めて寂しそうに呟く。

次のブレイク間違いないし、とまで言われるような女優になった一花は、今回の旅行は仕事を理由に欠席していた。

「えーじゃない。受験生だろ。五月を見ろ。こんな車内でもずっと勉強……」

「すう……」

風太郎はいつでも真面目に、ここ最近は特によく勉強している五月を引き合いにしようとしたが、帰って来たのは威勢のいい返事でもなく、集中している沈黙でもなく、穏やかな寝息だった。

「五月？」

「ここ最近もつと勉強頑張るようになってるから、ちよつと寝不足ぎみなのかもね」

「おいおい、そんなんでこつから半年もつのか？」

『次は〇〇。お出口は左側です』

「もう着くよ。可哀そうだけど起こしちやおつか」

四葉は背筋を伸ばしたまま人知れず眠っていた五月の顔の前で手を振り、確かに眠っている事を確認してポケットからスマホを取り出した。

はああ、とバトル漫画のように気を溜めながらスマホを持っている右手を額に持って行き、空いている方の手で眠った妹をちよんちよんと小突いて五月が薄っすら目を開けたと共に叫んだ。

「太陽拳！」

と、威勢のいい掛け声と共にスマホから強烈な光が放たれた。突然の事に五月は肩をびくりと震わせて弱々しく手で目を覆う。

「ま、眩しい……違う……違うんです先生。私は寝てません……ただ目を瞑って考え事してただけなんです……」

「眠ってる人はいつもそう言う」

「ふわあ……ああ、何だ、四葉でしたか」

「おはよう。もうそろそろ着くから起きて」

「ふわい」

姉妹だけでない事は忘れていいのか、あくびをしながら四葉の言葉に生返事をして眺めていた問題集を鞆にしまった。

「しかし何でクリリン」

「知ってるんだ」

「いや知らない男子がいるのか？」

「夏期講習で来ている特別講義の先生が居眠りしてる生徒によくやってるんです。自分の頭を指してふざけながら。その事を皆に話したら……ふわあ……こんな形で餌食になるなんて」

愉快的教師をいたもんだ、と思いながら風太郎は自分とらいはの荷物を手を取った。

まだ眠気が残る五月が停車の際にふらつく事に些かの不安を覚えながら、クーラーの効いた車内から、むわっと湿気を帯びた熱気が肌に纏わりついてため息を零した。

「お待ちしておりましたよ」

駅から出て目的地に行くバスを三玖が探していると、姉妹にとっては聞きなじみのある声がかけられて、驚きながらその方向を向いた。

父の運転手を務める江端が停めたリムジンの傍らに立って、穏やかに微笑みを浮かべてこちらを見ていた。

「江端さん!?! どうして?」

「いくらなんでも娘達の旅行の輪の中に男一人など、ちよつといただけませんかからね」

「はは、い……いやですね。何も危惧しているような事は起きませんから」

「えっ、起こしてくれないの?」

「黙ってようか三玖」

すました顔からとんでもない言葉を発した三玖を窘めながら、風太郎はもう一度誤魔化すために、はははと力なく笑った。すうつと江端の笑顔から温かさが急速に失われて行くのを見て、暑さから流れる汗

に冷や汗が一つ混じった。

「私も近くに宿をとっておりますので、まあお手伝いと思っていただければ」

「ありがとうございます。でもお父さんの仕事は大丈夫なのですか？」

「お父様は製薬会社の方と視察……という名目の接待旅行に出かけておられますから」

「意外。そう言うのお父さんも行くんだ」

「傷心旅行と……おっと。さあ、お送りさせていただきます」

「よかった。次のバスはちよつと待たないといけなかったから」

そう言った三玖を筆頭に、姉妹達は勝手知ったるリムジンに乗り込んだ。

漫画等でしか見た事のない雲の上と思っていた乗り物が目の前にある事に、らいはがポカンと口を半開きにしながらリムジンを眺める。

「ホントにお金持ちってリムジンに乗るんだね……」

「らいはちゃん？ 行くよ」

ぼうつと車を眺めたまま動かないらいはに四葉は声をかけて手を引いた。らいはは乗り込むと車内の広さに、はへーと情けない感嘆の声をあげて、目的地に着くまで始終キョロキョロと品定めするように視線を送っていた。

「写真で見るより立派」

コテージを見た三玖は開口一番そう言った。

二階建ての、まだ木の匂いがしてきそうなほどに手入れの行き届いた木造建てで、二階の南側にはテラスが張り出している。そこにある小ぶりの望遠鏡が空を見上げていた。

庭にはバーベキュー用の石窯が組んであって、五、六人は掛けられる丸い木のテーブルが二つ設置してある。

これを全部払うとなるとおいくら万円になるだろうか。風太郎は頭の中でそろばんをはじきだしたがあまりに貧乏くさい気がして止

めた。

「部屋割りどうしよつか」

「三玖とフー君は同部屋にする?」

「いいよ」

「ほほう」

「らいはとだな! やっぱり家族と一緒にの方がお前らも落ち着けるだろ!」

お目付け役である江端から厳しい視線を受け、にわかには風太郎は姉妹と距離をとってらいはの後ろに立つて盾にしながら言い張る。

恋人の三玖も合わせて姉妹からの視線が冷たくなつたが、風太郎としては節度のある付き合ひをしているのだとアピールしておくべきと思つた。マルオからの心証を良くしておけば、後に役に立つかもしれない。

もつとも娘と一緒に旅行という事実があるだけで、彼からの心証が良くなることは無いので無駄な努力だが。

「では私はこれで。用のある時はいつでも呼んで下さい」

意外にもあつさり江端は引き下がって、マルオが取つたコテージへと向かつた。

幼少のころから見ているとは言え、そろそろいい年ごろだから恋の一つや二つ、と思つているのかもしれない。

「まあ私達だつてこんな避暑地にまで来て二人のお熱い声を聞きたくないし? 姉妹と兄妹で分かれるでいいわね」

「それでいいよ」

「そもそも何部屋あるの? 一人一部屋くらいありそうな広さだけど」

「部屋があるなら一人一部屋でいいのではないですか? ……あ、らいはちゃん、夜は川の字になつて寝ますか?」

「いいの? 五月さん」

女性陣はそんな夜の予定を立てながらコテージに入つて行つた。

川の字のあと一本は誰のつもりで話してるんだ。まさか俺を勘定に入れてないよな。しかしあいつら、いや五月は違ふだろうが、完全

に遊ぶ気分でいるな。と風太郎はため息を吐く。

勉強の息抜きは勉強と言ってもいい風太郎である。遊びという物を必要としなかった悲しき勉強モンスターは、無駄と思っていた恋愛を受け入れる事で態度に軟化が見られたが、本質のことんやる気質に変わりはない。

「と、いう訳で」

二階の部屋が良い。南向きの部屋が良い。湖の見える窓が付いている部屋が良い。などと荷物を置いて部屋割りを姦しく議論し始めた中野姉妹に、風太郎は無慈悲に紙束を突きつけた。

「何ですか上杉さん？ その紙束は……」

「もちろんお前達にやってもらおうテスト用紙だ」

「ええー!?!」

二乃は目を真ん丸にして信じられないと顔全部で叫ぶように不満を露わにする。

夏休みの宿題以外への勉強のやる気を持って来ていない彼女は、まさかここで勉強漬けさせられるとは微塵も思っていなかったのだ。

上杉風太郎はお堅そうに見えて意外と行事にはしゃぐタイプなので、勉強を免除してくれるんじゃないかしらと淡い期待を抱いていたが、物の見事に裏切られた形になった。

「こんな風光明媚な所に来たのに、あんまりですよ上杉さん」

「やかましい。微妙な成績のくせにバカンスはいっちょ前に取りやがって。……だが俺も鬼じゃない。合格ラインを越えたら好きなかけ遊びに行つていいぞ」

「やった。話が分かるじゃない。で、何点取ればいいの？」

「八十点」

「は？」「ちじゅっ点」

「被せてこないでよ。それ遊びに行かせる気ないでしょ」

「勉強してたら取れる点数にしてあるぞ。まあ俺の言う勉強とお前達の言う勉強の意味が同じならだがな。フハハ！」

「こいつうら。と二乃がちよつと風太郎をぶん殴りたくなっている所で五月はぼんぼんと姉の肩を叩いた。

「二乃、学生の本分は勉強ですよ」

「あーもう、分かっているわよ」

「でこうなるのね」

採点の終わった答案を見ながら二乃は肩を落として、唯一合格ラインを越えた三玖を恨みがましい目で見た。

風太郎が作ったのは五教科まとめてのテストだったので、特に苦手な英語を覗いて得意科目以外でも点が取れる三玖がラインを越えたのだ。

まさか越えられるとは。少なくとも半日ほどは机に縛り付けるつもりで作ったテストで合格された事は素直に賞賛に値する、と風太郎は上機嫌の三玖の頭を撫でた。

「やった。じゃあ出かけようフータロー」

テストを突破した事による達成感と、風太郎に撫でられた事に気を良くした三玖は、高揚のままに頬を赤らめてデートをおねだりした。

「癒着だとか忖度だとかを感じるわ」

「馬鹿な事言うな」

「はいはい。こっちはこっちでやってるから、さっさと行ってきなさい」

「らいは、一緒に来るか？」

「パンフレットで見たけど色んなアクティビティがあるんだって」

「いやー、夏休みの宿題してるから。二人で楽しんできて」

「ほらほら、妹に気を遣わせてないでさっさと遊びに行ってください」
テストの結果がよろしくなかった四葉は、風太郎から新たに課せられた課題に辟易しながらも二人を力任せに後押しして玄関に向かわせた。

「あー、午後からは自由にしているから、昼までは頑張れよ」

「え、優しい。怖……」

「人が優しさを見せたら……」

夏休みだから遊びたいだろうと気を遣ったのに。風太郎は釈然としない物を感じながらも楽しそうな三玖を放つても置けないと玄関

に向かった。

「それで？ どこか行きたい所はあるのか？」

「うん。少し歩いた所にカフェがあるから、散歩のついでに行こうと思つて。途中で自転車も借りれるから乗って行けばすぐだよ」

「カフェか」

五月みみたいな事言うんだなと口を滑らせそうになったが、ここ最近には食レポブロガーMayという趣味と実益を兼ねた活動もせずに頑張っている彼女に申し訳なく思つて滑らせそうになった口をつぐんでおく。

「フータロー？」

「いや、なんでもない。行こう」

歪めた口を隠すように風太郎は頬を掌で撫でて、しっかりと夏草が刈りこまれたたれた道を歩いて行つた。

「あ、待つて。フータロー場所知らないでしょ。反対の道だよ」

その言葉にピタツと風太郎は足を止めた。隣に来た三玖が手を引いて反対の道を指し示すのを、反対の手で前髪を触つて黙りこくつてしまう。

早とちり、と三玖がおかしそうにぷぷぷと笑うのでますます居心地が悪くなつて誤魔化すように早足で歩いた。逃がさないと言う意思表示として三玖が手を繋いできたので、観念して歩みをゆつくりにして繋いで来た手にそうつと指を絡めた。

わっ、と嬉しそうに三玖は小さく息を漏らすと、満面の笑みのまま腕を絡ませてきた。

「暑いぞ」

「うん。ごめん」

風太郎は文句を言いつつも、絡ませた指に力を込めて離れないように物言わず訴えた。素直じゃないなあ和三玖は呆れながら、もつと身を寄せた。

「……って自転車借りるのにも金かかるのかよ。歩いて行こうぜ」

「びんぼーしょー」

木陰が夏の日差しを和らげて、爽やかな風が吹く道を歩く二人の横をマウンテンバイクに乗った家族連れやカップルが通り過ぎていく。貸出所が近いのか、と風太郎がすれ違う人に視線を向けてよそ見をしていると、自分の頭からカッーンと軽いが固い音が響いた。

「いてっ！」

「え、何？」

「いや、何か急に頭に」

左の側頭部をさすりながら、木の実でも落ちて来たのかと空を見上げて、そして変な物が落ちてないか下を見た。

土色の道に蛍光色のイエローの円盤が落ちていて、フリスビーだと気が付くと三玖は屈んでそれを摘まみ上げた。

「このすぐ上に運動広場があるから、そこから飛んで来きやつ！」

「三玖!？」

その運動広場に繋がる階段を見上げていた三玖に、いきなり大きな金色の塊が飛びついて来て倒れこみ、一瞬風太郎の視界から消える。慌ててその飛びついてきた物を見ようと下に視線をやると、金色の毛に覆われた生き物がぱたぱたと尻尾を振っていた。

それは立派な毛並みのゴールデンレトリバーだった。

「きやつ、もう、このフリスビーで遊んでた子？ やつ、くすぐつたいよ」

「三玖、大丈夫か？」

「うん。下は草だし痛くは……あはは、やめてよー」

人懐っこい性格なのか、ゴールデンレトリバーは嬉しそうに尻尾を振り乱しながら三玖の顔をペロペロと舐めていた。

怪我をさせるような意思がないと分かると、風太郎はこらこらと犬の頭を撫でながら窘めるも、そのままにしておいた。どうせすぐに止めるだろう、と。

「もう、ちよつとフータロー見てないで……きやあ」

ペロペロ

「しょうがない子。もっ……ダメ、わふっ」

ペロペロ

「うう、ちよつと、もう」

ペロペロ

……長くね？

「あつ、もう、どこ舐めて……やん」

……ちよつと感じてるし。

「おいお前いい加減に」

「ごらー！… このエロ犬！」

階段の上の方から女の子の叫び声が響いた。

それまで無遠慮に三玖の顔を舐め回していたゴールデンレトリバーの動きがピタリと止まってその方向を向いたので、恐らくこの犬の飼い主だろうと風太郎は思う。

「ヒデヨシ、どきなさい！ 知らない人をべろべろ舐めちやダメっていつも言ってるでしょ！」

きりりと吊り上がった目元が威圧的にも見える、小学生か中学生くらいの美少女だった。

小さな体から放たれる裂帛の声に、天下一の成り上がり者と同じ名前で呼ばれた犬はブンブン振り回していた尻尾を垂れさがらせてシユンと小さくなり、風太郎の影に隠れた。

いやいやなぜ俺がお前をかばうと思ってるんだ。ひできらい。

風太郎は首輪をもって飼い主の前に引きずり出そうとするも、犬は頑として譲らぬとばかりに四肢に力を込めて抵抗したが、じいっと女の子がキツイ目つきで睨むと観念したのか頭を垂れて前に歩み出た。のっそりのっそり歩く大きな背中が幾分か小さく見えて、風太郎は少しだけ同情する。少しだけだが。

「ごめんなさい、デートの邪魔しちゃったみたいで。うちの犬可愛い女の子が大好きだから」

「全くだ。どういうしつけをしているんだ」

「ごめんなさい……。あ、そうだ。これあげるね。彼女さんとのデートに役立てて。私達はもう帰っちゃうから」

女の子はポケットから紙を一枚取り出して風太郎の手に握らせた。

「何だ……？」

「おーい」

この紙が何なのか、と犬の首輪を引っ掴んだ女の子に尋ねようとすると同時に、女の子の降りて来た階段の上から凜としたよく通る声が響いて、風太郎は尋ねる言葉を飲み込んでその方を見る。

「江——！」

江、と呼ばれた目の前の女の子より年上の、高校生程に見える女子が優雅な所作で階段を下って来た。余裕というか、風格すら感じる歩みでゆつくりとこちらに来て、犬を一撫でしてからペコリと頭を下げた。

「初姉。ヒデの奴こっちに來てた」

「で、女の子をべろべろ舐め回していたと。ごめんなさい。大丈夫ですか？　うちの犬がとんだ失礼を」

お転婆そうな妹とは対照的に落ち着き払った様子の初という少女は、地面に倒れた三玖に手を貸して起こさせ、高そうなレースのついたハンカチで砂や草の切れ端をはたき落とした。

大丈夫です……といやに歯切れ悪く答えた三玖に、二人の姉妹は小首をかしげながら気遣わしげに犬の涎まみれの顔を拭っていた。彼女達の待ち合わせの時間か、二人のスマホから同時にアラームが鳴るまでそれは続く。

お母さんからだ、と妹の江が呟いたので、三玖は「ありがとう。もういいよ」と言葉短くお礼を言った。

姉妹はもう一度頭を下げて、しっかりと犬の首輪にリードをかけるのと、木立の間の木漏れ日を受けて光る髪を揺らしながら階段を登って行った。

「茶々姉も来れば良かったのにね」

「受験生だからしょうがないでしょ？」

そんな会話をしているのを、三玖は興味深そうに聞き耳を立ててうんうん頷いていた。

「……やっぱり浅井三姉妹」

うむむ、春蘭、秋菊、冬の梅。妹二人があれだけ美人だから長女の茶々さんもきつと美人に違いないのでは。

三玖が世に名高き美人三姉妹を見出したのも無理はない。

「ようやく口を開いたかと思えばそんな事考えてたのか」

「茶々に初に江で完全に。あの犬たぶん茶々に……淀殿に一番なついでるんだよ」

「顔も知らない他人に勝手にあだ名をつけるな」

「む、それもそうだね。そう言えば何貰ったの？」

「これは……チケツトか。ボートに乗るだとか用具の貸し出しとかが無料で受けられるって。何だ、えつと、このチケツトに書かれたコードを読み込ませるといいらしい」

「じゃあその貸し出し所によつていこう。お金がかからないなら自転車借りてもいいよね。ついでに顔も洗いたい」

飼い主の姉妹が持っていたウエットティッシュで拭われたとはいえ、じつくりたつぷりべつたり舐め回された三玖の顔周りには残った犬の涎でてらてら光る部位がある。

いくら理性をなくした俺だつてここまで舐め回さないぞあの犬畜生。

よく分からない対抗心を燃やしながら風太郎は三玖の手を取って歩きだした。

二人は歩きながら小さな子供にヘルメットや肘当てを付けている親の光景を横目にちらりと見て微笑ましく思う。

貸出所に詰めている係員に自転車大人二人と風太郎が言おうとした所で、隣の三玖が袖を引っ張った。

「どうした？」

「あれ」

「あれ？」

あれ、と言葉短めに指さした先には、さきほど風太郎の頭を狙撃したフリスビーと同じ形の物が色違いを含めて五、六個ほど箱に収められている。

「やってみたい」

「カフェはどうした？ それにさっきの姉妹みたいに犬いないぞ」

むうっ、と三玖は唇を尖らせて悩む仕草をする。しばらくそうして

いると、何か思いついたようで、ぎゅつと腕にすがり付くようにしながら上目遣いに風太郎を見上げて口を開いた。

「わんわん」

「よしよし。まあ俺は何でもいいけど」

キラキラと円らかな瞳を向けられた風太郎は三玖の頭を撫でた。うわあとんでもねえバカツプルが来たぞ、と係員に内心ドン引かれているとは露ほども知らずに。

「じゃあカフェは諦めるか。行って帰ってくるだけでも結構かかりそうだしな」

「午後から行こうよ」

「ダメだ。午前に遊んだんだから午後からは勉強しろ」

「えっ。結局の所勉強する時間は変わらないじゃん。何その朝三暮四みたいな話」

「で？ どっちがいい？ 俺はどっちでも構わないがどっちかだけな」

うむむ、と三玖はほつそりとした顎に手を添えながら考えて考えて、結論を出した。

「カフェ」

「決まりだな。すみません。自転車の貸し出しをお願いします」

風太郎は浅井三姉妹（仮）に貰ったチケットを係員に渡して面倒な処理を教えてもらって、三玖が御手洗いに顔を洗いに行っている間に自転車を二台受け取る。六段変速ギアが付いた、オフロードタイヤを履いたマウンテンバイクだった。

「じゃあ私が先に行くからついて来て」

真夏でも黒ストッキングを忘れない三玖がその足をペダルにかけてすいっとこぎ出した。

三玖のお目当てのカフェというのは、風太郎達が泊まっているコテージが立ち並んでいるエリアから湖を挟んで丁度反対側にある。二人は煌めき波打つ湖を横目に駆け抜けて行くと、栈橋の並んだボート乗り場を通り過ぎた。

城。

お目当てにたどり着いた風太郎が建物を見て抱いた第一印象はそれだった。白亜の石造りの外壁に、紺色の重厚感ある屋根。見栄えのための尖塔が右と左の一对あって、写真を撮っている客がいるのも納得できる出来だった。

カフェはホテルやコテージの客以外にも利用できるように、山の下から直接通じる道路と広い駐車場を備えている。湖の方向に開けたテラス席には、真夏の昼前にも関わらず人がごった返していた。

「一施設にしてはずいぶん立派だな」

「今のオーナーのお父さんがフランスのお城をイメージして作ったんだって。このあたりの建物の中で一番最初に作った物らしいよ」

「へえ。席は中でいいよな。汗かいたし」

「うん」

重厚な見た目の割には軽い扉を開けて中に入ると、メイド服というほど華美な物でもないが明らかに仕立てのレベルが高いエプロンドレスを身に纏った店員がこくりと会釈をしながら迎えて来た。

「いらつしやいませ。何名様でお来しでしょうか」

「二人で」

「かしこまりました。お席へご案内させていただきます」

案内された席に座は一番奥の二人掛けの机が置かれた小ぢんまりとした席で、中央の喧騒から少し離れた落ち着ける場所だと三玖は満足した。湖の方角とは反対方向だが、景観の為に森を少し切り開いているだけあって遠くまで広がる山々の景色が目飛び込んでくる。

「ご注文がお決まりでしたらこちらのボタンを押してください」

「はい」

「ではごゆっくりどうぞ」

女性店員は折り目正しく一礼して、ゆっくりと踵を返して他のテーブルの注文を取りに行った。

「すまん。ちよつとトイレ。メニューに何かいいのなか見えておいてくれ」

「うん。分かった」

合皮に覆われたメニューの冊子を広げていると、風太郎は短く言っ

て立ち上がった。

今座っている奥の席すぐ横に、木目調のフィルムが張られたパーテーションパネルがあつて、その後ろがトイレになっている。丁度出て来た中年の男性がチャックをあげているのを見て、風太郎はパネルの意味を理解した。

「えーと……」

「ここのお店はカヌレがおすすめのよ」

パンケーキ、パフェ、あんみつ。どれにしようかな。私は甘さ控えめの抹茶あんみつにしよう。

と思つている最中にいきなり声がかけて、人違いかなと思いつつ三玖は声のした方を見た。

細見のスラックスを履いて黄色の花が描かれたアロハシャツを着た人物。その人は余裕をもった佇まいから、優雅に腰に手を置いた。

うわ、腰細。

「え？ あのこと……」

「知つてるかしら？ カヌレっていうのはフランスはボルドーの修道院で生まれたお菓子だそうよ。ワインの澱を取り除くために卵白を使うんだけど、その時余った卵黄を何かに使えないかって考えだされたお菓子なんですって」

「はあ」

勘違いであつて欲しい考えを打ち砕くように、声をかけて来た人物は明確な意思を持って三玖の目の前まで来て風太郎の席に座った。

その得体の知れない人物はポケットから煙草を取り出して一本つまみ、口元まで持つてきて「いやだから禁煙だつて」と一人でノリツツコミまでしている。

「この建物がフランスが好きだった先代のオーナーがお城をイメージして造つたつてのは知つてるかしら？」

「え？ はい、パンフレットに書いてて……」

基本的に知らない人には話しかけて欲しくない三玖だが、今は恐ろしい会話を試みる。何をしてくるかかわからない、下手に刺激して怒らせたら嫌だし。そんな風に考えながら風太郎が速く帰つて来てくれる事

を析った。

「そう。でもね、お城はお城でもワイナリーを参考に造ったそうよ。ボルドーワインの頭に着くシャトーって言葉はお城って意味なの。まだお酒を飲めないあなたには分からなかったかしら。まあそれは相当なワイン好きだったそうで、ここは夜になるとお酒が飲めるようになってるのよ」

「え、ああ、はい」

「で、お話はここまで。ツイてるわ。私もうちよつとでここを出る所だったんだもの。あなたにとつてはツイてない話かしら？」

肘をつきながら優雅に足を組んで、いかにも長閑なバカンスと言った体勢を取っていた正体不明さんは、組んでいた足を直して真つすぐ三玖の方へ向いた。

「あなたは何をしているの？ 白昼堂々とサボリ？ ここは端っこの席だからバレないとも思ったの!？」

「ひゃっ」

いきなり飛び出した迫力のある声に三玖はビクツと肩を震わせた。

そこまで大きな声ではない。だが人々の雑多な喧騒に混じらないよく通る声は、少し凄んだだけで三玖を驚かせた。

「一つ大きな仕事をしたからつてもう天狗？ 今からそんな調子でこの先やっていけると思うの？」

「あの……あの」

知らない人にいきなり怒られて平然としていられたり、あるいは怒って言い返すことの出来ない三玖は助けを求めておろおろし、目線をあつちにこつちにキヨロキヨロさせる。

「おい」

トイレの方から低く唸るような声が聞こえて来た。トイレのすぐ傍の席に座っていた二人は、一人は誰かが喧嘩でもしてるのかしらと思ひ、一人は助けが来てくれたとほつと安堵の顔色に変わった。

「いきなり来て怒鳴りつけて何のつもりだよおば……おっさん!？」

風太郎はトイレから出て来た瞬間に聞こえて来た怒鳴り声に三玖が気弱な声を返しているのを聞いて、思わず声を出して勢いそのまま飛

び出すと目の前の光景に面食らった。

いささか低い声ではあったが、明らかな女言葉に怒鳴っているのは女性と思いついていたが、三玖の目の前に座っていたのは声の印象そのままの男性であった。一花の事務所の社長とそこはかとなく同じ匂いを感じる。もつとも社長は「それっぽい」だけで娘もいる異性愛者だが。

「あら？　君、多様性の認められる現代で、ずいぶんつまらない事言うじゃない」

「つまらないって……まあそれはどうでもいい。あんた何のつもりだ。いきなり怒鳴りつけられる用な事を何かしたか？」

「してないわね。けどしてない事が問題なのよ」

「意味が分からん。禅問答がしたいなら山を下って寺でも探すんだな」

「減らず口を。けど鼻っ柱の強い男は好みよ」

男は無駄に色っぽく流し目を風太郎にくれながら舌なめずりをした。見せられた風太郎は、肌が粟立つような寒気を感じて腕をさする。

「ヒエツ……。行こう、言葉は通じるが会話が出来そうにない奴だ」

「え、う、うん」

「ちよつと、行かせないわよ。これ以上は本気で怒るわ」

そつと風太郎は三玖に耳打ちして立ち去ろうと言い、三玖が腰を浮かせて所々で男は先んじて立ち上がり、威圧感たっぷりに腰に両手を添えて立ちふさがった。

うわ、腰細。

鍛えられた逆三角形の上半身とがっしりした下半身の対比から生じるウエストの細さに、奇しくも三玖と同じ事を思いながら、しかし三玖とは違って物怖じしない質の風太郎は意味が分からんともう一度呟いてから、自分より少し高い目を睨みつけながら毅然と言い放つ。

「これ以上はこっちだつて人を呼ぶぞ」

「意味が分からない訳ないでしょ。別に付き合うなどは言わないけど

時を選びなさいよ」

男はタレントのように細く長い指で風太郎を指しながら言い放った。

「君、うちの女優から手を離しなさい！」

その言葉を聞いた風太郎と三玖の二人は、目の前の男がどうして怒っているのか完璧に理解できた。できると、変な奴、怖い人だなと思っていた気持ちが急激に薄れて行って、おかしさがしだいにこみ上げて来る。

「ははははは」

「な……何よ気持ち悪い」

思い返すのは、五つ子と出会って一月もしない頃の、九月の終わりの夏祭り。

あの時もこんな風に知らない人に振り回されたんだっただけ。

風太郎と三玖は顔を見合わせて、同じ事を思い出しているなとくすくす笑った。

「アンタ人違いしてるぞ。こいつは一花じゃない」

「そんな訳ないでしょう。その顔、ウィッグで髪型変えて顔を隠しても間違える訳ないわ」

その言い草も一花の事務所の織田社長と同じだ。そしてここまですべて同じなら、一花が来さえしてくれば納得して引き下がってくれるだろう、という妙な確信を風太郎は抱いた。

「じゃあ一花に連絡を取ってみろよ」

自身たつぷり、余裕たつぷりに風太郎は言う。

男は、あまりにも目の前の彼が余裕そうなので、その一見バカげた提案にも乗ってやることにした。

「意味が分からないけど、そうして君の気が済むならしてあげる。その後でちゃんとトレーニングに戻るからね」

男はビシッと三玖を指さす。よく見ると薄ピンクのマニキュアを塗っているというどうでもいい事実に気づいて、三玖は自分の何もしていない爪をちよつと撫でた。

『はいもしもし』

「えっホントに出た」

男は目の前の一花……と思っている三玖から着信音が鳴る間抜けた展開を想像したが、その思いは裏切られてきちんと一花のスマホに繋がり聞き慣れた女優の声が耳元で響いた。

スマホと三玖を交互に見比べて困惑の様相を呈している男の姿は見えないはずだが、どうも様子がおかしい事に気が付いた一花は、いつものように少しからかいの声音で尋ねる。

『えー、何ですか？ 寂しくなっちゃいました？』

「おバカ。あなた今どこにいるの？」

『今ですか？ ボート乗り場の辺りを走ってますけど』

「そう。ごめんだけどそのまま池をもう半周してカフェの方に来てくれないかしら」

『え？ まあいいですけど……』

「場所分かる？ ……分かるわね。はい、お願いね」

通話を終えた男はどかっと椅子に座って「どういう事なの？」と言いたげな目をしてジロジロ三玖を品定めする目線で見つめた。

「こいつは中野三玖。あんたの所で世話になっている中野一花の妹だ」

風太郎は三玖の肩に手を置いて、困惑と疑いの目で見つめてくる男に説明する。

彼はそれを聞いてこめかみのあたりを撫でて眉根を寄せた。恐らく一花が話していた、姉妹がいるという事を思い出したのだろう。

「ふーん。でも本人が来るまでは何も言わないでおくわ。声真似出来る子に電話を持たせてサボってる可能性だってあるんだから」

「しつこいな」

「本当にそうやってサボってた奴が過去にいるんだからしょうがないでしょ」

そんな不真面目な奴がいるのか。一花はあんなに女優業に真剣に取り組んでいるのに。

風太郎と三玖はそんな風に考え事をして微妙な気分になった。

「あ、いたいた」

嘘をついてたらそちら持ち、という事で男が注文した紅茶が二杯目を迎えた所で、三玖より少しトーンは高いが同じ声が響く。声の主は近くの客がする「あれって中野一花?」「まさか」などという会話の間をすり抜けて、自分を呼びつけた人の席まで行った。

目立つシャツを目印に、優雅に紅茶を飲む演出家の下に行く、よくよく見知った顔があつたのでポカンと口を開けた。

「阿国さん……あれ、三玖? え、フータロー君まで!」

「ほら」

「ホント同じ顔……」

阿国と呼ばれた男は今来た一花の顔をよく見て、充分印象を叩きこんでから三玖の顔を見て、という事を間違いない探してもするように何度も繰り返す。風太郎が紅茶を飲み終わってカップをソーサーに戻して、そのカチンという音が合図だったかのように両手を上げて降参と小さく呟いた。

「えーつと、なんで三人は席を仲良く囲んでる訳?」

タマコちゃんでもなくとも良く分からないのですうな状況に、一花は小首をかしげながら三人に問いかけた。

「悪かったわね。三玖ちゃん……って言ったかしら?」

「あの」

「あれえー私の質問は……」

一花のもっともな質問を、阿国はしっしと払いのけて先に小さく頭を下げて三玖に謝罪した。

「いきなりしらないおじさんに怒鳴られて怖かったですよ。お詫びにここの注文奢ってあげる。彼氏さんと一緒に楽しんでね」

彼は立ち上がったもう一度頭を下げると、ポケットから財布を取り出して万札を一枚机に置いた。

どうでもいいが女言葉を話しているのに一応おじさんという意識はあるのか。などとお金を渡されて困惑している三玖の横で風太郎がそんなどうでもいい事を考えていたが、口には出さず行く末を見守っていた。

受け取る、受け取らないの押し問答をしばらく繰り返していた二人

だが、ついには三玖が折れてお洒落なカフェとは言え一番高いメニューを頼んでも余裕な一万円札を受け取った。

「えっと、ありがとうございます」

「一花も急に呼んでごめんなさい。話をしたって事にしておくから妹さんと少しくらい遊んでもいいわよ」

軽く手を振りながら彼は立ち去って行った。急に呼び出されて状況に翻弄されっぱなしな一花は、かしげていた首を今度は反対に倒す。

「ねえねえどういう事？」

「人違いだよ」

ほら、去年の花火大会みたいな。

そこまで言えば事態を理解した一花は、先ほどの三玖と風太郎のようにクスクス笑い出した。

「なるほどね」

「どうする？ お前もなんか食ってくか？」

「お金は気にしないで」

「気にするなってそれ阿国さんのお金じゃん」

人のお金で食う飯は基本気が咎めて食欲が湧いてこない風太郎だが、今回の場合は三玖の怒られ損にしないように遠慮なしに注文した。

来たかったんだよねー、と一花は三玖と一緒にメニューを見ながら小さなケーキとコーヒーフラペチーノを頼んだ。

高いだけの事はある甘い物に舌鼓を打ちながら（風太郎はよく分かかってないが）そもそもの疑問を三玖は口にする。

「そう言えば一花はどうしてここに？ 稽古があるからって来れなかったのに」

「あーそれ？ ここね、もう少し下つたら学校の研修施設があるんだよ。監督がその学校のOBで、今空いてるから格安で使わせてもらってるんだって」

「へえ。意外と安上がりな方法を使うんだな」

「華やかな印象だけどお金を切り詰めるために皆頑張ってるんだよ。」

意外とね」

風太郎は感心したように真面目な顔をして頷きながらも、「あーん」と三玖から差し出された白玉をそのまま口に入れた。うへえと苦虫を噛み潰したような顔を一花はして、コーヒーフラペチーノに口をつける。

「そうだ、せっかくだから皆に会っていくか？」

「そーだね。ちよつと顔出そうかな。お昼ごはんの前には戻らなきゃだけど」

「二乃は海行きたかったって文句たれてたけど、一花が来たら掌返して喜ぶ」

「あはは。じゃあ行こうか。皆が泊まってるそこ」

風太郎は会計が書かれた伝票を片手に立ち上がりレジに向かった。合計金額を見ると自分の財布から出ている金では無いとは言えくらぐらしそうになる。頑張れば一月は余裕で生きられるな。などとしようもない事を考えながら執事風の衣装を着た店員相手に会計を済ませた。

「二人は何で来たの？ 歩いて？」

「最初はそのつもりだったんだけど」

「三玖の尊い犠牲のおかげで財布を傷めずに自転車に乗って来れたんだ」

「えー、何それ？ あ、私も自転車乗って楽しちゃお」

一花は貸し出し自転車専用駐輪場に停まっていた一台を適当に選ぶと、スマホから支払いして開錠したそれにまたがる。

一切躊躇なしの一花を見て、何やら視線を感じた風太郎はそばの恋人を見て、目が合うと三玖は呆れたように首を振った。

「ほらフータロー、普通の人はあれくらい気楽にお金払うよ」

「いや、非日常のせいで財布の紐が緩くなってるだけだろ」

「コテージの近くの駐輪場で乗ってたら私も顔べろべろ舐められなくて済んだのに」

「それが無かったら一花に会えなかったぞ。運命と思って諦める。女子は好きだろ、運命」

「偏見」

「何してるのー？ 私いくらでも時間がある訳じゃないんだからね」

大きく手を振る一花が、楽しそうに二人を呼びつける。

偶然でも何でも、楽しい夏休みになればなんでもいいか。……一年前の自分が聞いたら卒倒しそうな事を考えてるな。

風太郎は自分の変化に笑いながら自転車に乗って三玖と一緒に一花の下に行った。

釈明の湖畔に月は笑って

「あーあ、何でリゾートに来てまで勉強しないといけないのかしら」

風太郎と三玖が一花と楽しんでる同じ時に、二乃はそんな事を言いながら顔を上げる。そこそこ真面目に勉強をしていた彼女だが、文具を投げて集中力を使い切ったと体全体で表現するように大きく背を伸ばした。

丁度問題を解き終わった所の四葉と、参考書のページをめくっていた五月は、集中の間隙を縫って放たれた姉の言葉に顔を上げる。

「そんな事言わないでください。上杉君も午後からは遊んでいいと言ってたじゃないですか」

「そうだけど」

「まあまあ。こんなとこまで来て勉強してる、なんて贅沢してるんだろって思えばいいよ」

ふうん、と二乃は気のないような返事をして、リボンの位置を直した。

別に本気で勉強したくない、とは思っていない。ただ少しばかり飽きがきたから、話でもして鋭気を養おうかと思っただけ。

言い訳がましく思い浮かべて、浮かんできた罪悪感を無かった事にしながら、手頃な隙を晒している四葉あたりに話を差し向けた。

「贅沢な勉強の割にははかどってないみたいじゃない」

「あはは……。あ、らいはちゃんは宿題終わった？」

「逃げた」

「宿題はもう終わったよ。後は日記かな」

まだ夏休みも前半なのに、分厚い問題のたっぷり載った宿題冊子は最後まで手が加えられていた。兄の影響でも受けているかのようによびつしりと十全に書き込まれた宿題は、完全に中学時代の自分達を越えている。

もし分らないならここは一つお姉ちゃんらしく教えてあげようか、と何となく偉ぶろうといった思いは消えて行った。うっかり忘れていて、下手をすると自分が教わる事になればとてつもないショック

を受ける事必至だ。

「そうだ、高い所平気？　ここ登ってくと地上百メートルの谷を渡るジップラインがあるんだって。平気ならやりに行こうよ」

という訳で数少ない得意科目『遊び』で四葉はふんぞり返る事にした。

「へえ〜凄い。でもそういう遊びって別にお金がかかるんじゃないの」

「まあまあ、任せてよらいはちゃん。午後からはおねーさんの威厳を見せてあげるから」

「お気楽ねえ。大学判定はどうだったかしら？」

「うわっ、今だけは忘れてたかったのに」

「……」

判定、という言葉に五月の顔が少し歪んだ。良くなかったのは四葉だけではない。五月自身の合格判定もDと、下から数えた方が速い結果が出ていた。

二乃と四葉の大学より上の偏差値の学校を目指しているとは言ってもそれは言い訳にはならない。

それを五月は家庭教師である上杉風太郎には黙っていた。知らずとも自分の浅ましい考えくらいお見通しだろう。と何となく自己弁護を添えて。

「三玖はA判定だったからなー」

「あれ？　それより一個上のランクを目指すとか言ってなかったかしら」

「え、そうなの？」

「そうらしいわ。その大学受けるクラスメートと何か話してたのを見たし」

「そう言えば、最近の三玖はあまり話した事のない人にも話しかけたりしてましたね」

「五月、感心してないでアンタも情報交換しないとまずいんじゃないの？」

「そう言えば五月の第一志望は私達と違うもんね。同じなら楽なの

に」

五月が目指しているのは、難関に分類される教育大学だったので、夏休み前の三者面談では教師にそれとなく志望大学の変更を促されたが、夏を制してみせますと息巻いて、今の所進路に変更はない。

「とうか五月は友達とかそう言った話が全然なさすぎ！ そんなんで将来何十人の人を相手にして生きていけるの？」

「うわ、ざっくりデイスったね」

「だって本当の事じゃない」

「向いてない、と、思いますか？」

そんな風に五月は小さく零した。

二乃はかくりと首を傾げて、いつになく弱気な発言をした妹に聞き返す。

「何よ。そんな事言うなんて珍しいじゃない」

「誰かに何か言われた？」

「はあー？ 誰よそんな事いう奴は」

四葉の言葉で二乃は傾げていた首を反対に倒し、また反対に倒す首の体操をしながら肩を回す。今からそいつを殴りに行こうかとも言いそうな勇ましい二乃に五月はくすりと笑って姉を窘めた。

「すみません。ただ先生に志望校の変更を勧められたのでちよつと」

「何よそれ」

「おーい」

五月がどれだけ頑張っているかという大演説を今から打ちそうな

二乃に水を差すように、玄関の方から男の声が出た。

「あ、お兄ちゃん帰って来た？」

「もうそんな時間？」

「はいはい。私が行きますよーつと」

手元にあつたコップに注がれた麦茶をあおって、四葉が軽やかに玄関に飛び出した。

帰って来たってことは良い時間のはずだ。お昼ごはんはどうしようか。電話すればルームサービスののように何か持ってきてもらえたような。

そう二乃と五月が考え事をする。

「ええっ!!」

とそんな風に四葉の驚きに叫ぶ声が聞こえた。

「ん？ なに四葉。そんな素っ頓狂な声出して」

「ね、あんな大声出す事ないよね」

玄関に通じる扉から、帰って来た三玖……より些か髪の短い頭がひよこつとその姿を現した。肩にかかるほどのボブカットより短い。そんな髪形をしているのは、

「い……い、一花!?!」

「やっほー」

誰あろう五姉妹の長女・一花である。

口をあんぐりと開けた二乃を見て、イタズラ成功と白い歯を見せつけるように笑った。

「ええっ！ 何で!?!」

「酷いなあ。二乃が寂しがってるって聞いたからわざわざ来たのに」

「ねえ二乃」

「え、あ……何よ三玖」

二乃は一花の登場で完全に頭から抜け落ちていた三玖が、短く語り掛けて来た事でその存在を思い出したように生返事をした。おまけに風太郎が四葉とリビングに入って来たのがチラツと視界の端に映る。が、二乃意外にもこれをスルー。

一花の隣まで来た三玖は、姉と同じようにちらりと白い歯を見せながら話した。

「山に来てよかったね」

「ぐぬぬ……そうね。今回ばかりは反論する気も起きないわ」

海への強行路線を固めていた二乃ではあるが、それだとこのような偶然には巡り合えなかった事は認めて、少し嫌味にも聞こえる三玖の言葉に頷いた。

「一花仕事じゃなかったの？ 大丈夫？ ここに来てのんびりしてて」

「それには三玖の尊い犠牲が……」

「それどういう事なの？」

遠い目をしながら語りだした風太郎に、一花は小首をかしげながら、さあさあ話しなよと促した。

風太郎はfrisビーに自分の頭を打ちぬかれた上に、それで遊んでいた大きなゴールデンレトリバーが勢いよく三玖を組み伏せて滅茶苦茶に舐め回し、顔中であらゆるにしてお詫びとして飼い主からチケットを貰った事を話した。

「あはは。かわいそー。フータロー君、今日の最初のキスは金髪の彼に取られちゃって」

「取られてないし。犬だからノーカンだし」

「拗ねない拗ねない」

「……その時に貰ったこれで午後から遊んで来たらどうだ。今日明日までだから使わないと勿体ないぞ」

「こんな物があつたんですね」

「ほんと三玖様様だわ」

「ほら、らいは、拝んどけ拝んどけ」

「ははー」

「もう」

らいはが両手を合わせて拝み倒すと、悪ノリがすぎるよと三玖は膨れて風太郎を睨んだ。そんな視線はどこ吹く風とばかりに彼は妹の為にチケットをちぎって財布に入れてやっていた。

「で、そこからどうして一花がこっちに来ることになったの？」

と言われて風太郎が話の後半、無料チケットを使ってレンタサイクルに乗った方がいいが、向かったカフェで三玖が一花の仕事先の人間人違いをされて説教を食らった話をすると、二乃四葉五月はその災難に申し訳なさそうに、けれどしつかりと笑った。

一花がその仕事先の人がどれだけ厳しいか話すと、二乃達も家庭教師がどれだけ厳しいか話した。面白くなさそうに家庭教師は聞いていたが。

「ごめん、そろそろ戻らなきゃ」

一花は、話題に上った三玖と一花を間違えた演出家にまつわる破天

荒な話を面白おかしく話して、芸能界の恐ろしさに震え出した妹達に満足そうな顔を見るとそう言つて立ち上がった。

「えー。もうちよつとゆっくりしていいよ」

「ちよつと話があるからつて抜け出して来たんだよね。あんまりゆっくりして変な事言われても嫌だし。ごめんね」

「それは面倒ね」

「でしょ？　じゃあ皆、もう二三日したら稽古も一区切りだから、それまでじゃあね」

そう言つと一花は立ち上がつて名残惜しそうな妹達に手を振る。特に強がつている二乃の頬をつついてからかつてから、楽しそうに稽古場へと戻つて行つた。

一花が戻つてしまつて寂しいと二乃あたりが愚痴りながら昼食を済ませると、その寂しさと、あそここまで来て勉強している鬱憤を晴らすように遊びに行こうと二乃と四葉の二人は勇ましく言う。

家庭の事情であまり遊びに行けないらしいは、いつも午前は勉強しているからと抑え込めていた興味が溢れて、どこに行こうどこに行こうとパンフレットを広げて外に飛び出した。

「良かったのか？」

「何がですか？」

風太郎は二乃と四葉、そしてらしいはが出て行つた方を見ながら、遊びに行かない選択をした五月に問いかけた。それに対して問われた方は、はて？という様な顔をしながら言い返す。

「いや、皆と遊びに行つても別に良かったんだぞ」

「まあ。明日は雪が降りますね」

「オーストラリアの話か？」

五月は勉強人間な家庭教師が遊んでもいいなどと言つた事に、異常気象かと驚いてみせたが、風太郎の地球を広く使つた返しに小さく笑つた。

「ふふつ。でもいいんです。余裕が一番無い私が遊んでいる訳にいかないでしょう？　らしいはちゃんに私と思つてとスマホを託しました

から、写真を楽しみに今は勉強します」

「そうか。他の姉妹はどこか呑気だからな。お前の危機感をいくらか処方してやりたいぜ」

シャーペンの尻でこめかみの辺りを叩いた風太郎は、ため息とともに隣に陣取る三玖を見た。姉妹の中で二番目にやる気に満ちている彼女は真面目に参考書を解いていたが、意味のありそうな目線に気が付いてそちらに目を向ける。

「私も危機感ない?」

「無い事無いが、いつも危機感とか焦燥感というのがまるでない顔してるな」

過去を回想すると、記憶の中にいる三玖はぼーっとしているか膨れっ面をしているか。この三女は、分かりやすい内面の割に外面は分りにくい。

「酷い。私だって危機に瀕すればそういう顔する」

「ほおー」

「むっ! ……どう?」

ぐつと眉間に力を入れて眉根を寄せる三玖。急ごしらえの無理やり作った顔を、風太郎は指で彼女の眉間をほぐすようにぐりぐりして、からかいながら言った。

「うっすいなあ」

「こう……かな?」

と言つて三玖は顔にある人を纏わせる。危機に瀕する顔と言えば、死に役ばかりの一花の表情がぴったりだ。

ところがダメダメと風太郎は首を横にふる。

「お前一花の顔真似はダメだろ。」

「皆の顔使っちゃダメって言われると難しいね」

「まあいいか。成績の推移が順調な三玖がどうしようどうしようって顔してたら、他の奴らが困るだろうし」

「結局してた方が良いの? しない方が良いの?」

「ほどほどにしとけ。俺としては危機感を抱かなくていいような成績の上がり方してるって珍しく褒めたんだが」

「そう？ ……あ、フータロー、自覚あるならもつと褒めるように」

「偉そうに。ほら、ほら。これで満足か」

「佳き」

三玖の褒めろとの催促に、わしゃわしゃと少し荒っぽく頭を撫でると、痒い所を搔いてもらった猫のように目を細めていた。猫だったら喉をゴロゴロ鳴らしていたに違いない。

「ゴホン。なにか忘れていませんかね。『い』から始まって『き』で終わる名前の人の存在とか」

いつでもどこでも非常に仲のよさそうなお二人に、忘れられているのでは、と五女はちくりと寸鉄を打つ。

少し気まずいように恋人達は口をむにやむにやさせると、普段の表情をさつさと取り戻した三玖が先に口を開いた。

「忘れてない」

「なくてそれなら、なお質が悪いのですけど」

言うのと、気まずさの残った顔のまま三玖は風太郎を見て、ぱたぱたと袖ではらう様に彼を叩いて責任転嫁した。

理不尽、横暴、とぼつちり。そんな風に言いながら三玖の手を楽しそうに受け流す様を、五月はごちそうさまという気分で見える。胸にスイーツバイキングで油分の高いホイップクリームばかりを調子に乗って食べ過ぎた時のような、そんなムカつきさえ覚えるような睦みあいから視線を切って、手元の水を飲み干した。

飲み干しても、それはどうも晴れそうにない。

似たような感覚は時たま五月が感じる、ここ最近の悩みだった。

一花が、休んでいた時のノートを見せてと、他のクラスメートに見せないようなだらけた態度で絡んでいる時。

二乃が、流行り物を全く知らない彼に、出来の悪い弟を可愛がるように教えている時。

四葉が、『風太郎君』などと呼んで、小悪魔のように笑って昔を懐かしんでいる時。

そして三玖が、心の通じ合った者同士の、何とも言えないむずがゆさというか、甘酸っぱい関係を、その気があるうと無かろうと、まぎ

まぎと見せてくるような時。

ほら、今も。

「フータロー、お弁当つけてどこか行くの？」

「は？ 何言ってるんだ三玖」

「ほら、ほつぺに付いてるよ」

夕食は豪勢に満天の星空の下でバーベキューをしていた。

クーラーボックスいっぱい詰められた肉や野菜に、らいはは目をキラキラ輝かせながら、肉の塊を鉄板に乗せる。

上杉風太郎は慣れない事をしてる所に加えて食べなれない物を食べた事で、新年に五月があげたシュークリームを食べた時が如く、だらしなく頬にソースの粗相をしていた。それを三玖に見咎められたという事である。

普段の昼食で焼肉定食を頼んでおきながら肉を抜くので、珍しく肉を食べる機会に知らず知らずのうちに注意が散漫になっていたようだ。内心そう反省して風太郎は紙皿を持っていた左手を空けて、そのまま右頬を拭った。

「反対」

「こつちか？」

「もー」

ぷぷぷ、と三玖は小さな声で笑って、人差し指でソースの付いた風太郎の左頬を拭ってやった。そしてそのまま人差し指をぺろりと舐めて、三玖の魅せたその不思議と色気のある仕草に、風太郎は顔を隠すように大きさに顔を拭った。

そんな光景を横目に見ながら、五月はトウモロコシの芯をバケツに捨てる。

なぜだろう、こんな小骨が刺さったような違和感が喉の奥に引つかかるように、胸の内がモヤモヤするのは。

どうしたの、とらいはが話しかけてくるまで、答えの出てきそうに出てこない問題を思案していた。

夕飯の後片付けを買って出てくれた二乃と三玖に甘えて、五月は勉強の為に割り当てられた部屋に籠った。

一時間は一心不乱に数学のチャートを丁寧に解いていく。すでに何度も解いている教材だが、あの三玖といえる時は精彩を欠いたようにデレデレな家庭教師曰く、これが全部分かるようになったら、医学部にだって入れるだろうという事らしい。あちらにこちらに手を出したりできるほど器用ではない五月は、一つ一つ虱潰しといった風に問題を解きほぐしていく。

そうしてさらに二時間ほど経つと、今日一日中座って勉強をしていたせいか、石になる魔法にかけられたように体が、特に首・肩まわりの筋肉が凝り固まって痛みとなって集中を奪っていった。

少し行儀悪くペンを放り投げて、ぐるぐると首を回す。肩を軽く揉みながら固まっている筋肉に血を送り込んだ。

はあ、と小さくため息を吐くと、五つ子皆に搭載された胸の二つ荷物を机に乗せて、おおよそ男性諸君に見せられないような楽な体勢をとる。

楽な体勢を取っているばかりではいけない、と思つて立ち上がると、集中して忘れていた喉の渴きを思い出したので、一息つこうと部屋を出る。

「わっ！ びっくりしたー」

扉を開けるとその向こう側の廊下から短い叫びが聞こえて、思わずドアノブから手を離れた。

「あーびっくり」

「四葉。すみません、驚かせてしまつて」

廊下に顔を出すと、二又に分かれたリボンがゆらりと揺れる四葉が本を片手に立っていた。

「四葉も休憩ですか？」

「これからはいはちゃんと一緒に天体観測でもしようと思つて。これ星の本なんだ」

四葉は持っていた本をめくる。フルカラーで星座が載っているそれは、一年中どの季節もどの空も載っているような分厚い本だった。

「五月も一緒にする？」

「私はもう一追い込みしようかと」

「はえー。頑張るね。まあ、気が向いたら来てよ。二階でやってるからね」

「はい」

広げていた本を閉じて、四葉はそのまま階段を登って行った。その後ろ姿、ベルトにラジオを結んでいた所を不思議そうに五月は見送った。天気予報によるとどうやら雨は降らないらしい。

水を一杯飲んでから気分転換の為に外に出る。

熱帯夜というほどでもないが、生ぬるい風が肌を撫でた。吹き抜ける風を追いかけられるように空を見上げると、これから満ちていく三日月が優しく輝いている。星の輝きを邪魔しない程度の月光は、雲一つない空と合わせて天体観測日和だ。

二階のベランダを見上げると、見えない物を見ようとして望遠鏡を調整している四葉と、説明書片手にその方法を教える二乃、空を見上げるらしいの姿が見えた。

静かな夜を邪魔しないようにゆっくりと体を伸ばす体操をしていると、少し離れた所から小さな話し声が聞こえてきて、五月はそちらに歩を進めた。

「分かるか？ あれが白鳥座のデネブで離れた所のがわし座のアルタイル、琴座のベガで夏の大三角形だ」

「懐かしいな。小学校の頃の宿題でね、皆で見たんだよ」

二つの影がシートの上に寝転がっている。聞き間違えるはずもない三玖と、そして風太郎の声だった。

不味い所に出くわした。咄嗟にそう思った五月は思わず物陰に隠れる。

五月に見られている、などとは露ほども思っていない三玖は、いつもより大胆に風太郎に体を寄せた。腕をぎゅっと抱きしめて、頬を相手の肩に乗せる様に添える。

風太郎は息がかかる程の近くにやって来た三玖の頭をぽんと撫でて、その滑らかな髪に重なる様に頭を預けた。

触れ合う肌から互いの鼓動が伝わってくる穏やかな時間を、星月だけが見ている。

「ねえフータロー、ベタな事言ってる良い？」

「だめって言ったら？」

「……（ムスツ）……」

「冗談。何だ？」

風太郎は首をひねってすぐ傍にある三玖の顔を見下ろした。

月光をはじき返して銀色に輝く神秘的な瞳が、当たり前のように、月がそこにあるように、愛を湛えて彼を見つめている。

「〴〵月が綺麗ですね」

かの文豪が英語教師時代に授業で言ったとされる、真偽の怪しい、しかしあまりにも有名な一説を三玖は口にした。

“I love you”を訳すなら、「あなたを愛しています」では芸がない。「月が綺麗ですね」と言いなさい、というものだ。

風太郎はいつかの、その言葉を額面通りに言った人の事を思い出して、隣の彼女に悟られないよう小さく笑う。そしてあの時にはしなかった、愛を込めたお返しを口に目の前の彼女にする。

「お前と見る月だから」

その返しに、三玖は微笑んでそつと風太郎の頬に手を添えた。同じように風太郎も触れ返す。その手を頼りに二人は、重力に引き寄せられ合う星のように近づいて、そして重なった。

空に浮かんだ、微笑む人の目元のように細められた三日月が、恋人の逢瀬を邪魔しないようにゆっくりと雲に隠れて行った。

「はわわ……」

空の月と違い、雲隠れしそびれた五月は、姉妹の繰り広げている逢引にアワアワし出す。アワアワを通り越してはわわになっていったが。

そんな動転した頭で来た道に戻って、コテージのすぐ横に据えられたベンチに腰を下ろす。まだ天体観測をしている三人を見上げて、自分の知っている世界だと安心するように息を整えた。

『月が綺麗ですね』

と、三玖は言った。

『月が綺麗ですよ』

と、五月は言った事を思い出した。

もちろんただの感想としての言葉だったが、あれから多少なりとも勉強をして、その意味を知った今となつては、ああ何て無知だったのでしょうと消え入りたい過去である。

月夜と、そして消え入りたいような過去、という二つで頭がぐるぐるしていると、パツとある事が思い浮かんだ。最近になつて胸の奥がモヤつく原因の答えを、ここにきてようやく見つけたように思ったからだ。

私だけが上杉君に嘘をついている。

そう思うと、五月は姉妹の事を指折り数えながら風太郎との関わりを思い出していく。

一花は、その完璧ともいえる外面を彼の前では脱ぎ捨てて、気取らず飾らず自然体で接している。

二乃は、……もともと最初の頃から真つすぐ気に入らないなら気に入らないと言っていた、一番嘘のない間柄だ。

三玖は正直言わせないで欲しいほどに仲良く過ごしている。

四葉は、隠していた京都の事を打ち明けて、ようやく出会えたかのように、風太郎君なんて呼んでいたり。

私はどうだ。

彼の家にお世話になつていた時、頼まれ事とはいえ、過去に会った女の子は私だよと言った事は、とんでもない嘘に他ならない。

何となく言う機会を逸していたし忘れていたけれども、思い出してしまふとこんなにも引つかかっていた事に自分自身でも驚きだ。

「五月ー、やっぱ一緒に星見ない?」

五月が声のした方を見上げると、ベランダからこちらを見る四葉が手を振っていた。

四葉に関わる事を考えている時に四葉から声がかかる。これは天からの思し召しと言うやつでは、と勝手に思いながら、五月は救いを求めるようにベランダをみあげながら言葉を口にする。

「四葉、ちよつとお話が……」

風太郎は三玖との二人っきりの天体観測から帰って来て、どこか夢見心地な足取りで自分の部屋に向かっていった。ふわふわしているのは三玖のせいである。

帰って来てから風太郎は三玖に先に風呂に入ってくればどうかと勧めると、

「一緒に入る？」

などと言われて言葉に詰まった。

仮に二人きりの状況でも何言っちゃってんのなのに、姉妹勢ぞろいの状況で言うなんて正気を疑うほどだ。

もしかして俺の彼女って馬鹿なのでは？

と、思うには十分すぎるほどの言動をした三玖を軽くデコピンで黙らせて、恨みがましい目線を投げかけられながら、今に至ると言う訳だ。

あの大きな瞳に上目遣いで見つめられて何とも思わない程、昔はともかく今の風太郎は感性が死んではいけないので、ドキドキを抱えながらこの熱を収めようと勉強をするべく歩いていた。

「何だこれ？」

ドアノブに手をかけた所で、ドアに二つ折りの紙が挟まれている事に気が付く。それを摘まみ上げ、誰だこんな回りくどい事をする奴は、と文句を垂れながら紙を開くと、無駄に達筆な字でこう書かれていた。

——湖畔に来られたし

「え、何、殺されるの俺？」

短いながらもどこか果たし状にも似た、剣呑な雰囲気の人に思わず後ろを振り返り、左右を見渡して安全確認をした。誰もいなかった。いたらいたで自分はさぞかし間抜けだったであろう事は想像に難くないのでいなくて良かったと思いたため息を吐く。

しかし、どうするか。

形だけ悩んでみたが、風太郎はすぐに出かける事にした。

もし待っている奴がいるなら、夜に女の独り歩きをさせている訳なのだからよろしくない。治安の良い国とはいっても、何があるか分からないのだから。

さつきまで履いていた、まだ何となく温もりの残っている気がするスニーカーにもう一度足を通して、星空の下に繰り出した。

先ほどまで三玖と二人で歩いていたからだろうが、感じなかった明かりの心許なさに今更気が付く。誰が待っているのか知らないが、早く行って用事を済ませた方が良さだろう。四葉と二乃あたりは平気だろうが、五月は林間学校の時に驚かしたら泣きながらどこかに逃げ出したという前科持ちだ。

湖畔の道に出る。ぐるりと辺りを見渡してみるが誰もいないようだ。

もう少し先に行つて見ようか、と思つている所、その意識の間隙を狙つたかのように声がかげられた。

「久しぶり

上杉風太郎くん」

あの時もこんな湖畔の道辺だったな。

どこか懐かしさを感じながら、ここに呼びつけた彼女に応える。

「ああ。久しぶりだな、零奈。いや——

——四葉」

覚えた答えをそのまま紙に書くように、半ば確信めいたものを抱いて、風太郎は振り返りながらそう言った。

そこには、白のワンピースに麦わら帽子をかぶった少女が立っていた。

あの時は秋で、今は夏なので服装の重厚さは当然異なっているのだが、概ね似たような雰囲気の色を着た彼女は、あの時と同じように、どこか秘密めいた笑みを浮かべた。

違う事があるとすれば、あの時の上杉風太郎には分からなかった事が、今の上杉風太郎には分かるという事である。つまり、零奈という少女は中野姉妹の誰かであるという事も、

「……五月？」

そこに立っている少女が、中野五月であるという事も。

「ぶぶ……くくっ」

「おい」

「久しぶりだな、零奈。いや、四葉（キリツ）」

「おい」

「あははは！ あーおかしー。皆に見せたかったな」

「おい聞いてんのか」

「聞こえてるよ」

風太郎の一步先を歩く零奈改め五月は、可笑しさに震える肩を何とか意思の力でねじ伏せ、真面目な顔を取り繕って彼の顔を見つめる。

しかし段々と口角がひくひくと引きつりを起こしたかのように震え、堪え切れないように大笑いした。

「……やっぱ無理あはははー！」

あまりにも可笑しそうに笑うので、風太郎はきまり悪そうに湖の方を見つめた。黒い天のような深い色の上に白く強い光が差している事に気が付いて視線を送ると、ボート乗り場の方からサーチライトのように幅の広い光が放たれていて、こんな時間まで貸し出ししているのかと隣の少女から気を反らすように考え事をする。

「ねえ無視しないでよ」

帽子のつばに手をかけながら、片目を隠すようにミステリアスな絵で風太郎の目の前にいる少女は咎めるように口を開いた。

首を傾げる。目の前にいる少女は五月で間違いないはずなのに、しぐさや声色がいつもの彼女とあまりにも結び付かない。

「あー。調子狂う。お前二重人格か何かかかってくらい違うな」

「二重人格何てそうそうある訳ないよ。テレビの見すぎ……あつ……」

「あつ、じゃねー」

「大丈夫。テレビを見てなくたって君は君だよ。むしろそれが君らしさだよ」

「くそつ。別に気にしてなかったのに哀れまれるとすげムカつく」
「あはは」

からからと軽やかに五月は笑うと、踵を返してまた歩いて行く。何か言おうと思った言葉は古い思い出そのまま飛び出してきたような彼女の前に飲み込んでしまった。

「しかしどういう事だ？ 確かに小学生のころ会ったのは四葉のはずだろ？ 修学旅行の時に思い出話しをしたのは何だったんだ」

「それは合ってるよ」

「じゃあなんでお前がそんな恰好して出てきてるんだ」

「それはね……」

それから意味深に黙って貸しボートの棧橋を横目に歩いていると、突然いい事を思いついたように笑ってボートを一台指さした。

「乗ろうよ。あの時の再現といこっか」

「いや俺何も持ってきてないから」

「私が持つてるから。行こ」

「あ、おい」

有無を言わせ無い強引さで五月は手を引くと、風太郎の静止もお構いなしに駆け出した。その速度に合わせられない彼は、つんのめるようになりながらも必死で足を動かす。着くころには笑顔の五月と対照的な息を切らした男がいた。

「はあ……はあ……」

「だらしないなあ。すみませーん。まだ乗れますか？」

「はい。大丈夫です」

閉店作業を始めていた係員は残り時間から最後であろう客を笑顔で迎えようと顔を上げる。

「何だよお前。その恰好になったら遠慮を忘れた生き物にでもなるのか」

「今の私は子供だもーん」

「だもーんじゃねえ、だもんじゃ」

こんな夜更けによくもまあ、微笑ましいやら羨ましいやら妬ましいやら何やかんや、と思いつながら五月と風太郎のやり取りを見ていた係員が「あ」の口のまま固まる。昼間はレンタサイクルの方で働いていた時の事を思い出したのだ。

うわあヤベーバカツプルがまた来た。

もちろん人違いだがそんな事は係員分かつろはずもない。

そんな内心を表に出さないように笑顔を作ると、そんな表情に違和感を覚えた五月は小首をかしげながら係員に尋ねた。

「? どうかしましたか?」

「いえ、すみません。何でもありません。ボートですね。あと二十分だけです乗れますよ」

「こほん、と咳払いをして五月の質問を流し、そのままボートに乗る人への注意事項を説明し出した。

「ふんふん」

夜間用の電飾のついた救命胴衣を身に着けた五月は、風太郎の知らない流行りの歌を口ずさみながら借りたボートに腰を下ろした。もちろんオールをついた方ではない。特別それに文句を言う気も起さない風太郎はオールに手をかけてゆつくりと漕ぎ出した。

「で?」

「で、って?」

「とぼけるなよ。京都で会ったのは四葉なのに、どうしてお前が過去に会ったフリしてたのかって話だろ」

「フリって酷いなあ。四葉公認なんだよこの恰好」

「お前らの悪趣味な変装の一環じゃないのか?」

「悪趣味が一番得意な子と付き合ってる人が言うセリフじゃないね」

「分かってるじゃないか。だがな、あれは悪趣味じゃなくて特技って言うんだ」

「屁理屈。君は三玖に甘いよね」

論破というほど強い言葉でもないが、言い負かされたような気分になった五月は子供のように唇を尖らせて、三玖のように膨れた。

櫂のきしむ音だけが響く間があつて、吹き抜ける風にさらわれない

よう帽子を押さえた五月が、ようやく意を決したかのように口を開いた。

「君が話してくれたでしょ？ 昔に交わした約束のために勉強するようになったんだって。あれ私を探しに来てた四葉が聞いてたんだ」

「そうだったのか？」

「うん。でね、四葉に昔の私達がしてた、つまり四葉が君に初めて会った時のワンピース姿ね、して会ってくれて頼まれたんだよ」

「いや何で本人が出てこないんだよ。そこが分からん」

「だって君四葉の変装が分かるからバレるって本人が言ってたんだもん。だから代役を立ててきよならする事にしたんだ。分かった？」

「……ああ」

あの時の裏側にそんな事が潜んでいたのかと風太郎は頭の中でこながらがつた事実を懸命に解きほぐす。

五月はそんな頭を悩ませる彼の姿に、やっぱり言うべきじゃなかったかな、と良心の呵責に苛まれるが、この先ずっと黙っている事で起きるそれとどっちがマシだろうか。

「ほんとはね、言うつもりは無かったんだ。君は三玖と仲良くやってるし、四葉の事を自分で思い出した後に言うのって何だか、無粋って言うの？ まあそんな感じでしょ」

「じゃあ何で今になって言う気になったんだ」

「一言で言うなら自分のため、だよ。最近はね、君と過ごす皆を見てると何だか後ろ暗いようなもやもやする感じがね。で、思い出したんだ。これ」

「零奈」

「そう。だから四葉に言って、君に打ち明ける事に決めただよ。君から分かってくれたらよかったのにね」

「いや分かるか！ 何だよその、あの子は誰だ？ 四葉だ。でもあの時公園で会ったのは五月だっていう二重底のトリックは」

「天才高校生探偵だったら分かってくれたよ。君も天才の部類なんだからじっちゃんの名に懸けて頑張ってる」

「俺のじっちゃんは普通のサラリーマンだ」

「あはは」

そこまで言うと、心の中で一区切りついたのか、満足そうな微笑みを浮かべてほっと息を吐いた。そしておどけたように言う。

「お分かりいただけただけでしょうか？」

という言葉はいつもの五月の物に相違ないが、いつもと違ってどこかたどたどしく、それこそ大人の口調を真似する子供のようだった。「では帰りましょう。こんな星空の下、二人つきりでいたなんて三玖が知ったら大目玉をくらいますよ」

五月は風太郎の後ろの棧橋を指さした。その姿に僅かな違和感を抱いた彼は、漕いでいた手を止めて膝に肘をつく。

「言いたかったのはそれだけか？」

「はい？」

「この際だ、言いたい事があるならついでに言っておけ。ここなら他の誰にも聞かれないしな」

風太郎の視線は話せよと五月を射竦める。その有無を言わさないような目は父親であるマルオを思い出させると同時に、この恰好をする少し前に言われた「俺が父親代わりになろう」というセリフを思い出した。

「全くあなたという人は。本当に全国二位ですかと疑いたくなるほどデリカシーがないくせに、たまに見せるその頭の冴えはどういう事ですか」

「何だよ」

「褒めたんだよ」

するりと敬語が抜けた口調で五月は喋り始めた。

「実はね、塾の先生に進路の変更を薦められてて」

「……思ったより妥当な事だな」

「君までそんな事言うの？」

「なんだよ。志望校のランクを下げるのはどこでもやってる事だろ？」

「うん？ ……あ、違うよ。志望校を変えろって言われてるんじゃないよ。先生って進路を変えないかって言われてるの」

「はあ？ ずいぶん突っ込んだ事を言う講師もいるんだな。ただの塾講師だろそいつは」

「ただの、じゃないらしいんだよね。なんでもお母さんが高校生だったころの担任の先生だって」

「それは何とも」

それを聞いて風太郎は顎に手を添えて思索する。

という事は、その講師は最低でも自分達の年齢程の年齢程の時間は最低でも教壇に立っている訳で、経験からくる言葉というのは中々馬鹿にできなかった物ではない。その講師なりの経験則から導きだした進路変更ではあるのだろうか。

「お前はそれでいいのか？」

だが風太郎は現状からの妥当よりも未来の成長を信じたいと思った。

「相談してるのはこっちなんだけど」

「じゃあまず俺の結論から言うぞ。お前が自分で進路を変えると言わない限りはそのままが良いと思う」

「それはどうして？」

こてん、と首を傾げて五月は目の前の家庭教師が何を言うのか待つ。

「お前自身はそれに納得してないんだろ？ 納得できない事に人は頑

張れない。昔の俺がそうだったからな」

「あの金髪の頃の君？」

「そうだ。見た目からして察せるとは思うが、その時の俺は勉強なんてからっきしのクソガキだったんだぜ」

「よく勉強君に転身できたね」

「勉強をする理由に納得できる出来事があったんだよ。四葉に会った事だな」

「四葉が……？ そういえばどんな話をしたのか、とかまでは知らないんだ。教えてくれる？」

「あいつは、うんと勉強してお給料貰える会社に入ってお母さんを楽させてあげるんだって言っていたんだ」

「そうなんだ」

「それを聞いて俺はやる意味を見出せなかった勉強が未来につながっている」と初めて分かった。家族の為に頑張ろうって約束をして、それを果たすためにも、勉強するようになったんだ。」

「有言実行だ。凄いね、君は」

五月は嬉しそうに微笑んだ。目の前の男の子が約束を一途に守ってくれたことに、不思議と自分の事のように嬉しい気持ちになったからだ。

その温かい目にむずがゆい気分になりながら、風太郎は正面に顔を見据えた。

「俺は自分で勉強する理由を見つけられなかったが、お前は自分で見つけられただろ？ どうして勉強するのかって答えを。だからお前はそのままが良いと、俺はそう思う」

「いいのかなあ」

「何を弱気な。お前の頑固さでその講師をねじ伏せろよ。先生つてのは生徒の強い意思に弱いものだけ」

「君も？」

「さてね」

濁した時点で肯定しているようなものだけど、と五月は思ったが、言つてへそ曲がらせても困るので薄く微笑むだけにとどめておいた。

放つておいたオールを手に取り、「帰るか」と風太郎が口を開こうとした所、湖を照らす電灯が明滅し始める。怖い物が苦手な五月はその光景にうすら寒い物を感じて、ワンピース一枚で出て来た事を後悔しだした。

カタカタと、風か、何か、不穏な音が少し響いて、

ふっ、と電灯が全て消えた。

「えっ！ 何？！ 何ですか!?!」

突然の事に五月は驚き、慄き、声をあげた。特に暗い所が怖いという訳でもない風太郎でさえ驚いたのだから無理もない。

前後不覚のような状況に陥った彼女は考え無しに立ち上がる。しかし足元は小さなボートで、当然の如く大きく揺れ始めた。

「馬鹿！ お前急に立ち上がるな」

「もう帰るー！ もう帰りましようー！」

零奈の時の口調と普段がごっちゃになって叫び出すと、さすがに船をひっくり返されてはたまらないと風太郎は慎重に立ち上がって五月の肩を掴んだ。

「落ち着けて」

「えっ!? ちょっと、止めて……きやー！」

周りが見えなくなっていた五月は、同乗していると分かっているはずの風太郎にすら怯えて、体が恐怖の許容を越えた。

腰が抜けて、倒れるようにへたり込む。肩を掴んでいた風太郎も巻き込んで。

「いた……くない？ 何だこの枕みてえな物は」

どこかぶつける事を覚悟して目を閉じた彼は、いつまでたつても痛みが来ないので恐る恐る目を開けた。

頭にシーツのような上質な布が擦れる感触があつて、こんな物船に載つてたのか、などと思いつつながら首を左右に、そして上に動かす。

山があつた。

それも二つ。非常に眼福なやつが、である。

そこそこ見慣れた大きさのそれに、置かれた状況を理解した。

「う、うう上杉君！ 最っ低！」

げし、つと非常に強烈な蹴りが風太郎の脇腹辺りを襲う。

倒れる時にその場で半回転した風太郎は五月の足の間に体が落ちて、彼女の下腹部に頭を乗せていた形になっていた。

話のタネになるかと立ち読みした漫画でこんな体勢になっていたな、と風太郎は蹴られた脇腹をさすりながら体を起こした。

「もうー、ほんとにー！ お父さんにも言うし三玖にも言うー！」

五月が怖い物嫌いな事は風太郎も十二分に承知しているが、いや俺が支えなかったら落ちていたかもしれないだろうが。黙って五月からのお叱りを受けていたが、その一言は無性に頭に来た。

「この野郎、元はと言えばお前がビビッて暴れたのが悪いんだろうが」「人の事枕扱いしてほいへ」

がーつと捲し立ててきそうな五月の頬を風太郎は先んじて摘まみ、喋れないようにしてやった。

「むむむ……」

思い通りに五月は黙りこくって、眉を吊り上げるのみで怒りを表している。

されっぱなしは性に合わないとはかりに風太郎の頬を振り上げた。

「くのお……」

「むうう……」

意地っ張りな二人は抓った頬を引つ張ったまま睨み合う。ここで引いたら負けな気がしてしばらく膠着状態が続いたが、夏の夜の暑さに当てられて汗をかいてきた頬を摘まんでいられずに、ぱちんと洗濯ばさみを引つ張られた時のような痛みを残して離れた。

「いたっ!」

「いてっ!」

お互いに抓られていた左頬を、お互い同じようにさすり出して、その何とも間抜けな光景に二人はボートの上に寝っ転がって笑い出した。

子供のようにつらつら笑って、笑って、五月は怖がることも忘れるほどに笑った。

はあ、と乱れた息を整えながら笑いすぎて涙に滲んだ目をこすると、明かりの消えてあんなに怖かった夜の闇の天蓋に、人生をかけても数えきれないほど散らばった金銀砂子が華麗な模様を描いている事に気が付く。

「ねえ」

「何だよ」

「どうして三玖だったの?」

「はあ? どうしたいきなり」

「だって、昔に会ったのは四葉でしょ? 君はそれをきっかけに変わった。そして、変わった事で未来に君と四葉は出会った。これはちよつとした運命じゃない?」

五月は星に手を伸ばす。

どれがベガでアルタイル……つまり、織姫と彦星だったわけ？

二つ上の姉ほどに占いに熱心ではない彼女だったが、遥かなる時を越えて届く星の光の前に、運命だとか天命だとか言う物を否定する気持ちにはなれない。なれないからこそ、非常に運命的な再会を果たした人と結ばれなかった事がどうしても気になった。

「運命だとか好きだよな。女って奴は」

「うわー」

「俺が思うに運命ってのは後付けだし、言ったもん勝ちなんだよ」

「後付け？ 言ったもん勝ち？」

「三玖は過去のことなんて何も知らない。なのに俺の事を好きになってくれて、俺もそんなあいつの事を好きになった。これだって運命だと言えなくはないか？」

「そんなの言ったら……」

「どうとだって言えるだろ」

「じゃあ四葉と再会した事は、君にとつてただの珍しい事？」

「そうじゃないが……。例えば俺が四葉と再会したのは三玖とめぐり合わせてくれる運命だったんだ、とか言ったら」

「えー……何か嫌だ」

「まあこんな風にどうこじつけてでも言えるんだから、運命なんて言葉はあんまり信じてねーんだよ俺は」

言い終えて、ゆっくりと風太郎は身を起こす。星明りに充分目が慣れた事で船着き場が見えるようになっていたので、また五月が恐慌状態に陥る前にコテージに帰ってしまいたかった。

「さあ帰るぞ」

「ちよつと、運命の講釈は受けたけどまだ質問に答えてないよ」

「しつこいな。ガキかお前は」

「それでいいから。ほらほら、早く答えてよ」

この自分の事しか考えていない感じ、まさしく子供だな。

風太郎は呆れつつも懐かしむように目の前の少女をじっと見た。

「なに？」

「いや別に。それで、どうして三玖だったのかって話だったか。だっ

「てあいつが一番かわいいだろ」

「え、なに口説いてるの？ 同じ顔を目の前にしてるからって」

「ちげーよ。あれだぞ。見分けが出来るようになった俺にとってお前はカブトムシのメスとカナブンくらい違うからな」

「可愛くない」

「例えに突つかかるな」

「で？ なんで同じ顔の中で三玖が一番可愛いのか？」

「何でかって言われると単純さに我ながら笑っちゃうんだが……」

あー、と口を開けたまま照れているのか言うに二の足を踏んで、思
い出したように遠い目をして話を始めた。

「あいつ、俺に会うといつも嬉しそうな顔するだろ」

「うん」

「……」

「……」

「……」

「……えっ、それだけ？」

「だから単純だつて言っただろ」

言い切つて、気まずそうに視線をもう一度明後日の方向にやると、
パチンと傍にあったオールを叩いてワザとらしく音をたてた。

単純とは言いつつも、何か劇的な事を言ってくれるのではないかと
身構えていた五月は、あんまりな言葉にあんぐり口を開ける。確かに
笑ってしまうような単純さだ。

「単純接触効果つてやつだね」

「賢しらに」

「教えたのは君でしょ。ふーん。そっかあ」

「いや最初のきっかけがという話であつて」

「ふふっ。分かったよ」

まずい事でも暴かれたかのようにうろたえだした風太郎に苦笑し
ながら、揺れる足元に気を付けて五月は立ち上がった。

「あー、すつきりした」

「本当にお前らは大した嘘つきだな」

「でももうやめるよ……あー……終わりにします」

「そうしてくれ」

五月は空を見上げた。それを風太郎は見ている。

月光をはじめ返して青色に輝く瞳は同じ形をしているのに、その奥に宿る物は違う。三玖の瞳が静謐さを湛えて緩やかに微笑むのに対して、五月のそれは無邪気な子供の頃に持っている澆刺さに似ているように見えた。

「ねえ、上杉君」

「何だよ」

「今夜は月が……」

月が、と言えば、次に続く言葉は綺麗ですねと相場が決まっているが、それはただの形容にとどまらない。さつき三玖と天体観測していた時に囁かれた言葉をまた言われるのか？　と思いつつながら深刻な顔をして風太郎は唾を飲み込んだ。

「……」

「……ふふふ、何て顔してるんですか」

「はっ？」

「期待しましたか？」

「お前……！」

「あはは。さ、今度こそ帰りましょう」

すとんと五月が腰を下ろすとほぼ同時に陸の方から明かりがチラチラと瞬き始めた。小さな光が一つ夜空に伸びていく。

係員が懐中電灯を片手に貸出所から飛び出してきたようだ。

光を片手に導く人に、五月は風太郎に早く漕いでと急かす。

ゆつくりと真つ暗な水面に空が移る星の湖を小舟が進むと、何だか神様にでもなった気分と五月は思つて、星を摘まむように指先を濡らした。

棧橋に着いて救命胴衣を脱ぐと、着脱を手伝うここまで先導してくれた人が赤べこのように頭を下げながら謝罪していたので、別に怪我もしてないからいいのに、と二人は内心なぜだか申し訳ない気持ちになった。

ふっ、と何の前触れもなく電気が灯ると、それに気を取られた係員の間について二人は逃げるように帰路に駆け出した。

「ごめんなさいーい！　ありがとうございますーい！」

五月は一つ礼も忘れずにして、へなへなになって先を走っている風太郎に追いついた。

「上杉君もごめんなさい。私のわがままに付き合わせてしまつて」

「はー……。まあ、いいさ。お悩み相談だ」

「はい。ありがとうございます」

「しかしだ。お前がよく一人で出歩けたな」

「どういう事ですか？」

「ほら、昼に一花が来て言つてただろ。学校の施設を借りてつて」

「言つていましたね。それが？」

「知らないんだな」

風太郎は額の汗を拭いながら深呼吸を一回挟んで、ゆっくりと歩きながら話始めた。にかつと意地の悪い笑みを浮かべた彼に、五月は嫌な物を感じたが気にせず聞く事に決める。

「ここは昔、とある学校の医学部が入っていたらしい。第二次世界大戦の頃だ」

「ま……まさか」

「ここは非道な実験が行われた医学現場だったそうで、今でも夜な夜な『恨めしいぞお』と行き場をなくした霊魂たちが徘徊して人々に語り掛けるそうだ」

「そ、そんなの嘘に決まっています！　そんな土地だったらこんなにゾート施設が建つはずがありません！」

「フッフ。さあてな」

「ううう上杉君も人を怖がらせて楽しむなんて、堕ちた物ですね！」

——う……

「恋に？」

——う……

「何そこらのラブソングみたいな事言ってるんですか!？」

——あ……

「違うのか」

——ろ……

「当たり前じゃ……ちよつと待つて何か聞こえませんか？」

——おお……

五月は林道の合間の闇から、何ともおどろおどろしいような声が響いて来るのを聞いた。咄嗟に麦わら帽子のつばを摘まんで、頭巾のように耳まで垂れ下げて防御姿勢をとる。

「風じゃねえ？」

——い……

「そう……いえ！ 近づいてきてます！」

——い……

「嘘つけ……いや、確かに聞こえるな」

——う……

「わー！ 上杉君があんな事言うから寄ってきたんです！」

——う……

「お、落ち着け。散歩してる誰かの話声かも……」

——いい……

「絶対こっちの方に関心ある声ですって』——おお……』ひい！
来てますよ!?!」

風に乗って響いてくる低めの女性の声はつきりと聞こえてきて、風太郎も適当なでまかせのつもりだったが、本当にあったのかと身をこわばらせる。

——ううおお……

(ゴクリ)

「ふうたろおおおお」

「出たあああああ！」

二人は現れた人影に悲鳴を上げた。

長い髪が顔を覆うように垂れさがっていて、有名な霊である貞子を連想させた。大きな瞳がぎよろりとこちらを向いて、五月はそばの風太郎に抱き着いた。

「ななな何とかしてくださいー！」

「何とかって何だ！」

「それを考えるのがあなたの役目でしょう！」

「家庭教師の領分じゃねえ！」

「うわーん！ シチュエーションにこだわった私が馬鹿でしたあ！」

「何してるの二人とも」

「へっ？」

「ほら。私」

低く唸るような声の持ち主、貞子はその長い前髪をかき上げて顔を露わにさせた。

大きな釣り目気味の目。通った鼻梁に桜色の小さな唇。五月と同じ顔をしたそれは、

「……三玖？」

「そう。中々帰ってこないから探しに来た」

五月の姉、風太郎の恋人、中野三玖だった。

幽霊の正体見たり、という具合で気の抜けた五月はその場にへたり込んで、風太郎も額にかいた冷や汗を拭った。

「二人で何してたの？ ……浮気？」

ジトつと半眼になりながら三玖がそう言うと、今度は別の冷や汗が彼の額を流れた。

確かに三玖に何も言わずに出てきて、その妹とボートに乗って遊んでいたと言えば、浮気の誹りは免れないような気がして風太郎の良心をチクチクと苛んだ。早く釈明を……

あ、だからこいつ言いたかったんだな。

今更になって零奈を打ち明けた五月の気持ちがあつた気がして、どうしてと言った事を心の中で謝っておいた。

「ふうん……。まあ何で出かけたのか知ってるんだけどね」

「え」

「帰ろう五月。もう遅いよ」

「うう〜三玖う〜。この人が悪いんです……この人が変な事いうから〜」

「分かってる分かってる。こういうの大体フータローが悪いから」

「おい」

「じゃあ何でこんなに怖がってるの？」

「……俺が怪談話をしたから」

「ほら」

「いやそれは確かに俺が悪かったけど。でも最高のタイミングで出て来た三玖にも責任の幾ばくかは」

「どう？ 五月」

「知りません」

「あーあ怒っちゃった」

「うむむ……」

「さあ帰ろう」

三玖はへたり込んだ五月の手を取って立ち上がらせると、なだめながら歩いて行った。

「どこに行ってたの？」

「は？」

「いや、だってシチュエーションがどうって五月が言ってたから」

「そのボート乗り場あるだろ。そこでボートに乗ってたんだ」

「ずるい」

「ずるいて」

「私も乗る」

「今さっき閉まったんだよ」

「じゃあ今度……あ、近所にもボートに乗れる所あるんだよ。ほら、あの大きな湖のある公園」

「知ってる」

「乗ったことあるの？」

「え……ああ、まあ」

「ふーん。らいはちやんと？」

「……五月」

「……」

「……」

「やっぱ有罪。切腹」

「三玖さん!?!」

風太郎がいつもの調子を取り戻したように話し出したので、五月はそつと顔を上げて二人の会話している様子を見た。

彼を見つめる三玖の横顔が、いつものように嬉しそうだ。たじろぎながらも風太郎が楽しそうに言葉を返す。二人の、なんて楽しそうな時間だろう。

「ふふふ」

「ん? どうしたの五月」

「いえ、何でもありません」

二人はお似合いですよ、とは四葉を応援していた手前少しだけ言いにくかったが、素直に思った事を話すほどでもなくて、心の中で呟いて、笑顔にその思いを乗せた。